

ふしぎのくにのありんすちゃん ～ALINCE IN UNDERGROUND LARGE
GRAVE OF NAZARICK～

善太夫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。——

何故か5歳児位の女の子『ありんすちゃん』として復活したシャルティアによる、ほのぼのの日常を描いた1篇1500文字程のショートストーリー連作です

※ありんすちゃんが踊ります

※最新話投稿については活動報告をご確認下さい

※031おまけ『薔薇は夕日に輝く』ラキユース・アルベイン・デイル・アインドラ はありんすちゃん本編ではなく、ラキユースが書いた薄い本の内容な為、ほのぼののしていません。ありんすちゃんも登場しないのでご注意下さい。

※この二次作品は原作小説が読了されている方を対象として書かれたもののため、原作未読の方には楽しめない箇所がありますのでご注意下さい。

ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

ありんすちやんがキノを助手に難事件に挑んでいく『ありんす探
偵社へようこそ』もよろしく

目次

| | | |
|-----|-------------------|----|
| 001 | ありんすちやんはじまる | 1 |
| 002 | ありんすちやんとポンコツうさぎ | 4 |
| 003 | ありんすちやんハンバーガーになる | 7 |
| 004 | ありんすちやんぼくじょうにいく | 10 |
| 005 | ありんすちやんミルクをのむ | 14 |
| 006 | ありんすちやんとベッドとひみつ | 16 |
| 007 | ありんすちやんおめいばんかいする | 19 |
| 008 | ありんすちやんカルネむらにいく | 21 |
| 009 | ありんすちやんチャルメラになる | 23 |
| 010 | ありんすちやんしつぼうされる | 25 |
| 011 | ありんすちやんとダメいぬ | 28 |
| 012 | ありんすちやんいもうとになる | 31 |
| 013 | ありんすちやんすやすやねむる | 33 |
| 014 | ありんすちやんつめをきる | 36 |
| 015 | ありんすちやんかめんをかぶる | 39 |
| 016 | ありんすちやんイタズラする | 42 |
| 017 | ありんすちやんとバイコーン | 45 |
| 018 | ありんすちやんのかしましい | 48 |
| 019 | ありんすちやんだいかつやくする | 51 |
| 020 | ありんすちやんていこくにいく | 55 |
| 021 | ありんすちやんとジルクニフ | 59 |
| 022 | ありんすちやんはげます | 63 |
| 023 | ありんすちやんいすになる※挿絵あり | 65 |
| 024 | ありんすちやんかつさいされる | 68 |

| | | |
|-----|--|-----|
| 025 | ありんすちやんとザイトルクワエ | 71 |
| 026 | ありんすちやんがいつぱい | 75 |
| 027 | ありんすちやんとペンギン | 78 |
| 028 | ありんすちやんとエクレアだん | 80 |
| 029 | ありんすちやんりょうりをする | 83 |
| 030 | 番外編・魔法少女いびるありんすちやん | 87 |
| 031 | おまけ『薔薇は夕日に輝く』ラキユース・アルベイン・デイル・ アインドラ | 90 |
| 032 | ありんすちやんメモをとる | 94 |
| 033 | ありんすちやんもぐらたたきをする | 97 |
| 034 | ありんすちやんほしがる | 100 |
| 035 | ありんすちやんとエロフおう | 103 |
| 036 | ありんすちやんおになる | 106 |
| 037 | ありんすちやんときようふのかくれんぼ | 108 |
| 038 | ありんすちやんはんぶんこおる | 111 |
| 039 | ありんすちやんみつごになる | 114 |
| 040 | ありんすちやんありんすちやんになる | 117 |
| 041 | 特別編・名探偵ありんすちやん　く消えた三吉君の行方く (プ | 120 |
| | レイアデスな日　より) | |
| 042 | ありんすちやんふたたびみつごになる | 127 |
| 043 | ありんすちやんまたまたみつごになる | 130 |
| 044 | ありんすちやんおうこくへおつかいに行く | 132 |
| 045 | ありんすちやんあちやんになる | 135 |
| 046 | ありんすちやんゆうかいされる | 137 |
| 047 | ありんすちやんときえたおやつ　く犯人はマーレく | 141 |

| | | |
|-----|-----------------------|-----|
| 048 | ありんすちやんのおばけたいじ | 145 |
| 049 | ありんすちやんメイドみならいになる | 148 |
| 050 | ありんすちやんまたもやメイドみならいになる | 152 |
| 051 | ありんすちやんりゆうおうこくにいく | 155 |
| 052 | ありんすちやんとハロウィン | 159 |
| 053 | 番外編 ジルクニフのクリスマス | 162 |
| 054 | ありんすちやんサンタクロースになる | 165 |
| 055 | ありんすちやんいなくなる | 168 |
| 056 | 番外編 ふしぎのくにのアイズちゃん | 171 |
| 057 | ありんすちやんのあかずきん | 175 |
| 058 | ありんすちやんのあかずきん ふたたび | 178 |
| 059 | ありんすちやんのあかずきん みたび | 180 |
| 060 | ありんすちやんのおおそうじ | 183 |
| 061 | ありんすちやんおとしだまをあげる | 185 |
| 062 | 番外編 名探偵ありんすちやんと消えたルプー | 187 |
| 063 | ありんすちやんスカウトされる | 190 |
| 064 | ありんすちやんモモンをみはる | 192 |
| 065 | ありんすちやんおやつをたべる | 195 |
| 066 | ありんすちやんかしこくなる | 197 |
| 067 | ありんすちやんのすぺしやるカレー | 201 |
| 068 | ありんすちやんむくちになる | 205 |
| 069 | ありんすちやんのバレンタインデー | 208 |
| 070 | 劇場版 ふしぎのくにのありんすちやん?? | 212 |
| 071 | ありんすちやんせがのびる | 216 |
| 072 | 特別番外編 ルベドでありんす | 219 |

| | | |
|-----|-------------------------|-----|
| 073 | ありんすちやんのへいぼんないちにち | 222 |
| 074 | ありんすちやんはるがくる | 224 |
| 075 | ありんすちやんがんばる | 227 |
| 076 | ありんすちやんとひみつかいぎ | 230 |
| 077 | ありんすちやんチャイナドレスをひろう | 233 |
| 078 | ありんすちやんあなにおちる | 237 |
| 079 | ありんすちやんプーさんになる | 241 |
| 080 | ありんすちやんねぼける | 244 |
| 081 | ありんすちやんとおふろ | 247 |
| 082 | ありんすちやんとオツパイ | 249 |
| 083 | ありんすちやんとからっぽのヨロイ | 252 |
| 084 | ありんすちやん07211919 | 255 |
| 085 | ありんすちやんひきこもる | 258 |
| 086 | ありんすちやんこまらす | 261 |
| 087 | ありんすちやんとアウアウちゃん | 264 |
| 088 | ありんすちやんとスポイトランスとマーレとおしり | 267 |
| 089 | ありんすちやんときんのはくちよう | 270 |
| 090 | ありんすちやんのシヨウ・マスト・ゴー・オン | 273 |
| 091 | ありんすちやんのたなばた | 278 |
| 092 | ありんすちやんあこがれる | 282 |
| 093 | ありんすちやんのがーるずとーく | 286 |
| 094 | ありんすちやんとねむれないよる | 290 |
| 095 | ありんすちやんとコキユートス | 293 |
| 096 | ありんすちやんおえかきする | 295 |
| 097 | ありんすちやんはみた | 297 |

| | | |
|-----|-----------------------|-----|
| 098 | ありんすちやんしょうせつをかく | 301 |
| 099 | ありんすちやんとパッド | 304 |
| 100 | ありんすちやんとルビクキュー | 306 |
| 101 | ありんすちやんとみつまめ | 310 |
| 102 | 番外編・「美姫」ありんすちやん | 313 |
| 103 | ありんすちやんぶきをもつ | 320 |
| 104 | ありんすちやんテニスをする | 324 |
| 105 | ありんすちやんアイドルになる | 327 |
| 106 | ありんすちやんきがえる | 330 |
| 107 | ありんすちやんとふしぎなダンジョン | 333 |
| 108 | ありんすちやんとたくさんのランス | 336 |
| 109 | ありんすちやんはえる | 339 |
| 110 | ありんすちやんはんせいする | 342 |
| 111 | ありんすちやんはねつきをする | 345 |
| 112 | ありんすちやんとおわらないふゆ | 348 |
| 113 | ありんすちやんとマールとさんにんのエルフ | 351 |
| 114 | ありんすちやんまたしてもメイドになる | 354 |
| 115 | ありんすちやんスイーツになる | 358 |
| 116 | ありんすちやんとエロさいあく | 361 |
| 117 | ありんすちやんふたたびせいおうこくにいく | 364 |
| 118 | ありんすちやんまたしてもせいおうこくにいく | 368 |
| 119 | ありんすちやんVSヤルダバオト | 373 |
| 120 | ありんすちやんカリンシャにいく | 377 |
| 121 | ありんすちやんとかいほうぐん | 380 |
| 122 | ありんすちやんまたまたせいおうこくにいく | 383 |

| | | |
|-------|----------------------------|-----|
| 1 2 3 | 番外編 ジルクニフとりユロ | 387 |
| 1 2 4 | ありんすちゃんまたまたまたまたまたせいおうこくにいく | 389 |
| 1 2 5 | 特別編・ありんすちゃん理解テーブルゲーム ドラマCD | 人 |
| | 間理解テーブルゲーム より | 394 |
| 1 2 6 | ありんすちゃんおもいだす | 397 |
| 1 2 7 | ありんすちゃんダイエツトする | 401 |
| 1 2 8 | ありんすちゃんたちしよんする | 404 |
| 1 2 9 | ありんすちゃんとメロン | 408 |
| 1 3 0 | ありんすちゃんのあけおめ | 412 |
| 1 3 1 | ありんすちゃんのひなまつり | 415 |
| 1 3 2 | ありんすちゃんけししようをする | 418 |
| 1 3 3 | ありんすちゃんツインテールにする | 420 |
| 1 3 4 | ありんすちゃん、ゆかたをきる | 422 |
| 1 3 5 | ありんすちゃんのにじいろのみずたまり | 424 |
| 1 3 6 | ありんすちゃんとしやつくり | 427 |
| 1 3 7 | 番外編 ティラの忍者修行 | 430 |
| 1 3 8 | ありんすちゃんとパワードスーツ | 433 |
| 1 3 9 | ありんすちゃんスライムになる | 437 |
| 1 4 0 | たいまにんアリス | 440 |
| 1 4 1 | ありんすちゃんスーパーロボットたいへん | 444 |
| 1 4 2 | ありんすちゃんはりきる | 447 |
| 1 4 3 | ありんすちゃんねぼうする | 450 |
| 1 4 4 | ありんすちゃんリベンジする | 454 |
| 1 4 5 | ありんすちゃんとドラゴンのは | 460 |
| 1 4 6 | ありんすちゃんとなぞのメモ | 463 |

| | | |
|-----|--------------------------------------|-----|
| 147 | ありんすちゃんのりょうりたけつ | 466 |
| 148 | ありんすちゃんのおしょうがつ | 470 |
| | 〈最終話〉アリンズ・ウール・ゴウンよえいえんに | 473 |
| | A l i n c e / s t a y n i g h t | 477 |
| | おまけ編 もしもありんすちゃんが至高の四十二人目だったら…… | 482 |
| | おぼろど せいおこくのせいき した | 485 |
| | はたらかない細胞 | 489 |
| | 特別編 亡国の吸血娘 (五さい) 【前編】 | 492 |
| | 特別編 亡国の吸血娘 (五さい) 【後編】 | 498 |
| | ご注文はうなぎですか？ | 503 |
| | (祝) アニメ四期&劇場版聖王国編制作決定 | 506 |
| | かんぜんしんさくげきじょうばんありんすちゃん | 509 |
| | オーバーロード劇場版聖王国編公開記念 ありんすちゃん再放送を 見る | 511 |

001ありんすちゃんはじめる

スレイン法国との遭遇戦において、カイレ様と相討ちとなったシャルティアは、法国の至宝『ケイ・セイ・コウク』によつて洗脳されてしまいました。

アイنزはシャルティアの洗脳を解く為に『星に願いを』を発動させようとしますが、シャルティアの洗脳はワールドアイテムによるものとわかり、指輪では解除出来ない事を知ります。

やむなくシャルティアを一度滅ぼして改めて復活する事により、洗脳の呪縛から解放する事にしたアイنزは激戦の末、シャルティアを倒します。

かくて玉座の間に一同が会し、いよいよシャルティア・ブラッドフォールンを復活させる事になったのでした。

※ ※ ※

ナザリツク第十階層へ玉座の間――。居並んだ各階層守護者、各領域守護者、そしてアイنز、守護者統括アルベドが固唾を飲んで見守る中、いよいよシャルティアの復活が行われます。

使用されたユグドラシル金貨は総額5億G。その黄金の山が溶けるように形を変えていきます。

アイنزの目の前で溶けた金貨が人の形となり……やがて銀髪の少女の姿、いや、一糸もまとわない幼女の姿になりました。

幼女はゆっくり瞳をひらくと一言、「ありんちゅ?」と言葉を発しました。

「……シャルティアよ。私ができるかね?」

アイنزの問いかけに対してシャルティアはまたしても「ありんちゅ?」と答えました。

(……いやいや、そんな事言っていないよ……どうしちゃったのよ、これ……しかも幼女だよな?)

「アインズ様、畏れながら……シャルティアに何らかの異変がおきたかと」

頭を深くたれたアルベドが緊張した面もちで発言しました。

「……うむ。どうやらそのようだな。……何かが復活に足りなかったのかもしれぬ。……ユグドラシルとは違う、という事は考えたくはないが……」

アインズには全く訳がわからず、本当ならば大声で叫びたかったのです。しかしながらアンデッド特性により、強い感情は強制的に沈静化されてしまうのでした。

アインズはそんな我が身が好ましくもあり、疎ましくも感じるのです。

「……これは、アインジユチャマ。チャルチエア・ブラドホルン御身の前にでありんちゅ」

少女、いや、幼女の姿のシャルティアが平伏します。

(……このシャルティア、案外かわいいかも……とりあえず舌つ足らずながらちゃんと喋れるようだな。……もしかしたら以前より賢いかもしれないぞ?——いかん、いかん)

「——あーゴホン。……シャルティアよ、一体何が起きたのか覚えている事を申してみよ」

シャルティアが舌つ足らずの言葉で語る話によれば、どうやら王国のセバスと合流する為にナザリックを出発するあたりまでの記憶しかないらしいとの事でした。したがって、何者がシャルティアを洗脳したのかはわかりませんでした。

幼女になったものの、しっかり受け答え出来ていた為、これまで通りに階層守護者を任せる事として、玉座の間から退出させました。

「……まるで5歳児、といった感じだな……」

既に退出したシャルティアの姿を思い出しながらアインズは溜め息をつきました。

「……金貨は間違いなく5億Gあった……何が足りなかったのだろうか? ……それともこの世界はユグドラシルとは違うのだろうか?」

アインズはふと、守護者達NPCが皆、シャルティアのように5歳

児位の幼児になった様を想像してしまいました。

——ナザリック幼稚園——それはアインズにとっては耐え難い苦痛を産みそうな世界にしか思えませんでした。

※ ※ ※

何はともあれ、残念美少女『ありんすちゃん』はこうして誕生しました。いろいろ失敗もしてしまいますが、それは5歳児位の女の子のする事、少々大目に見て下さい。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

002ありんすちやんとポンコツうさぎ

ありんすちやんの仕事はナザリックの第一階層から第三階層の守護です。

とはいっても子供になってしまったありんすちやんには良くわからないみたいです。

とりあえずしもべのヴァンパイア・ブライド二人に手を引かれながら見回りをしました。

でも、ありんすちやんはすぐ飽きてヴァンパイア・ブライドに抱っこをせがみます。

抱っこに飽きると今度は肩車をねだります。いやはや、見回りにならないですね。

でも、ありんすちやんは大体5歳児くらいの女の子なのですから仕方ないですよ。

肩車は普段見れない景色をありんすちやんに見せてくれます。

——あれあれ？

茂みの向こうにピヨコピヨコとウサギの耳が動いています。

「おもしろそうだから行ってみるでありんちゅ」

ありんすちやんはヴァンパイア・ブライドに肩車されたままウサギの耳を追っかけることにしました。

※ ※ ※

ナザリックの戦闘メイド、ナーベラル・ガンマは焦っていました。

アインズ様が冒険者モモンとしてエ・ランテルに向かうの際に同行する筈だったのについつい寝過ごしてしまったからでした。

魔法発動——ヘラビットイヤ、ラビットフット、ラビットテール

「アインズ様は………さすがにもう、いないか……」

急がなくては……ナーベラルは頭の中で言い訳を考えながら全速力でアインズの気配を追うのでした。

(……いつもより30分多く眠ってしまいました……これではダメだ

……いつもより30分遅く目覚めました……これでは同じ……春眠
暁を覚えずとは良く言ったものでして不覚にも30分程多く睡眠を
とってしまったようです……言い訳じみて無理……いっそ誠に申し
訳御座いませぬ。寝坊しました。かくなるうえは命をもって償い
……！ え？ ——)

「――！」

「――！」

突然現れたありんすちやんとぶつかりそうになったのです。

「――シャルティア様、ど、どちらに？」

「ナーベはどこに行くのでありんちゅ？ わらわも行きたいでありん
ちゅ」

「申し訳ありませんが、私はアインズ様のお供として、あの……急いで
おりますので……失礼しま――」

(……もしかしてシャルティア様を言い訳にしたらアインズ様もお叱
りにならないのでは？ ……素晴らしい考え。子供になったシャル
ティア様相手ならきつとお許しくださるに違いない)

ナーベラルはにこやかにありんすちやんに話しかけました。

「……あの……」コホン。 ……その……よろしければ、シャルティア様
もご一緒されますか？」

ありんすちやんは力強く頷きました。

「わかりました。シャルティア様、ではこれより私がシャルティア様
を抱っこして差し上げますね」

ありんすちやんを抱っこしてナーベラルはアインズを追いかけた
のでした。

※ ※ ※

ナーベラルからのメッセージを受け取ったアインズはエ・ランテル
の宿屋で待っていました。

やがてナーベラルと一緒にありんすちやんがやってきました。

(――え？ シャルティアが何故？ えええ？)

アイنزは動揺を隠しながらナーベラルに問いかけました。

「……ナーベよ。何故シャルティアが一緒なのだ？ シャルティアにはナザリツクの守護をさせていたのだが？ これは一体どういうこと——」

ナーベラルは額を打ちつけながら答えました。

「申し訳ありません！ 実はシャルティア様がアイنز様にどうしてもお会いしたいとおっしゃいまして、断りようなくお連れ致しました。……つきましては道中遅れ誠に申し訳ありません」

（——いや、だからここではナーベとモモンなんだって……アイنز様とか言って誰かに聞かれたら面倒……）

「……ナーベよ。ここでは私は冒険者モモンだ。それ以上でもそれ以下でもない」

「もうし訳ありません。アイ、モモンさ——ん」

「わかればよろしい、いや、よいのだ」

アイنزはありんすちゃんを覗き込みました。するとありんすちゃんはそんなアイنزの気持ちなど知らぬ気に、幸せそうにすやすやと眠っています。

（……おいおい……どうするのよ？ 幼児を連れた冒険者って……こんな所を誰かに見られたりしたら何と思われるか……困ったぞ……）
途方に暮れたアイنزが天を仰いだ瞬間、ありんすちゃんが小さなくしゃみをしました。

「……くちゅん！」

途端に魔法が発動してありんすちゃんの姿は消えてしまいました。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

003ありんすちゃんハンバーガーになる

ナザリック地下大墳墓ダミー兼倉庫建設現場——アインズの命でアウラの指揮の下、大勢のシモベ達が働いています。

折しも昼休み。

アウラの前には大きなハンバーガーが置かれていました。

「おっしよくじい〜おっしよくじい〜楽しいた〜のしいおっしよくじい〜♪」

楽しそうに自作の歌を歌いながらハンバーガーを両手に持ち、かぶりつく——

そこにありんすちゃんが突然現れました。どうやらくしやみをした時に魔法——ヘグレーターテレポーション——が発動してしまったみたいです。

「ちよつと、シャルティア。なんでアンタがここにくんによ？ あたしはアインズ様の命令で仕事しに来てんだけど？」

アウラは頬を膨らませてありんすちゃんにくっつかかっけてきました。た。

「ひい……なんだシャルティア様……驚かさなくてくださいよ。もうー！」

驚きのあまり首が落ちそうになるユリ・アルファ。でも、ありんすちゃんは落ち着いたものです。

だって、アウラはいつだってありんすちゃんの可愛らしさに妬んでイジワルするんです。

「……せっかくですからシャルティア様も何か召し上がられますか？ ボク……私がお持ちします」

見事にアウラのハンバーガーに挟まっているありんすちゃんにユリは尋ねました。

「オレンジジュースが飲みたいでありんちゆね」

「あたし、ハンバーガーもう一つ。大至急」

不機嫌そうなアウラの声が続きました。

すぐにありんすちゃんの前にオレンジジュース、アウラの前に新しいハンバーガーが用意されます。ありんすちゃんはオレンジジュースを一気に飲むとすぐさまおかわりをねだりました。その後さらに二杯もおかわりしました。

アウラはそんなありんすちゃんにイジワルな事を言います。

『飲み過ぎておねしょしちゃうぞ』ですって。

でもありんすちゃんは気にしません。

おねしょなんてする筈がありません。ありんすちゃんは知っています。おねしょするのは赤ちゃんだけです。

ありんすちゃんはプリプリ怒っているアウラを後にナザリックに帰りました。

※ ※ ※

——ナザリックに帰って、翌朝——

目覚めたありんすちゃんはベッドの中がひんやりしているのに気が付きました。

——なんと、ありんすちゃんはおねしょしてしまっただけでした。残念ながら、アウラが言った通りになってしまったみたいですね。

大変です。この事をアウラが知ったらきつとみんなに言いふらすかもしれません。そうなればありんすちゃんは皆から『おもらしちゃん』と呼ばれてしまうかもしれません。

ありんすちゃんはブルブルと頭を振りました。それだけはなんとかしても防がなくてはなりません。

そこでありんすちゃんはシーツとパンツをこっそり洗う事にしました。

そういえば『洗う』と『アウラ』ってなんだかにてますね。綺麗に洗ったら干します。

ありんすちゃんはパンツをはいていないのでスースーしますが仕方ありません。

と、ありんすちゃんの鼻がムズムズして——

「くちゅん！」

ありんすちやんとパンツは消えてしまいました。今度はどこに飛ばされてしまったのでしょうか？

※ありんすちやんが挿絵を描いてくれました

004 ありんすちゃんぼくじょうにいく

ありんすちゃんが目を開けると、周囲の景色は見慣れないものに変わっていました。

ありんすちゃんは右手を見、左手を見、またまた右手を見てみましたが、しつかりつかんでいたパンツはありませんでした。可愛らしくレースで飾られた真っ白のお気に入りのパンツ。

ありんすちゃんは小さくため息をつきました。お気に入りのパンツが無くなって残念な気持ち、それに、やっぱりパンツがないとスーするのが気になります。このままだと風邪をひくかもしれないですね。風邪をひかなくてもまたくしゃみでどこかに飛ばされてしまうかもしれません。

ありんすちゃんは周りを見回すと、どうやらパンツの替わりになりそうなものを発見しました。

あたりの木々にひらひらと布のようなものがたなびいていました。長いもの、短いもの。幅も様々です。何百もの布、羊皮紙の原材料が木の枝に架けられていて、ひらひらとたなびいていたのでした。

ありんすちゃんはジャンプして一枚の布を手にとると器用にぐるぐると巻きつけました。

これで大丈夫。

風邪なんかひきません。

え？ ありんすちゃんはアンデッドだから風邪をひくはずがないですって？

でも、ありんすちゃんはまだ5歳児位の小さな女の子なんです。もしかしたら、もしかしたらですが、もしかしたら風邪をひいちゃう事だってあるかもしれません。

もしかしたら、ですが。

「これわこれわ……ナザリック地下大墳墓階層守護者のシャルティア様でいらっしゃいませんか。あいにくデミウルゴス様わナザリックにお戻りになられていましてこちらにわ、いらっしゃいませんが……」

ありんすちゃんに男が声かけてきました。

「デミウルゴチュ？」

ありんすちゃんは『ス』を『チュ』と言ってしまいます。仕方ないですよ。だってまだ5歳児位の女の子なのですから。

そうそう、そういえばデミウルゴスが確か聖王国の国境近くで牧場を運営しているとかいう話を聞いた記憶がありました。なんでもナザリックで使うスクロールの材料の羊皮紙を得るためにナントカ羊を飼育しているとか……だったようでした。

「よろしければ、このプルチネツラめのご案内致します」

ありんすちゃんは道化師（プルチネツラ）の後を付いていく事になりました。

※ ※ ※

やがて大きな看板が見えてきました。

『聖王国両脚羊牧場』

「ここわ、スクロールの材料になるアペリオンシープの繁殖場です」

何やら大きな檻がいくつもあって牧場っぽくない気がしましたが、ありんすちゃんにはよくわかりませんでした。

「デミウルゴス様わ慈悲深く愚かなものたちにも分け隔てなく愛情を注いでられます……実に美しき愛……」

感極まって言葉が途切れたプルチネツラの眼からは涙が流れていました。

しばらく歩くと大きなサイフォンのようなものがありました。中には赤い液体が入っています。ありんすちゃんが顔近づけると球体のガラスにひしゃげて写ります。

なんだか面白いですね。

「これわ、デミウルゴス様が皮を剥ぐ時に流れる血をムダにするまいとして作ったものです。こうして一滴もムダにすまいという、これこそ、まさに真実の愛とすべきでわないでしょうか……」

ありんすちゃんが写ったガラスに手を伸ばして触れた途端、ガラス

は粉々になりありんすちゃんは赤い液体でずぶ濡れになってしまいました。……だんだん、だんだんと視界が赤くなっていきます。……ありんすちゃんが覚えていたのはそこまででした。

※ ※ ※

——気がつくとありんすちゃんは真つ赤な湖に浮かんでいました。「やれやれ……シャルティア。困ったものだね。これではまた一からやり直さなくてはならないよ」

ありんすちゃんが見上げるとデミウルゴスが空を飛んでいました。「血の狂乱」とはね。シャルティア、済まないがこの事をアインズ様に報告させてもらおうよ」

ありんすちゃんはイヤイヤとかぶりをふりましたがどうしようもありません。

その後、ありんすちゃんはしばらくナザリックから出る事を禁止されてしまいました。

※ ※ ※

竜王国のアダマンタイト級冒険者「クリスタル・ティア」の「閃烈」セラブレイトは前線にいました。竜王国に侵攻してきたビーストマンとの戦いは一段と激しさを増していたのでした。

「陛下、きつと私がお守りします」

幼さの残る竜王国女王、ドラウディロンの面影を思い出しながら心を奮い立たせます。

先ほど届いた可愛らしい手紙を何度も読み返し、この戦いが終わったら得られるであろう名声と褒美に胸を踊らせるのでした。

セラブレイトは懐から白い布を出すと広げました。縁がレースになった純白の布は手紙が届けられた際に一緒に置かれていた大切なもの。

セラブレイトにとってドラウディロンの信頼の証であり幸運のお

守りであったのです。

「ああ……陛下……この命に変えても……」

布切れに顔を埋めながらセラブレイトは女王ドラウデイロンへの更なる忠誠を誓うのです。

※ありんすちゃん挿し絵を描いてくれました

005ありんすちゃんミルクをのむ

「……わらわのせいじゃないんちゅ。知らないでありんちゅ」

グビグビ、ガコーン。プファア！

ありんすちゃんはジョッキのミルクを一気に飲み干しました。

ありんすちゃんはデミウルゴスの牧場をダメにしてしまった為、自分の間ナザリツクから出る事が禁止されてしまったのでした。

そんなある日、第九階層の大人びた雰囲気のレストランのカウンターにありんすちゃんの姿がありました。

(まったく。やれやれ……)

カウンター内でグラスを磨きながらキノコのようなバーテンダー——彼は副料理長でした——はそんなありんすちゃんを見ないようにはしていました。

見た目は小さな女の子であっても彼女は階層守護者であるのかつな事は言えません。

ただただ時間が過ぎてそのうち姿を現すだろうありんすちゃんのシモベを待ち続けるのでした。

ありんすちゃんはおかわりしたミルクを一息に飲み干すと、またもやおかわりを頼みます。

「あの……シャルティア様、今日はそれくらいにしておかれては？」

……それに、そろそろお迎えがお見えになるのではないですか？」

「おむかえ？ ……そんなの来ないでありんちゅ。今日はとことん飲みたい気分なのでありんちゅ……朝まで」

ありんすちゃんの眼は心なしか座っているようでした。

副料理長は慌てました。

彼はこのショットバーの洗練された雰囲気を大切にしています。言葉にはませんが、客にもそんな雰囲気を大切にして欲しいと思っています。ですがそんな願いもありんすちゃんには通じません。

まあ、ありんすちゃんは5歳児位の女の子に過ぎないので仕方ありませんよね。

仕方なく副料理長はありんすちゃんにおかわりのミルクを出してあげました。

ゴツゴツゴクビと一気にミルクを飲み干すとありんすちゃんはカウスターに突っ伏してしまいました。

グズグズと鼻を鳴らしているのでどうやら泣いているようです。

このままでは本当に、朝まで動かないかもしれません。そうなれば一晩中ありんすちゃんの世話をさせられてしまうかもしれません。

いやいや、一晩ならまだ良い方かもしれません。それどころかこれからずっとこんな事が、毎晩毎晩続くかもしれません。副料理長は悪寒に震えながら決断しました。

そう、なんとかしなくてはならないのです。

「シャルティア様……：……：……：そういえば近頃アウラ様マーレ様の第六階層に新しく村が出来たのをご存知ですか？」

ありんすちゃんは顔をあげました。

「村？ でありんちゆか？」

「なかなか面白いですよ。是非一度見に行かれては如何でしょう？」

「ふーん。面白いでありんちゆか……：……：」

どうやら副料理長の目論見は無事に達成出来そうでした。

あとは明日出掛ける為に今晚は早く帰って寝た方がよいと言いくるめるだけです。

副料理長は深くため息をつくとありんすちゃんの説得に適した言葉を探すのでした。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

006 ありんすちやんとベッドとひみつ

副料理長の努力も虚しくありんすちやんはカウンターで眠ってしまいました。

「はあ……どうしたものでしょうね。まったく……」

磨いていたグラスを片付けると副料理長はため息をつきました。

昨日までならシャルティアのシモベが迎えに来たのでまかせてしまいましたが、今晩はどうやら本当に、迎えはなさそうです。

「シャルティア様……起きて下さいませんか？ お願いです。……シャルティア様？」

ありんすちやんは死んだように無反応でした。

え？ ありんすちやんはアンデッドだから当たり前？ ……そんな事を言ってしまったら話が進まなくなるので、ここは突っ込まないようお願いします。

よろしくお願いします。

一向に起きる気配がないありんすちやんの対応にすっかり困り果てた副料理長は、思わず天を仰いで祈りました。

「たすけて……かみさま……」

きつとその声が届いたのに違いありません。まさにその瞬間、勢いよく扉を開けて救世主が現れたのでした。

「やほー！ こんばんはー！ 頼まれていた果物持って来たよ？ ……あれ？ シャルティアじゃん？」

副料理長は思い出しました。第六階層に新しく植えたリンゴ、桃、ミカンが食べ頃になったら知らせて欲しい旨、アウラのシモベに頼んでいたのです。それをわざわざアウラ自ら、しかも果物を持って来てくれたという訳です。

「これはこれはアウラ様。わざわざお持ちくださるとは誠にありがとうございます」

副料理長の瞳にはキラキラと光るものがありました。

「そんな事よりどうしたの？ シャルティア？ また寝ちやつたん

じゃないの？」

副料理長はアウラにこれまでの経緯を説明するのです。

「ふーん……あつそ。仕方ないなあ、シャルティア。邪魔ならあたしの家に連れて行ってあげようか？」

副料理長は渡りに船とばかりに、頷くのです。そしてアウラを静かに拜むのです。

かくしてありんすちゃんは眠ったまま、アウラに背負われて第六階層に運ばれていきました。

※ ※ ※

夜中にふとありんすちゃんは目覚めました。自分の部屋でなくアウラとマールレの部屋でしたがありんすちゃんは気がつかなかったみたいです。

マールレはハンモックで、アウラはありんすちゃんと一緒のベッドでぐっすり寝ています。安心したありんすちゃんはまた眠りに落ちました。

※ ※ ※

おやおや？ 五分も経たないうちにありんすちゃんがまた目を覚ましました。

どうしたのでしょうか？ ありんすちゃんはアウラを揺さぶりだしました。アウラを起こそうとしているのでしょうか？

アウラはぐっすり眠っていて、一向に目覚める様子がありません。そのうちゴロンとアウラは転がってありんすちゃんが寝ていた位置に移動しました。

ありんすちゃんは何やら一仕事終えたように満足げな様子でアウラが寝ていた場所に滑り込むとスヤスヤ眠り始めました。

※ ※ ※

「あー！ ウツソー！ えーな・ん・で？」

翌朝アウラの素っ頓狂な叫び声で皆起こされました。

「……………ん？ お姉ちゃん……………どうしたの？」

「……………いや。な、なんでもないから……………だ、大丈夫……………大丈夫だつて！」

ありんすちゃんはゆっくり起き上がりました。

と、いきなり、アウラはありんすちゃんを突き飛ばしてベッドから落とすとシーツを丸め抱えて部屋の外に走っていきました。

アウラが赤い顔をして戻ってきたのはそれから二時間後でした。何があったのかをいくら訪ねてもアウラは答えませんでした。

でも、ありんすちゃんにとつて嬉しい事にそれ以降アウラのありんすちゃんへのイジワルがバツタリ止まったのでした。

—— 教訓 ——

ミルクを飲み過ぎた後でそのまま眠るのはやめましょう

007 ありんすちゃんおめいばんかいする

「シャルティア、ほら……これが新しい村だよ。えへへへ」

ありんすちゃんはこの前のシヨットバーで副料理長の話を思い出していました。話の通りにいつの間にか畑や果樹園や集落が出来ていました。

「ほら、面白いでしょ？ さてさて、整列！ アインズ・ウール・ゴウン！ バンザーイ！」

——芸をするマンドラゴラ——

——様々な異業種の新しい住人達——

——そしてアウラが建てた山小屋風の建物の数々——

アウラはやたらと人懐っこい表情でありんすちゃんを連れ歩きま

した。
いつもならありんすちゃんにイジワルしてばかりのアウラが、です。

昨晚、ありんすちゃんが寝ていた間に何かあったのでしょうか？ ありんすちゃんには全く心当たりがないんですけれども。

そうそう、アウラにいつもと違う所がもう一つありました。マールレがアウラを呼ぶ時に明らかにドキツとするんですよね。

「おね（ドキツ）ーちゃん？」

「お姉ちゃん？」

「な……なんだ。マールレか……な、なにかな？ ……アハハハハハ……」

明らかにおかしいのですがありんすちゃんは気にならないみたいです
ですね。

仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なんですから。

「そうだ！ シャルティア、私からアインズ様に許してもらおうように
お願いしてあげるよ。ね？」

アウラの申し出はありんすちゃんにとってまさに願ったりでした
ので早速お願いする事にしました。

アウラはありんすちゃんに顔を近づけると小さな声で続けました。「だから……良いよね？ シャルティア、昨日の事は誰にも言わないでね？ ね？」

ありんすちゃんはなんの事かわかりませんがアウラの勢いに負けてコクリと頷きました。途端にアウラは笑顔になると踊るように歩き出しました。

ええつと。なんでしたか。こういうの。確か『名誉返上』とか『汚名挽回』っていうんでしたっけ？ 良かったですね。ありんすちゃん。これでようやくミルクを煽る毎日にサヨナラ出来ることでしよう。副料理長もきつと、ありんすちゃんの謹慎がとけた事を喜んでくれるでしょう。違った理由で……

※ ※ ※

いよいよ明日から自由に外出出来るようになったありんすちゃんはウキウキしながらお風呂で足をのびしました。二人のヴァンパイア・ブライドが代わる代わるありんすちゃんの髪をとかします。

湯船の中でありんすちゃんは両手を眺めながらぼんやりと思うのでした。

(そろそろちゆめを切らなくちゃでありんちゆ)

ヴァンパイア・ブライドにタオルでくるまれながらもありんすちゃんはあれこれとも思いにふけていました。

ベッドに横たわって天井をぼんやりみながらも。ありんすちゃんはその夜はぐっすりと、本当にぐっすり眠ったのでした。

幸せそうな笑顔を浮かべながら。

008ありんすちゃんカルネむらにいく

朝になりました。

大きく伸びをしたありんすちゃんは勢いよくベッドから跳ね起きました。

さてさて何処に出掛けましょう？　まずは洗面台で顔を洗いました。石鹸をこすって細かな泡を作ります。そして滑らかに出来た泡をまんべんなく顔に広げて優しく丁寧に洗うのです。最後に綺麗に洗えたか鏡を覗いてチェックします。

と、いきなり後ろから声が聞こえてきました。

「いやいや、オハヨーっす。シャルティア様、今日から謹慎解けておめでとっす」

振り返ってみると戦闘メイドの一人、ルプスレギナが満面の笑みで立っていました。

「ルプチュレギナ？　どうしたんでありんちゆか？」

（『ルプスレギナ』って言いにくいでありんちゆね）

そうなんです。ありんすちゃんはどうしても「す」が「ちゆ」になっ
てしまうんですよね。

「そうだ、シャルティア様あ、これからカルネ村に行かないっすか？
ちよつと面白い事が起きそうな気がするんすつよね」

ありんすちゃんも面白い事は大好きです。ありんすちゃんはカル
ネ村に行くルプスレギナについて行く事にしました。

※ ※ ※

カルネ村はナザリックに比較的近くにある小さな村です。ナザ
リックがこの場所に転移して始めてアインズが交流を結んだ村で、ア
インズの命令で交流の為、ルプスレギナ・ベータが時折訪れているそ
うです。

馬車を走らせながらルプスレギナはカルネ村の様々な話をしてく
れました。

現在、カルネ村には『人間のエンちゃん』『ンファイ』『ゴブリンさん達』などが混在していて賑やかならしいですね。

「可笑しいのがゴブリンさん達の事なんすっけど、男女でみた感じあんま違わないんすよね。んで、ゴブリン同士ならばつきりわかるかって思ったら意外や意外、ゴブリンさん達でもたまに間違えてるんすよ。笑っちゃいますよね」

しばらくするとありんすちゃんは眠たくなってきました。仕方ありません。そろそろお昼寝をする時刻なんですから。

だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なんですから。すやすや眠るありんすちゃんとお構いなしに話し続けるルプスレギナを乗せて馬車は山道を進んでいくのでした。

※ ※ ※

いつの間にか馬車が止まっていました。

ルプスレギナの姿はなく、馬車の中はありんすちゃん一人だけでした。どうやらとつくに目的地のカルネ村に着いていたようです。

充分にお昼寝を済ませたありんすちゃんは胸をワクワクさせながら馬車を降りたのでした。

「あなたは誰？ 何処から来たの？」

ありんすちゃんが声のした方を見るとありんすちゃんよりは大きな、でもやはりまだ幼さが残る女の子がこちらを伺っていたのでした。

「あなたはだれでありんちゆか？」

「人に聞く時は自分からまず名乗るのが礼儀だってお姉ちゃんと言った」

女の子は胸を張って答えました。

009 ありんすちゃんチャルメラになる

カルネ村で馬車を降りたありんすちゃんを待ち受けたのは十歳位の少女でした。

ありんすちゃんはちよつとビックリしたのでとつきに自己紹介が出来ずにまごまごしていました。だって相手は十歳位、ですがありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なんですから。

「仕方ないわね。いい？ 私はネム。ネム・エモット十歳よ」

「わらわはチャルチエア……で、ありんちゅ」

ありんすちゃんはネムの勢いに押されて小さな声で答えました。

しかも名前をちよつとだけかんでしまいました。

「チャルメラ・デ・アリンチュちゃんか。変わった名前ね。……あなたの事はこれからチャルメラちゃんって呼んでいい？」

え？ ネムってこんなキャラだったかですって？ 本編では大概エンリと一緒にしたからね。でもンフィーの事を『ンフィー君』と呼んだりして結構したたかだと思えますよ。

ありんすちゃんはネムに手を繋がれて歩き出しました。

しばらく行くと、向こうから一匹のゴブリンと弓矢を持った女の人 がやってきました。

「ジユゲムさーん。ブリタさーん」

名前を呼ばれた二人はネム達に手を振り返しました。

「おやおや？ こんな所にいたっすか？ 馬車の中にいなかったから探しちゃったっすよ」

不意に背後から声をかけられたありんすちゃんとネムは思わず飛び上がりました。

「びっくりした！ ルプスレギナさん。……チャルメラちゃんは知り合いなんですか？」

「チャ？ ……ああ……男胸さんなら友達っていうか、今はおもちゃっていうか……ま、そんな感じっすね」

ルプスレギナと話しているありんすちゃんとネムのもとにジユゲムとブリタもやって来ました。

「チャルメラちゃん、こちらはジユゲムさん。ブリタさん」
「よろしく」

「——！」
握手を交わすジユゲムとは異なり、ブリタの身には明らかに異変が現れました。

握手をしようとありんすちゃんに手を差し出した途端、まるで石像になったのかのように全身が硬直してしまったのです。

「ああああ!!」

突然、糸が切れた操り人形のようにその場へたり込むブリタの周りには水溜まりが出来ていました。

「あらあら？　ブリタさん、お漏らしっすか？　しょうがないっすね」
ブリタは何が起きたかわからない、という表情を浮かべていました。

それもそうです。

可愛らしい、5歳児位の女の子にしか見えないありんすちゃんがかつて出会った吸血鬼のシャルティアだなんて思うはずがありません。でも、身体が、もしくは魂がああ恐怖を覚えていたので駆けつけたエンリに

しばらくするとブリタが落ち着いてきたので駆けつけたエンリに預け、とりあえず風呂に連れて行ってもらいました。

ありんすちゃんは大人でもおもらしするという事を学びました。

※ ※ ※

——その夜のナザリック地下大墳墓第六階層——

「大人になってもおもらしちゆるんでありんちゅね……」

「——あーあー何を言ってるのかなーシャルティア。きーこーえーなーい」

この話題はアウラにとってなぜか禁句だったようです。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

010ありんすちゃんしつぼうされる

カルネ村から帰って来てしばらくありんすちゃんはナザリツクでのんびり過ごしていました。

もちろん仕事もちやんとやっています。

いつものように二人のヴァンパイア・ブライドに抱かれて巡回をしていると、バタバタと慌ただしくルプスレギナがやって来ました。

ルプスレギナはありんすちゃんの前で立ち止まるといきなり土下座をしました。

「シャルティア様、これからアインズ様にお会いするのですが、シャルティア様もご一緒していただけませんかでしょうか？」

ルプスレギナはいつもと異なり真剣な表情で頭を下げています。

しかしながらありんすちゃんはすぐに答えませんでした。ありんすちゃんは知っています。

魅力的な女性——熟女——というものは相手を焦らすものだという事を。

え？ ちょっと違うって？

まあ、気にしないでください。

ありんすちゃんの機嫌をとり、ようやく同行する事になったルプスレギナはホツとしてアインズの執務室に向かうのでした。

※ ※ ※

アインズの執務室に緊張した面持ちのルプスレギナと一緒に、訳が分からずキョロキョロしながらありんすちゃんが入ってきました。

ルプスレギナはアインズ様からの突然な呼び出しを受けてから、同僚達のいろいろ噂を小耳にしていただけに緊張が極限にまで達しようとしていました。

（叱られる……アインズ様に間違いなく叱られる。食堂でアインズ様を『絶対最強無敵ドクロキング』と呼んでしまったからだろうか？

……でも、あの時はシズが来て最後までは……もしかしたらあの事？

……いやいや……心当たりがありすぎ——)

メイド達の話ではあのアルベドすら現在謹慎中なのだそうですから、ルプスレギナには不安しかありませんでした。

ルプスレギナは直立不動で最敬礼しようとしたが、アインズはそれを右手で制し、口を開きました。

「ルプスレギナよ。私に何か話すべきことがあるのではないか？」

ありんすちゃんはアインズの脇にナーベラルとアウラがいることに気がつきました。アウラは何やらありんすちゃんを睨んでいます。人差し指を口にあてたり顔の前で指を振ったりしてきます。ありんすちゃんはアウラの意図が分からずアインズ達の会話を聞いていませんでした。

※ ※ ※

「——愚か者が！」

アインズの怒鳴り声にありんすちゃんは身を縮めました。あまりの恐怖にありんすちゃんは耳をふさぎます。あまりの怖さにちよっぴりそそうをしまいました。

そろそろと手を離すとまたもやアインズの怒鳴り声がありました。

「——！ お前には失望したぞ！」

ありんすちゃんはびっくりして、更にそそうをしまいました。ほんのちよっぴりだけ、ですが。

それできつとアインズに失望されてしまったのに違いありません。アウラが泣き出しそうになるありんすちゃんをあやしなから部屋の隅に連れていきました。

アインズはそんなありんすちゃんに気をかけながらも目のルプスレギナへの訓戒を続けるのでした。

※ ※ ※

全員が退出し、ただ一人となったアインズは溜め息をつきました。シャルティアが復活した時に消費した金貨は間違いなく五億Gありました。しかしながらカウントされたのは5億枚でなく一枚足りない4億9999万9999枚。

一体何があつたのでしよう……

※ ※ ※

静かに頭を抱えてうづくまるアインズの事を書棚の陰から見守る一人の領域守護者がいました。

彼は思い出していました。

あの日、何故か眷属の数が一匹足りなくなっていたことを。

てつきりいつもの天敵戦闘メイドの胃を満たしたのかと思つていましたが、どうやら深刻な事態を産んでしまったようでした。

「……………」

高貴な身分に相応しい、優雅な身のこなしでマントを翻すと自らの領域の階層へ帰っていきました。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

011 ありんすちゃんどダメいぬ

ルプスレギナは目を覚ましました。

頭が包帯でぐるぐる巻きになっていて、酷くズキズキします。

何だかいろいろな事があったようななかったような……大事な事を思い出しそうな忘れてしまったような……ハッキリしない、気持ちがモヤモヤしていました。

ふと見ると側にありんすちゃんを抱いたユリ・アルファがいます。

「ルプス、具合はどう？」

「ルプチュゲリナ大丈夫でありんちゆか？」

ありんすちゃんも心配そうです。

「あははは。いいっすよ、ルプーで。シャルティア様、いや……チャルメラちゃんもありがとーっす。なんかアインズ様に怒られた夢みちやいましたっすよ」

能天気なルプスレギナの言葉にユリは激しく激怒しました。

あの、至高の方々のまとめ役、ナザリック地下大墳墓の絶対的支配者たるアインズ様の激怒を受けたのに関わらず、このルプスレギナの脳天気さ。

このままにしておいてはルプスレギナだけでなくプレアデス全員にアインズ様のお叱りを受けるかもしれないのです。

ユリのお説教は昼まで続き、いつしかありんすちゃんは眠ってしまったのでした。

※ ※ ※

ルプスレギナとありんすちゃんがアインズの執務室に行ったあの日に一体何があったのでしょうか？

「まじ、アインズ様、ばねえっす。あそこまで物事を考えて行動しているとか、化け物なんて言葉じゃ言い表せないっす」

「ゴインー！」

ナーベラルの容赦ない一撃はルプスレギナの意識と記憶を奪って

しまったのでした。

殴る時に力が入りすぎてしまったようで、ルプスレギナの頭からは大量の血が吹き出してしまいました。

大変です。

5歳児位の女の子とはいえ、ありんすちゃんはついこの間血の狂乱でデミウルゴス牧場を壊滅させてしまっています。

この場を急いでなんとかしないとまたもや惨劇が、しかもナザリツク地下大墳墓の第九階層で起きてしまいます。

ナーベラルはルプスレギナの頭を両手でガシツと掴むと急いで引きずっていきました。

幸いにもありんすちゃんは緊張と疲れが押し寄せて眠っていましたから、そんなに急がなくても大丈夫だったみたいですが。

眠ってしまったありんすちゃんを迎えにユリ・アルファが呼ばれ、その後エ・ランテルに戻るナーベラルに頼まれてルプスレギナの面倒を見ていた、というわけです。

※ ※ ※

ありんすちゃんが目を覚ますといつの間にかルプスレギナのベッドに寝かされていてユリの姿はありませんでした。

「んじゃ、行きますっか」

何処へ行くのだろうかとありんすちゃんが不思議に思っていると、ルプスレギナが明るく言いました。

「カルネ村に行くすっすよ。汚名返上ってやつすよ」

かくてありんすちゃんはルプスレギナと一緒に再びカルネ村に行く事になりました。

※ ※ ※

ちなみにその後の本編にて王国でのゲヘナでナーベラルにルプスレギナが再会した時――

「久しぶりっす。ナーちゃんがアインズ様にドナドナされてから会ったのはこれが初めてっすよね」

　どうやらルプスレギナの記憶から一部の記憶——アインズの執務室でナーベラルと会っていた事——が消去されていたようです。

　極めて原始的な記憶消去法ではありますが……

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

012 ありんすちゃんいもうとになる

ありんすちゃんはルプスレギナに連れられて再びカルネ村にやってきました。

そうそう、ありんすちゃんはこの前来たときにネムからクマさんのワンピースが貰った可愛いパンツをプレゼントされていたので、そのパンツをはいていきました。

カルネ村では入り口でネムがブリタと待ち受けて、ありんすちゃんに手を振っていました。

「チャルメラちゃん。ルプスレギナさーん」

ありんすちゃんは駆け出しました。

目の前に行くとネムは自分のスカートを捲り上げて笑いました。

「おっそろーい」

見るとネムも同じクマさんパンツをはいていました。

ブリタは何だか具合が悪そうに青い顔をしています。

もしかしたらお腹を出して寝ちゃって風邪をひいちゃったのかもしれないですね。ありんすちゃんもたまにありますよ。

「ありやりや。将来レディーになりたいんだったら感心しないっすね」

「…………ごめんなさい」

ネムは顔を真っ赤にして俯きました。

「どうやらネムはルプスレギナの言うことは素直に聞くみたいです
ね。」

「チャルメラちゃん、行こっ」

ネムはありんすちゃんの手を掴むと駆け出しました。

「やれやれ、しょうがないっすね」

※ ※ ※

ネムはありんすちゃんを村の外れに連れてきました。

そこには小さなテントがあつてネムは中に入ります。

テントの中には小さな椅子、本、ランプ、マグカップが置かれた小さな机があります。どうやらネムの秘密基地みたいですね。

「チャルメラちゃん、あなたは今日から私の妹にするから。私の事をお姉ちゃんと呼ぶの。ね?」

「わらわのお姉ちゃんでありんちゆか?」

ありんすちゃんの脳裏にダークエルフの双子が浮かびましたがすぐに追い払いました。

まごまごしているうちにありんすちゃんはネムの妹という事にされてしまいました。

集会所に行くともう会議は終わっていて、村人がそれぞれ帰っていく所でした。

「お姉ちゃん」

ネムがエンリに駆け寄りそのまま抱きつきます。

「私ね、チャルメラちゃんを妹にしたんだよ。だから私も今日からお姉ちゃんだよ」

「これでネムさんも大人の仲間入りっていう事ですね」

カイジャリが楽しそうに話に加わります。

「ネム。それは良かった。……本当に」

エンリは上機嫌でありんすちゃんⅡチャルメラちゃんを抱きしめるネムを眺めながら、久しぶりにほのぼのした気持ちを味わっていました。ルプスレギナの話ではしばらくありんすちゃんが泊まっています。らしいのです。

父母を亡くしてから健気にもおとなしい『よい子』だったネムが少しでも年令相応の子供らしくいられたら、と姉らしい気分になりました。

賑やかに家に向かうエンリ達から離れた木陰に佇んだ人影がポツリと眩きました。

「あー村、滅んでくれないかなあつすね」

013 ありんすちゃんすやすやねむる

しばらくの間、ありんすちゃんはカルネ村に滞在する事になりました。

アインズに失望されたと思い込んでいたので挽回しようと思死です。それに……激怒したアインズの怖かった事……チビってしまったのは内緒です。

絶対に内緒ですよ？

村の外れにはルプスレギナがいました。

「ルプー？ どうしたでありんちゆか？」

「おはつす。いや、もう夕方っすけど。そういや私もチャルメラちゃんって呼んでいいっすか？」

困ったありんすちゃんはいいややをしましたでしたが、ルプスレギナには通じなかったみたいです。

「今日あたりなんか楽しくなりそうな気がするっすよ」

ありんすちゃんも楽しい事は大好きです。

もしかしたらありんすちゃんの歓迎パーティーとかあるのかもしれないですね。だってありんすちゃんはとてもとても可愛い女の子なんですから。

楽しい事を待っていたありんすちゃんはお昼寝も我慢して待ち続けました。

次の日も次の日も。

でも、そのうち眠くて眠くて我慢出来なくなって熟睡してしまいました。

え？ アンデッドのヴァンパイアが眠くなるのはおかしいですって？

だってだってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なんですから。

ありんすちゃんは村がざわつくのをよそに熟睡してしまいました。

※ ※ ※

村の外では大事件が起きていました。なんとカルネ村をモンスターが襲ってきたのです。

エンリ、ンファイレーア、そしてジユゲムらゴブリン達は村人を指揮して応戦しています。

ルプスレギナはどうやらナザリックにちゃんと報告したみたいですね。

「さてつと。汚名返上にはもってこいつすね。あとはギリギリのピンチ作って格好よくルプー姉さん登場、っていきたいっすね」

※ ※ ※

一方ありんすちゃんは どうして いる でしょうか？

村の真ん中にある、ひとときわ大きな建物——集会所にありんすちゃんはいました。

ネムやリイジーらと一緒に避難している村人と一緒です。

ピンク色の可愛いタオルケットにくるまれてスヤスヤと眠っていますよ。

仕方ないですよね。

だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子に過ぎないのでから。

え？ いい加減この言い回しがくどい？

申し訳ありませんがこれを無くすとこの作品のアイデンティティが崩壊する恐れがありますので我慢して頂けたらと思います。

※ ※ ※

一方ルプスレギナは……

「やっば、こうンファイーちゃんがエンちゃんの危機に颯爽と登場なんかしちゃって『僕の命はエンリのものさ。エンリ、キミを愛してる！』って妙なフラグ立てて、でも次の瞬間に呆気なく倒されて絶対絶

命！ って所でジャーン！ ルプー姉さん登場！ っていきたいもんすね。さてさて……」

ルプスレギナはアインズの言葉を思い出しました。確かはつきり言っていました。そう、「モンスターに襲われるなら仕方ない」と。

そうなれば手軽なモンスターがンファイー達を襲えば良いのです。彼らの手に余る、丁度良いモンスターが……

ルプスレギナは不可視化したまま村を観察すると西側にウロウロ所在なげにしているトロールに気がつきました。邪悪な笑みを浮かべるとルプスレギナはトロールにそつと近づいていきました。

※ ※ ※

ありんすちゃんが目覚めた時には全てが終わっていました。

「いやー、なんとか汚名返上出来たっすよ。最高っすね」

ありんすちゃんにはなにがなんだかわかりませんでした。

014 ありんすちゃんつめをきる

ありんすちゃんは朝から少し緊張していました。

アイنزの命令でこれから守護者や戦闘メイドらとり・エステイ
ゼ王国へ行く事になったのです。

ピクニックに行くのではないんです。

戦争に行くんです。

ありんすちゃんは興奮して昨日はよく眠れませんでした。

ナザリック守護者、戦闘メイド、シモベ達、それにありんすちゃん。
その他に応援部隊もいるらしいですよ。凄いですね。でも、やっぱり
ありんすちゃんが主役だと思います。

それは、ありんすちゃんが一番可愛いからです。

一足先に王都で準備していたセバスが出迎えます。

「これほどのメンバーが揃うとは……アイنز様に感謝の言葉を申し
上げなくては……ん？」

デミウルゴス、マール、ソリュシヤン、エントマ、ありんすちゃん。
順に挨拶するセバスがありんすちゃんに少し驚いたみたいでした。

ありんすちゃんは張り切っています。

デミウルゴスが次々に指示を出します。今回はデミウルゴスが責
任者です。いよいよありんすちゃんの番です。張り切っていたあり
んすちゃんは胸を張って命令を待ちました。

「——シャルティア。君は遊軍として遊んでいてくれたまえ」

ありんすちゃんは喜びました。遊ぶのは得意ですから。多分、守護
者の誰よりも遊びが得意かもしれません。ありんすちゃんは張り
切って遊ぶ事にしました。

ありんすちゃんは扉の上をバランス取って歩いてみたり、あちこち
の倉庫を開けて覗いてみたりしました。疲れたら昼寝して、夕方にま
た遊びました。

いつの間にか綺麗な炎が王都の一角にあがっていたので、ありんす
ちゃんは見物しにいきました。たしかゲヘナの火とかいった気がし

ます。

すっかり夜になりました。そのうちありんすちゃんは一人で遊ぶのにだんだん飽きてきてしまいました。

ありんすちゃんはもつと楽しそうな事はないか探してみました。ふと見ると闇夜に目立つ白い鎧を着た少年が向こうを走っています。そうだ、鬼ゴツコをしよう。ありんすちゃんは閃きました。あの白い鎧にペタペタと手形を付けたらきつと楽しいですよ。きつと。

※ ※ ※

白い鎧を追いかけようとするありんすちゃんはいきなりとうせんぼされて戸惑いました。見たことがない、ワカメみたいな髪の毛がびっくりしたような顔をしています。

「——シャ、シャルティアだよな? ……いや……シャルティアの子供? いや……妹? ……もしかしたら親戚の子供か? はたまた、他人のそら似……それは無いよな……」

その男、ブレイン・アングラウスは戸惑っていました。遠目でシャルティアだと思った女がよく見たら5歳児位の女の子だったのですから。

ありんすちゃんには記憶がありませんでしたが、ブレインは以前、シャルティアと対戦して泣きながら逃げ出した事があるのでした。

「えっと……あの……(ど、どうする? 俺……)」

しどろもどろの状態で戸惑うブレインに対してありんすちゃんが命令しました。

「邪魔でんちゅよ。そこからどくでありんちゅ」

「……あ……は、はい……」

ブレインは動揺しながらありんすちゃんに道をあげようとしてしまった。と、足がもつれて尻餅をついてしまいました。

「それは何でありんちゅか?」

ありんすちゃんが拾い上げたのはブレインのポケットから落ちた爪切りでした。

「……っ、爪切り……だが……」

ブレインの頭の中で瞬時にいろんな考えが駆け巡るのでした。

(この女の子はやはりシャルティアと関係があつて、近くにシャルティアがいるかもしれない。ここはクライムのための時間を稼ぐ為になんとかすべきだろう……しかし、どうしたら……)

ブレインはありんすちゃんに思わず言いました。

「……あの……良かったら爪を切りませんか？」

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

015ありんすちやんかめんをかぶる

今日もみんなで王都に行きます。

今回はみんな仮面を被っていくみたいですね。

ありんすちやんも仮面が欲しかったのにデミウルゴスはくれませんでした。

ケチんぼですね。

ありんすちやんは仮面が欲しくてたまらなくなりました。

ルプスレギナもエントマもユリもソリュシャンもシズも仮面を貰っています。

ありんすちやんは面白くありませんでした。

ありんすちやんは仮面がなきゃ行かないとだだをこねてみましたが、デミウルゴスはあっさりとありんすちやんを置いていっちゃいました。

「……デミウルゴチュのばか」

ありんすちやんはデミウルゴスの悪口を言ってみましたが気は晴れません。手に入らないとなんだかとてももなく素敵に思えて諦められません。

ありんすちやんがお面をつけたらどんなに似合うでしょう？

だってありんすちやんはとてもとても可愛いらしいのですから。

ありんすちやんの頭は仮面の事で一杯だったのですが、そんな時久しぶりに、本当に久しぶりにくしゃみが出ました。

「くちゅんー」

ありんすちやんはまたしても何処かに転移してしまうのでした。

※ ※ ※

「きゃっ！」

ありんすちやんが転移した先は誰かの頭の上だったので、丁度あり

んすちやんの頭と相手の頭がぶつかってしまったのでした。

その相手——赤いフードと漆黒のロープを着た金髪の女の子——は完全に気絶してしまっていました。

年齢は十四歳位でしょうか。ありんすちは5歳児位なので随分お姉さんですね。

ありんすちは全く悪くありません。これは事故です。もしかしたらこの女の子がわざとありんすちやんが転移した場所にいたのかもしれない。

ふと、ありんすちは女の子のすぐ側に素敵な物が落ちていたのに気がつきました。なんと！ありんすちやんが欲しかった仮面が落ちていきます。デミウルゴスの仮面とはデザインが違いますが、これはこれでカッコイイ仮面だと思います。真ん中についた朱い宝石が綺麗です。ありんすちはさっそく仮面をつけてみました。

とってもお似合いです。ありんすちは可愛いので何でも似合っちゃいますね。

ありんすちはクルリと回ると人差指ですをあごに当ててポーズをとりました。完璧です。仮面は最初からありんすちやんのものだったみたいについています。

「……こんな所にいた……急ぐぞ……」

ありんすちは不意にやって来た女性に手をつかまれました。

「ボスが待ってる。いくぞ」

ありんすちはそのまま連れていかれてしまいました。

※ ※ ※

なんだかんだでありんすちはモモンとナーベと一緒に王都リ・エステーゼの中央にきていました。誰もありんすちやんだという事に気がつかないようです。

ありんすちは楽しくなりました。

そのうちデミウルゴスが戦闘メイドと一緒に現れました。みんな仮面をつけています。

ありんすちゃんはまだ羨ましくありません。

だってありんすちゃんも素敵な仮面を持っていますから。

おやおや？ 誰一人としてありんすちゃんだとは気がつかないみたいですね。ありんすちゃんはナザリックでお留守番しているはずなので、まさか王都にきているとは思いませんでしたね。

アインズとデミウルゴス、ナーベラルとルプスレギナ・ソリュシヤン・エントマ、ありんすちゃんはユリ・シズと対します。

ありんすちゃんが仮面を外して正体を教えてあげるとみんなビツクリするでしょう。ユリはビツクリしすぎて首を落としてしまうかもしれません。

そんな事を想像しながらワクワクして仮面を外そうと――

「くちゅん！」

なんと！ ありんすちゃんはまたまた転移してしまいました。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

016 ありんすちゃんイタズラする

ありんすちゃんが転移したのは小さな小屋の中でした。

中に小さな机と二つの椅子が置かれています。

「……誰かいるでありんちゆか?」

ありんすちゃんは礼儀正しく声をかけました。

本当は家人の許可がないと家に入ってはいけないという迷信があるんですけどね。

「あ……あれ? ……ど、どなたですか?」

見るとマールレがびっくりしてこちらを見えています。どうやら仮面をしているのでありんすちゃんだと気がつかないみたいですね。

ありんすちゃんはいたずらを思い付きました。

「マールレ、お姉ちゃんのアウアウでありんちゆよ。わからないでありんちゆか?」

ありんすちゃんはマールレをからかってみました。

「なんだ。お、お姉ちゃんだったんだ……仮面をつけてたから、あの、わからなかったです」

マールレはなんて素直なんでしょう。

ありんすちゃんの言うことを信じて姉のアウラ——ありんすちゃんはアウアウと言ってしまいましたが——だと信じています。

本当に仮面って凄いですね。よく仮面をつけただけで正体がわからないなんて事が設定上おきますが、あれは嘘じゃなかったのですね。さて、どうしよう……

ありんすちゃんは完全に信じきった様子でこちらを見るマールレに質問しました。

「マールレはここで何をしているんでありんちゆか? お姉ちゃんに言うでありんちゆ」

「えっと、あの、アインズ様とデ、デミウルゴス様が、あの、ここで……」

その時入り口の扉が壊れて二人の人物が入ってきました。

「まず、この部屋は安全なのだな?」

「大丈夫でございます……ん?」

「!」

アインズとデミウルゴスはアインズちゃんに気づいて身構えました。

「……これは!」

「……蒼薔薇の?」

(——たしかイビルアイとか言ったな。なんであの子供がここにいるんだ? しかも一人? ……)

アインズ様もデミウルゴスも混乱していますね。二人共完全にイビルアイだと思い込んでいて、正体があるアインズちゃんだとは思えないみたいです。

やりました。

アインズちゃんのはたは大成です。

おやおや? 大変です。

どうやらいたずらの度が過ぎてしまったのかもしれない。

二人共怖い顔をしてアインズちゃんを睨んでいます。ただならぬ殺気を感じてアインズちゃんは泣きそうになりました。

(……そうでありんちゆ! 仮面をはずちやないと……)

あわててアインズちゃんは仮面を外しました。

「アインズちゃん! うわーん!」

「——シャルティア?」

「……?」

「えーお、お姉ちゃんが、シャ、シャルティアさんに? え、えっと、えっと……ええー!」

「——マール? ……ちよつまっ——」

動揺したマールはうっかり魔法を発動してしまいました。

※ ※ ※

王都に合図の地震が起きました。

「地震だ。マール様ガヤツタミタイ」

「これは何かのサインなの?」

「そうっすよ、ナーちゃん。悪いんすけど、ちよつと怪我してもらっ
すよ」

かくして王都をゆるがすゲヘナは終盤へと移行していくのでした。

※ ※ ※

その夜、お風呂でありんすちゃんはパンツを洗っていました。あま
りにも怖かったのでそそうをしてしまったからです。

仕方ないですよ。だってありんすちゃんは5歳児位のまだ小さ
な女の子なのですから。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

017 ありんすちゃんどバイコーン

——ナザリツク地下大墳墓第六階層——そこにアウラ、アルベド、そしてありんすちゃんがいました。ありんすちゃんはとつてもワクワクしています。

「では、始めるわ——来なさい。私の騎獣」

アルベドが発動したスキル、騎獣召喚で姿を現したのは馬よりは少し小さいながら迫力が凄まじい漆黒の魔獣でした。

「おお！ 普通のバイコーンとは違う！ 角も身体も立派だね」

「そうよ。まさにウオーバイコーンロードとでもいうべき存在。残念ながら空を飛ぶのは無理ね」

「とつてもちゅよそうでんちゅね」

アルベドはありんすちゃんに答えるかわりに頭を撫でました。アウラは興奮した様子で訊ねました。

「で、なんて名前なの？」

「……そうね。トップ・オブ・ザ・ワールド……とでも付けようかしら」

「チョプオバールト？ でありんちゅか？」

「……」

「まあまあ。じゃあ次いつてみようよ!?!」

アルベドはバイコーンに向き直り鎧に足を掛けひらりとまたがりました。するとバイコーンがよろめきだすのでした。

「アウラ！ シャルティアア！ 私のバイコーンの様子が変なの」

「と、とりあえず降りなよ、アルベド！」

アルベドが飛び降りると疲れきったようにバイコーンがへたり込んでしまいました。

「きつと重ちゅぎたんでちゅよね」

ありんすちゃんが得意げに解説します。そうです。ありんすちゃんは5歳児位の女の子にしか見えませんがとつてもとつても、とつても賢いんです。

大事な事なのでもう一度言います。

ありんすちゃんはこう見えて、とつてもとつてもとつても賢いんです。

「アウラ、あなた魔獣と会話なんか出来ないの？」

「無理無理。てか、ずっと前にあたしの能力は全て話したじゃん」

「さしてどうしたものでしょう？」

「そうだ。デミウルゴスなら何かわかるかもしれないんじゃない？」

「アウラが名案を思い付きました。」

「残念だけどデミウルゴスはアインズ様のご命令で現在外で働いていないわ。余程の事でなければ相談は無理ね」

三人は途方にくれるのでした。

しばらくしてからありんすちゃんが口を開きました。

「きつとアルベドが重たちゆぎたんでちゆよね」

アルベドはせっかくのありんすちゃんの指摘をあたかも聞こえなかったかのように無反応でいます。

なんとという事でしょう！

賢いありんすちゃんの見解を無視するとは！ ありんすちゃんはひとりプンプンしながら頬を膨らみますのでした。

「……ひまだねー」

「……そうね」

膨れているありんすちゃんには全く触れず、二人は空を見上げていました。

※ ※ ※

部屋に帰ってからありんすちゃんやんは以前にアインズ様から貰ったペロロンチーノの百科事典——エンサイクロ・ペディア——を広げました。

「バ……バイ……バイコ………あつたでありんちゆ」

ありんすちゃんやんはバイコーンの項目を声に出して読み始めました。

「えっと………の………を………に………して、………は………を………ると………われている。???」

残念ながらありんすちゃんにはひらがなだけしか読めませんでした。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

※ありんすちゃんが挿し絵を描いてくれました

018ありんすちやんのかしましい

ナザリック地下大墳墓第九階層のアルベドの私室——かつてナザリック地下大墳墓を作り上げた至高の四十一人に与えられた私室と同じに作られた一室にありんすちやん、アルベド、アウラの三人の姿がありました。

「アウラ、さつきからあまり機嫌が良くなさそうだけれど、眠いのかしら？」

アルベドが慈母のような微笑みを浮かべながらアウラに問いかけました。質問に答えたのはアウラではなくありんすちやんでした。

「アウアウはおねむでありんちゆ。わらわはモンブランが食べたいでありんちゆ」

そう言いながらもありんすちやんは両手にしっかりとマカロンを持っていきます。アウラは二人をあきれたように見ながら話し始めました。

「まったくいい気なものだね。……あのさあ、この間デミウルゴスから言われたんだよ、あたし。『アルベドとシャルティアが問題を起さないようにアウラがしっかり手綱を握っていてくれたまえ』だってさ。これっておかしくない？」

早速ありんすちやんが答えました。

「たじゆなってお菓子、食べてみたいでありんちゆ」

「馬鹿ね、シャルティア。手綱よ手綱。確かにおかしいわね。手綱を握ってもらうならアインス様よ」

アウラは憐れみを含んだ眼差しを二人に送るのでした。

「そういう事じゃなくて、あなた達の面倒をみるのがあたしの役割だって思われているの。なんで？」

「やっぱりモンブランが食べたいでありんちゆ」

アルベドはありんすちやんの頭を撫でながら言いました。

「確かにおかしいわね。小さなアウラには荷が重いから私がその役割を担ってあげるわ」

アルベドはこれ見よがしに胸を張ると豊かな双丘がアウラの目の

前でプルンと揺れました。

「あのさあ、嫌味が通じないの?」

「モンブランが食べたいでありんちゅ」

ありんすちゃんは足をバタバタさせ始めました。どうしてもモンブランが食べたいみたいですわね。

「おつきい栗の、乗った、モンブランが、食べたいでありんちゅ」
アルベドとアウラはそんなありんすちゃんを無視して会話を続けました。

「嫌味なの?」

アルベドの表情は穏やかでしたが、金色の瞳は少しばかり冷たい光りを放っていました。

「……もういいよ。ところであたし達を呼んだのは何の用だったの?」

「実は……内密にしたい相談事があるの」

アルベドは声を落として語り始めるのでした。要約するとアルベドの唯一の神器級マジックアイテムである鎧“ヘルメス・トリスメギストス”の性能についての相談がしたいという事でした。

「——シャルティアはマジックアイテムの能力を解析する魔法を使えたわよね? この鎧にかけて——?」

アルベドがありんすちゃんに振り向くとなんとありんすちゃんはテーブルにうつ伏せになって眠ってしまったっていました。

仕方ありませんよね。ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

※ ※ ※

「……で、結局何が問題なわけ?」

頬杖をついたアウラがジト目で尋ねました。

「私の鎧、三層になっていてダメージを受け止めるのだけれど、それだけの層が破壊されても少しも露出度がアップしないのよね。せっかくだから少しずつ肌が露出していくべきじゃないかしら?」

「……あーあー。さいですか」

アウラはすやすやと眠っているありんすちやんを眺めながら、ふと、自分も居眠りしてやろうかと思うのでした。

※ありんすちやんが挿絵を描いてくれました

019 ありんすちゃんだいかつやくする

その日ありんすちゃんはお昼頃に目が覚めました。なにやらシモベ達がざわついていきます。

第一階層や第二階層のスケルトンやエルダーリッチ達がやたらと張り切っています。

ありんすちゃんは自分の守護階層の見回りをしてみました。今回はなんとありんすちゃん一人で見回ります。いつもだったらシモベの二人のヴァンパイア・ブライドと一緒にないと見回りしないのに不思議ですね。

実は先日、アウラとアルベドから一人で階層の見回り出来ないとなりんすちゃんがからかわれたからです。

「なに、シャルティアってもしかして自分の階層の見回り、一人じゃ出来ないの？ そんなのまるで赤ちゃんじゃん」

「……おぎゃー。……ちよつと言ってみただけよ。別に意味はないわ」

よりにもよって、ありんすちゃんを赤ちゃん扱いしたんです。許せませんよね？

アウラなんか、アウラなんかこの間おねしよしたシートを第六階層の片隅で干していたってマールから聞いちゃいましたから。ありんすちゃんはもうおねしよなんてしません。

そりやたまにシートが濡れていた朝があつたかもしれませんが、寝ぼけてちよつとお水をこぼしちやつたのに違いありません。

ありんすちゃんは気持ちを入れ替えて見回りに集中しました。

ふと見ると恐怖公が眷属を並べてフォーメーションの練習をしていました。

「——違うぞ、違う。この動作の次は第一班がこうズサササつとまづ足下をすくう。で、第二班が視界を奪いつつ顔面を制圧。そう、もつと素早く。で、第三班第四班が衣服の隙間から侵入。でこの時に悲鳴を上げるから第五班が口から……」

恐怖公はありんすちゃんに気がつくと恭しくお辞儀をしました。

「これはこれは我が領域の階層守護者、シャルティア・ブラッドフォルン様。どうぞ我が眷属をご覧下さいませ」

たくさんのゴキブリ達がずらりと整列してありんすちゃんにお辞儀をしました。

ありんすちゃんは恐怖公とその眷属がちよつと苦手です。正直なところ、出来るだけ近づきたくないのが本心でした。そこでありんすちゃんは適当に挨拶してその場を去りました。

ひと通り見回りをして、お風呂に入ったら今度はお昼寝をします。え？ お昼まで寝ていたから必要ないですつて？

とんでもありません。睡眠不足はお肌の大敵なんですよ？

え？ いつもだったなら「だって、ありんすちゃんは5歳児位だから仕方ない」というですつて？

気まぐれでちよつと変えてみました。

さてさて、ありんすちゃんが再び目を覚ましたのは夜も更けた頃でした。夕方から一眠りすれば当然ですよ。ありんすちゃんは第一階層に行ってみました。

何だか騒がしいので近付いてみると冒険者達がスケルトンと闘っています。戦闘メイド達が見物しながら声援を送っています。

「ルプー、みんなずいぶん楽しそうでありんちゆね？」

「一緒に見物するつすか？ 面白いつすよ？」

「アア、アンナ時二飛ンジヤイイ的ジャネ？」

ありんすちゃんも応援してあげる事にしました。ありんすちゃん はあまりにも興奮してしまったので階段の手すりから大きく身を乗り出してしまいました。

「——危ない！」

冒険者の盗賊がありんすちゃんを助けようと振り向いた瞬間にスケルトンの一撃が見事に当たりました。

「ば馬鹿者しや……」

緑の冒険者が気を取られてこれまたスケルトンの一撃。次々と冒険者達はまるでドミノ倒しのように地に伏していききました。

「ナザリック・オールドガーダーの出番までいかなかったわね」

「セツヤク出来テ良カツタジヤナイノ」

「やったつすね。シャルティア様、大活躍つすよ」

ありんすちゃんは張り切つて第二階層に向かいました。

※ ※ ※

第二階層には他の冒険者達がいきました。

どうやら落とし穴に落ちそうになっています。ありんすちゃんは棒でカブトムシみたいな冒険者をちよんちよんと突つついてみました。

カブトムシは脇の下を突つくとヘンな声を出すので面白くなりました。

ツンツンツン

「あふん。あふ、あふん」

……ツンツンツンノツツン

「……あ、あ、あふん、ふふん」

ありんすちゃんは指揮者のように棒を構えて——それぞれ、それ。たまらなくなつたカブトムシは向きを変えました。

ありんすちゃんからだとお尻が突つつきやすそうですよ。

ツンツンツンツン……ブスツ?

「あふあふあふん。んへ? あ、——」

カブトムシは暗闇に落ちていつてしまいました。穴の底で恐怖公がありんすちゃんに感謝のお辞儀をしました。周りに眷属達も並んでいます。ありんすちゃんは自らの活躍をアインズ様に報告しようと第九階層に向かいました。

※ ※ ※

第九階層にアインズ様はいませんでした。メイド達の話では他の

階層守護者達と一緒に第六階層に行っているらしいとの事でした。

ありんすちゃんをのけものにしてみんなでケーキでも食べているかも知れませんか。

ちなみにありんすちゃんが好きなケーキはモンブランです。もちろんでっぺんの栗を一番最初に食べます。

ケーキの事を考えながら、ありんすちゃんは第六階層に到着しました。

コロッセウムの前に来るといきなり扉が開きました。みるとアラが扉を開けたところでした。

「――アルシエ！ 逃げてえ！」

「うん。ぎつどもんなもぎでね」

ありんすちゃんがコロッセウムに入ろうとしたら中からロケットみたいな勢いで飛び出してきた女の子と正面衝突しました。

女の子はありんすちゃんが倒れたのを見てびっくりして 抱き起こしました。

「――おお？ シャルティアがアルシエを捕まえた！ お見事お！」

アラが叫んでいます。本当はありんすちゃんの方が捕まったよ
うな感じなんです。

今夜はありんすちゃんが大活躍の夜でした。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

020ありんすちゃんていこくにいく

今日のありんすちゃんのははアインズ様に頼まれてバハルス帝国に使者として行く事になりました。

お供はアウラとマーレの双子のダークエルフです。

もちろんありんすちゃんは一人でちゃんとお務めを果たせますが、双子がどうしても連れて行って欲しいとだだをこねるので仕方なく連れて行ってあげる事にしたのでした。ありんすちゃんはとても優しいですね。

マーレはドラゴンを持っています。

アインズ様はマーレにありんすちゃんをドラゴンに載せるように命令しました。

アインズ様の前では双子のダークエルフも子犬みたいに大人しいものですね。ありんすちゃんの出発をアインズ様はわざわざ見送ってくれました。

バハルス帝国に着くとそのまま王城を目指します。

王城の前の広場みたいな所にドラゴンは舞い降りました。

さて、いよいよありんすちゃんのお仕事です。

まずはアウラがマイクを使つて話します。

「あーあー。聞こえますか？ あたしはアインズ・ウール・ゴウン様に仕える、アウラ・ベラ・フィオーラです！」

「……ありんちゅ」

「この国の皇帝がアインズ様のお住まいのナザリック地下大墳墓に不屈きな奴らを送り込んできたのでアインズ様はお怒りです！」

「……でんちゅ」

「皇帝が謝罪しないとこの国を滅ぼします！」

「……でちゅよ！」

「手始めにこの広場のみんなは皆殺しにします！」

「……殺ちまちゅ」

「マーレ！」

マーレが杖を地面に刺すと大きな地震と共に地割れが出来、広場に

いた兵士達を飲み込んでしまいました。

「はい。皆殺しにしました。次はこの城を壊しちゃいます。——と
思ったけど皇帝も死んじゃうので止めてあげます」

「……あげまちゅ」

「早く皇帝出てきて下さい！ でないとこの都市を壊しちゃいます
！」

「……ありんちゅ」

バハルス帝国皇帝、ジルクニフは窓から顔を出して震える声で叫び
ました。

「ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルニクスは私だ……話し合
いをしたい……」ので、こちらまで来てもらえるだろうか！

ジルクニフは語尾だけ勇ましく叫びましたが、国民の多くに皇帝が
ビビっちゃっている事が丸わかりでした。

応接室に使者達を待たせてジルクニフは深く深呼吸をしました。
初戦ではドラゴンに大地震という天災級の荒技に度胆を抜かれたも
の、所詮相手は子供達です。

したたかなバハルス帝国皇帝、鮮血帝ジルクニフにかかればまさに
赤子の手をひねるようなものです。

（まずは、ご使者殿を観察して、出方次第で臨機応変に探りを入れてい
くか？ とりあえずあれだけ慎重に手配したワーカー達と何故この
ジルクニフを結び付けたのかを探らないと……）

扉を開くとジルクニフはとびきりの笑顔をアインズ様なるものの
使者達に向きました。

しかし、……そこに使者達の姿はありませんでした。

部屋の中にはジルクニフのメイドだけがいて、困ったような顔で答
えました。

「皇帝陛下、あの……ご使者様方はお手洗いに行かれました」

ジルクニフは部屋の中でメイドと三人、使者達の戻るのを待つこと
にしました。

……待ちました。

……ジルクニフは使者達の戻りを待ちました。

が、使者達はいつまで待っても戻って来ませんでした。

※ ※ ※

「……一体何だったんだ？」

翌日、ジルクニフは執務室で頭を抱えています。

「……まあ、このままなにもないという訳にはいくまい……さて、どうしたものか……」

ジルクニフは誰に言うことなく呟いていました。そして腕を組み、考えを巡らせるのでした。

（しかしながら………いったいアインズ・ウール・ゴウンとは何者なのだろう？ ……あのように一方的に力を誇示されては帝国としても無視する訳にいかない。もしかしたらそれが狙いか？ ……だとすれば相当な策士だといえよう。それに使者として子供達を選んだ事も、こちらの油断を招く狙いだったのかもしれないぞ……うーむ、アインズ・ウール・ゴウン、恐るべき相手だ……）

ジルクニフが考えに耽っていると、なにやら広場が騒がしくなりました。

窓から見下ろすと今まさに一匹のドラゴンが、昨日と全く同じ光景を再現するごとく、舞い降りて来る所でした。

背中には昨日の三人の子供達——いや、アインズ・ウール・ゴウンの使者達が乗っています。

「……まるでデジャヴのようだが？ ……いいや違う……これは悪夢だ……」

「あ、あのー聞こえますか？ ……ぼ、僕はア、アインズ様の使者として来ました」

「……きまちゆた」

「皇帝は、あの、すぐにアインズ様に謝りに来て下さい」

「……ありんちゆ」

「……あの、とりあえず、この広場のみんなは死んでもらいますね」

「……ちぬでんちゆ」

マーレが杖を突くと広場に地震が起き、昨日の出来事がビデオで見
るかのように再現されました。

「やーめーてーてー!!」

ジルクニフの絶叫しは折から起こる凄まじい地鳴りにかき消され
てしまいます。

傷跡が生々しく残る広場の亀裂が再び口を開け、兵士達を飲み込ん
でしまうのでした。

021 ありんすちゃん と ジルクニフ

バハルス帝国の王城にドラゴンに乗ってやって来たありんすちゃんとアウラ、マーレの三人は広場にいた帝国兵士達を魔法で生き埋めにしてしまいました。慌てて顔を出した皇帝、ジルクニフの懇願によりありんすちゃん達はひとまず皇帝と会見する事にしました。

「さて、ご使者殿。私がバハルス帝国皇帝、ジルクニフ・ルーン・ファード・エルニクスである。……先だってフィオーラ殿が言っていた件だが、私には全く心当たりが無いのだから？」

ムツとしたアウラを制してありんすちゃんが口を開きます。なにしろアインズ様から今回の任務の責任者に指名されたのはありんすちゃんなのですから。

「ナジャリックにワーカーが泥棒しに来ちゃでありんちゆ。皇帝の命令でありんちゆ」

ありんすちゃんの鋭い指摘にジルクニフは動揺しました。

「なにを……いや、言いがかりだ。私は知らぬ……なにか誤解されているのであろう」

(ワーカー達を送り出す計画は慎重に進めたから私の関与を示すものは何もないはずだ。……きつと口から出任せに決まっている)

ジルクニフの心の中の葛藤を見抜くようにありんすちゃんが可愛いらしく小首を傾けました。

「アインジュちゃんに謝罪しないでありんちゆね。じゃあ帝国はおちまいにするでありんちゆ」

ありんすちゃんはそう言うのと立ちあがりました。両隣のダークエルフも立ちあがり、少女のダークエルフが黒い杖を振り上げました。ジルクニフは慌てました。と、同時に理解するのです。この魔導国の使者には駆け引きが全く通じないという事を。彼らは自分達がそこにいる事にお構いなしに王城もろともこの場にいる全員を抹殺しようとしている事を。そして、そこにはジルクニフ側の釈明を微塵も許さないという事を。

「す、すまなかつた。謝る。いや、是非とも謝罪させて下さい！ この

通りだ」

ジルクニフが必死に懇願するとありんすちゃんはニツコリしました。

「しようでありんちゆか。しよれならこの城壊すのはやめるでありんちゆ」

ジルクニフは安堵しました。と、同時になんとか主導権をこちらで手に入れられないか目まぐるしく頭を回転させるのでした。

「では、アインズ殿に謝罪にナザリック地下大墳墓とやらに行くとして……準備等々でみつか、いや、十日程待つて頂けないだろうか？」

ジルクニフはありんすちゃんの瞳をじっと見つめながら訊ねました。ありんすちゃんは顎に人さし指を当てて悩む素振りをしてみせます。ジルクニフは今こそ好機とばかり言葉を続けました。

「その、アインズ殿にプレゼントを用意したりしないとならないのでね」

プレゼントという言葉に明らかかな反応をありんすちゃんが示したのを見て、ジルクニフはほくそ笑みしました。しかし、次の瞬間、ジルクニフのささやかな希望は隣のダークエルフの少年によってうち壊されてしまいました。

「あのさあ、アインズ様から『すぐ来るように』伝えろって言われているんだよね。『すぐ』が何日後かはそっちが決めて構わないけど」

ジルクニフは苦虫を噛むような気持ちを味わいました。どうやらず子供達にしか見えない使者を寄越したアインズは相当な策士と思われました。

「準備などもろもろ整えて三日後までにはそちらを伺おう」

ジルクニフは絞り出すかのような声で答えました。国内では鮮血帝などと呼ばれている自分が年端もいかない子供達相手に手も足も出ないという屈辱……

「じゃあアインジユちやまにちゆたえるでありんちゆ。しよう言えば、生き埋めの人たち、掘り出しゆの手伝ってあげるでありんちゆか？ まあ——」

ありんすちゃんは両手をパンと打ち合わせるとニツコリと笑みを

浮かべました。

「——おせんべいみたいにペツタンコでありんちゆかもしれないでありんちゆね」

ジルクニフはようやく反撃の機会を得たかのようにニツコリと微笑みました。

「それはありがとうございます。ではお願いしてもよろしいですか？」

※ ※ ※

ジルクニフは後悔していました。あの会見の最後に余計な頼みなんかをした事を。ありんすちゃんはジルクニフの言葉に対して素直に頷きました。それからすでに三時間——

「マール、もうちゆこし盛り上げるでありんちゆ。出てきたでありんちゆ」

マールが魔法で隆起させた地面からありんすちゃんが遺体の一部を次々に取り出します。それを一つ一つジルクニフが受け取ります。

「顔が半分でありんちゆね。あとは足でありんちゆ。この鎧は三角に潰れちえておもしろいでありんちゆ」

「ほらほら、皇帝。しつかり持つ！ さっきから頭を二つ落としたじゃん。あんたの部下なんだから大切に扱いなよ？」

「……ハ……ハイ」

ダークエルフの少年に叱られて、ジルクニフは慌てて兵士の成れの果てを拾いました。無惨な光景に付き合わされて手も足も震えが止まりません。

(……まさに地獄だ……)

ジルクニフ自身が頼んだ事である為、今さら嫌味だったなどと言いつつ、訳する事も出来ません。

まだまだ終わりが見えないこの地獄の責め苦にジルクニフはただ

ただ涙ぐむだけでした。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

022 ありんすちゃんはげます

ありんすちゃんはとつてもご機嫌でした。

アインズ様の命令であるバハルス帝国への使者という大任をちゃんとやり終えたからです。

城から慌てて飛び出して来た皇帝ジルクニフの真つ青な顔……思っただけで笑っちゃいます。

「是非ともお願いですからアインズ・ウール・ゴウン閣下に謝罪させて下さい。お願いします」と何度も頭を下げていましたっけ。ありんすちゃんはその時、ジルクニフ皇帝の頭のとっぺんがうっすらと地肌が見えていたのに気がつきました。

そして今日はバハルス帝国から皇帝自ら謝罪にやつてくる日なんです。

第十階層の玉座の間にはアインズ、アルベド、階層守護者達、周囲には沢山のシモベ達が並んでいます。

ありんすちゃんとアウラ、マーレの3人は玉座の間ではなく、手前の廊下に面した小さな中庭のテーブルにいました。

ありんすちゃんはバハルス帝国の皇帝が簡単にごめんなさいしないでだろうと考えて、アウラとマーレと作戦会議をしているのでした。だつてありんすちゃんだつておねしよは絶対絶対認めませんから。仕方ないですよ。

ありんすちゃんはなんだかんだ言つても、まだ5歳児位の女の子なんですから。

「やっぱりさあ、インパクトが大事だよ。シャルティア、あたしんこのシモベを動員して道すがら廃墟にしていくのつてどうかな？」

ぺんぺん草も生えないつての、やってみたいんだよね。あたし」

「……や、やっぱり僕はあの、ドラゴンが良いと思います。……こ、今度は、あの、二匹で行つたら凄いいんじゃないかな？」

「やっぱりガルガンチャをアインジュしやまにお借りんちゆて、一気に行くのが面白いでありんちゆね。城にガルガンチャがパンチするとガラガラでバラバラになるでありんちゆ」

ありんすちやん達が夢中になって話し合っているテーブルの近くでは、バハルス帝国皇帝ジルクニフが真つ青な顔をしていました。

もしかしたらありんすちやん達の計画が「ごめんなさい」をする勇気の励ましになってくれたかもしれないね。

ジルクニフに付き添ったバジウツドも真つ青な顔をしています。ジルクニフは悪魔にでも会ったかのように見開いた目でありんすちやん達を凝視しながら考えます。

（——いかん。これはいかんぞ。このままではあの子供達はきつとやる。間違ひなくやるぞ。絶対にだ。……どうする？ どうしたら良い？ 考えろ。考えるんだ）

やがて意を決してアインズとの接見に臨んだハバルス帝国皇帝ジルクニフはさらに心をへし折られながらもなんとかナザリックとバハルス帝国の同盟に向けての第一歩を進める事になりました。

そして、それはジルクニフの果てしない抜け毛の恐怖との闘いの始まりであつた事はいうまでもありません。

結果的にみればジルクニフを精神的に追い詰めたありんすちやんの励ましはバハルス帝国にとってまずは存続の道を勝ち取る事になつたといえます。

とはいえ、三人——ことさらガルガンチュアで暴れたかつたありんすちやんは特に——残念で仕方なかつたのでしたが。

023ありんすちゃんいすになる※挿絵あり

ありんすちゃんはナザリックの外に建てられた大きな丸太小屋にやってきました。

今度ナザリックの遠征軍をコキユートスが率いる事になり、リザードマン達との戦いの拠点として使用される事になった、アウラが建設中の要塞です。

中ではデミウルゴスがいろんな動物の骨を組み合わせてアインズの為の仮の玉座を作っている最中でした。

フンフンと鼻歌を歌いながら楽しそうです。ありんすちゃんも何かお手伝いしたくなるのでした。

「デミオルチュチュ、それは何でありんちゆか？」

「これはだね、シャルティア。アインズ様に座って頂く為の玉座なのだよ」

得意気にデミウルゴスはありんすちゃんに白く輝く玉座を披露します。人間やモンスター、動物……様々な生き物の様々な箇所を骨を見事に組み合わせて作られています。どの骨も綺麗に磨き込まれていてまさに芸術品とも言えるべき出来でしたから、デミウルゴスが得意になっていたとしても不思議はありません。

あまりの美しさにありんすちゃんは思わず溜め息をつきました。

「……きれいでありんちゆね。デミオルチュチュは工作が得意なんちゆね」

「ありがとう。シャルティア。だがね、今のままではアインズ様に座って頂くのに何か足りないというか、相応しくない気がするのだよ。何かもう一つアレンジが出来れば良いのだがね」

ありんすちゃんには難しい事はわかりません。ただ、リボンを付けたら可愛いかな、と思いデミウルゴスに提案してみました。

「ふむ。リボンですか。ふむふむ……なる程。シャルティア、ありがとう。君の意見を参考にして赤をワンポイント使ってみたら良いかもしれないな」

さすがはありんすちゃんですね。ナザリック随一の知恵者とも言

われるデミウルゴスよりありんすちゃんが賢い事が今まさに証明されたのです。

ありんすちゃんは大得意でした。

「ふむ……そうだ、シャルティア。この椅子の背のこの窪みに入ってみてはくれまいか？」

ありんすちゃんはデミウルゴスの指示するまま、椅子の背もたれ部分の窪みに身体を合わせてみました。すると驚いた事にまるでそうする為にこしらえたかのようにピッタリとありんすちゃんがはまりました。

「ありがとうございます。シャルティア。君のおかげでどうやら完成出来たようだよ」

こうしてありんすちゃんは椅子——白骨の仮玉座の一部——になったのでした。

※ ※ ※

部屋に入ったアインズは真つ先にその白い玉座に気がつきました。

これ見よがしに人骨——それも頭蓋骨を含めた——を沢山つかい、何故か解らないが背もたれの真ん中にシャルティア——ありんすちゃん——がピッタリとはまっている白い玉座と、その側には恭しく会釈をしているデミウルゴスの得意そうな顔がありました。

（あれに座れという事なんだろうな。人骨、しかも頭蓋骨がこつちを見てるし……趣味悪いよな……それともこの世界の美的感覚では普通なのか？普通なのか？……それにシャルティア。何やってんの？ 意味判らないんだが？）

心の動揺を隠してデミウルゴスに促されるままにアインズは白い玉座に腰掛けるのでありました。もし、仮に失態を犯した守護者がいて、その守護者に罰を与えるという名目でその守護者に腰掛ける事が出来たら白い玉座を使わずに済んだのでしょうか。

ありんすちゃんは後ろからアインズ様の背中を揉み揉みします。確か『まつさあじちえあー』というんですよね。

「……アインズ様、ちよつと外の空気を吸ってきます」

俯いていたアルベドが唐突に部屋から出ていきました。

——と、建物の外でまるでダンプカーがマンモスと正面衝突したかのような音がしたかと思つたら——メキメキメキ——とアウラが建てた丸太小屋が全壊してしまいました。

※ ※ ※

その後、リザードマン達へは戦闘が一週間後に変更になったという布告があつたとの事です。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

024 ありんすちゃんかつさいされる

今日もありんすちゃんは張り切っていました。とうとう戦争に参加する事になったからです。

せっかく守つてあげたのだから城塞都市エ・ランテルをアインズ様にプレゼントしてくれば良いのにとありんすちゃんは思います。ですが、お馬鹿なり・エステイーズ王国はケチンぼで言うことを聞かないのでアインズ様は懲らしめる為に戦争をすることになった、という訳です。

こう見えてありんすちゃん、以前ではナザリックでも上位の強さでしたから戦いには自信があります。たぶん。王国の兵隊なんてちよちよいのちよい、です。

アインズ様がマールレをお供に馬車で戦場となるカツツエ平野に向けて出発してからしばらく経ちました。

これからがいよいよありんすちゃんの出番です。戦場へ転移魔法——〈ゲート〉——でデスナイトとソウルイーターの軍勢を送り出すのです。

「げーちよー！」

ありんすちゃんは語尾を噛んでしまいました。

「げーちよー!!」

力一杯言ってみましたが、駄目でした。

「げーちよー！ げーちよー！ げーちよー！」

「げーちよー！ げーちよー！ げーちよー！ げーちよー！ げーちよー！」

「げーちよー！ げーちよー！ げーちよー！」

駄目です。いくら繰り返しても転移しません。

「……ありがとうシャルティア。もう充分だよ。今回はパンドラズ・アクターに替わってもらうとして、君には他の事を頼むとしようか」
ありんすちゃんはデミウルゴスに連れられて第二階層にやってきました。

そこにある恐怖公の領域、通称エントマのおやつの間前にありんすちゃんを立てさせてデミウルゴスが言いました。

「いいかな？ 戦端が開いたらここで小さなくしゃみをして欲しいんだ。出来るだけ多く、ね」

ありんすちゃんは力強く頷きました。

※ ※ ※

水晶に映った戦場ではアインズが腕をひとふりして超位魔法——
〈黒き豊穣への貢〉——を発動させました。

王国軍左翼七万の軍勢は糸の切れたあやつり人形のように転がり
ました。

やがて木のようなものが生えて黒い仔山羊が生み出されました。

——今です。ありんすちゃんはくしゃみをします。

黒い仔山羊に追われて王国兵が逃げ惑います。

その頭上からありんすちゃんのくしゃみでテレポートしてきた恐
怖公の眷属が黒い雨となって降り注ぎます。

黒い仔山羊がグチャグチャグチャグチャグチャグチャグチャグ
チャ……

黒い雨がカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサ……

グチャグチャグチャグチャグチャグチャグチャグチャグチャグ
チャグチャグチャグチャグチャグ……

カサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカ
サカサカサカサカサカサカサ……

グチャグチャグチャグチャグチャグチャグチャグチャグチャグ
チャグチャグチャグチャグチャグ……

カサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカサカ
サカサカサカサカサカサカサ……

黒い仔山羊から逃げ惑う人達がありんすちゃんの黒い雨に包まれ
ていきます。

こうして見ると逃げまどう人間がまるでゴミのようです。ありん
すちゃんはますます頑張ってくしゃみをして黒い雨を降らせるので
した。

最後にしたくしやみでありんすちゃんは転移して黒い仔山羊の上のアイズ様の膝の上にいました。

アイズはありんすちゃんを膝の上から優しく降ろし、立ち上がる
とゆつくり仮面をはずして言いました。

「——喝采せよ。……我が至高なる力に喝采せよ」

アイズ様とありんすちゃんに万雷の拍手が寄せられるのでした。

※ ※ ※

ありんすちゃんのくしやみで転移した恐怖公の眷属——P e r i
p l a n t a f u l l i g i n o s a（和名 ゴキブリ）——の一部
は火星に達して、そこで独自の繁殖をしていきました。

後に彼らが地球を脅かす存在になろうとは、誰にも想像出来ません
でした。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

025ありんすちやんとザイトルクワエ

トブの森の奥深くにある貴重な薬草を採取するという難解なクエストを引き受けた「漆黒」のモモンことアインズは、途中でドライアードのピニスンと出会いました。そしてピニスンの案内により、かつて七人組により封印された『世界を滅ぼす』という魔樹——ザイトルクワエの元にたどり着きます。

同行したアウラのスキルにより目覚めたザイトルクワエを見上げながら、アインズは守護者達に対プレイヤー戦闘の訓練を実践させる事にするのでした。

「コキュートス、マール、デミウルゴス、ご苦労」

〈ゲート〉により到着した守護者達にアインズがねぎらいの言葉をかけました。

「アインズ様がお呼びとあらば、即座に」

「デミウルゴスノイウトオリダ。アインズ様、ゴメイレイヲ」

「……あの……アインズ様のお役に、あの……立ってみせます」

アインズは満足そうに頷いてみせました。離れた場所でハムスケと一緒に様子を見ていたピニスンが騒ぎだしました。

「何あれ？ いつの間にか増えたよ？ どこから現れたのかな？」

「うるさくしない方が身のためでござるよ。あの方達は普通ではないのぢやない」

やがて再び〈ゲート〉が開かれアルベドとありんすちやんが現れました。

「アインズ様、おそくなり申し訳ございません」

「よい。アルベドよ」

と、アインズはアルベドの隣にありんすちやんがいることに気がついて、一瞬ギョツとしました。ありんすちやんは既に真紅のフルプレートにスポイトランスを持ち、やる気満々です。

「……その……アルベドよ。シャルティアはナザリックで待機すべきだと思ふのだが……」

「申し訳ございません。どうしてもついでいけると言い張りまして

……」

ありんすちゃんは鼻からフンスと息を吐きながらスポイトランスをブンブン振っています。それを見てデミウルゴスは静かに肩をすくめてみせました。

「……ゴホン。……では本題に移ろう。今回、階層守護者達に集まってもらったのはお前たちのチームとしての戦闘能力を確かめたい。それと、全員の力が見たいから決して本気を出すな。私は後ろで見させてもらおう」

※ ※ ※

「一番さいちよにいくでありんちゅ！」

ありんすちゃんがトテトテと駆け出しましたがたちまちの内にコキュートスとアウラに追い抜かれてしまいました。

「わら……わたしがさいちよでないといやでありんちゅ！……う、うわーん！」

コキュートスとアウラがザイトルクワエに攻撃しているのを見ながら、とうとうありんすちゃんが泣き出してしまいました。仕方ありませんよね。ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

「大変だ。あの子供危ないよ！ お母さんは助けようとしなの？」

興奮して叫ぶピニスをハムスケが宥めます。

「あの子供は実はとても強いでござるよ。それにあの女性はシャルティア殿の母親では無いでござる。決してそのような事を言つてはいけないでござる。命が……」

コキュートスとアウラは途中で攻撃を止めてありんすちゃんを宥め始めました。そこにアルベドがやって来て二人に言いました。

「コキュートス、アウラ、あなた達はアインズ様のお言葉を思い出しなさい！ アインズ様は私達守護者が協力して戦う事をお試しになっているのだわ」

「うん。アルベドの言う通りだね。……それと我々守護者はアインズ様よりワールドアイテムをお預かりしていますが、それを敵に奪われ

ない為にも関係は必要ですね」

デミウルゴスも加わって論じます。マーレがアルベドとデミウルゴスに訊ねました。

「……あ、あの……するとぼ、僕たちは、……どう戦えば？」

「合体攻撃でありんちゅー！」

アルベドやデミウルゴスが答えるより先にありんすちゃんが叫びました。

※ ※ ※

「……うーん。どうしたのかな？ なんだか揉めているみたいだけど……世界の危機だというのに何をしているんだよ！」

ピニスは苛々しながら守護者達を見守りました。

「うわっ！ 何をするんだろう？ 女の人とシッポの男の人の上に昆虫みたいな人が乗った。今度はダークエルフの二人が両側にぶら下がったぞ？ ……あー危ない。小さい子供がてっぺんに……」

「うーん……それがしにも全くわからないでござるよ」
強情なありんすちゃんの見意を受け入れて完成した？ ナザリツク階層守護者の合体形態『ふあいなるあたつくモード』になった守護者達はヨロヨロしながらザイトルクワエに向かいました。てっぺんのありんすちゃんは大喜びです。

「やってられるかー！」

『右足』のアルベドか思い切りコキユートスを投げます。コキユートスはアウラマーレを左右に飛ばし、さらに頭上のありんすちゃんをザイトルクワエの頂点に飛ばします。ありんすちゃんはスポイトランスを構えてロケットのように飛んでいきます。

「うわー！ 凄い！ あの昆虫の人が四本の剣を出したよ！ 凄い勢いで枝を切っていく。……赤い子供が大きな槍を突き刺す度に魔樹が少しずつ萎んでいく！」

ピニスンとハムスケが呆気に取られる内にどんどんザイトルクワエは刈り込まれていき、さらにあらゆる攻撃を受けて萎んでいきま

す。てっぺんにあった薬草はありんすちゃんのスポイトランスで風呂ぎ払われた後、デミウルゴスの手に無事収まりました。

「うーん……じゅいぶんちっちゃくなっただでありんちゆね」

百メートルもあつたザイトルクワエはもはや一メートル程の高さになり、魔樹の面影はなくなっていました。マールが養分いっぱい雨を降らすと、なつくようにキューキュー鳴いて甘えます。結局、ザイトルクワエはナザリック地下大墳墓の第六階層でピニスンが世話をする事になったそうです。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

026ありんすちやんがいつぱい

アインズ・ウール・ゴウン魔導国が建国され、アインズは悩んでいました。

(……この国をどうしていききたいか、か。……なかなか難しい問題だな……)

階層守護者達はアインズの言葉に盲目的なだけにこの基本方針だけはアインズ自ら決めなくてはならないのです。

着替えを済ませて執務室へ向かう途中も考えています。

執務室でのアルベドやエルダーリッチ達と打ち合わせの最中も考えています。

「アインズ様。アウラ様とマール様です」

「おはようございます！ アインズ様」

「お、おはようございます、アインズ様」

アウラがアインズに抱き上げて貰おうとVの字に手を上げてピョコピョコしている時も考えています。

アウラとマールをそれぞれ膝に載せてあげた時も考えています。

アルベドがアウラを妬んで『おぎやー』と言い出した時はさすがに考えていませんでした。

アルベドが腰掛けられるようにマールをどかした途端、膝の上にあるりんすちやんがいました。

ありんすちやんはスヤスヤ眠っています。

アルベドは行き場の無い怒りに身を震わせましたがさすがにありんすちやん相手には怒りをぶつけられません。

空気を読んでアウラがアインズの膝を譲ってあげたのでなんとか事なきを得られる事になりました。NPC達のやり取りを前にしながらもアインズは考えていました。

アインズは気分転換に久しぶりにパンドラズ・アクターに会いにく事にしました。

パンドラズ・アクターが冒険者モモンとして生活している館の前

で、アインズはハムスケ小屋からアンデッドの気配を感じて様子を見ました。

するとそこには熟睡しているハムスケとトゲが丸くなったデス・ナイトに挟まれて一緒に眠るありんすちやんの姿がありました。

やっぱりありんすちやんはスヤスヤ眠っています。

アインズは起こさないように静かにモモン——パンドラズ・アクターの住居へ向かいました。

「至高の御身、私の創造主であらせられるアインズ様にはご機嫌うるわしく——」

アインズは長くなりそうな挨拶を止めさせて要件を切り出しました。

「——で、何か問題はあるか？」

パンドラズ・アクターはひとしきり宝物庫に時々帰りたいと感情的に訴えた後、アインズの悩みと同じ指摘をしました。

「多くの人間たちがこの国をどのように導いていかれるのか疑問に思っています。争いに駆り出されはしないか等と不安に思っています」

「……話したいところだが、まだ考えている最中だ。今後守護者各員と相談の上で話そう」

アインズはモモンの屋敷を出ると空を見上げました。

そこには青い空が浮かんでいました。

「飛ぶ」

慌てる従者をよそにアインズは空に浮かび上がりました。

ふと側の木に大きな鳥の巣があり、卵に並んでありんすちやんがスヤスヤ眠っています。

その後も街を巡回するデス・ナイトの肩の上で、またまた、荷物を運ぶソウルイーターの荷車の上でスヤスヤ眠っているありんすちやんを見かけるのでした。

まるでありんすちやんの大量発生みたいですが、実はありんすちやんが寝ぼけてアインズの行く先々に転移していたのでした。

そんなありんすちやんを見ている内にアインズは閃きました。

「——そうだ。ハムスケ、動物、アンデッド。かつてのギルド、アインズ・ウール・ゴウンのように種族の垣根がなく、様々な種族が共存できる国をつくろう」

アインズは晴れ晴れした表情でスヤスヤ眠るありんすちやんを抱き上げるのでした。ただ寝ていただけにアインズの悩みを解決するヒントになってしまっうなんて、さすがですよ。ありんすちやん。

でも、まだ5歳児位の女の子なんですよ。

おやすみ。ありんすちやん。良い夢を。

※ ※ ※

おまけ『ありんすちやんききいっぱっ』

※ ※ ※

ある日、ありんすちやんは夜中に目が覚めました。

そして小さくくしやみをするとなりの景色が変わりました。

どうやらまたもや転移しちゃったみたいですね。

ありんすちやんがいたのはとてもフカフカナベッドで、部屋の内装もゴージャスでした。

ふと見ると誰かベッドの中にいます。

なんとびっくら。

アインズ様!!!——と思ったら——アインズ様のぬいぐるみでした。

よく見るとおたり一面アインズ様だけです。

ありんすちやんはアインズ様のぬいぐるみを抱きしめるとウツラウツラして……!!またもや寝入ってしまいました。

027ありんすちやんとペンギン

ありんすちやんは第九階層に迷いこんでしまいました。

うろうろしていると向こうからペンギンが歩いてきました。ナザリックの執事助手をしているエクレアですね。どうやらありんすちやんとは仲良しみたいです。

「これはこれは。シャルティア様。今日も私と一緒にナザリックの叛逆活動をされますか？」

「はんぎやくでありんちゆね」

ここで本来のシャルティアならばバーで飲んだくれるか目がザツパンザツパンするところですが、なにしろありんすちやんはまだ5歳児位の女の子なのですから訳わからずにはしゃいでいます。

さて、いよいよエクレアの日課のナザリック支配作戦の開始です。まずは至高の方々の住居がある第九階層のトイレ掃除です。

ありんすちやんはエクレアのような柔らかな羽根がないので雑巾とトイレタワシを持ちます。

まずは男性トイレです。

小便器の中を磨く時にエクレアもありんすちやんもスツポリ中に入り込んでしまいます。

ありんすちやんが磨いた場所は必ずエクレアがチエックします。

高い場所を磨く場合にはエクレアとありんすちやんはエクレアの部下に抱え上げてもらいながら磨きます。

え？ 全部部下にやらせた方が早いのでは、ですって？

実は……私もそう思います。

ですがエクレアにとっては大切なナザリック支配の為の作業らしいですよ。だから部下に任せておけないそうです。

小便器では排水の所の『尿だまり』まで綺麗にピカピカにします。

「――隊長。おしっこのやちゆおわりまちゆた」

ありんすちやんがエクレア隊長に敬礼して報告します。

「ふむ。〴〵苦勞様。これで本日のナザリック支配度が10%上昇し

た。次のターゲットは大便器である。気を引き締めて当たるように「らじゃ」

勇ましくありんすちゃんは大便器に向かいます。

気を抜くと吸い込まれそうになるのでありんすちゃんは足元に力を込めて踏ん張ります。トイレタワシを両手で握りしめ、まずは着水。この時に45°の角度にしないと反撃を受けてしまいます。

無事に着水させられたならば壁面に押し当てて上から下にこすり下げます。

大変です！

ありんすちゃんはうっかり下から上へこすり上げてしまいました！

水ごとトイレタワシが水面から勢いよく飛び出してありんすちゃんはビショビショです。

どうにかこうにか格闘の末に男性トイレをピカピカに磨き上げたナザリック支配叛逆部隊は場所を女性トイレに移動します。

女性トイレは全て大便器ですから、なかなかの強敵です。

しかも『おしゆれつ』なる機能があるので危険です。

前回、ありんすちゃんはうっかり『びで』というボタンを触ってしまいとんでもない目にあつたのでした。

ありんすちゃんは慎重にトイレタワシを構えます。

——そして、慎重に着水。

今度は間違えずに上から下へ……うまくいきました。

ありんすちゃんはやれば出来る子なんです。

時間をかけてピカピカに磨き上げたトイレを見渡しながら、エクレーはナザリック支配への道がまた一歩前進したな、と思いました。

ありんすちゃんの加入で効率も二倍になったはずだけど、前より効率が悪くなった気がするのには単に気のせいだろう。そのうちアルベドやデミウルゴスも仲間に取り込んでさらにトイレの輝きを増すのだ、と心に誓うのでした。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

028ありんすちやんとエクレアだん

ナザリツク地下大墳墓第九階層にありんすちやん、部下に抱えられたエクレア、そしてもう一人の姿がありました。エクレアが二人の前に立ちます。

「あー、えーコホン。今回、我がナザリツク反逆団に新たに新人が加わりました。彼は帝国から出向している人間に過ぎないので戦力として頼りないが、本人のやる気を見込んで特別に我がエクレア団の入団を許可するものとする」

「えーと……はじめまして。私はロウネ・ヴァミリネンです。この度、同志の中に加えて頂きまして誠にありがたく存じる次第にあります」緊張のあまり直立不動の姿でロウネが挨拶をしました。エクレアは部下に抱えられたまま、面倒くさそうに指示を出します。

「じゃ、ロウネはシャルティア隊員に任せる、という事で」
「らじゃ、でありんちゅ」

エクレア隊長の命令にありんす隊員は元気に返事をします。ロウネはありんすちやんがまだ5歳児位の女の子なので思わず慌てました。彼の目にはエクレアを抱えている部下の方がありんすちやんよりも格上に見えたからです。

「あの……こちらのシャルティア様はいささか幼すぎるのでは……」
「こう見えてシャルティア隊員はナザリツクでもなかなかの強者なんだ。しかもかつてアインズ様と戦った事すらある。ガチンコでな」

ありんすちやんは得意げに胸を反らせました。ロウネにはこの幼女と魔導王が戦う様子が全く想像出来ないので呆気に取られるばかりでした。そんな新米隊員のロウネはエクレア隊長の声で我に返りました。

「では、諸君。今日もナザリツク制覇の為、反逆活動に勤しむとしよう」

エクレア隊長の音頭で隊員二名はオーと力強く拳を突き上げるのでした。

※ ※ ※

トイレ掃除に追われた一日がようやく終わり、第六階層の居住区に用意された自室に戻ったロウネはベッドに横たわりました。

(陛下の指令にあったダークエルフの少女との接触は、取り巻きのエルフによってほぼ不可能みたいだが、どうにか魔導国内の反乱勢力に加わる事が出来たぞ。あのエクレアにシャルティア……見ためはペンギンと幼女に過ぎないが恐るべき強者みたいだ。しかも、よく判らないがああ魔導王と争つたらしい。この情報をもつと集めれば、皇帝陛下もご満足頂けるに違いない)

※ ※ ※

翌日もエクレア団が反逆活動に勤しんでいると、デミウルゴスが通りがかりました。

「これはデミウルゴス様。如何ですか？ そろそろ私のナザリック反逆の力添えを戴けませんでしょうか？」

「反逆しゆるでありんちゅ」

デミウルゴスは優しくありんすちゃんの頭を撫でながら答えました。

「そうだね。考えておくよ。……そうだ、その反逆活動を是非とも頼みたいのだからね。第五階層で『綺麗なもの』『バラバラなもの』『グチャグチャなもの』を整理して欲しいのだが、頼めるかね？」

「まかちえるでありんちゅ」

やたらと張り切るありんすちゃんを先頭にエクレア団は第五階層に向かうのでした。

※ ※ ※

「うーん……これは大変でありんちゅね」

「部下を大勢呼ばなくては……この際、恐怖公の力を頼るしかないか

……」

「……仕方ないでありんちゆね」

呆然として言葉を失ったロウネをよそにありんすちゃんとエクレアは淡々と相談を進めていました。

数え切れない死体の山を前に恐怖公の眷属達の力を借りれば作業が楽になるのはわかっていましたが、ありんすちゃんはちよつと気が引けてしまっていました。自分の階層の領域守護者ではありませんが、ありんすちゃんは恐怖公とその眷属が苦手なんです。仕方ありませんよね。ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

尚、その後ロウネは自室に籠って二度と外に出てくる事はありませんでした。

029 ありんすちゃんりょうりをする

ナザリック地下大墳墓第六階層にありんすちゃん、アウラ、ユリ、ナーベラルが集まっています。野外キッチンが用意されていて、どうやら皆で料理に挑戦してみるみたいですね。

「うーん……やっぱり駄目だね。あたしもただの消炭みたいに真っ黒焦げになっちゃった。……やっぱりユリみたいに料理スキルが無いと無理なのかなあ?」

「ただ、食材の肉を焼いてステーキにするだけですが、無理みたいですね」

アウラが作った消炭料理を前にして、思わずユリはため息をつきました。以前、アインズが一般メイドに試させてみた時も皆、やはり消炭のように真っ黒焦げにしてしまったそうです。この結果はたとえば階層守護者といえども同じのようです。

「次はわら……わたちがやるでありんちゅ」

フンスと鼻から息を吐きながらありんすちゃんがキッチンに向かいました。ありんすちゃんはやる気満々の様です。

「……いやいや、シャルティアも無理だつてば。あたしで無理なんだからシャルティアにはできっこないよ?」

ありんすちゃんはキツとアウラを一睨みして肉を手に取ります。フライパンにバターを敷いてやさしく肉を乗せます。ここまでは順調です。しかし……肉に熱が通り出した瞬間……ジュンと音がして真っ黒焦げの消炭になってしまいました。

と、さつきから一人黙って料理の様子を観察していたナーベラルが口を開きました。

「この間、アインズ様と冒険者をしていた時、敵をへっついんマキシマイズマジック・チェイン・ドラゴン・ライトニングで倒したのですが焼けた死体がとても美味しそうな匂いでした」

「ちよれでありんちゅ! ナーベ、お肉を魔法で焼くでありんちゅ」

アウラもうなずいています。

「うんうん。試してみようよ?」

「……あの……それは料理とはいえないのでは？」

若干一名、気乗りしない者がいましたが、ナーベラルはキッチンのフライパンに乗せられた肉を前にして魔法を発動させました。

※ ※ ※

「うーん……やっぱり人間でないと駄目でありんちゅね」

ナーベラルのヘッインマキシマイズマジック・チエイン・ドラゴン・ライトニングで焼かれた肉はまたしてもただの真っ黒焦げの消炭になったのでした。

「うーん……人間かあ。丁度この階層に一人いるけど、アインズ様から危害を加えるなつて厳命されているんだよね」

ぼやくアウラの隣でありんすちやんが顔を上げました。どうやら心当たりがあるみたいですね。

「わたちに任せるでありんちゅ」

ありんすちやんは魔法へグレーターターテレポーションを発動させました。次の瞬間、ありんすちやんの足元には一体の氷漬けの死体がありました。

「たくちやんあるからいくつでも持ってこられるでありんちゅ」

ありんすちやんはどうやら第五階層に氷漬けになっている死体の事を思い出したみたいですね。これで実験が出来ます。ナーベラルは今度は死体に向かって魔法を発動させました。

※ ※ ※

「うーん……やっぱり生きていないと駄目でありんちゅね」

結局、人間の死体でも同じように真っ黒焦げの消炭になってしまいました。

「生きてる人間かー……やっぱりこの階層にいるのが丁度良いんだけどねー……かといってシモベを焼くのもね……あ、そうだ。丁度良いのがいた」

アウラは突然自分たちの住居に戻ると鳩が三羽入った籠を持って来ました。

「これは帝国のネウロ……だっけ？ ……今第六階層に住まわせているんだけど、持って来てた鳩を逃がしちやっただよね。で、すぐにあたしが回収しておいたんだ」

早速、ありんすちゃん、ナーベラル、アウラはそれぞれ魔法やスキルを利用してそれぞれこんがり美味しくな鳩の丸焼きを作りました。アウラはファイヤボールやライトニングなどの魔法を覚えていない為、スキルで魅了して鳩に自らグリルに飛び込ませました。

こうしてありんすちゃん達は『丸焼き』という料理を覚えました。アインズは大喜びでしばらく食堂で『ありんすちゃんの丸焼き料理』が続いたという事です。

※ ※ ※

第六階層の自分用の住居に閉じ籠っていたロウネ・ヴァミリネンはひたすら書き物をしていました。

(陛下に伝えなくては。魔道王打倒の獅子身中の虫、ナザリック地下大墳墓の反逆勢力の存在——エクレア団——についての情報をなんとしても伝えなくては……)

ロウネは三通の手紙をしたためると小さく折って小さなリングに挟みました。それを三羽の鳩の足にそれぞれ着けて放しました。青空に向かって飛び立っていく鳩の姿を目で追いかけてながらロウネは満足気に頷くのでした。

※ ※ ※

それから数日後、ロウネは相変わらず引きこもり状態でしたが、気が回復してきたので夕食に出された鳩の丸焼きをペロリと平らげたそうです。

尚、臨時料理人となって丸焼き料理を作っていたありんすちゃんでしたが、残念ながら臨時料理人をクビになってしまいました。ありんすちゃんがカボチャの丸焼きを作ろうとして畑をすべて焼いてしまったら、焼き魚を作ろうと生け簀を三つも丸焼けにしてしまったからですって。

仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の子に過ぎないのですから。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

030 番外編・魔法少女いびるありんすちゃん

王国のアダマンタイト級冒険者、蒼の薔薇のマジックキャスター
イビルアイ、そしてイビルアイから奪った仮面をつけたありんすちや
ん。

ゲヘナの時に全く見分けがつかなかった事からありんすちゃんは
アインズ様の密命で王都に潜り込んでスパイをする事になりました。
名付けて『魔法少女いびるありんすちゃん大作戦』です。

なんでも魔法少女にはペットのお供がつきものだというコキユー
トスの強い主張でエクレアがお供する事になりました。

※ ※ ※

まずは準備をしましょう。ありんすちゃんは大切にしまっておい
た仮面を取り出します。あのイビルアイが気絶した時に手に入れた
仮面です。

ありんすちゃんは仮面をつけるとクルリと回ってみせます。……
あら不思議。誰が見てもどこから見てもイビルアイそのものです。

かくてありんすちゃんとエクレアは王都に潜入するのです。
今回のターゲットは蒼の薔薇のリーダー、ラキユースです。

ありんすちゃんは何が何でもラキユースの弱みを握らないといけ
ません。

まずは何気ない会話から探りを入れます。偽物とバレないように、
さり気なく、さり気なく、です。

「ラキユーチュ、良い天気でちゅね」

「……そうね」

「こんな日はケーキが食べたいでんちゅね？」

「……そうね」

ありんすちゃんは上の空なラキユースに少しムカついてきました。
ラキユースはありんすちゃんを赤ちゃん扱いしているのに違いあり
ません。

「ガガアランにはおひげがありまちゅね？」

「……そうね」

ありんすちゃんは用事を言い訳にしてラキユースにサヨナラを言ってその場を離れてみました。

そして物陰からこっそりと観察していました。

凄いですね。とても5歳児位の女の子とは思えない、名スパイぶりですね。

ありんすちゃんに見張られている事を知らないラキユースは、キョロキョロ周囲を伺っていたと思うと一冊のノートを取り出して熱心に何か書き込み始めました。

時折朱くなったりしながら、機嫌良さそうに鼻歌まじりに一生懸命になにやら書いています。これはきつと、アダマタイト級冒険者ならではの何か重要な情報に違いありませんね。

そう思ったありんすちゃんはいきなり飛び出していつてラキユースからノートを奪いました。

「ちよつ？ なにすんのよ？ イビルアイ！ や、やめて！」

ありんすちゃんは素早くノートをエクレアにパスします。

エクレアは死に物狂いで逃げます。

ラキユースはまるで鬼のような形相で追ってきます。

しかしエクレアは身体の小ささを生かしてテーブルの下を駆け抜けてなんとか追撃をかわしました。

かくしてありんすちゃんとエクレアは王都の重要機密が載っているであろうラキユースのノートをナザリックに無事、持ち帰りました。

デミウルゴスはノートを広げると喜びました。

「……これは実に素晴らしい。この秘密を公開すれば王国は底知れないダメージを受けるだろうね」

※ ※ ※

数日後、魔導王国ではガゼフとブレインの道ならぬ恋が描かれたラ

キユース作の薄い本「薔薇は夕日に輝く」が売り出され、空前のベストセラーになったそうです。

——番外編 おわり——

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

031 おまけ 『薔薇は夕日に輝く』 ラキユース・アル ベイン・デイル・アインドラ

※注意※

この作品『薔薇は夕日に輝く』は王国アダマンタイト級冒険者であり、大衆文芸研究家でもある、ラキユース・アルベイン・デイル・アインドラ氏の作品です。したがってありんすちゃんが登場しません。しかも直接的な表現はありませんが作者（ラキユース女史）の趣味が反映された内容であり、やや薔薇的な示唆に富むと感じる方もあるようなのでご注意ください。

※ ※ ※

リ・エステイーゼ王国、首都リ・エステイーゼ。北側の城壁から市街へと続いた道に仲良さそうに歩く二人の男の姿があった。

折しも昼の鐘が鳴り、行き交う人々の誰もが昼休みに心をとられている中、男の一人、ブレイン・アングラウスは真剣な表情でもう一人の男に迫った。

「……頼む。ストロノーフ。お前のレイザーエッジを見せてくれないか？」

対する男——ガゼフ・ストロノーフはまるで少年のような、戸惑いとはにかみを混ぜたかのような複雑な表情を浮かべた。

「……ま、まさか……ここ、ここでか？……こんな街中でアレを出すのはな。さすがに人目が気になるし、もつと人目が無い所でない……」「わかった。では人目に付かない場所で。……そうだ。二人つきり……ならば構わないだろ？」

多くの人々が市街へと急ぐ中、二人の男は逆に城壁へと歩いて行った。やがて男達は人目の少ない茂みにやって来た。

二人は互いの実力を認めあったライバル同士の武人で、かつては王

宮の主権である御前試合で剣を交えた事もあった。その勝負は実に
し烈なもので、最終的には「四光連斬」によって王国戦士長であるガ
ゼフが勝利したのだが、両者の実力差はそう大きくは無い。

「……ここなら人目も無い。さあ、見せてくれ。ストロノーフ。お前
の全てを」

「……うむ……まあ、待て。そんなに焦るなよ。アングラウス……今、
見せるからな……うむ」

荒々しい息を吐きながら、ガゼフは剣帯から鞘ごとレイザーエッジ
を抜き取る。そして目を閉じて何か小さく呟いた後に、カツと目を見
開くと一気に刀身を抜き出してみせた。

刀身の煌めきは小さな虹を作り、ブレインは感嘆のため息をつい
た。

「……アングラウス。貴様も出してみろ。前々からお前の刀なる逸品
をまじまじと見てみたかったのだ」

「……そうか……わかった……だが、頼みがある。刀を出すまで後ろ
を向いていてくれないか？」

しかし、ガゼフは直ぐに答えなかった。じつと見つめる視線が雄弁
に疑念を現していた。堪えきれずにブレインは小さく呟いた。

「……見られていると……恥ずかしいんだ」
俯いたブレインの長い睫毛を眺めながら、ガゼフはようやく頷いて
みせた。

「了解した。いいと言うまで後ろを向いていよう。男同士の約束だ」

「……すまない」

ブレインは優しく腰のベルトを外すと、両手を刀に添え、そつと慈
しむかのように鞘から抜き身を出した。

ふと、その様子をじつと見つめているガゼフに気がついた。ブレイ
ンは頬を染めながら恥ずかしそうに呟いた。

「……向こうを向いているって言ったのに……嘘つき……」

「いや、すまない。アングラウス、怒らないでくれ。かわりに俺のレイ
ザーエッジを触らせてやる」

ブレインは興奮に震える手でレイザーエッジの柄を握った。心な

しかレーザーエッジも微かに震えているようだった。

「……凄いな……こんなに反っている……光沢も見事だ。これがまさしく王国の至宝か……」

ブレインは吸い付かんばかりにして手にしたレーザーエッジを眺めた。柄側から、刃先側から、両面……ありとあらゆる角度から観察した。時折、吐く息が刀身に曇りを一瞬だけ作り、消えた。

「そういうアングラウスのもなかなかの逸品じゃないか。この鋭い切っ先は何でも突き抜けそうだ」

「……ふ……こうして息を吹きかけるとまるで呼吸をしているかのようだ。たまらないな……ストロノーフ、こいつで俺を突いてくれ」

ガゼフはブレインの瞳を見つめた。ブレインの瞳にはガゼフが映っていた。もはや二人には言葉など無用だった。

※ ※ ※

「——むう。やるようになったな？アングラウス。さすがは俺が見込んだ漢」

「まだだ。まだ終わらんよ？ 領域いつ！！……ふっ。感じるぞ。お前をビンビン感じるぞお！ストロノーフ！お前も来い！」

「……ふ。……なに、甘いぞ！ 〃不落要塞〃！そんな程度じゃイケないな。こちらからもいくぞ！ 〃四光連斬〃！」

「……こいつはスゴいな。イキそうだ……しかし……まだだ。まだ足りん！」

互いの攻撃はそれぞれの着衣を引き裂いていく。凄絶な命懸けの仕合いの爪痕が互いの皮膚に刻み込まれていく。

が、しかし、まだまだ戦いは終わりそうにない。

いつしか互いの着衣は全て引き裂け、隆々たる筋肉の陰影をくつきりと、惜しげもなく晒していた。ただただ、互いの息づかいと剣と剣が撃ち鳴らす音だけが静かに続く。

それはあたかも永遠に続く、神々へ捧げる音楽であるかのようでさ

えあつた。

二人の男はワルツを踊るかの様に剣戟を競い合い、やがて、ひとつの影となった。

※ ※ ※

いつしか芳醇な時間は過ぎ去り、リ・エステイーゼの街並みは夕日に染まっていた。

あたりは静寂が支配し、いつの間にか二人の凄絶な戦いは終わっているのだった。

沈みゆく大きな夕日が二人の一糸もまとわぬ産まれたままの姿を黄金に輝かした。男達は互いにじつと見つめ合い、そして――

※ ※ ※

「……ブレイン。ブレインだ。俺の事はブレインと呼んでくれ」

「……わかった。ブレイン。……俺の事は今日からガゼフだ」

黄金に染まる二人の男は熱く掌を握り締め、きつい抱擁を交わすのだった。

〈第一部おわり〉

※おくづけ※

次回作はなんと蜥蜴人の兄弟の禁じられた愛情劇『しゃーすりゆ☆ざりゆ』？

032ありんすちゃんメモをとる

アインズ様のお供をしてドワーフの国に行く事になったありんすちゃんは張り切っていました。

「がんばりまんちゅ」

「シャルティア、張り切るのは良いんだけどさ、アインズ様はシャルティアが様々な体験をして新しい面を見つけて欲しいんじゃないかな？」

一緒に行く事になったアウラがありんすちゃんの気持ちに水を差します。

「せっかくナザリックで最も優れたアインズ様とご一緒出来るんだよ？ 勉強するチャンスじゃない？」

「勉強したら良いでんちゅね」

ありんすちゃんはアインズ様の言葉をメモする事にしました。

※ ※ ※

よかろう となりにわがまま そいつたて 高い。いっぱく。ここで止まる。ふりようマーレが作る。ならば グリーンしくれとトム てぎま 見ている。くり ほーとれす。私のみ あけらら アウラ 触れ。ほんじつは しゆくはく きゆうけい 立ってる おちつか かくへや たいきせよ。上野 2回 3回 そちら あうシャルゼべる のこる。ソファア。まずルート。でわ ゼンベル いやな匂い。悪役 はつきり ぼんやりだね。大丈夫 べてらんヘンなおさ もんだい おなら。じっさいメイド おこってない。そのとり ぼんやり 悪い もしもし もつとちがう こんでんてき 記憶おしら さす。まあ きおく。そのしんぱ だいじようぶ ゼンベル きおくを ちかん王。ふむ らくに いろいろ どんなこた。どうだ なんでもない。わたしわ ヘンなかんじ おさる おまる。さて よていどり ゼンベル カモシカ。かいさん ゆっくり ゼンベル ひつようない そなえよ。

※ ※ ※

アウラが部屋にはいるとありんすちゃんはなにやら一生懸命書いていました。

アウラが来た事に全く気がつかない位集中しています。

「シャルティア、何してるの?」

「アインジユちやまのお言葉をメモちているんでありんちゅよ」

「へー感心じゃん。どれどれ?」

アウラはありんすちゃんにメモを見せてもらいましたが、何が書かれているのかよくわかりません。

仕方ないですよね。

だってありんすちゃんはまだまだ5歳児位の女の子なんですから。

一生懸命アインズの言葉を書き込んでいるのですが、聞き漏らしたり聞き間違えもします。書いている内に話が変わってよくわからなくなる事もありますよね。

「えっと、あのさ。メモを取るのはすごく良いことだとは思うけど、これじゃわからなくない?」

アウラはありんすちゃんにイジワルな事を言ってきました。

と、ありんすちゃんのメモ帳から一枚のメモがアウラの足元に落ちてきました。

アウラはそれを拾い上げましたが、明らかに動揺しています。

メモには——マールレ アウラのおねしょ しーつ せんたく——と書いてありました。

「……えへへへ……じゃあね。シャルティア。あたしは自分の部屋に戻るから」

急にアウラは部屋を出ていきました。

ヘンなアウラ。

今回もやっぱりありんすちゃんがしつかりしないとダメみたいですね。

ありんすちゃん、頑張つて。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

0333ありんすちゃんもぐらたたきををする

アインズからの命令でクアゴアたちの捕獲に向かうありんすちゃんとアウラはかつてドワーフの王都であった都市にやってきました。そろそろお昼寝の時間だった為、ありんすちゃんは少し眠かったのですが我慢します。

「クアゴアとはどんな姿なんでありんちゆかね？」

「……うーん？ 穴掘って生活しているし、モグラみたいなんじゃないかな？」

ありんすちゃんは笑顔で片手のスポイトランスをブンブン振りましました。

「これでモグラたたきしゆるでありんちゆ」

「それじゃ、始めよっか」

アウラは背中に背負っていた大きな巻物を下ろして広げました。するとその能力が起動して、辺りは閉鎖空間に覆われました。ワールドアイテム山河社稷図——特定の一つ以外の脱出方法が無い閉鎖空間に相手を引き込む能力——が今まさに発動したのでした。

※ ※ ※

総数六万を超えるクアゴアたちの軍勢を率いる氏族王ペ・リュロは一抹の不安を感じていました。突然王都を含んだこの巨大な洞窟内がぼやけた霧で覆われたからです。やがて彼らの目の前に赤い鎧の小さな女の子と黒い肌の少女が現れました。

「……私はこの地のクアゴアたちを統べる氏族王ペ・リュロである。お前たちは何者か？」

リュロは二人の前に進み出ました。

「ちやるちえでありんちゆ」

と、いきなりありんすちゃんがスポイトランスを振り上げてリュロめがけて突進しようとしたので、アウラは慌てました。

「ちよ、シャルティア！ 待ちなさいってば。アインズ様のお言葉忘

れた？」

アウラに制止されたありんすちゃんはしばらくキョトンとしていましたが、ポケットからメモを取り出して確認し始めました。

「……危険 デスナイト 全力出すな チェック 一個か二個 しこを回転……」

ありんすちゃんは大きな声でアインズ様の言葉を記録したメモを読み上げました。後ろでアウラは呆れて天を仰いでいます。

「回転させたら良いでありんちゅ！」

ありんすちゃんは器用にスポイトランスでリュロを突き上げました。リュロはクルクル回りながら部下達のもとに戻ってきました。

「あいつら何を考えている？ ……親衛隊を、ブルー・クアゴアとレッド・クアゴアたちを集めろ」

リュロは力強く立ち上がり吠えるのでした。

「これからが本当の決戦だ」

※ ※ ※

戦闘ではありんすちゃんが張り切っていました。スポイトランスでクアゴアたちをなぎ払い、まるでモグラたたきゲームを楽しんでいるみたいです。見た目は5歳児位の女の子に過ぎないのですがさすがはナザリックでも最強クラスの階層守護者ですね。あつという間に六万いたクアゴアたちは一万になってしまいました。

「……おねむ……ムニヤムニヤ……」

突然、ありんすちゃんがゴロンと寝転がってしまいました。どうやらお昼寝タイムみたいです。

「……ま、いつか……アインズ様からは一万位に減らせてって命令受けていたから丁度良いかも。……えつと、じゃあ降参してくれるよね？」

アウラは泣きながら平伏するリュロに尋ねました。リュロの答えは決まっていました。

「よ、喜んで……、降参致します。いや、是非とも降参させて下さ

いっ！」

ありんすちゃんはグッスリ眠っています。時折ムニヤムニヤ口を動かしている所を見ると、大好きなお菓子でも食べている夢を見ているのかもしれない。

今回もありんすちゃんが大活躍しました。きっとアインズ様も大喜びでしょう。良かったですね、ありんすちゃん。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

034 ありんすちゃんほしがる

「ちよういえば凄かったでありんちゅね」

ナザリック地下大墳墓 第六階層の木陰に用意されたダイニングで紅茶を楽しみながらありんすちゃんはアウラの腰に下げられた大きなスクロールを羨望の眼差しで見ました。——山河社稷図——ここに存在する全てのものを閉じ込めてしまう世界級アイテムの一つ——その能力はついこの間のクアゴア達に使って体験したばかりです。

「アインズ様からあたしがお預かりしたんだよ。凄いやねーさすがは世界級アイテムだよね」

「ぼ、僕の『強欲無欲』も、す、凄いんだから……」

マールも負けじと天使と悪魔をモチーフにしたかのようなガントレットを見せます。そんなアウラとマールを眺めながらありんすちゃんはため息をつきました。

「わらわも欲ちいでありんちゅね……」

ありんすちゃん——シャルティアが精神支配を受けた件により、ワールドアイテム対策として各階層守護者はアインズより世界級アイテムを持たされていたのです。

「マール、片方ありんちゅちやに超越すでありんちゅ」

ありんすちゃんはマールのガントレットに手を伸ばしました。もちろんありんすちゃんに相応しい天使のような『無欲』の方です。

「だ、駄目だよ。シャルティアさん。……そうだ。あの、シャルティアさんもアインズ様をお願いしてみては？」

ありんすちゃんは目を輝かせました。

「うーん……でもさあ、シャルティアさあ、大丈夫？ ……この前スポイトランスを忘れそうだったじゃん？」

アウラがジト目で水を刺しました。ありんすちゃんは一瞬なんの事かわからず、目をパチクリさせました。

「……もう忘れた？ ……この前スポイトランスをこの中に置いて出てこようとしたじゃん？ ……あたしが気づかなかつたら忘れていたよ

？」

ありんすちゃんは思い出しました。クアゴア達を凧ぎはらった後、汚れが少し付いちやったので後できれいにしようと、ほんのちよつとだけ置いておいただけです。決してアウラが言うように忘れていたわけではありません。ちよつとだけ、置いておいただけです。

「アウアウはうるちやいでありんちゆね。私たちはぜーんぜん、忘れていなかったでありんちゆ」

「……ふーん。まあ、いいけど」

アウラはつまらなさそうに横を向くとティーカップをつまみました。

「あ、あの……シャルティアさんはどんな能力の世界級アイテムが良
いかな？」

空気を変えようとマールが口を挟みました。ありんすちゃんはニコニコしながら答えます。

「わたちの可愛さが引き立ちゆアイテムが良いでありんちゆ。可愛いステッキとか服でも良いでありんちゆね。可愛いくないのは嫌でありんちゆ」

「うーん……しゃ、シャルティアさん。それはちよつと……」

さすがにマールも呆れてしまったみたいです。仕方ありませんよね。ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

※ ※ ※

それからしばらくしてアインズが執務室でアルベドとの協議をする為に集められた投書を清書していると……『おいしい ワールドアイテムくだちやい』『かわいいワールドアイテムがわらわにあいます』『ワールドアイテムたくさん くだちやい』という投書が出てきたそうです。一体誰が出したのでしょうか？

「……アインズ様、いかがされましたか？」

「……いや……このシャルティアからの投書なのだが……」

アインズはとても不安げな様子をアルベドにみせていました。

「シャルティアにはオーレオールからワールドアイテムを渡しておいた筈なのだがな……」

まさかありんすちゃん、ワールドアイテムを忘れて……いやいや、そんな事はないですよね？

もし、忘れて何処かに置きっぱなしだとしても、仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

035 ありんすちゃんとおろふおう

ありんすちゃんがいつものようにナザリックの見回りをしていると、何だか肌寒くなってきました。

もしかしたらコキュートスが近くにいるのかもしれないと思いましたが、いませんでした。

もしかしたら『冬』が近づいてきているのかも知れません。もしも二〇一五年の冬のように長かったら嫌ですね。

ありんすちゃんはひさしぶりにくしゃみやみをしました。するとありんすちゃんはまたまたどこかに転移しちゃいました。

ありんすちゃんは何やら初めて見る都市の高い建物のテラスにいました。

見るとエルフの男がグラスを片手に等身大の鏡の前に立っています。男は上半身裸で鏡の前で様々なポーズを取ってウツトリとしています。

「……この国が落ちたら、私が法国に行つて奪い返すか。……女であればものにしてやろう。……楽しみだな」

何だかエロい人みたいです。

ありんすちゃんはエロいエルフの王だからエロフ王だと思いました。

やがてエロフ王はありんすちゃんに気がつききました。

瞳がアウラ、いや、マールに似ています。

もしかしたらマールも大人になったらエロフ王みたいになるのかもしれない。ありんすちゃんはガツカリです。

「……力を感じる……強者か。……が、しかし……」

エロフ王はありんすちゃんをまじまじと見ています。もしかしたらありんすちゃんの可愛らしさに驚いているのかもしれないよ。

仕方ないですね。

だってありんすちゃんは5歳児位の女の子にすぎないといつても、将来のお嫁さんにしたらいランキングのトップだって言っていましたから。ルプーが。

気を取り直したエルフ王はありんすちゃんに話しかけました。

「お前は一体何者か……？」

「ちやるちえ、ありんちゅよ」

ありんすちゃんは胸を張って答えます。ありんすちゃんの中では「シャルティアでありんす」とちやんと言えているみたいですが……「ふむ。名前など良い。見たところ人間種みたいだが……だがまだ子供か……残念だな」

エルフ王、いや、もうエルフ王で統一しましょう。この人物、エロい事しか頭に無いようですから。

「……その……ありんちゅとやら……お前には母親がいるかな？」

「……母親でありんちゅか？ うーん……うーん……」

ありんすちゃんの生みの親は至高の方の一人ペロロンチーノです。つまりありんすちゃんの母親はペロロンチーノといってもよいですよね？

「ペろろんちいのちやまでんちゅね」

「そうか、そうか。ペロロンチーノか。さぞかし美人だろうね。楽しみだ」

何だか一人でもりあがっています。

ありんすちゃんはエルフ王の相手をするのに飽きてきちやいました。

ありんすちゃんは大きなあくびをしました。

すると周りの景色がぼやけ……ありんすちゃんはナザリツクに戻っていました。

エルフ王はその夜、ペロロンチーノという美女の妄想に悶々としたそうです。

※ ※ ※

ナザリツクに戻ってしばらくして、ありんすちゃんはアウラに会いに第六階層に行きました。

あのエロフ王の事後、そういえばエルフが第六階層にいた事を思い出したから見にいこうと思ったのでした。

ありんすちゃんがアウラとマーレが住んでいる建物に近づいてみると何やら中からキャツキャウフフ聞こえてきました。

窓から覗いてみるとマーレが三人のエルフに裸にされている所でした。

ああ、ガツカリです。

だって、マーレにはあんな大人になって欲しくありませんでしたから。

ありんすちゃんはプンスカしながら帰りました。

036 ありんすちゃんおにになる

今日はプレアデスのみんなとかくれんぼです。まずはありんすちゃんが鬼になって見つけるんですって。

ありんすちゃんはとつても張り切っています。さて、ゆつくり百数えたありんすちゃんが探しに行きます。

おや、椅子の影に黒いポニーテールが見えていますよ。

あれあれ？ ありんすちゃんは素通りしちやいます。

気付かないみたいですね。

ありんすちゃん、後ろ。後ろですよ？

ありんすちゃんは口に指を当ててシーと合図しています。

なるほど。次にポンコツ過ぎる人が鬼になるといつまでも見つけて貰えなくなるから、敢えて見つけないんですね。

ありんすちゃんの賢さはとても5歳時位の女の子には見えませんね。

次にありんすちゃんは骨を取り出しました。

骨を高く投げると「アウーン！」誰かが噛みつきました。

ルプスレギナでした。

ルプスレギナを見つけたありんすちゃんは今度はお風呂場に来ました。

なんと大きな水溜まりがあります。

ありんすちゃんは構わず水溜まりに足を踏み込みました。

あらあら大変です。ありんすちゃんは水溜まりに飲み込まれてしまいました。

ありんすちゃんは大丈夫でしょうか？

「チヨリユチュン、見つけたでんちゅよ」

なんと水溜まりはソリュシャンだったのです。

ありんすちゃんはもしかしたらかくれんぼの天才かもしれません。次にありんすちゃんが目を付けたのはメイド達の衣装部屋です。

いくつかのトルソに特別仕立てのメイド服が着せてあります。

おや？ 二つばかり他と違いますね？

ありんすちちゃんはトルソの中に紛れていたシズを見つけてました。
もう一人は……頭がないのでわからないですね。

一体誰なんでしょう？

頭を見つけないと見つけた事になりません。

ありんすちちゃんは落ち着いたものです。

台所に行つて冷蔵庫を開けます。

すると中からゴロンとスイカが転がり落ちました。よく見るとなんとなんとユリの頭でした。

ありんすちちゃんはシズに続いてユリも見つけちゃいました。

今度はありんすちちゃん、あちこちの箱を開けています。

いくらなんでもそんな小さな箱に入れないと思えますが……

でも、ありんすちちゃんは自信満々です。

あれあれ？ いくつかの箱から虫みたいなのが出て来ました。

いつの間にか虫みたいなのは随分沢山になっていますよ？

それは集まって、合体して、おやおや？ エントマだったんですね。

こうしてありんすちちゃんはエントマも見つけてしまいました。

楽しくかくれんぼをしたありんすちちゃんとプレアデスのみんなは

仲良くおやつにしました。

※ ※ ※

その夜、ナザリツク地下大墳墓に戻ったアインズはギョツとして立ち止まりました。

椅子の影に何者かが潜んでいるみたいですが……

「——ナーベラル？ ここを何を？」

「……アインズ様……あの……かくれんぼを……」

ナーベラルつてもしかしたらかくれんぼの達人だったのかも知れませんか。

※ありんすちちゃんが挿絵を描いてくれました

037 ありんすちゃんときょうふのかくれんぼ

今日もプレアデスのみんなと一緒にかくれんぼをします。

おや？ プレアデスが一人足りませんね。

ナーベラルがいませんが、きつとアダマンタイト級冒険者「漆黑」の美姫ナーベとしてモモンと一緒に出掛けているのでしょうか。

今回の鬼はルプスレギナです。

ありんすちゃんは隠れる番ですね。

ありんすちゃんはどこに隠れるのでしょうか？

ありんすちゃんは至高の方々の部屋が並ぶ廊下に真っ直ぐやってきました。

……なるほど。

ここなら乱暴に探す事は出来ませんから、時間稼ぎも出来そうですね。

ありんすちゃんは沢山並んだ至高の方々の部屋の一つを開けて入っていきます。まるで最初からここに隠れると決めていたみたいですね。

大きなベッドがある寝室の奥の……あれあれ？ ……奥のクロー

ゼットの部屋に入っていつちやいましたよ。

大丈夫でしょうか？

部屋の外では鬼のルプスレギナが探しています。

彼女はつい先程食堂で一般メイド達から情報を集めていたみたいですよ。

ルプスレギナって実は賢いのかも知れませんね。

一方、ありんすちゃんは……どうやら小部屋の中で眠っちゃっているみたいです。

仕方ないですよ。

だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なんです。ぼちぼちお昼寝したくなっちゃったんですね。

ルプスレギナは部屋の外を探して……おや？ 変ですね。

ありんすちゃんが入った部屋のドアを開けないで立ち去っていく

ましたよ。

ありんすちゃんはラッキーですね。

ありんすちゃんは誰かの部屋のベッドの奥のクローゼット部屋でスヤスヤ眠っています。

沢山のアインズ様に囲まれて：

——ちよつと待った！

……そこはもしかしたら某守護者統括の某アルベドさんのアインズグッズが沢山ある通称『ハーレム部屋』じゃないですか？

確か一般メイドの立ち入りも厳禁にしていたはず。だからルプスレギナも中を見ようとしなかったのですね。

一難去つてまた一難、いやいや、今度はありんすちゃんの生命そのものがピンチです。

なんとという事でしょう。

よりもよつてアルベドが戻つて来てしまいました。

いつもならアインズの部屋のベッドで裸でゴロゴロしているのに、今日は自分の部屋に戻るみたいです。

アルベドは部屋に入り、ベッドに腰掛けます。

大変です！ ……ありんすちゃんとは目と鼻の先です。このままアルベドがハーレム部屋の扉を開けてしまえば、スヤスヤ眠っているありんすちゃんが見つかつてしまいます。もし、ありんすちゃんがアルベドのハーレム部屋で寝ている所を見つけれたらどうなる事か？

もしかしたら今まで続いてきた『ふしぎのくにのありんすちゃん』は今回で最終回になってしまうかも知れません。

これまでご愛顧頂きました皆様、ありがとうございました。

今の内にお礼申し上げます。

アルベドはハーレム部屋の扉のノブに手をかけました。

そうだ！ ありんすちゃん、くしやみです。

くしやみでテレポートすれば見つかりません。

アルベドはハーレム部屋の中を見回しました。

——そしてそこに沢山のアインズのぬいぐるみに囲まれてスヤス

ヤ眠るありんすちやんの姿を見つけました。

※ ※ ※

アイズはふと胸騒ぎがして部屋の外を出ました。

廊下を通り広間にやって来てふと、暗がりに潜む人影気がつきました。

「ナーベラル……もしかしてまだかくれんぼか？」

椅子の後ろに隠れているナーベラルは弱々しく頷きました。

※ありんすちやんが挿絵を描いてくれました

038 ありんすちゃんはんぶんこおる

ありんすちゃんは寒さで目を覚ましました。

まるで冷蔵庫の中みたいに冷たくて、ありんすちゃんは半分凍ってしまっていました。

ありんすちゃんは冷たい冷蔵庫の中で見知らぬ人に抱っこされていたのでした。

一体何が起きたのでしょうか？

ありんすちゃんは抱き上げている女の人を見上げて、その顔を見て……なんという事でしょう？ 顔の皮膚がありません！

あまりのショックでありんすちゃんは気を失ってぐったりしてしまいました。

ありんすちゃんの反応に女の人もおたおたしちゃっています。

さてさて、ありんすちゃんが寝ている間に何が起きたのでしょうか？

※ ※ ※

——時間を遡る事数時間前、アルベドがありんすちゃんをハーレム部屋で見つけた所まで遡ります。

ありんすちゃんはかくれんぼをしていて、アルベドの部屋の秘密の『ハーレム部屋』に隠れているうちにすっかり眠ってしまいました。

そこに部屋の主のアルベドが帰って来てしまったのだから大変です。

なにしろアルベドは自分の部屋の中ですら一般メイドに立ち入りさせないのでから。

アルベドはハーレム部屋でスヤスヤ眠っているありんすちゃんをじつと見下ろしています。

その表情は怒りのあまりに無表情な能面みたいです。

やがてありんすちゃんをむんずと掴むとアルベドは荒々しく部屋の外に出ました。

アルベドはありんすちゃんをどうするつもりでしょうか？

もしかして恐怖公の領域に？ それとも餓食狐蟲王の巣に放り込まれてしまうのでしょうか？

ありんすちゃんはそのような事態になっているのも知らないでぐっすり眠っています。

せめて、今起きて『ごめんなさい』をすれば命だけは助けてもらえると思いますが……

アルベドは能面のような無表情のまま、第五階層にやって来ました。

氷結牢獄に来ると扉の鍵を開けて叫びました。

「……姉さん！ 私よ。あなたの子供を連れてきたわ！」

「子供、子供！ わたしの子供お！」

部屋の奥から凄まじい勢いでニグレドが走ってきて、アルベドの手からありんすちゃんを奪い取りました。

ありんすちゃんはまだ起きません。

仕方ないですね。

ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なんですから。

こうしてありんすちゃんはニグレドの腕に抱かれた状態で目覚める事になりました。

——半分凍ってしまったていましたが。

ニグレドはいつもの人形だと思ったらありんすちゃんだったのでビックリ。

お詫びにありんすちゃんの探し物を手伝ってくれるそうですよ。

ありんすちゃんはラッキーですね。

さて、何を探して貰いますか？

かくれんぼで隠れているプレアデス？

いえいえ、ありんすちゃんにはどうしても見つけたい、諦めきれない大切なものが一つありました。

それは白いレースの飾りが可愛いお気に入りのパンツです。

ニグレドはありんすちゃんのパンツの行方を水晶に映し出しました。

そこには初めて見る国の王宮の中が映っていました。

※ ※ ※

竜王国の女王、ドラウデイロンは納まらない怒りに震えていました。

(あのロリコンめ！ ロリコンの変態騎士め！ よくもよくもよくもよくも……)

「どうか陛下、お気をお鎮め下さい。上に立つものがさような怒りに身を任せていては……」

「……わかつておる！」

ドラウデイロンは深々と深呼吸をして心を静めようと思いました。

——思い出しても腹立たしい。

彼——セラブレイトは公衆の面前で、よりにもよってパンツで女王たるドラウデイロンの顔を拭いたのである。

「しかし、陛下、いきなりかの者を降格の上謹慎など……冒険者組合も黙っていますぞ」

「うるさい。うるさい。うるさい！ そんな事はわかつておる！ 追放しないでだけマシと思え！」

「しかしながら……かの者は陛下より賜ったハンカチと思つてとの事
でして……」

「赤じゃ！」

「は？」

「このドラウデイロンは赤しか穿かぬわ！」

「……なんと!!……」

かくして竜王国の命数は一気に縮まってしまうのでした。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

039 ありんすちゃんみつぐになる

氷結牢獄からなんとかでられたありんすちゃんですが、寒くて寒くてたまりません。

どこか暑い所はないでしょうか？

さすがはありんすちゃん。

どうやら心当たりがあるみたいです。

ありんすちゃんは第七階層にやってきました。

なるほど。

溶岩の世界の第七階層なら暑いどころか熱い位ですね。

「おじやまするでちゅよ」

ありんすちゃんは礼儀正しく挨拶します。

おや？ 溶岩の川から領域守護者の紅蓮が姿を現しましたよ。

紅蓮はうちわでありんすちゃんを扇いでくれています。

ありんすちゃんはホカホカの焼き芋みたいにアツアツになってきました。

いつのまにかこんがりとキツネ色になっていますよ。

なんだかとても美味しそうですね。

こんどはうつ伏せに寝て、まんべんなくキツネ色に焼きます。

こうしてあつという間に日焼けありんすちゃんの完成です。

せっかくこんがりキツネ色になったのですから、誰かに自慢したいですよ？

ありんすちゃんは礼儀正しく紅蓮にお礼を言ってから第七階層を後にしました。

こんがりキツネ色に日焼けしたありんすちゃんは第六階層にやってきました。誰かがやって来た事を感じてマーレがありんすちゃんを迎えにきました。

「あれえ？ なんだか黒くなっていますよねえ？」

ありんすちゃんは得意そうに胸を張ります。

「アウアウとマーレよりも黒いでちゅ。」

「ボ、ボクの方が、く、黒いに決まっています！」

マーレが否定します。

「マーレ、どうしたの？　なんかさあ、あたしだけのけものみたいなんだけど？」

そこにアウラもやって来ました。

「お姉ちゃん、ボクの方が黒いよね？」

ありんすちちゃんとマーレ、二人とも同じ位に色黒に見えます。

「……うーん？」

大きな鏡の前にアウラも並んで立ってみます。

こうして三人が並ぶと、みんな同じ位色黒で、まるでダークエルフの三つ子みたいでした。

「……そうだー！　面白い事をひらめいた！」

なにやらアウラが思いついたみたいです。

自分の部屋のタンスをひっくり返していたアウラはマーレとありんすちちゃんにアウラが普段着ている服と同じものを渡しました。

早速着替えて並んでみると、あらビックリ！　アウラが三人並んでいるように見えます。

ダークエルフの三つ子の完成です。この姿でいきなり登場したらみんなビックリしそうですね。

三人は仲良く手を繋いでナザリックのあちこちへ出かけていきました。

一般メイドのみんなに後ろ向きになった三人からありんすちちゃんを当てるゲームをしたら、正解率は50%でした。

みんな観察力がありませんよね。

よく見ればありんすちちゃんだけ耳が尖っていないので簡単に見分けられるんですよ。

ありんすちちゃんは思いました。

そうだ、王都で会った変な仮面の子も日焼けさせたら四つ子になれるかもしれない。

同じ様な仲間を増やしていくのも面白そうですね。

もっともありんすちちゃんは飽きっぽいから明日にはもう別の事に夢中かもしれません。

仕方ありませんよ。
だってありんすちゃんはなんといいっても5歳児位の女の子なんですから。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

040 ありんすちゃんありんすちゃんになる

今日のありんすちゃんはいつもと少し違います。
何やら思い悩んでいるみたいです。

季節の変わり目で感情が不安定なのでしょうか？

それとも食欲の秋が関係するのでしょうか？

もしかしたらおやつにプリンを食べるかシュークリームを食べるか悩んでいるのかもしれないね。

え？ 違うんですって？

まさか、秋は恋の季節……でもでもありんすちゃんにはちよつと早いですよね？

だってだって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なんですから。

恋……ではない？

なんだかジエスチャーゲームみたいになってきましたね。

おや？ ルプスレギナが来ましたよ。

「チャルメラ……じゃなくてペタン血鬼航空さん、おはよつす」

あれあれ？ ありんすちゃんが怒っている？

「……イタタタ……痛いっすよ。なんすか？ 一体？ 男胸の残念美少女さん？」

ありんすちゃんは両手をぐるぐる回してルプスレギナを叩きまくっています。

なるほど。わかりました。

ありんすちゃんはルプスレギナが付けたあだ名が気にいらなそうですね。きつと。

「うーん……でもペタン血鬼航空ってフロストドラゴンの空輸会社っぽくて格好いいっすよ。略してPV-AIR。格好いいっす」

言われてみたらなかなかありんすちゃんもだんだん格好良く思えてきたみたいです。

さて……悩み事って何でしょう？

なんと……ありんすちゃんは自分の名前を上手く言えないのを悩んでいたんですか？

では、ありんすちゃん、『シャルティア・ブラッドフォールン』と言ってみましょう。

「シャルチエア、ウラドホールル」

あらあら……ルプスレギナが爆笑して……酷いですね。

「ぎやははは……これじゃシャルメラに聞こえるわけっすよ。良くできまぢゆたねえっす」

ありんすちゃんは真っ赤っかに怒っています。いくらなんでもこれはルプスレギナが悪いですよ。

「……シャルティア・ブラッドフォールン、良いこと？ 自分の名前を上手く言えないなんて大したことではないの。名前とはそもそも他者が呼びかける為のもの」

ルプスレギナは普段と違う真面目な顔で続けます。

「貴女は復活してから以前のシャルティアではなくなったのだから、無理にシャルティアであり続ける必要は無いの。どうせなら、そうね。ありんすちゃん、これが今の貴女にピッタリじゃないかしら？」
ありんすちゃんはありんすちゃんになりました。なんだかうれしそうです。

良かったですね。ありんすちゃん。

※ ※ ※

アインズはアルベドを前にして少し緊張した面もちでメモを取り上げました。

「……ゴホン。うーん……『ナザリックのオリジナルキャラクター、ナザぽん』を作ってキャラクターグッズ販売で外貨を稼ぎましょう。』か……うむ……これは是非検討……」

「問題外です。誰がこんな愚策を……見つけ出して処罰すべきです」

「あ……次に行こう。『ありんすちゃんはありんすちゃんとよんでください』……うむ？ これはシャルティアか？」

「アインズ様、どうぞよしなに」

「……そうだな。それならこれからはシャルティアを“ありんすちやん”と呼ぶ事にしよう」

かくてありんすちやんをありんすちやんと呼ぶ事はアインズのお墨付きとなるのでした。

※ありんすちやんが挿絵を描いてくれました

041 特別編・名探偵ありんすちゃん　く消えた三吉
君の行方く（プレイアデスな日　より）

ありんすちゃんはアインズ様の執務室にやって来ました。

ありんすちゃんがありんすちゃんになって初めてご挨拶をするので、少しばかり緊張しているみたいですね。

わずかに頬が紅潮してみえますよ。

トントン、トン。扉をノックすると中から一般メイドのデクリメントが顔を出します。

「アインジュちゃまにお会いしにきたでありんちゅ」

デクリメントも何やら緊張した面持ちでアインズ様にお伺いします、と答えて扉を閉めました。

扉の前でありんすちゃんは更に緊張してきました。

「……………どうぞ。アインズ様のご許可がありましたので、お入り下さい」

フンスと鼻から息を出して思いきり胸を張ったありんすちゃんが部屋に入ります。と、部屋の入り口にいたユリとぶつかりました。部屋を見回すとアインズの他にユリ、ソリュシャンがいました。

デクリメントは少し怯えた様子で、部屋の中はなにやら不穏な感じ
です。

ありんすちゃんはお構いなしでアインズ様の前に進み、口上を述べ
ます。

「このたびはありんちゅちやがありんちゅちやになりましたのであ
いさちゅでありんちゅ」

ありんすちゃんはありんすちゃんになったお礼の挨拶をします。

微妙な空気の中を察して本当なら気を使うべきなのかも知れませ
んが、何しろありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子ですから仕方あ
りませんよね。

シーンと静まり返った中、アインズが破顔しました。

「……………そうか。ありんすちゃんだったな。……………うむ」

ありんすちちゃんは続いて口を開きます。

「アインジユちやま、何かありまちたんでありんちやか？」

ありんすちちゃんの無垢な瞳がアインズをじっと見つめます。無碍に出来ないアインズはついついありんすちちゃんに話してしまいました。

「……うむ。実は、私の三吉君がいなくなってしまうてな。どうやらソリュシヤンが行方を知っているようなのだが」

「アインズ様！ 私ですぐにも聞き出します！」

ユリが両腕にガントレットを装備して構えるのを、アインズが慌てて止めます。

「どうやらここは名探偵の出番です。なんという偶然か、ここには名探偵ありんすちちゃんがいるではないですか？」

ありんすちちゃんはソリュシヤンに近づき顔をじっと見つめます。

「……チヨリユチャはさんちちくん、ちらないでありんちゆか？」

ありんすちちゃんは無垢な瞳でじっと見つめます。

「……じつは……」

純真無垢な瞳で見つめられてソリュシヤンも流石に嘘はつけません。

彼女はポツリポツリと話し出しました。

——ソリュシヤンの話をまとめると、風呂場から三吉君連れ出したのはソリュシヤンでした。

三吉君がいなくなれば、アインズ様の身体を洗う役目につけるのは、としばらく三吉君を隠しておこうと体の中にしてしまっていたそうです。その後、うたた寝して目が覚めたら三吉君がいなくなってしまう方がわからない、というのです。

「……もしかして食べちゃった？ マジ？」

アインズは思わず呟きます。

ソリュシヤンはスライム形態の体内に取り込んで消化してしまうので、スライムの三吉君も消化されてしまったのでしょうか？

「……なんて事を……ソリュシヤン、覚悟しなさい。これから貴方の中から取り出します！」

ユリがまたしてもガントレットを構えます。

「さて！ 待つんだユリよ。早まるな」

ありんすちゃんはいんズ様の前に進んで申し上げます。

「ここはありんちゅちゃんにお任せくだちやい。きつとちやんちき君見ちゆけるでありんちゅよ」

「……ふむ。よかろう。ここはありんすちゃんに任せる。ユリ・アルファよ、サポートするのだ」



まずは目撃者探しです。ありんすちゃんとユリは戦闘メイド達の部屋にやって来ました。

——ポリポリ

何やら音がします。音の方を見るとエントマが何やら黒い物を立ちながら食べていました。

——ポリポリ

「エントマ、貴女は三吉君様について何か知らないかしら？」

——ポリポリ

ユリがありんすちゃんのセリフを奪ってしまいました。ありんすちゃんは頬を膨らませて抗議をします。

ありんすちゃんにポカポカ叩かれたユリはありんすちゃんに謝ります。

機嫌を取り直したありんすちゃんは胸を張って尋ねます。

「エントマは何を食べているんでありんちゅか？」

エントマは答える代わりに食べていた黒い、まだカサカサ動く『おやつ』をありんすちゃんとユリの手のひらに乗せました。



——ひどい目にあつたでありんちゅね……

最初の聞き込みは散々でしたが、それでも有力な情報が得られまし

た。

それは寝入ったソリュシヤンの鼻の穴から三吉君がはみ出していた、というものでした。

もしかしたら三吉君はソリュシヤンから自分の力で逃げ出したのかも知れませんね。

ありんすちゃん、流石です。ソリュシヤンが三吉君を消化してないという視点を最初から持っていたのですから、名探偵の資質が本当にあるかも知れませんね。

ありんすちゃんは腕を組んで考えます。名探偵はこの後に閃いたように犯人の名前を告げると相場が決まっています。ありんすちゃんに出来るでしょうか？

「犯人はルプーでありんちゅ」

どうやらありんすちゃんは犯人がわかったみたいです。

ありんすちゃんと他一名はルプスレギナを捜しました。

ルプスレギナは直ぐに見つかりましたが、何かポリポリ食べていたのでありんすちゃんは後にする事にしました。

だって、もしかしたらルプスレギナがアントマと同じ『おやつ』を食べているのかもしれないですから。



ありんすちゃんの推理は外れて、ルプスレギナがポリポリ食べていたのはなんとジャガイモをスライスして油で揚げ、塩を振りかけたものでした。

え？ 三吉君の行方はどうなったか、ですか？

三吉君行方不明事件に於いて、ルプスレギナは真犯人ではありませんでした。

しかし、寝ているソリュシヤンの枕元に落ちていた三吉君を拾ったのはルプスレギナでした。

彼女が三吉君を片手につまんでウロウロしていると、声をかけて「私がアインズ様のお部屋に戻しておきます」と言って三吉君を持ち

去った人物がいたのでした。

おそらく、その人物はアイنزの部屋に三吉君を戻さずに自分の部屋に持ち帰ったのでしよう。

真犯人に聞けば事件の全てが明らかになるでしょう。

難事件を無事に解決したありんすちゃんは助手と一緒にアイنزの執務室に報告しに向かうのでした。



ありんすちゃんと助手一名はアイنزの元に戻って来ました。

「アインジュちやま、真犯人はアル●ドでありんちゆた」

「……うむ。その事なのだから……もう良いのだ」

アイنزはいくぶん気まずそうな様子でありんすちゃんに背を向けました。

「——あれからすぐに三吉は戻ってきた。この案件は無事解決した、というわけだ」

アイنزは何処か遠くを見るようにしています。事件は解決したみたいですね。

でも、ありんすちゃんは納得いかないみたいですよ。

「……真犯人はア●ベドでありんちゆ。真犯人なんでありんちゆ」

アイنزはありんすちゃんに向きなおり、頭を優しく撫でました。

「……うむ。ありんすちゃんよ、ご苦労であった。……そうだな、何か褒美をやろう。何がよいかね？」

途端にありんすちゃんの眼がキラーンと光りました。現金なものですね。

「アインジュちやまにお願いするでありんちゆ。チヨリユチャとニグレドとペチュトレワンワンを許ちて欲ちいでありんちゆ」

アイنزはしばらく目を閉じて考え事をしていましたが、意を決して口を開きました。

「……うむ、わかった。ソリユシャン、並びに謹慎中のニグレド、ペストレーニヤを許すでしょう」

ありんすちゃんは嬉しそうです。とてもまだ5歳児位とは思えませんね。

今日も大活躍のありんすちゃんでした。

— f i n —



—ふう。

『三吉君』は深くため息をついた。

—今回はもう駄目かと思った。

『彼』がスライム♀だと看破したのはおそらく同じスライム種のソリュシャンだけだろう。

いわゆる同性が故の嫉妬——アインズ様をめぐる女の戦いで危うく『三吉君』は命を落とす所だった。

本来なら単なるPOPモンスターに過ぎない自分が、事もあるうに至高の御方の御寵愛を受けてしまったのだから、怨みを買ってしまうのは仕方ないだろう。

—ふう。

最後の彼女——守護者統括というNPC最高の存在——との約束を思い出すと気が滅入る。

アインズの元に戻すかわりにこれからアインズの入浴後にどのよう
に御方の身体を洗ったかを詳細に報告しなくてはならない。

単なるスライムである彼女にとっては難題である。なにしろ喋る
事が出来ないのだから。

——ふう。

彼女のため息は止まる事なく続くのであった。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

042ありんすちゃんふたたびみつごになる

鮮血帝ジルクニフは朝からご機嫌でした。

勢力拡大中の魔導国の評判は今のところ悪くなく、属国となろうとしていくバハルス帝国を表立って非難する国は現れません。

それどころか最近では聖王国が魔導国に助力を求めて、魔導王自ら聖王国に向かったらしいのです。

これで聖王国もバハルス帝国同様に魔導国の幕下となればいくらか負担も軽くなるうというものですから。

気分よく王城から帝都を見下ろします。

ふと、広場が目に入った瞬間に嫌な事を思い出して眉をひそめました。

そうです。ドラゴンに乗ったありんすちゃん達が来た時の事を思い出してしまったのですね。

良い気分には水をさされたジルクニフは空に視線を動かします。

すると何やら白いモノがやって来るのに気がつきました。

なんと……!!

ドラゴンです。

白い丸みを帯びた身体ドラゴンがやって来て、広場にフワリと降りました。

背中に小さな影が三つ……間違いありません。

魔導国の三人の子供達です。

「……まさか」

ジルクニフは慌てて顔を突き出します。

なにしろあの子供達の事ですから、この前の事をすっかり忘れて、「そういえば帝国に行って来いってアインズ様言ってなかったっけ？」とか勘違いしているのではないのでしょうか？ それとも別の用事

とか？

顔を出したジルクニフに向かって三人がドラゴンの上で立ち上がります。

ジルクニフは驚きました。

三人ともダークエルフみたいに色黒で、しかも三人とも同じ服装でスカートをはいていました。

真ん中の子は少し小さい女の子でしたが、まるで三つ子か姉妹みたいにそっくりです。

真ん中の子が口を開きました。

「皇帝、誰があらんちゅちゃんであらうか？」

ジルクニフはこの間の事を思い出します。

あらんすちゃんというのは多分、少し舌足らずの女の子の事だと思われまます。

前回双子のダークエルフと一緒にいた赤い服の女の子の事でしょう。それならば、色黒ですが真ん中の一回り小さな女の子に間違いないことでしょう。

——しかし——

ジルクニフはこれまでのアインズ——魔導王とのやりとりを思い出します。

あの人物が、こんな単純なゲームを仕掛けるとは思えません。

あの、悪夢が具現化したような、深慮遠謀の塊のような男ですから、きつと何か裏に意図するものがきつとあるのでしよう。

ジルクニフは腹を括って真ん中の女の子を指差します。

「……あらんすちゃんは女の子」

「——ではない」

相手の反応をじつと待ちます。

ジルクニフの考えが正しいならば、この中に『あらんすちゃん』という子はいない筈です。

これは引つ掛け問題に決まっています。

もし、仮にジルクニフが不正解したらまたもや悲惨な事態を起こされかねません。

この子供達ならきつとやるでしょう。

更にジルクニフの観察眼は彼等が今回別のドラゴン——白くて太めでメガネをした——で来ている事に気がついていました。

そう。きつと『あらんすちゃん』はこのドラゴンの名前に違いない

のです。

シーンとした中で先ほどの真ん中の女の子が口を開きます。

「ブブブブブー！　残念でありんちゆた。ありんちゆちゃんはわたちでありんちゆよ。……マーレ！」

名前を呼ばれた隣のダークエルフが広場にひらりと降り立ち、静かに杖を振り上げます。

広場の回りの呆気にとられている兵士達は身動きすら出来ません。

「やーめーてー!!」

ジルクニフの悲痛な叫びは地震の地響きに消えていくのでした。

043ありんすちやんまたまたみつごになる

ジルクニフは憂鬱そうに広場を見下ろしました。

地震の跡は塞がっていますが、またしても多くの兵士が犠牲になりました。

ジルクニフは頭をかきむしりながら苦悩しました。

「……何故だ？ 何故なんだ？ 何故、こんなにも不幸なのだ？」

ジルクニフに振り向かれたバジウツドは視線を反らしました。

子供のやる事、と一言で片付けてしまうにはあまりにも残酷でかつ無慈悲と言えます。しかしながら、現在のバハルス帝国としては魔導国を表立って非難する事は出来ません。

せめてあの時——ジルクニフは深く後悔します——下手に勘ぐらないで素直に答えていたら……あんな惨劇は起こらなかった筈です。

ジルクニフはただただ、髪をかきむしり身悶えするだけでした。かつては鮮血帝等と怖れられていたのが嘘みたいに無力な自分に腹立たしさを感じながら、そして髪をかきむしる事ぐらいしか出来ない自分を哀れに思いながら。

ふと、またもや昨日のドラゴンがやってくるのが見えました。やはり背中に三人の小さな人影があります。

おそらくまたまたあの魔導国の子供達でしょう。ジルクニフは目を閉じると、自らを奮い立たせるのでした。

三人はまたもや同じ服装——今回は男の子に見える格好——をしていました。

きつとまたまた真ん中の女の子が『ありんすちやん当てゲーム』を言い出す事でしょう。いいさ。今度はちゃんと間違えずに答えてやる、そうジルクニフは思いました。

真ん中の女の子が口を開きます。

「さて、誰がありんちゅちやんでありんちゅか？ 当てられないちよ罰ゲームでありんちゅ」

ジルクニフは心の中で嘲笑いました。所詮は子供の考える事、それなら簡単です。

これがあの畏るべき魔導王ならば深読みしなくてはならないでしょうが、ここは所詮子供が相手です。ましては前回のような失敗は出来ませんから素直に正解を答えるまでです。

ジルクニフは深呼吸をすると答えを口に――

と、丁度その時に横槍が入りました。

「ちゃんと考えた方が良いと思うな。あたしならね。……だって間違えたら大変だよ?」

確かファイオーラといったダークエルフの姉? の方です。ジルクニフは一瞬、氣勢を削がれましたが、これはきつとブラフでしょう。正解させまいとする相手の心理作戦に違いありません。

ジルクニフは正解を確信して、ゆつくりと真ん中の女の子を指差しました。

「ありんすちゃんはこの子だ」

シーンと静まり返った中、三人は顔を見合わせます。そして満面の笑みでジルクニフを迎えます。

「ピンポン、ピンポーン! おめでどうでありんちゅ。正解でありんちゅよ」

ジルクニフはホツとして、思わず座り込みました。正解したとはいえ、この子供達を相手にするのはもう勘弁して欲しいものです。

ニコニコしながらありんすちゃんが言いました。

「おめでどうでありんちゅ。マーレ、お願いするでありんちゅよ」

思わず顔を上げたジルクニフの視界の中で、またもやダークエルフの片方が杖を上げて……

「な——ん——で——!!」

またしてもジルクニフの絶叫は地響きの中にかき消されてしまうのでした。

044 ありんすちゃんおうこくへおつかいに行く

今日のありんすちゃんはアルベドに頼まれて王国へお使いに行きます。

お供のアンデッドはありんすちゃんの階層から連れて行きます。身の回りの世話をするのはヴァンパイア・ブライドです。何だかんだでそこそこの大所帯になってしまいました。

ありんすちゃんは最近再びゲートを使えるようになったので、馬車ごとすぐに王国へ行けます。

本当はゲートよりドラゴンで行きたかったのですが、今回は駄目なんですって。残念です。

ありんすちゃんは王国に着くと、ヒルマの館を目指します。館では八本指という人達がいるので、ありんすちゃんはアルベドのかわりに指示を出すのです。

「ありんすちゃん様。ようこそおいで下さいました。皆、揃っております」

ありんすちゃんは胸を張ってヒルマに案内されて館に入ります。あんまりふんぞり返りすぎて倒れそうになったのは内緒です。

部屋の中には痩せた人や痩せて頭が禿げた人達がいました。どの人もヒルマに負けず劣らず痩せています。王国ではダイエットがブームなのかもしれませんね。

ありんすちゃんはアルベドから渡されたメモを読み上げます。

「これからジャンケンで負けた人は罰ゲームでんちゆ。素直になる部屋にいくでちゆね」

居合わせた八本指の全員が真っ青になりました。ヒルマが震える声で嘆願します。

「……お願いです。それだけはご容赦下さい」

ありんすちゃんには『ご容赦』の意味がわかりませんでした。だってまだ5歳児位の女の子ですから、難しい言葉はわからないのは仕方ないですよね。

「……わかりました」

ヒルマは安堵のあまり、ペタンとへたり込んでしまいました。あの地獄を二度と味わらなくて済むのなら何でもするつもりです。

——どうやら地獄を回避出来た——そんなヒルマのささやかな希望は無惨にもありんすちゃんの次の一言で潰えるのでした。

「では、ジャンケンするでんちゅ。負けたら恐怖公とあそぶでありんちゅ」

「——そんな——」

八本指の誰もが絶望した面持ちで互いの顔を見合わせます。こうなれば仕方ありません。相手は子供とはいえ、あのナザリックの幹部です。反抗しても簡単に殺されてしまうだけでしょう。

彼らの命懸けのジャンケンは数時間も続けられました。

敗者となったのはやはりヒルマでした。

他の八本指の名前をこの二次小説の作者が知らないのでヒルマになった、なんという事はないと思います。多分。

「……お願いです。お許し下さい。……そうだ、ありんすちゃん様に素敵なプレゼントを差し上げます」

「……プレゼント？ でありんちゅか？」

どうやらありんすちゃんの心が動いたみたいです。

「見てください！ この超合金アインズ様を！ こうしてスイッチを入れると目と下半身が赤く光るんです！ しかも——」

ヒルマはアインズ様をテーブルに置きました。するとアインズ様ファイギュアは右手を動かしセリフを喋りました。

「——騒々しい。静かにせよ——」

おや？ありんすちゃんの目の色が変わりました。どうやら欲しくてたまらないみたいです。

私も欲しかったりしますが……ゴホン。

「ふたちゅでちゅ」

ありんすちゃんはメモを見ながら言います。

「アルベドからアインズちゃんやま人形を持って帰るとなっているでありんちゅから、ありんちゅちゃんの方とふたちゅでちゅ」

ヒルマは大急ぎでアインズ様ファイギュアを二つ用意してありんす

ちゃんに渡しました。

ありんすちゃんは無事にお使いを済ませてナザリックに帰りました。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

045ありんすちゃんあちちゃんになる

ありんすちゃんはお風呂が大好きです。朝、起きたらまずお風呂、そして各階層を一回りし終えたらまた、お風呂に入ります。

ありんすちゃんが特に大好きなのはバスタブ一杯に泡が溢れるなかでバチャバチャする事ですって。

ヴァンパイア・ブライドが二人がかりでありんすちゃんをゴシゴシ洗います。

するとありんすちゃんはピカピカのツルツルになります。身体を洗い終えたら、シャンプーです。ありんすちゃんはまず、頭にシャンプーハットをかぶります。

シャンプーハットがないと泡が目に入ったり、顔があわあわして大変なので、必須なのです。

仕方ないですよ。ありんすちゃんはまだ5歳時位の女の子ですから、シャンプーがちよつと苦手でも。

ヴァンパイア・ブライドはありんすちゃんの頭をゴシゴシ洗います。

ありんすちゃんの頭はその度にグラグラ揺れます。

シャワーで綺麗に泡を流すと、今度はリンスです。

ありんすちゃんお気に入りの花の香りがするヤツです。

大変です！ なんとということでしょう！ リンスの中身が空です

！ よりによってありんすちゃんがリンスをしようとしているタイミングでリンスが無くなつてしまいました。

なんとということでしょう！

「うひひひひ。ありんすちゃん、リンスが無くなったっすか？ これじゃありんすちゃんじゃなくてリンス無しの『あちちゃん』っすね」

不意に現れたルプスレギナが意地悪します。ありんすちゃん、真に受ける必要はありませんよ？ ルプスレギナの言うことは出鱈目で、ありんすちゃんはありませんすちゃんですから大丈夫です。

しかしながらありんすちゃんは所詮まだ5歳児位の女の子、ルプスレギナの言葉を真に受けてしまったようです。

ありんすちやんが『あちやん』になんかなるはずなのに……

可哀相なありんすちやんは風呂から飛び出して必死にリンスを探します。いやいや、そこらにリンスは落ちていませんよ？　ありんすちやん。

「そういえば、第九階層のスパにシャンプーとリンスが常備してあつたつすね。まあまあ、慌てない慌てない。裸で至高の御方のおわす階をウロウロしたらまずいつすよ？　まずはちやんと服を着るべきつすよ」

ありんすちやんも恥じらいある乙女です。裸でウロウロ歩き回る変態さんにはなりたくはありません。

ありんすちやんはヴァンパイア・ブライド達に身体を拭いてもらい、ちやんと服を着せてもらいました。

これで準備万端です。

珍しく、ルプスレギナがありんすちやんをスパの入り口に案内してくれました。

「私はここで待っているつすから、ありんすちやんはさつさとリンスを持って来ちやつて下さいつす。流し場の所に沢山あるつすから」

ああ、後から考えたらルプスレギナが妙に親切過ぎだと疑問に思うべきでしたよね。何しろありんすちやんの事を『男胸さん』だの『残念美少女』だの『ペタン血鬼』だのと陰口叩いていたルプスレギナです。

疑う事を知らない純真無垢なありんすちやんはガラガラとサツシを開けて中に入っていきます。

「入るでありんちゆよ」

「――服を着たまま風呂に入るなどというこの痴れ者があ!!」

風呂場のゴレム達が一斉に立ち上がり、ありんすちやんを囲みます。まさに絶対絶命！

ありんすちやんはこんな事になるなら『あちやん』になつても良かったな、と今更ながら思うのでした。

046 ありんすちゃんゆうかいされる

その日のありんすちゃんはいつになく早い時間に目覚めました。こういう時ってなにか大事件が起こったりしてしまうのがお約束だったりしますが……それは一通の手紙から始まりました。

大きなあくびと伸びをしながらありんすちゃんはベッドを降ります。ふと見ると足下に一通の手紙が落ちていました。

宛名はありません。ですが、ありんすちゃんの住居ですからありんすちゃんが読んでも構わないでしょう。

早速封を切り、手紙を広げて読みました。

「——ありんすちゃんはとてもかわいいのでゆうかいしました。アウラとマールがこれからずっとありんすちゃんのめいれいをきくならありんすちゃんをかえしてあげます。ほんきです」

なんと！ ありんすちゃんが誘拐されてしまったみたいですよ！ 犯人の要求を認めなければありんすちゃんの身が危ないみたいです！

ありんすちゃんは大きく口を開けて呆然としています。あまりのショックに我を忘れてしまったみたいですね。

仕方がないですよ。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子に過ぎませんから。

誘拐事件の当事者になってしまったなんて、私でも気が動転してしまいます。

ありんすちゃんが誘拐されて、ありんすちゃんはどうするのでしょうか？

ん？ あれ？

ちよつと待って下さい。ありんすちゃんは今ここにいますが？

……誘拐されたありんすちゃんとは？

大変です！ ありんすちゃんは気がついていません。必死な形相でどこかに走っていきます。

ありんすちゃん！ ちよつと待って下さい！

※ ※ ※

ありんすちゃんは第六階層にやって来ました。どうやら誘拐犯の要求をアウラとマーレに知らせるつもりかもしれないね。

「んー？ どうしたの？ ありんすちゃんじゃん。あたしに何か用かな？」

ありんすちゃんはアウラに手紙を見せます。

「……………うわっ！ なにこれ？ ……ただのイタズラじゃない。……………あのさあ、まさかとは思うけど……………ありんすちゃんってば、もしかして本気にしているんじゃない？」

ありんすちゃんは興奮して言葉を喋る事が出来ません。激しい身振りで事の重大さをアウラに伝えます。

なんとこの事でしょう？ ありんすちゃんが一生懸命話しているのにアウラはまともに取り合ってくれません。

「……………ハイハイ。もう気が済んだかな？ あたしもヒマじゃないからね」

ありんすちゃんはほつぺたを膨らまして抗議します。ありんすちゃんが誘拐されたのはアウラのせいなんですから。

「……………だーかーらー……………ありんすちゃんはここにいるんだから問題ないってあたしは言ってるんだけど？」

アウラはジト目でありんすちゃんを見ている。

うーん……………ようやくありんすちゃんも気がついたみたいですね。

ハツとした様子で駆け出して行きます。

今頃やってきたマーレは突然部屋を飛び出してきたありんすちゃんに驚き、アウラに尋ねました。

「……………お、お姉ちゃん、ありんすちゃんどうしたの……………かな？ ……

あ、なんでもないよ」

アウラがジト目のまま振り向いたのでマーレは質問を止めるのを止めました。

※ ※ ※

ありんすちゃんはその自分の階層に走りながら、混乱した頭で一生懸命考えていました。

あの手紙を出した犯人を見つけられてありんすちゃんを誘拐させないと、ありんすちゃんは嘘つきになってしまいかもしれません。

「どうやら、ありんすちゃんはどうしたら誘拐されるか考え始めてしまったみたいです。」

「うーん……根本的に間違った方向に行ってしまったとしか思えません、どうなるのでしょうか？」

ありんすちゃんはシモベ達を集めて手紙を見せました。

「この手紙を出した犯人を見ちゆけるでありんちゆ」

ありんすちゃんを誘拐した、という内容にシモベ達はざわめきま

す。
一人のヴァンパイア・ブライドがおおずと手を上げて発言を求めました。

「あの……その手紙は昨日、ありんすちゃん様のご指示で私が書いたものかと……」

「——え？」

……そうでした。アウラとマーレを騙そうとありんすちゃんが誘拐されたという手紙を出そうとしたような記憶が少しあります。

「……ゴホン。……では、これからありんちゆちゃん、ゆうかい大作戦始めるでありんちゆよ」

ありんすちゃんは何事も無かったかのようにヴァンパイア・ブライ

ドに命じます。
「これからアウアウとマーレにありんちゆちやがゆうかいされたと知らせるでありんちゆ」

ヴァンパイア・ブライドはありんすちゃんから手紙を受け取ると第六階層へ向かいました。

ヴァンパイア・ブライドはすぐに戻って来ました。

「ありんすちゃん様！ 大変です！ アウラ様もマーレ様も笑い転げてまともに相手をして頂けませんでした」

それはそうですね。さつきありんすちやんが大騒ぎしちやっていますから。

「役にたたないでありんちゆね。もういいでありんちゆ」

ありんすちやんは恐縮しきっているヴァンパイア・ブライドを許してあげました。

……うーん……でもヴァンパイア・ブライドは何も悪くないと思いますが。

※ ※ ※

そんな事があつた翌朝、ありんすちやんはいつものように目を覚ましました。

ベッドから降りたありんすちやんは足下に一通の手紙を見つけて……またまた大騒ぎするのですでした。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちやんはまだ5歳児位の子なのですから。

※ありんすちやんが挿絵を描いてくれました

047ありんすちやんとときえたおやつ　　く犯人は
マーレく

おやおや？　ありんすちやんが空になったお皿の前で難しい顔を
して腕組みしていますね。どうやら何か事件が起きたみたいです。

ありんすちやんの後ろには扉が開けられたキャビネットがあつて、
そこには『たべるな』と書かれた貼り紙があります。

このキャビネットはありんすちやんが後で食べようと思つて、おや
つをしまつておくのに使つていたのでした。

では、おやつを食べ終えてまだ足りなくて悩んでいるのでしょうか
？

……うーん……どうやら誰かにおやつを食べられちゃつたので、あ
りんすちやんは怒つているようです。

なんと……ありんすちやんがおやつを食べられてしまったのはこ
れが初めてでは無いのですつて。

それでありんすちやんは自ら『たべるな』と書いた貼り紙を貼つた
のに、またもや食べられてしまった、という事のようにです。

一番最初はモンブランケーキでした。ありんすちやんはお風呂上
がりに食べようと思ひ、とても大きなマロングラッセが乗つかつたモ
ンブランケーキをキャビネットに入れておきました。そして三十分
後にお風呂から上がったありんすちやんがキャビネットを開けると
モンブランケーキのてっぺんのマロングラッセが無くなつていたの
でした。

ありんすちやんにとつて、モンブランケーキを食べる一番の楽しみ
である最初にマロングラッセを食べる事が出来ないなんて……イチ
ゴが乗つていないショートケーキのようなものです。

そこで、次にマカロンをキャビネットにしまう時にありんすちやん
は『たべるな』と書いた貼り紙を貼つておいたのですが……

ありんすちやんの目の前のお皿は空っぽです。よりによって犯人
はありんすちやんが書いた貼り紙を無視して全部食べちゃつたので

した。

いくら寛大なありんすちゃんだつて怒ります。犯人を見つけて懲らしめなくては気が収まらないですよ。

空っぽのお皿を前にしたありんすちゃんの頭には二人の容疑者が浮かんでいました。

「ルプーとアウアウが怪しいでありんちゆ。……どちらかが犯人でありんちゆな」

またまた名探偵ありんすちゃんの出番みたいですね。前はアイズ様の依頼で無事に三吉君を見つけたのでした。

ありんすちゃんは第一容疑者のルプスレギナを探します。ペタン血鬼航空フロド隊がありんすちゃんの指示で動きます。あつという間にルプスレギナをありんすちゃんの所まで連れてきました。

「なんか用つすか？　ありんすちゃんのおやつを食べちゃった犯人ならルプーさんじゃないつすよ？」

おや？　……聞かれもしないのに自分から容疑を言い出すなんて、怪しいですよ？　……あれ？　……ありんすちゃんはルプスレギナの言葉に納得しちゃったみたいです。ニコニコしながらノートの内容疑者リストのルプスレギナの名前に大きなバツを書いてしまいました。ありんすちゃん、大丈夫でしょうか？

うーん……どうやら犯人は残ったアウラという事になってしまったみたいです。……大丈夫かな？　ありんすちゃん。

ありんすちゃんはアウラを犯行現場に呼び出しました。何も知らないでやって来たアウラをとちめてやるつもりみたいです。

「ヤッホー。お待たせ、あたしにおやつをご馳走してくれるんだって？」

ありんすちゃんはアウラに指を突きつけて非難します。どれだけあのマカロンを食べるのを楽しみにしていたか、ありんすちゃんの渾身の一笔『たべるな』に込められた想いなどを蕩々と語ります。

「——ちよ、ちよつと待った！　あたしは知らないよ？　濡れ衣もいどこだつてば」

……うーん……どうやらアウラも犯人じゃなさそうですね。

ありんすちゃんはガツカリです。さつきまでの気合いがしぼんだ風船みたいに抜けてしまいました。

「……うーん。この『たべるな』ってさ『食べるな』って事だよね？」
アウラがありんすちゃんに尋ねます。何をわかりきった事を聞くのでしょ？

「……あのさ、ラテン語で『タベルナ』って食堂の事だったりするんだよね。もしかしたらこの貼り紙を勘違いした誰かが食べちゃったんじゃないかな？」

……ありんすちゃんはキョトンとしたまま、アウラの言葉の意味がわかりませんでした。

……アウラやマーレの創造主のぶくぶく茶釜はどうやらスペイン語やイタリ語あたりのラテン系の語学の知識があったそうです。アウラやマーレの名前にも女性名詞や男性名詞が使われていて、その為かアウラにも少しばかりの知識があるそうです。

アウラは続けます。

「どうせ貼り紙するなら『食べちゃダメ』とか『盗み食い厳禁』にした方が良いんじゃないかな？」

なるほど……ありんすちゃんは早速アウラの意見をもとに『盗み食い厳禁』の貼り紙を作る事にしました。

※ ※ ※

その夜、マーレはリング・オブ・アイNZ・ウール・ゴウンを発動させてありんすちゃんのキャビネット前にやって来ました。

なんと！ ありんすちゃんのマカロンを食べてしまった犯人はマーレだったのですね。

もしかしたらマーレは『たべるな』の貼り紙を勘違いしたのかもしれない。

マーレはありんすちゃんの新しい貼り紙に気がつきました。……
そして……

※ ※ ※

朝になってありんすちゃんはキャビネットを開けてみました。なんとという事でしょう！ またしてもありんすちゃんのおやつは無くなっていました。

残念ながら、せつかくのアウラのアドバイスもありんすちゃんの努力も報われなかったみたいですね。ありんすちゃんはガツカリしています。

……ありんすちゃんが一生懸命書いた貼り紙には『ぬすみぐいげんき』とありました。

仕方がないですよ。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

048 ありんすちゃんのおばけたいじ

ありんすちゃんが階層の見回りを終えてのんびりしていると来客がやって来ました。

ルプスレギナとシズは何やらありんすちゃんに相談事があるのだそうです。

どうやら三吉君誘拐事件やありんすちゃん誘拐事件、キャビネットのおやつ盗難事件など、数々の難事件を解決してきた名探偵ありんすちゃんの噂は戦闘メイドの間にも広まっているようですね。

「今日はありんすちゃんに頼みがあるっすよ。ありんすちゃんはオバケって大丈夫っすか？」

「……………否定。あまりにも非現実的です。……………しかしながら一般メイドの疑念を晴らす必要があります」

うーん……………ありんすちゃんは実はオバケとか幽霊とかってちよつと苦手なんですよね。夜中にトイレに行くのも一人で行けないのでヴァンパイア・ブライドに付き添って貰っていたりするのは内緒です。おかしいですよ？ だってありんすちゃんはアンデッドのヴァンパイアの真祖なんですから。

でも、仕方ないのだと思います。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なんですから。

「そんなのじえんじえん、コワくないでありんちゅ、ありん、ちゅ」
ルプスレギナは意地悪そうな笑みを浮かべながら続けます。

「いや……………なんか一般メイド達の間で噂があるらしいっすよ。第九階層の最近使っていない旧食堂に出るらしいんすよ」

ありんすちゃんは全然怖くない、という風に胸を張ります。

「……………ある晩のことっす。その日の勤めを終えたある一般メイドが一人で旧食堂の横を通りかかったらしいっす。その時に夜食用にカレーパンを五個持っていたそうなんすか……………」

ルプスレギナは言葉を切るとシズの方を見ます。なんと……………シズもカレーパンが入った袋を抱えていました。

「……………丁度、旧食堂の横に来た所で何者かの声でしたそうっす。……………」

男とも女とも判別しないかすれた声で……『オイテケアー！ ……タベモノオイテケアー！』って」

「！！」

ありんすちゃんはほんの少し怖かったので、ちよっぴりそそうしてしまいました。

「と、まあ、そんなわけっすから、行きますよ。ありんすちゃん」

ルプスレギナは明るく言うどありんすちゃんにシズが持っていたカレーパンの袋を持たせます。そしてそのまま第九階層に連れて行かれてしまいました。

第九階層では一般メイドが何人も待ち受けていました。みんなありんすちゃんを応援しています。

「じゃ、ありんすちゃん、後はよろしくっす」

「……………健闘を祈る」

ルプスレギナもシズも当たり前のようにありんすちゃんを見送ります。どうやらオバケ退治はありんすちゃん一人で行くみたいですね。

「……………うん……………こわくないでありんちゅ。ありん、ちゅ」

ありんすちゃんは本当は行きたくありませんでしたが、成り行きで嫌だと言えませんでした。

ありんすちゃん頑張つて。

※ ※ ※

ありんすちゃんは旧食堂にやって来ました。胸がドキドキします。とはいえ実際には心臓は動いていませんが。

『……………オイテケアー……………タベモノオイテケアー……………オネガイ』

怪しい声が聞こえてきました。ありんすちゃんはしつかりとカレーパンの袋を抱き締めます。

そして、恐る恐る声の方を見ると……………椅子の陰に隠れた人影がありました。

「！！！！」

ありんすちゃんは無言で悲鳴を上げ――

※ ※ ※

――ませんでした。

「なんだ、ナーベでありんちたか」

椅子の後ろには随分やつれたナーベラルがいました。ありんすちゃんはすっかり忘れてしまっていましたがおそらくあのかくれんぼからずつと隠れていたのです。

「……シャルティア様あ……お願いです。……私を見つけて下さい……」

なるほど。鬼だったありんすちゃんがみつければナーベラルのかくれんぼが終わる訳ですね。さあ、ありんすちゃん。「ナーベラル見つけ」って言ってあげましょう。

……おや？ ありんすちゃん、どうかしました？

ありんすちゃんは黙っています。どうしたのでしょうか？

「……出来ないでありんちゅ」

ナーベラルはありんすちゃんの言葉が信じらんない、という顔をしています。

「……もうチャルチエアじゃないから駄目なんでちゅ。今はありんちゅちゃんだから鬼じゃないでありんちゅ」

ありんすちゃんとナーベラルに空白の時間がしばし流れました。

しばらくして、ナーベラルが重い口を開きました。

「……あの……せめて……カレーパンを頂いても？」

049 ありんすちゃんメイドみならいになる

おや？ 今日のありんすちゃんは何だか上機嫌みたいですよ。え？ なになに？ どこか違わないか、ですって？

うーん……背が伸びたようにも見えないですし、どこが違うのでしょうか？ わかりません。

ウソウソ。冗談です。ありんすちゃんは今日、メイドさんの格好をしているんですよ。とてもお似合いですよ。可愛い、可愛い。ありんすちゃん最高です。……っておだてればすぐに機嫌が直つてしまうのは、やはり5歳児位の女の子なので仕方ないですね。

ありんすちゃんは今日からメイド見習いとしてプレアデスの仲間入りするそうです。それでメイド服にホワイトブルームを付けているのですね。

まずはエントマが先生です。ありんすちゃんは礼儀正しくお辞儀をします。

「お願いしますでありんちゅ」

「ありんすちゃんかあ。じゃあねーよろしくう」

エントマはありんすちゃんを連れて第二階層にやって来ました。

「ここはあ、私のおやつ部屋あ」

自分の階層ですからすぐにそこにはおやつがない事をありんすちゃんは知っています。きっとエントマはありんすちゃんを試しているのでしょう。

「そこはあ、おやつないでありんちゅう」

ありんすちゃんは飲み込みが早いですね。すぐにエントマの口調をマネしています。

エントマはありんすちゃんの意見を無視して『おやつ部屋』から黒いモノをつまみ上げてポリポリ食べ始めました。

「貴方も食べるう？ 美味しいからあ」

ありんすちゃんの目の前に『おやつ』を突き出します。エントマはワサワサ動いている『おやつ』をありんすちゃんの口に入れようとしてきます。

ありんすちゃんは逃げ出しました。

※ ※ ※

次の先生はシズです。ありんすちゃんはお辞儀をしました。

「ありんちゅちや、でありんちゅう」

うーん……エントマの口調が少し移ってしまったかもしれませんね。

「……………妹の物言いみたいだけど許す。かわいいから」

シズはどことなく落ち着きが無いように見えました。

ありんすちゃんは目をキラキラさせてシズをじっと見つめます。一体シズは何を教えてくれるのだろうか？ という期待に満ちているのですね。

「……………これから第六階層に行く。魔獣のお世話」

シズはありんすちゃんを連れて第六階層に向かいました。

第六階層に着くと、シズはポケットからシールを取り出してありんすちゃんに渡しました。丸いシールには一円と書かれてあり、とても可愛らしいもので、ありんすちゃんは自分のエプロンに貼ってみました。

「……………これから魔獣のお世話。可愛らしい魔獣にお気に入りシールを貼る」

これならありんすちゃんにも出来そうです。沢山シールを貼って、早く一人前のメイドになりましょう。

一時間もすると第六階層はシールを貼られた魔獣だらけになりました。ありんすちゃんもシズも大満足です。

シズはモコモコした魔獣に抱きついてその感触を楽しんでいます。ありんすちゃんも真似して抱きつこうとした瞬間――

「あー！ またシールだらけにして！ ……剥がすの大変なんだからね？ ……あれ？ ありんすちゃんも一緒なんだ」

ありんすちゃんが起き上がると困った表情をしたアウラが腕組みして立っていました。

「アウアウ、魔獣のお世話でありんちゅよ」

「うーん……魔獣達は嫌だつてさ。まあ、あたしに言わせると余計なお世話なんだけどね」

シズは相変わらず魔獣に抱きついていきます。

しばらくするとユリがやって来て、アウラに謝りながらありんすちゅんとシズを連れだしました。

※ ※ ※

「今度はユリが先生でんちゅね。お願いしまちゅ」

ありんすちゅんは礼儀正しくお辞儀をします。

「それではボク……ゴホン」

「ぼく？ でありんちゅか？」

「……ゴホン。えー、それではメイド見習いのありんすちゅんには歩き方の練習をしてもらいます」

ありんすちゅんは頬を膨らまして抗議します。歩く練習なんて、ありんすちゅんをバカにしていますよね？

やれやれ、といった風でユリは手を振ります。

「……わかりました。それ程言うならありんすちゅん、歩いてみて下さい」

ありんすちゅんは口を真一文字にして、歩き出しました。緊張して何だかロボットみたいにぎこちなく、その上右手と右足、左手と左足を同時に振ってしまいました。

「……これでは立派なメイドにはなれません。まずは真っ直ぐ歩く練習から始めなくては」

ありんすちゅんの練習はその後三時間に及びました。

さすがにそれだけ練習すればありんすちゅんの歩き方だつて随分洗練されたものになった事でしょう。

さあ、ありんすちゅん。練習の成果を披露しましょう。

……あれ？ ……ありんすちゅん……三時間前と全く変わり

ません。相変わらずロボットみたいにギクシヤクで、やはり手足が同時に動いちやっています。

さすがにユリもありんすちゃんに教えるのを諦めてしまったみたいですよ。

一人落ち込んだユリを後にありんすちゃんは部屋を出ます。

さあ、次は誰が先生でしょう？　ありんすちゃん、頑張つて。

※ ※ ※

ソリュシヤンがありんすちゃんの元を訪ねてみると、ありんすちゃんのメイド服が脱ぎ捨てられており、ホワイトブルームも床に落ちていました。ありんすちゃんの姿は何処にもありません。

「……いない？　……ありんすちゃん様？」

ありんすちゃんはメイド服を脱ぎ捨てた後、お風呂に入ってからベッドで眠っていました。どうやらメイド見習いにもう飽きてしまったみたいですね。

やれやれ。仕方ないですよ。ありんすちゃんはなんととってもまだ5歳児位の女の子なのですから。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

050ありんすちゃんまたもやメイドみならいになる

さて、今日のありんすちゃんは何をしているのか、覗いてみましょう。

おや？ ありんすちゃんは着替え中ですね。どういう気まぐれか、またしてもメイド服を着ようとしています。

あらあら。先にホワイトブリムを付けた頭で着ようとしたので、頭が引つかかって出て来ないですよ。ありんすちゃん、落ち着いて。一旦頭を戻してホワイトブリムを外した方が……ああ……そんなにも暴れても無理ですって。

激しい物音でようやくヴァンパイア・ブライドが駆けつけて来ました。ヴァンパイア・ブライド三人が寄ってたかってありんすちゃんにメイド服を着せようと悪戦苦闘しています。

ようやくメイド見習いのありんすちゃんに変身ですね。

「……ようやく支度出来ましたね。……わん」

顔の真ん中に継ぎ目がある犬の頭をしたメイド、ペストーニャ・S・ワンコが顔を覗かせました。

ありんすちゃんはスカートを摘まんで優雅にお辞儀をします。

「今日はお願ひするでありんちゅ。ワン」

ペストーニャもお辞儀で返します。

「よくお似合いですよ……わん」

この前より何だかありんすちゃんのやる気が感じられますね。まあ、前回はユリ以外、あまり良い手本ではなかったみたいですが。

とりあえず今回、どういう気まぐれかまたまたメイド見習いを体験するみたいですね。

「それでは、まずは姿勢と歩き方の練習をしてみましよう。……わん」
うーん……前回ユリが匙を投げてしまいましたから、ちよつと心配ですよ。大丈夫でしょうか？

なんと！ 意外にもありんすちゃんはちゃんと歩いています。姿

勢良く、上品でなんとなく気品すら感じられます。

ありんすちゃんはやれば出来る子なんですよね。まあ、普段は全くやる気がないみたいではありますが……

「良く出来ました。……わん。……一旦、お茶にしましょうか」

「……わん」

あきらかに語尾を忘れたペストーニヤにありんすちゃんは気がつかないみたいですね。それともワザと気づかない振りをしているのでしょうか？

ありんすちゃんはペストーニヤからメイド長の仕事についての色々な話を聞きました。一般メイドの間の噂話には都市伝説まがいの話もあつてついつい時間を費やしてしまいました。

「おや、ペストーニヤはここにいましたか。……そろそろ仕事に戻るべきですね」

ありんすちゃんとペストーニヤが声の方を向くと、そこにはセバスがいきました。よく見るとツアレも一緒にいます。

ありんすちゃんはちょうどセバスの噂話を聞いた後なのでびつくりしました。

「セバチュ、チュアレと出来てるんでちゅよね？ ……アチチチなんでありんちゅ」

慌ててペストーニヤがありんすちゃんの口を塞ぎます。しかし、セバスはすべて聞いてしまいました。

セバスは少し顔を赤らめながらも、何事もなかったかのように悠然と背を向けました。

「……ゴホン。お茶が済みましたら仕事に戻りなさい。……その、ありんすちゃんもです」

「……出来てるのは赤ちゃんでありんちゅか？」

ありんすちゃんは思わずセバスに疑問を尋ねてしまいました。セバスの背中が凍りついたように見えました……仕方ないですよ。ね。ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なので、そんな気遣いなんて出来るわけではないのですから。

翌日、セバスからありんすちゃんのメイド見習いは中止になったと

の報告がありました。

せっかくやる気になっていたありんすちゃんはがっかりです。まあ、どうせすぐに立ち直ってしまうでしょうが。

051 ありんすちゃんりゅうおうごくにいく

ありんすちゃんは朝から物思いに耽っているみたいです。やたらとため息をついたり、ぼんやり考え事をしていきます。

もしかしたら恋の病とか？ まさかね……

ありんすちゃんの周囲だと少年なのはマーレだけですが……もしかして？ ……そうなるもありんすちゃんとアウラは姉妹になりますね。

おっと……どうやらありんすちゃんとアウラの両名から抗議が来たようなので、違うみたいです。

ありんすちゃんは窓から顔を出して外を眺めながら、何処かに消えてしまったレースの飾りのお気に入りの真っ白なパンツの事を思い出していたのでした。

すると、風に乗った小さな葉っぱがありんすちゃんの顔に止まり、ありんすちゃんの鼻をくすぐります。

「くちゅん！」

ありんすちゃんは何処かにテレポートしちゃいました。

※ ※ ※

ありんすちゃんが飛ばされてきたのは何処かの王宮の中でした。ありんすちゃんはすっかり忘れてしまっていますが、以前、ニグレドに見せてもらった白いパンツの在処——竜王国の女王、ドラウディロンの寝室——に転移していたのでした。

ありんすちゃんが起き上がると、高級そうなネグリジエを着た少女がありんすちゃんの下で気絶していました。どうやらこの少女の上に転移してしまつたみたいです。

お気に入りのパンツの事を考えていたありんすちゃんは、もしやと思いい女の子のネグリジエを捲り上げてみましたが、彼女の下着は残念ながらありんすちゃんではなく赤い下着でした。

ありんすちゃんはがっかりしました。ふと、ベッドの脇を見ると女

の子の服が綺麗に畳んで置いてあります。ありんすちゃんはニコニコしながらその服——女王ドラウディロンの服——に着替えました。部屋の片隅のクローゼットに気絶したままの女の子を押し込むと、なに食わない顔をしてベッドに潜り込みます。

「——陛下！　いかがなされましたか？　……何やら大きな音がしましたが……」

扉を開けて竜王国宰相が駆け込んできました。ありんすちゃんを見ても、入れ替わった事に気がつかないみたいです。

「おはようでありんちゅ。食事にするでありんちゅね」

「は、はい……陛下……ですが、その前に」

宰相はありんすちゃんの顔に自分の顔をグツと近づけて言葉を続けました。

「『閃烈』のセレブレイト殿の謹慎をそろそろ解いて頂けないでしょうか？　かの者なしでビーストマンの進攻は抑えられません。……法国から援軍を送るとの言質を得てはおりますが、このままでは援軍到着の前に滅亡してしまいます」

ありんすちゃんは何だか厄介な時に入れ替わってしまったみたいですね。これはこっそり帰った方が良さそうですよ？

「……びーすとまんでありんちゅか？　面白ちようでありんちゅね」

ありんすちゃんの瞳が好奇心でキラキラしています。そういえばありんすちゃん、こういう厄介事が大好きなんでしたね。

「良いでありんちゅ。食事したらびーすとまんやちゅけてくるでありんちゅ」

宰相は目を剥きました。彼はあくまでもありんすちゃんをドラウディロンだと思っていますから、いよいよ黒鱗の竜王の始原の魔法が使われると考えたのでしよう。

「……陛下……それでは……よろしいので……」

ありんすちゃんには宰相の考えなどわかるはずもないのですが、面倒くさくなってきたので適当に相槌をうちました。

さて、竜王国内では上から下への大騒ぎです。とうとう竜王国女王、黒鱗の竜王ドラウディロン女王が始原の魔法を用いてビーストマ

ンに鉄槌を下す、というニュースは瞬く間に広がっていきました。

「では……生け贄の住人はいかほど必要でしょうか？」

食事をしているありんすちゃんに宰相が尋ねました。ありんすちゃんは面倒くさいので両手を広げてみせました。

「じゅ……十万ですと……いや、かくなる上は仕方ないでしょう。わかりました。手配いたします。これも国の存亡の為、致し方ない事でしょう」

ありんすちゃんは食事を終えたとお風呂に入りました。宰相は始原の魔法を使う為のお清めの儀式だと思ったみたいでしたが。

「陛下。『閃烈』セレブレイト殿が謁見を申し出ております。お会い頂くのが宜しいかと……」

ありんすちゃんは鷹揚に頷くと、玉座の前に一人の騎士が進みでて来ました。

「陛下。ご尊顔は拝し誠に幸せに存じ上げます。此度は陛下直々の親征との由、お許し賜れるならばこの身をお側に……」

セレブレイトが額を打ちつけると、懐から一枚の布切れが落ちました。なんと！ありんすちゃんのお気に入りのお気入りのパンツではありませんか！

ありんすちゃんはパンツを拾い上げるとセレブレイトを下がらせます。ようやくパンツを取り戻したありんすちゃんは踊るような足取りで玉座に座り直します。

「びーすとまんやつちゆけてやるでありんちゆ」

※ ※ ※

戦場に着くとありんすちゃんは真紅のフルプレートに身を固めました。手にはスポイトランスを持っています。

遠くからみるとスポイトランスが大き過ぎて、スポイトランスがありんすちゃんを持っていてるように見えますが……おそらくフルプレート同様に今のありんすちゃんのサイズに合わせる事が出来る筈

だと思いますが……まあ、なんだかんだでありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子に過ぎないので仕方ないですよね。

ありんすちゃん一人に対してビーストマン軍はその数三万。ライオンやヒョウなどの頭を持つ彼らは小さなありんすちゃんを見て笑いました。

ありんすちゃんはお構いなしに駆けていきます。スポイトランスを振るうとたちまち百人ものビーストマンが飛ばされました。まるで落ち葉を竹ぼうきで掃くように、ありんすちゃんは次々にビーストマンをスポイトランスで掃除していきます。

ほんの三十分足らずで三万ものビーストマンは綺麗に掃除されてしまいました。子供になったとはいえ、かつての階層守護者最強のありんすちゃん、流石ですね。それともビーストマンが弱すぎたのか……

一斉に勝どきが響く中、舞い上がっていたビーストマンの抜け毛がありんすちゃんの顔に留まりました。

「くちゅんー」

ありんすちゃんの姿は消えてしまいました。

※ ※ ※

その後——寝室のクローゼットからドラウディロンが見つかりましたが、彼女は気絶したままで何も覚えていませんでした。人々はきつと始原の魔法を使った後遺症だと噂するのです。

尚、生け贄として選ばれた人々は何事もなく帰る事が出来たそうです。

052ありんすちやんとハロウイン

バハルス帝国皇帝、ジルクニフ・ルーン・ファーロード・エルニクスは苦々しい思いで城下を見下ろしました。帝国では折からハロウインの飾り付けが溢れていて、あたかも異界の国であるかのようでした。

「陛下、ハロウインは嫌いでしたっけ？」

帝国四騎士の一人、*雷光*、バジウツド・ペシユメルがおどけるように声をかけました。ジルクニフはそんなバジウツドに気がつかないかのよう城下を見下ろし続けています。街中にはカボチャやガイコツの飾りが溢れ、それらをじっと見つめ続けながらボソツとジルクニフは呟きました。

「……ハロウインなんてクソ食らえ、だ。なんであんな奴らを崇めるようなイベントなど……」

「……魔導国、ですか？ ……気持ちはわかりますが、あんなバケモノ相手にしちや命がいくつあってもどうしようもないですよ」

「……わかってる」

アインズ・ウール・ゴウン魔導国——属国化を決めたもののアンデッドは生者に対して憎しみを抱くものだという。いつ、その歯牙が帝国に向かうかわからない……ジルクニフは頭をかきむしりながら苦悩するのです。

——いま美しい。なにがハロウインだ——意味がない事はわかってるものものジルクニフにとってはアンデッドの祭りのようなハロウインが恨めしく思えるのです。

気分転換に視点を空に向けたジルクニフは、雲の彼方に小さななにかを見つけました。

「まさか……な……」

ジルクニフはついドラゴンの姿を思い浮かべてしまうのです。——厳密には、ドラゴンの背中に乗った魔導国の三人の子供達の事を苦々しく思い出していました。

「へ、陛下！ ……ありや……まずいですぞ？」

バジウツドの言葉より先にジルクニフはその小さな姿がドラゴンであると確信していました。

※ ※ ※

ありんすちゃんはアウラの声で目覚めました。

「おはよーありんすちゃん。今日はハロウィンだよー」

アウラは絵本に出てくる魔女の格好をしていました。その後ろのマールはフランケンシュタインの怪物でしようか？

「はろいん、でありんちゆか？ 何でありんちゆか？」

アウラは腕を組んで答えました。

「うーん……なんか、トリックオアトリートって言ってお菓子を貰うイベントらしいよ？ ……あたしもよくわからないんだけど、仮装してイタズラしまくるお祭りなんだってさ。それって面白そうじゃん」

ありんすちゃんは飛び起きました。瞳をキラキラさせています。ありんすちゃんはお菓子もイタズラも大好きですから。

ありんすちゃんはアウラが用意してきたカボチャのお化けの衣装に着替えます。マールは何故かずっと後ろを向いていました。

「で、どこに行くの？」

アウラはありんすちゃんに尋ねました。ありんすちゃんに思い浮かべられるのはそんなに多くはありません。

「帝国がよいでありんちゆね」

「う、うん。それならば、僕のドラゴンで……」

「決まった！ 早速出発しよう」

かくして急遽、アウラ、マール、ありんすちゃんの三人はバハルス帝国に出かけるのでした。

※ ※ ※

帝国へはもう何回も来ているので慣れたものです。行き慣れたルートを通り、あっという間に帝国の上空にきました。街並みはすっ

かりハロウイン一色で飾られており、三人の子供達を喜ばせました。手慣れた様子でマーレは帝国の王城のそばの広場にドラゴンを降ろします。以前に地震を起こさせた事を警戒してか兵士達は遠巻きにしています。

「トリックオアトリート！ お菓子くれないとイタズラしちゃうよ！」

アウラがマイクで叫びました。慌てたのは皇帝ジルクニフです。あの子供達のイタズラでまたしても多くの兵士を失うだろう事は明白です。なんとしても防がなくてはなりません。

「お菓子だ！ 王宮のあらゆるお菓子をありつたけかき集めて運び出せ！」

兵士達もまだ先日の惨劇を忘れていませんから必死になって働き、広場にあつという間にお菓子の山が出来ました。

「アインズ・ウール・ゴウン魔導国の方々！ どうぞお召し上がり下さい！」

ジルクニフは皇帝の威厳すらかなぐり捨ててドラゴンに向かい平伏しました。バジウツドラ配下もならいます。

「わかった！ それじゃあ——」

ニコニコした三人の子供達が拍手をします。それを見て安堵したジルクニフの笑顔が次の瞬間に凍りつきました。

「じゃあ、お礼に——マーレ！」

フランケンシュタインの怪物の仮装をしたダークエルフが黒い杖を振り上げました。

「な、なんでー!?!」

折から起こる凄まじい地響きにジルクニフの絶叫はまたしてもかき消されてしまうのでした。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

053 番外編 ジルクニフのクリスマス

バハルス帝国皇帝、ジルクニフ・ルーン・ファーロード・エルニクスは苦々しい思いで城下を見下ろしました。帝国では折から街中にクリスマスソングが流れていて、まさにクリスマス一色でした。「陛下、クリスマスは嫌いでしたっけ？」

帝国四騎士の一人、《雷光》バジウツド・ペシユメルがおどけるように声をかけました。ジルクニフはそんなバジウツドに気がつかないかのように城下を見下ろし続けています。街中にはクリスマスのイルミネーションが溢れ、それらをじつと見つめ続けながらボソツとジルクニフは呟くのでした。

「……クリスマスなんてクソ食らえ、だ。なにがサンタクロースだ。なにがクリスマスプレゼントだ……」

「……お悩みは魔導国、ですか？ ……気持ちはわかりますが、あんなバケモノ相手にしちや命がいくつあってもどうしようもないですよ」「……わかつている」

アインズ・ウール・ゴウン魔導国——属国化を決めたもののアンデッドは生者に対して憎しみを抱くものだという。いつ、その歯牙が帝国に向かうかわからない……ジルクニフは頭をかきむしりながら苦悩するのです。

——いまましい。なにがクリスマスだ——ジルクニフはついこの間のハロウインに起きた惨劇を忌々しく思い出していました。

(来る。……きつと奴らはやって来る)

ジルクニフには確信がありました。こういう一般的には幸福の象徴ともいえるイベントを悲惨なものに変えてしまう悪魔のような子供達——双子のダークエルフと舌足らずな女の子——が乗ったドラゴンが今にも現れてくる気がするのです。

(……既に四回だ……二度ある事は三度あるとはいいが、もう四回だ……)

頭をかきむしりながらジルクニフは苦悩します。そしてこの苦悩から解放される事は恐らくないだろう、と確信するのです。

「どうだ？ ドラゴンはまだ見えないか？」

ジルクニフのせつかちな叫びに物見の兵士は大きくかぶりを振ります。いち早く彼らの訪問を見つけた所で打つ手はありません。だが、このまま何もせずに手を拱いて蹂躪を待つのは癪だったのです。

（今日はクリスマス・イヴ。彼らはきつとやって来る。ニコニコと満面の笑みを浮かべながら……これも全てあの忌々しい魔導王の差金だろう）

夕方になってもドラゴンはやって来ませんでした。しかしながらジルクニフの心は穏やかではありません。いつ来るともわからない恐怖に心はすっかり憔悴していくのでした。

イライラする気持ちをメイド達にぶつけて自己嫌悪に陥ったり、沈みゆく夕日を眺めながら訳わからず涙ぐんだり、それでもドラゴンはやって来ませんでした。こんなに苦しい思いをするならばいつそのことドラゴンに現れて欲しいとすら思ってしまう程、ジルクニフは追い詰められていくのでした。

「……来ませんか？ ……ドラゴン」

バジウツドが気の抜けた声を出しました。ジルクニフはそんなバジウツドを忌々しく思いながら吐き捨てるように「わかっておる」と答えます。

どうやら今日災難が訪れる事は無いかもしれない。だが——ジルクニフはまざまざとアインズ・ウール・ゴウン魔導王が嘲笑う様を幻視するのでした。

（まだ、安心は、出来ない……今日はあくまでもクリスマスイブ。本番はクリスマス朝の明日かもしれないな）

夜になりました。

「陛下。及ばずながら警護しますから、そろそろお休み下さい」

バジウツドの進言を聞き入れてベッドに横たわってみたものの、ジルクニフの五感は敏感に研ぎ澄まされたままでした。

イライラしながら部屋を歩き回ってみても当然不安は収まる筈はなく、扉の向こうから漏れ聞こえてくる脳天気ないびきを聞くにつけ

てジルクニフの感情はもはや爆発しそうでした。

と、不意に甘い香りがしたと思った瞬間、ジルクニフは気が遠くになりました。

※ ※ ※

翌日の昼過ぎにようやくジルクニフは目を覚ましました。枕元に大きな靴下が飾ってあり、中になにか入っています。

そつと覗き込むと靴下の中にカツラと頭皮を叩くマツサージブラシとクリスマスカード——メリークリスマスマス〜アインズ・ウール・ゴウン魔導国〜と書かれていた——が入っていました。

サンタクロース？ いや……間違いない。あの魔導国の子供達の仕業に間違いありません。ジルクニフは思いました。

——これはアインズからのメッセージなのだ——

かつてジルクニフはイジャニーヤによる魔導王暗殺の可能性を臣下に聞いてみた事がありました。それをアインズは知っていたのでしよう。

きっと、アインズはバハルス帝国皇帝たるジルクニフの生命を奪う事は簡単に来るのだぞ？ という無言のメッセージを靴下に託したのだ、と……ジルクニフは心の底から戦慄するのです。

054 ありんすちゃんサンタクロースになる

ありんすちゃんが昼寝をしているとアウラとマーレがやって来ました。

「やほー。ありんすちゃん、クリスマスって知ってる?」

「くるします?。でありんちゆか?」

ありんすちゃんは誰かの首を絞めるのかな? と首を傾げます。

「ち、ちがうよ……クリ、クリスマスだよ」

マーレが持っていた絵本——クリスマスのまえのよる——を広げて綺麗な挿絵をありんすちゃんに見せました。

赤い服のふとちよなお爺さんがトナカイのそりに乗ってプレゼントを配っています。雪が降っている街中は綺麗に飾り付けられています。

「綺麗……」

ありんすちゃんは飾り付けられたモミの木の挿絵に見とれます。この絵本を眺めているとなんだかワクワクしてくるのです。

エヘン、と咳払いをしてアウラが口を開きます。

「この太った老人はサンタクロースっていつてクリスマスイブの夜に子供達にプレゼントを配るんだってさ」

ありんすちゃんは瞳をキラキラさせました。

「じゃあ、サンチャクロスをやっつけてプレゼント奪うんでありんちゆね?」

ありんすちゃんは手をグルグル回してやる気満々です。

「ち、ちがうよ……ありんすちゃん」

マーレが慌ててありんすちゃんを止めます。不思議そうなありんすちゃんにアウラが言葉を続けました。

「うーん……それも面白そうだけど、今回はあたし達がサンタクロースになるうかってね」

アウラはそう言うのと赤いサンタクロースの衣装を取り出しました。ありんすちゃんは大喜びです。

ありんすちゃんとマーレは可愛らしいミニスカサンタさん、アウラ

はトナカイです。みんなとても似合っていますよ。

アウラは既にプレゼントも用意していました。アインズ様に相談したら大喜びでいろいろ用意してくれたそうです。

絵本ではトナカイのそりに乗って煙突から家の中に入るみたいでしたが、ありんすちゃんたちはゲートの魔法で室内に入って、アウラのスキルで眠らせてしまいますから完璧です。みんなきつと、朝に覚めてプレゼントを見つけて大喜びする事でしょう。

小さなサンタクロース達は始めにカルネ村に行きました。ゲートでカルネ村に姿を現したありんすちゃん達は、気配を消したアウラのスキルによって村人達をすべて眠らせてしまいます。

それから担いできた袋からプレゼントを取り出しました。エンリには安産のお守り——中には二十丸に線が書かれた紙が入っていただけでした——、ンファイにはウンケルという名前のポーシヨン、ネムには木彫りの熊さんです。

「……あれ？ ハダカだねー」

「……は、裸で、な、何をしているのかな？ ……ぼ、僕わからな……」
「子供を作ってるんでありんちゅね」

エヘン、とありんすちゃんは胸を張ります。

「ありやー……このゴ布林達は覗き見しているみたいだねー」
「ピーぴんでありんちゅよ」

エンリ、ンファイ、そして別の家で寝ていたネムにプレゼントを配り終わると他の村人とゴ布林の為に大きな七面鳥とケーキを集会場に置いていきました。

これでカルネ村での任務は完了です。

次は帝国の皇帝です。ありんすちゃんはあらかじめ第五階層の氷づけの死体の中から見つけてきたカツラと、アインズ様から渡された頭皮マツサージブラシを持って行きます。小さなサンタクロース達はゲートで直接帝国の王城内に転移していきました。

ここでもアウラがスキルを使ってみんなを眠らせます。

「皇帝だねー」

「落書きしたいでありんちゅね」

「だ、ダメだよ……ぼ、僕はやめた方が……」

「——眼がみつちゆになったでありんちゆね」

目が覚めたらジルクニフ皇帝は大喜びする事でしょう。ありんすちゃん、良い事をしましたね。

メリークリスマス！

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

0555ありんすちゃんいなくなる

さてさて、今日のありんすちゃんの様子を見てみましょう。この時間だといつものように第一階層から第三階層の見回りをしている事でしょう。

おや？　ありんすちゃんが飛び出していきます。大声でワンワン泣きながら外に行ってしまった。いったい何があったのでしょうか？

第一階層には取り残されたシモベ達が呆然としています。もしかしたらプレイアデスの誰かに意地悪でもされたのでしょうか？

そういえば原作でシャルティアはルプスレギナから『残念美少女の男胸さん』だの『ペタン血鬼』だのと陰口を言われていましたが……『プレイアデスな日』ではユリとシズが通りすがりに『階層守護者のボディに一発きつい物をお見舞い』していたりとシャルティアの扱いが可哀相なんですよね……

……なにがあつたのかわかりませんが、ありんすちゃんはいなくなっていました。

ありんすちゃんがいなくなってしまうので『ふしぎのくにのありんすちゃん』はどうやらこれでお終いになりそうです。今までご愛顧下さいますありがとうございます。ありんすちゃんに代わってお礼申し上げます。

いざ終わるとなるといろいろと心残りが出てくるもので、もつとありんすちゃんを活躍する話を書けば良かったとか、ありんすちゃんの魅力をもっと出せたら良かったと等の反省が出てくるものですね。

「あれ？　ありんすちゃん、いないねー？」

どうやらアウラがありんすちゃんの姿が無い事に気がついたみたいです。

「まあ、夕方になったら戻ってくるかなー、たぶん」

「……も、戻ってこなかったらどうしよう？」

平然とした様子のアウラに対してマーレは不安なようです。

「——おやおや？　ありんすちゃん家出っすか？　しょうがないおチ

「びさんっすね」

「ほっとけばあ？」

今度はルプスレギナとエントマもやって来ました。なんだか段々大事になってきてしまいましたね。これではアインズ様の耳に入るのも時間の問題ですね。

※ ※ ※

「——なんだって!」

執務室でありんすちゃん失踪の話を聞いたアインズは思わず叫びました。瞬間的にかつてシャルティアが洗脳された一件が思いおこされましたが、直ぐに思い直すのでした。

(……まあ、ナザリック内で洗脳されるなど起こり得ないだろう。元はシャルティアとはいえありんすちゃんは所詮、幼児に過ぎないから何か気に食わない事があったのかもしれない。……こんな事ならば普段からもう少し気を配っておけば良かったかな……)

「アインズ様、すでに姉のニグレドに行方を探させておきました」

「……うむ」

ニグレドの魔法を使えばありんすちゃんの居場所はすぐに判明する事でしょう。

「ありんすちゃんは現在トブの大森林を移動中で、監視の為にシモベを何体かつけております。……いかがなさいますか？」

(このまますぐに連れ戻すのは容易いだろう。しかし少しそつとしてあげた方が良くもしいれないな)

「わかった。しばらくそつと見守っておくように。……連れ戻す時は私自ら行くでしょう」

アルベドは了解すると執務室を出ていきました。

※ ※ ※

「絶対に許さないでありんちゅ」

ありんすちゃんはプンスカしながら走っていました。絶対に帰るもなか、謝られても許さない、固く結んだ口元にありんすちゃんの強い意志が現れています。

この様子だと当面ありんすちゃんは戻ってきそうにありませんね。

ところで……ありんすちゃんが戻らないので『ふしぎのくにのありんすちゃん』はこれで本当にお終いかもしれません。もしくはアインズが主役で『ふしぎのくにのアインズ』が始まるかもしれません。

ありんすちゃんが無事にナザリックに戻ってきてくれる事を願うとしましょう。

たくさん泣いて、スッキリしたら何食わない顔できっと戻ってくるでしょう。何といてもありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子に過ぎないのですから。

056番外編 ふしぎのくにのアインズちゃん

唐突ではありますが、ある朝アインズが目覚めると5歳児位の女の子になっていました。

そもそもアインズはアンデッドであり、睡眠を必要としません。ですからいつものようにアインズ番のメイドに注視されながら、ベッドに横たわり『部下に信頼される上司とは』等のタイトルのハウツー本を読みふけていた筈なのですが……どうやらいつの間にか眠ってしまい、目覚めたらそうなっていたのでした。

「おはようございます。アインズ様」

アインズ番の一般メイドのインクリメントが声をかけてきました。

「……うむ」

アインズはそつと枕元に手を入れてみました。大丈夫、『部下に信頼される上司とは』はまさしくそこにありました。どうやら眠りかけた時にとっさにしまったようでした。

アインズはさり気なくボックスにハウツー本をしまい、小難しい本『古代ヨーロッパにおける地政学的分析と検証』を枕元にしまいました。次にベッドから降りようとしたのですが、背がかなり小さくなっていて足が届きません。インクリメントは慣れた様子でアインズの足元に踏み台を置きます。

「……コホン……うむ、ご苦労」

アインズはチラチラとメイドの表情を伺いましたが、特に変化は見られませんでした。どうやらアインズが小さくなっている事を変だとは思っていないようでした。

「……衣装は任せる」

途端にインクリメントの瞳が妖しく光り始めます。アインズは心の中で（ああ、お前もか）と小さな溜め息をつきました。

「アインズ様。本日は紫をテーマにしてみても如何でしょうか？」

……何でも昔から高貴な色とされてきているそうでした。アインズ様の御身を飾るのに相応しいかと……」

鏡を見たアインズは深く溜め息をついたのでした。アインズの衣装

はいわゆるゴシッククロリータでまとめられていて、まるでビスクリのようでした。それでいて顔はガイコツなのですから違和感があり過ぎました。

(……似合うのか？　これ)

アインズの心の声とは裏腹に居並ぶ一般メイド達からは賞賛の声ばかりが聞こえてきました。

やれ「実にお美しい……白玉の肌に紫の映える事」「まさに王者としての威厳そのもの」お尻がむずかゆくなる思いをしながらアインズは「うむ……ご苦労」とねぎらう事で精一杯でした。

少しづつ落ち着いてきたアインズはふと不思議な感覚があるのに気がつきました。それは自分自身が『女の子』になってしまったという感覚があつて、少女趣味な服装をする事に抵抗感が全くないことでした。

もともとガイコツである自身の身体には性別を示す性器などないので性別の違いなど大してなさそうなのですが明らかに『女の子』であると感じるのです。法医学的に見れば骨盤の形状から男女の区別がつくのでしょうか……アインズはふと5歳児位の女の子になったシャルティアの事を思い出すのでした。

アインズの記憶ではたしかシャルティア——ありんすちゃん——がナザリックを飛び出した後から記憶がありません。そしていきなりアインズは女の子として目覚めたのでした。

「……うむむ……これはいったい？」

アインズは控えている一般メイドに尋ねました。

「……インクリメントよ。私はいつからこの身体なのか？」

インクリメントは最初のうちは意味がわからないという顔をしていましたが、ようやくアインズの意図を理解すると答えました。

今ひとつ要領を得ないインクリメントの話をもとめると、どうやら『この世界』のアインズはシャルティアの洗脳を解く為に『星に願いを』を発動させるが失敗してしまい、あるうことか少女化してしまつたらしいのでした。

「……なん……だ……と……それではシャルティアは？　……シャル

ティアの洗脳はどうなった？」

「おそれながら……シャルティア様はまだまだあのまま……」

※ ※ ※

「……なんだこれは？ ……なんなんだ？」

表情はわからないがアインズ様はかなりお怒りのようでした。私は心底震えました。

「……つまり、ありんすちゃんのかわりに私が少女になる、と？ ……くだらん！ だからお前はいつまでたっても評価が黄色止まりなのだ」

「も、申し訳ありません」

私はアインズ様の足元に土下座しました。いつそのことアインズ様の靴でも舐めてしまおうかと思いましたが止めておきました。

「そもそも……だ。お前は単なる二次作者に過ぎん。しかも読者も少ない作品だ。……なんというタイトルだったかな？」

「『ふしぎのくにのありんすちゃん』にございます」

「その『ふしぎのくにのありんすちゃん』だがな……私の出番が少な過ぎではないか？ 読者もそう感じていると思うぞ？」

「わたくしの出番も少ないように思います」

横からアルベドも口をはさみました。

「おそれながら魔導王陛下、主役はありんすちゃんでございます……」

「なんという事を！ ……おのれアインズ様の御前で……」

「よい。アルベド。……そもそもありんすちゃんをナザリックから飛び出させていかせたのは作者であるお前自身ではないか。……それならばその責任は私が少女化する事ではなくお前自身がとらなくてはならないのではないのか？」

「……そうでありんちゅ」

私は眼窩の奥で暗く光る赤い光りに射すくめられて言葉を返せませんでした。思い返せばただ『プレイアデスの日』を読みたいが故に

オーバーロードの二次小説を書き始めただけだったのにこんな事になるとは……

「餓食狐蟲王の所に連れて行け」

アインズは冷たく言い放つと玉座から立ち上がりました。私は目の前が真つ暗になり、力なく跪くのでした。まさに絶体絶命——
「まちゆでありんちゆ」

その時まさに天使の声が聞こえてきたのでした。

いつの間にかありんすちやんがアインズの側に立っていました。ありんすちやんは思慮深い瞳で私をじつと見つめていました。

「アインズちやま、この者はさくちやでありんちゆから助けてほちいでありんちゆ」

今度はアインズの瞳をじつと見つめました。純真無垢な瞳がゆっくりアインズの怒りを溶かしていきます。

「……うむ、善太夫の処分はありんすちやんに委ねるとしよう……それにしても何時戻ったのかね？」

「おやつが食べたくなつて帰ってきたでありんちゆよ」

しっかりとしているようですがやはりありんすちやんはまだ5歳児位の女の子なんですよね。アインズは思わず破顔しました。

「さて……がちよくこちゆおうのお家になりたくなかったら、ありんちゆちやんの言う事きくでありんちゆね」

私は力強く頷きました。

「……まずは……もつと更新するでありんちゆね。それからもつと面白くするでありんちゆね。ありんちゆちやんがもつともつと活躍するでありんちゆね……」

ありんすちやんの要求を聞きながら私は思わず叫んでいました。

「すみません。餓食狐蟲王の所へ連れて行って下さい」

〈ふしぎのくにのアインズちゃん おわり〉

※ありんすちやんが挿絵を描いてくれました

057 ありんすちゃんをあかずきん

第六階層のコロッセウムには戦闘メイドのルプスレギナ、ユリ、シズ、階層守護者のアウラが集まっています。みんなありんすちゃんからの呼び出しを受けてきたのですが、何をするのか誰も知りませんでした。

誰もが顔を見合わせながら戸惑っていると、ありんすちゃんがやって来ました。何か思いついたように得意気な表情を浮かべたありんすちゃんは唐突に口を開きました。

「あかずきんちゃんでありんちゅ」

見るとありんすちゃんは真紅のフード付きのコートを着ていました。胸元に揺れるボンボンがとても可愛らしく似合っています。なるほど、ありんすちゃんはあかずきんちゃんになりきっている訳ですね。

「フランス」と小鼻を膨らませて得意そうに胸を張るありんすちゃんでしたが、観衆達はただ戸惑うだけでした。

ありんすちゃんはまたもや「あかずきんちゃんでありんちゅ」と胸を張りますが誰も喝采してくれません。

仕方ありませんよね。そもそもナザリックの舞台では『あかずきんちゃん』はおろか『グリム童話』自体もほとんど知られていないのですから。

ありんすちゃんは顔を真っ赤にして手にしていた一冊の絵本を投げ出します。その絵本は童話『あかずきんちゃん』でした。絵本の表紙の赤い頭巾の女の子を見てようやくなんとなくありんすちゃんの意味図に気がついたアウラがありんすちゃんに尋ねました。

「ふーん。なんか前にマーレが読んでいたかも。……で、あたし達が集められたのに関係あるのかな？」

ありんすちゃんは勢い良く叫びました。

「あかずきんちゃんの劇をするでありんちゅ！」

「えー？」

かくしてナザリック演劇部のあかずきんちゃん上演が決定された

のでした。

まずは配役を決めます。主役のあかずきんちゃんはもちろんありんすちゃんです。

ありんすちゃんは次々に役をふっていきました。ルプスレギナはオオカミ、お婆さんはユリ、猟師はシズです。

最後にアウラが残ってしまいました。ありんすちゃんは一生懸命考えてようやく一つの役を思いつきました。

「アウアウはイジワルままははでありんちゅね」

「えー？ なにそれ？ あたしの役おかしくない？ ……イジワル継母って出てくるのは他の話じゃなかったっけ？」

「……良いんでありんちゅー！」

アウラはすぐさま胸元の金のドングリでマールレを呼びます。

「……あれ？ お姉ちゃん。どうかしたの？」

「マールレ、イジワル継母ってあかずきんちゃんの話に出てこないよねー？」

状況が今ひとつわからないマールレの声は寝起きの様にボンヤリしていました。

「うーん……イジワル継母が出てくるのはシンデレラ、じゃないかな？」

短くマールレに礼を告げてドングリの発動を切ると、アウラは勝ち誇った表情でありんすちゃんに詰め寄りました。

「ほーら？ マールレに聞いたけど『あかずきんちゃん』には継母って出てこないよっ！」

「……でてくるでんちゅ……でてくるでんちゅよ……うわーん！」

アウラに問い詰められてありんすちゃんは泣きながら飛び出して行ってしまいました。

どうやらありんすちゃんがナザリックを飛び出していったのはこういう事情があったのですね。

まあ、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なんですから、それも仕方ありませんよね。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

058 ありんすちゃんをあかずきん ふたたび

ありんすちゃんの隣にマーレ、前にはアウラ、ユリ、シズ、ルプスレギナが並んでいます。先日泣きながらナザリツクを飛び出していったありんすちゃんは満面の笑みを浮かべていました。気まずそうな面もちのアウラとは対象的です。

「これからあかずきんちゃんの映画をさちゅえいするでありんちゅよ」

「えー。あの、ありんすちゃんはこれからあかずきんちゃんの映画を撮影したいみたいです」

胸を張ったありんすちゃんの言葉をマーレが通訳します。ありんすちゃんは今日も真紅のフード付きのコートを着ていますから主役のあかずきんちゃんはありんすちゃんが演じるのでしょーうね。

「まず、イジワルままははがアウアウでありんちゅ」

「えー？ あたしがイジワル継母って……そもそもあかずきんって話には継母は出てこな……」

いけません。ありんすちゃんの顔がみるみる真っ赤になってきました。唇を尖らせていかにも不満げです。このままではまたもや前回と同様の事態が起きてしまいそうです。

「――しー！ お、お姉ちゃん、ダメだって。アインズ様がありんすちゃんのわがままに付き合ってやれと……」

ありんすちゃん脱走事件でいささかショックを受けたアインズは日頃からありんすちゃんと仲がよいアウラとマーレに諭していたのです。とはいえ、アインズのショックは餓食狐蟲王と同衾させられた私に比べたら……ゲフンゲフン……いや、なんでもありません。

アウラとマーレに代わる代わるおだてられたありんすちゃんは忽ち機嫌を戻しました。

まあ、所詮はまだ5歳児位の女の子に過ぎないのですから仕方ありませんよね。

結局、前回と同様にルプスレギナがオオカミ、ユリがお婆さん、シズが猟師となり、オオカミのルプスレギナは森であかずきんちゃんを

待ち受ける事になりました。

「で、では、シーターのあ、あかすきんちゃんがイジワル継母にイジメられるシーンから……いい、いきます」

監督兼カメラマンのマーレがカメラを回します。イジワル継母役のアウラが口汚くあかすきん役のありんすちやんをイジめます。

「あんたってホントグズだね？ そんな事じゃしようがないんじゃない？ 少しは成長しないと……」

アウラはなかなかの演技達者ですね。イジワル継母になりきってありんすちやんをイジめる演技を続けます。なんだかありんすちやんが可哀想に思えてきました。

……おや？ ありんすちやんの瞳が潤んできています。ありんすちやんは今にも泣き出しそうです。ありんすちやんもなかなかの演技力ですね。

——違いました。ありんすちやんは演技ではなくて本当に泣き出していました。ありんすちやん、これはお芝居なんですって……ダメです。ありんすちやんはまたもやワンワン泣きながら飛び出して行ってしまいました。

仕方ありませんよね。なにしろありんすちやんはまだ5歳児位の女の子なんですから。

結局、ありんすちやんはその日は帰って来なかつたらしいです。まあ、私はまたまた餓食狐蟲王の所で過ごした為、直接は知りませんが。

※ ※ ※

「んふふふ……完全不可視化で驚かせてやるっすよ。伊達にカルネ村で村人を驚かしまくってない所をバッチリ見せるっす。……あー早くありんすちやん来ないっすかね」

059 ありんすちやんのあかずきん みたび

ありんすちやんの隣にマーレ、前にはアウラ、ユリ、シズが並んでいます。先日泣きながらナザリックを飛び出していったありんすちやんは満面の笑みを浮かべていました。まるで前回の事がなかったかのようですね。

「これから改めてあかずきんちゃん映画をさちゅえいするでありんちゅよ」

一列に並んだメンバーを眺めながらありんすちやんは小首を傾げました。

「ルプーがいないでんちゅね……変わりにベスチョ……ワンワンにするでありんちゅ」

あれ？ ルプスレギナはどこかで……うーん……何か忘れているような……いよいよ改めて撮影開始です。

前回の反省を生かして、今回はイジワル継母は無しになりました。お母さん？ のアウラに挨拶してあかずきんのありんすちやんが出かけます。

この先の森でオオカミと出会う筈ですが……大変です！ ありんすちやんは綺麗な蝶々を追いかけて道をそれていつちやいました。

すかさずアウラが魔獣を呼んで監督兼助手兼カメラマンのマーレと一緒に追いかけます。

ありんすちやんはクルクルとまるで踊るような足取りで蝶々を追いかけます。きつと頭の中は蝶々の事で一杯でしようね。

仕方ありませんよね。ありんすちやんはまだ5歳児位の女の子に過ぎないのですから。

蝶々を追いかけている内にありんすちやんは小さな小屋の前をやつてきました。どうやらずいぶん近道をしてしまい、ありんすちやんはオオカミに出会う事なく無事にお婆さんの家に着いてしまいました。

「……か、カット……」

「カートツ！ ダメじゃん。ありんすちやん、オオカミに会わなきや

あかずきんじやないじゃん?」

マーレを押しつけてアウラがダメ出しします。今更森に戻るのには面倒だ、という事で小屋の近くであかずきんとオオカミの出会いのシーンを撮ることにして、ベストーニヤを呼び寄せる事にしました。

さて、撮影再開です。オオカミがあかずきんに尋ねます。

「あかずきんちゃん、どこに行くのかな? ……わん」

「おばあちゃんのお見舞いいくでありんちゅ」

「森の向こうに綺麗なお花が一杯咲いていたから、摘んでいけばお婆さんが喜ぶと思いますよ」

「——『わん』を忘れてるよ?」

「……………わん」

助監督のアウラがとつさにベストーニヤに指摘したので事なきを得たみたいです。

話はこの後ありんすちゃんがお花を摘んでいる間にオオカミがお婆さんを飲み込んでしまうシーンがあるのですが、ありんすちゃんが飽きてきた為端折る事になりました。

ベッドでお婆さんのユリになりましたオオカミのベストーニヤが、やって来たあかずきんのありんすちゃんを招き入れます。

「おばあちゃん、お口が大きいでありんちゅね」

「お前を食べる為だよ! ……わん」

ベストーニヤの顔の継ぎ目が裂けて開きます。中からはうねうねと触手が伸びてきてありんすちゃんを捕まえようとします。

「……………ジャーン。猟師登場」

突然扉を開けて入ってきたシズが両手の銃を構え、撃ち始めました。ベストーニヤはありんすちゃんを食べる事が出来ずに倒れました。

「……………か、カット……………」

「カート! ……んー良いねえ! ……良い演技だったんじゃないかなあ? お疲れ様」

またしても自称助監督のアウラが仕切ります。まあ、何にせよ無事に撮影は終わりました。ありんすちゃん良かったですね。

唯一残念だったのはカメラの中にフィルムを入れ忘れていた事でしたが……とりあえずめでたしめでたし。

※ ※ ※

「うーん……なかなかありんすちゃん来ないっすね……どんだけ待たせるんすかねっす……まさかこれが放置プレイってヤツっすか？」

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

060 ありんすちゃんのおおそうじ

年末です。ありんすちゃんは朝から張り切っています。顔にはマスク、頭にはバンドナでほっかむりしています。片手にはハタキ、もう片方の手にはチリトリを持っています。今日はこれから家の大そうじをするんですって。

ありんすちゃんの住居はナザリック地下大墳墓の第二階層にある死蝨玄室という部屋なのですが……いくつもある部屋がいささか散らかっていました。あちこちに脱ぎ散らかした服や食べかけのお菓子やオモチャが散らばっているのです。

今日はこの散らかった部屋を綺麗に片づけてしまおう、と気合を入れていたのでした。

「やほー。ありんすちゃん、なんかスゴいね？ ……もしかして大そうじなの？」

唐突にアウラがやってきました。

「年末でありんちゆから大そうじするでありんちゆ」

ありんすちゃんは胸を張って答えます。

「……ふーん。あつそ。……そういえばあたし、ルプスレギナを探しに来たんだけど、ありんすちゃんは見なかった？」

ありんすちゃんは首を傾げます。

「……ルプーでありんちゆか？ ……見ないでありんちゆね」

うーん……何だか大切な事を忘れているような気もしますが……気のせいでしょう。多分。

「……ま、いつか。どうせどこかで遊んでいるんですよ。……ありんすちゃんは大そうじ頑張ってる」

「……アウアウは大そうじしないでありんちゆか？」

「うーん……あたしんところはいつも綺麗にしているからね。大そうじなんて必要ないかな」

アウラが立ち去った後、ありんすちゃんの鼻息が荒くなっただけです。どうやらアウラが大そうじをしない事で変な優越感が生まれてきたみたいです。

「張り切って大そうじでありんちゅ」

ありんすちゃんは積み上げられた衣類の山を片付け始めました。片方だけの可愛らしいカラフルなハイソックスを引っ張り出します。ありんすちゃんのお気に入りだったので、また、片方だけ見つかった時の為に取りつておいたのです。

「うーん……これは捨てられないでありんちゅ」

ありんすちゃん、捨てないと結局片付かないと思いますよ？

結局ありんすちゃんは衣類の山を右から左に移動させたただけでした。

ありんすちゃんは次に絵本やマンガが散らばった所を片付け始めました。

「おもちゃろいでありんちゅね」

おやおや？ ありんすちゃんたら、ベッドに寝そべってマンガを読み出していました。これでは大そうじは進みませんね。

どうやらありんすちゃんが眺めているマンガは丸山こがね原作深山フジン作の『オーバードーロ』みたいですね。なかでも吸血鬼ティルシャアがブラインをやつつけるシーンがお気に入りみたいで、何度も何度もページを戻して読んでいます。

「ブライン、泣いているでありんちゅね」

こんな事でありんすちゃんは大そうじ出来るのでしょうか？ 少し心配になってきました。

で、結局ありんすちゃんの大そうじは終わりませんでした。あれからマンガを読みふけているうちにいつの間にか眠ってしまいましたので。

仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子ですからね。

061ありんすちゃんおとしだまをあげる

バハルス帝国皇帝、ジルクニフ・ルーン・ファーロード・エルニクスは苦々しい思いで城下を見下ろしました。帝国では折から新年を祝う民に溢れていてまさにお祝い一色になっていました。

「陛下、新年早々に苦虫を噛んだような顔ですが……そんなだと幸運を逃がしますぜ？」

帝国四騎士の一人、『雷光』バジウッド・ペシユメルがおどけるように声をかけました。ジルクニフはそんなバジウッドに気がつかない振りをするのでした。

新年です。昨年に魔導王国の領国になると申し出てからまだ具体的な動きはありません。しかしながら臣下として年始の魔導王国詣ではしなくてはならないでしょう。その際にきつと無理難題を押し付けてくるに決まっています。そう考えていました。

街中の民はそんな皇帝の苦しみを全く知らずに新年を祝っているのです。それがジルクニフにとって腹立たしくもあつたのでした。

「こんな話をしていると、また来ませんか？ あのドラゴンが……」
バジウッドののんびりとした発言にジルクニフの胃がキリキリと痛みすのでした。

（来る……きつと来る……忘れていたのではない。思い出したくなかつたのだ。魔導王国の子供達が新年早々やってくるに違いない）

「……あ？　ありや……陛下、まずい。ドラゴンが来ますぜ」

ジルクニフは固く目を閉じました。こうなつてしまえば次の展開は見えています。あの、たどたどしい話し方の少女が『ありんすちゃん当てゲーム』を持ちかけます。正解しても不正解でも連れの双子のダークエルフの一人が地震を起こして兵士を飲み込ませます。これの繰り返しです。

やがて広場にドラゴンが降り立ちました。いつぞやの白い太めで眼鏡をしたドラゴンです。背中にはやはり三人の小さな影が見えました。間違いありません。きつとあの恐るべき魔導王国の子供達です。

「皇帝、いるでありんちゅか？出て来るでありんちゅ」

女の子が口を開きます。きつと次のセリフは『誰がありんちゅちやんか当てるでありんちゅよ』だろうとジルクニフは思いました。

「……初詣でありんちゅからカツラを取った頭みちえるでありんちゅ」

ジルクニフの顔がみるみるうちに朱色に染まりました。なんとう屈辱でしょう。大勢の民の目の前で恥ずかしい秘密を大声で叫ぶなんて……それもまがりなりにも皇帝である自分に対して、です。

しかしながら、ジルクニフに拒否する事は出来ませんでした。ゆつくりとカツラを外すとチョロチョロとした毛だらけとなった寂しい頭を窓から突き出しました。

だって仕方ありませんよね？彼の髪がドンドン抜けてしまったのも、全てはあの忌々しい魔導王国のアインズのせいなのですから。充分にジルクニフの『初日の出』を堪能した子供達が叫びました。

「それじゃあ、皇帝にあたしたちからお年玉だよ？……マーレー！」
ドラゴンから黒い杖を持ったダークエルフが降りました。きつと魔法で何か禍々しいモノを降らすつもりです。ジルクニフは空を見上げました。もしかしたら隕石でも降って来るかもしれない……と思っていた瞬間――

凄まじい地響きがしてまたもや地震が起きました。

「……どこがお年玉なんだよ？……やーめーてー！ー！」

ジルクニフの悲痛な叫びは地響きに消されて届く事はありませんでした。

062 番外編 名探偵ありんすちちゃんと消えたルプー

今日もありんすちちゃんは二人のヴァンパイア・プライドに連れられて階層の見回りをしていました。

ふと、外の様子が気になって地上に出てみるとログハウスに戦闘メイト達が集まっていました。

「どうちたでありんちゆか？」

ありんすちちゃんの問いかけにユリが答えました。

「あ、ありんすちちゃん。……実はログハウス当番なのにルプスレギナが来ないんですよ。どこかで見ませんでした？」

ありんすちちゃんは口元に人差し指を当てて小首を傾げます。ちなみに45°よりちよつと狭い43°位に傾けるのが一番ありんすちちゃんの魅力をアピールする角度なんですって。

「わかりました。名探偵ありんちゆちゃんにまかせるでありんちゆ久しぶりに名探偵ありんすちちゃんの出番がやって来ました。ありんすちちゃん良かったですね。

ありんすちちゃんは目をつぶり考えます。きっとありんすちちゃんの灰色の脳細胞が今まさに事件を解決しようとしているのに違いありません。

ぐくぐくく……

突然ありんすちちゃんのお腹が鳴りました。

「お腹へったからお昼にするでありんちゆ」

ありんすちちゃんはさつきと食堂に向かうのです。仕方ありませんよね。だってありんすちちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

食事を終えて満足そうなありんすちちゃんにユリが尋ねました。

「……で、ルプスレギナの居場所は……？」

ユリ以外の戦闘メイト達は業務に戻ったらしく、姿がありませんでした。ありんすちちゃんはユリを連れて屍鑑玄室に来ました。そこに

は既にヴァンパイア・プライド達が待ち構えていてありんすちゃんをパジャマに着替えさせました。

「食べた後はお昼寝するでありんちゅ」

スヤスヤと寝息をたてはじめたありんすちゃんを眺めながらユリはただただため息をついたのでした。

(こんな時に、せめて末妹の手が借りれたら……)

ユリは唇を噛みました。末妹ならばたちどころにルプスレギナの居場所を見つけられる事でしょう。しかし、末妹の力を借りる為にはルプスレギナがいない事をアインズ様に報告しなくてはなりません。今の段階ではそこまで大事にしたくない、それがプレアデスの総意でした。

焦るユリの気持ちが伝わったのか、パチリとありんすちゃんが目を開きました。そしてムクリと起き上がりました。

「……おちっこ」

トコトコと部屋から出ていくありんすちゃんの姿を見送りながら、ユリはまたもやため息をついたのでした。

※ ※ ※

ありんすちゃんに連れられてユリは第六階層にやって来ました。ありんすちゃんの推理では『犯人はアウラ』だそうです。

「……えー！ 知らないよ？ あたしは関係無いんだけど」

アウラは自らの疑惑を否定しました。これで捜査は振り出しみたいですね。

「……うーん。ルプーはあかずきんちゃんの時はいたでありんちゅから……」

あれ？ ありんすちゃん、赤ずきんの撮影でルプスレギナがなくてペストーリヤに代役を頼んだのではありませんでしたっけ？

「あ、そういえば……うーん。でも違うかな？」

アウラが何か思い出したみたいです。

「先週位から森のあたりになにやら出るらしい、というような事をシ

モベ達の間であつたような、なかつたような……」

名探偵の瞳が光りました。

「それでありんちゆ。きつとルプーのお化けでありんちゆ」

早速、ありんすちゃん、アウラ、ユリの三人は森に向かうのでした。

※ ※ ※

森に着くと声が聞こえてきました。

「あかずきんちゃん……遅いつすよ……どんだけ……待たせるんすか……」

「ルプスレギナ？ 貴女なの？」

ユリが辺りを見回しますが、ルプスレギナの姿はありません。

「……ルプーはいないでありんちゆね。残念でありんちゆ」

ありんすちゃんが重々しく断言しました。アウラも同意します。

「残念だったねー。このままずっと見つからないかも、だねー」

「ちよ、ちよと待つつすよ……」

ありんすちゃんが不意に振り向きました。ルプスレギナは驚いて

不可視を解いて姿を現しました。

「ルプー見つけたでありんちゆ」

またまた名探偵ありんすちゃん、大活躍ですね。ルプスレギナも良かったですね。

めでたしめでたし。

063 ありんすちゃんスカウトされる

ありんすちゃんはエ・ランテルの街を歩いていました。と、角を急に曲がったところで女の人とぶつかりそうになりました。

「あつぶないなー」

黒いマントの女は紫の瞳でありんすちゃんをまじまじと見つめると少し驚いたみたいでした。

「んー。なんか強い魔力を感じるなー。もしかしてただものじゃないのかな？」

「ありんちゅちゃんでありんちゅ。タダじゃないでありんちゅ」

「ふーん。まいつか。ありんちゅちゃん、ズーラーノーンに入らない？」

「ズーロン？ でありんちゅか？ おもちろちようでありんちゅね……いいでありんちゅ」

なんと……ありんすちゃんは初対面の怪しい女に誘われて、ズーラーノーンに入っちゃいました。大丈夫でしょうか？

「ところでズーロンはおいちいでありんちゅか？」

うーん……どうやらありんすちゃんはズーラーノーンをお菓子かなにかと勘違いしているみたいです。本当に大丈夫でしょうか？

「……うーん……まあ、おいしいっていうより色々良い思いは出来るかなー？ そのうちに盟主にも会えるよー。結構凄いからねーその人ー」

女はありんすちゃんの手を引つ張つて走り出しました。ありんすちゃんはどこに連れていかれてしまうのでしょうか。ナザリックに学校があったら『知らない人についてはいけません』と教わる事が出来たでしょうが……

と、突然女が立ち止まりました。顔面が蒼白で、手が震えています。ありんすちゃんは女を見上げました。

「どちらたでありんちゅか？」

「しー……静かに。あいつ……モモンだ」

見ると冒険者仲間と話をしているモモン——アインズの代わりに

パンドラズ・アクターでしたが——がいました。どうやら女はモモンに酷く怯えているみたいでした。

「……あいつに私、一度殺されたから……あいつの正体はアンデッドなんだ」

ありんすちゃんは目を丸くしました。なんとという事でしょうか？パンドラズ・アクターは本当はアンデッドとは知りませんでした。するとドツペンゲルガーはアンデッドなのかもしれませんね。

しばらくするとモモンと冒険者は別れ、モモンは馬車に乗って去りました。

女は深くため息をつくともたありんすちゃんの手を引いて走り出しました。

そうこうしてありんすちゃんは女——名前はクレマンティヌと名乗りました——と一緒にズーラーノーンの秘密施設の一つに着きました。

このままありんすちゃんはズーラーノーンの幹部になってしまうのでしょうか？ それも仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なんですから。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

064 ありんすちゃんモモンをみはる

前回のあらすじ

お腹が減っていたクレマンティーヌ改に吉備団子をあげたありんすちゃんはお礼に竜宮城に連れていってもらった。そこで秘密組織ズーラーノーンの存在を知ったありんすちゃんはアインズの特命を受けて潜入する。そんなありんすちゃんにクレマンティーヌ改はアダマントタイト級冒険者モモンの正体がアンデッドだという驚愕の事実を打ち明けるのだった。

※ ※ ※

ありんすちゃんのズーラーノーンの一員としての初仕事は『冒険者モモンを監視して弱味を見つけよ』でした。ありんすちゃんは張り切っていますよ。

え？ あらすじが滅茶苦茶ですって？ 申し訳ありません。ありんすちゃんがどうしてもそう書けと言うので仕方ないので……改めて……今日のありんすちゃんは朝から張り切っていました。鹿撃ち帽を被りマントを羽織ってまさに気分はシャーロック・ホームズですね。ありんすちゃんは何でもよく似合っちゃいます。

エ・ランテルの街でこっそりモモンが現れるのを待ちます。やがてモモンが姿を見せました。どうやらナーベと一緒にいたいですね。

「ギリギリギリ……」

モモンとナーベは何やら親密そうに話をしています。ありんすちゃんはこのモモンが実はパンドラズ・アクターだと知っています。もちろん『美姫ナーベ』が戦闘メイドのナーベラル・ガンマだという事も知っています。

「ギリギリギリ……」

パンドラズ・モモンは派手な仕種でナーベをエスコートしながら馬車に乗り込みました。

「ギリギリギリ……」

ありんすちゃんはさつきから聞こえてくる音に気がつききました。よく見ると変なお面をつけた女の子がモモン達が乗り込んだ馬車を見つめていました。どうやらその女の子が歯ぎしりをしていたみたいです。

どこかで見たような気もしますが、気のせいでしょう。ありんすちゃんにそんな変な知り合いはいないのでした。多分。

ありんすちゃんは馬車を追いかけてきました。すると仮面の女の子も馬車を追いかけているのに気がつきました。モモン達の馬車を仮面の女の子が追い、さらにありんすちゃんが追いかける、という図が出来るようになりました。

モモンは冒険者組合でナーベと別れ、別の冒険者と馬車に乗り込みました。ありんすちゃんは馬車を追いかけているのにだんだん飽きてきてしまいました。

仕方ありませんよね。ありんすちゃんは5歳児位の女の子です。ら。

見ると仮面の女の子はモモンを観察しながら何やらメモを取っているみたいです。もしかしたらありんすちゃんと同じようにズーラーノーンの指令でモモンを見張っているのかもしれない。

突然ありんすちゃんは閃きました。眷属の小さなコウモリを呼ぶと仮面の女の子を見張らせて、自分はナザリックに帰っていきました。

※ ※ ※

モモンの馬車を追いかけてながらイビルアイはいろいろ考えていました。一目モモンの姿を見届けたいという思いでエ・ランテルに来てしまったが、いざモモンを目の当たりにすると声をかける事が出来なideいたのでした。

「……うむ。や、やあ、モモン殿。息災であるか？ ……これじゃダメだな。……うーん……も、モモン様。私を覚えていますか？ 貴方の

イビルアイです。……これは柄じゃないな……うーん」

イビルアイはモモンの後を追いながら声をかけるタイミングを見計らっていたのですが、肝心のセリフが決まりません。あれこれとメモしてみますが実際に言葉にしてみると恥ずかしいものばかりなのでした。

「まさか、この私がこんな乙女チックな悩みに落ちるとはな……」

イビルアイは溜め息をつきました。——仕方無いじゃないか。モモン殿はあんなにも格好が良いのだから——

やがて夕方になり今日の所は諦めて帰ろうか、と踵を返した瞬間、何者かに襲われてイビルアイは気を失ってしまいました。

倒れたイビルアイから誰かがメモを拾い上げました。なんとありませんすちゃんです。なる程、自分でモモンを見張るのが面倒くさくなつたから他に見張っている人間を利用したわけですね。……しかし、その仮面の人物は多分ズーラーノーンではないかと……

※ ※ ※

ズーラーノーンの秘密拠点の一つ——ありんすちゃんはメモを幹部に渡しました。

「……うむ。ご苦労。……なになに……モモン様ああモモン様モモン様……モモン様にすべてを捧げます……モモン殿が颯爽とマントを翻す様は実に格好がよいな、私はマントになりたい……モモン殿は右利きだな……モモン様、モモン殿、モモンさーん……これは一体？」

メモは小さな字でびっしりとモモンを崇拜するような意味不明な言葉で埋め尽くされていました。幹部はあきれてしまい、得意げに胸を張るありんすちゃんに返す言葉がありませんでした。仕方ありませんよね。ありんすちゃんは5歳児位の女の子なんですから。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

065ありんすちゃんおやつをたべる

ズーラーノーンの一員になってしまったありんすちゃん。今日は何をするのでしょうか？

ありんすちゃんは自分の階層の屍鑑玄室にいました。食卓に腰掛けてよだれかけ……ゲフンゲフン……前掛けをしてお行儀良く座っています。そこにヴァンパイア・プライドがシュークリームが載せられたお皿を持ってきました。

ありんすちゃんの顔の半分位ある大きなシュークリームを前にして、とても嬉しそうですね。

ありんすちゃんは両手でシュークリームを持つとかぶりつきました。あらあら、顔がカスタードクリームだらけですよ？

あつという間にシュークリームを平らげたありんすちゃんの前に今度はエクレアが運ばれて来ました。これまた大きなエクレアです。

パクリ、パクリ、パクリ。なんと三口で食べてしまいました。左右からヴァンパイア・プライド達がタオルでありんすちゃんの顔についたクリームを拭きます。

さて、そろそろズーラーノーンの仕事に……行かないみたいです。ね。ありんすちゃんはお昼寝をし始めてしまいました。

あつという間にスヤスヤと寝息をたてはじめてしまいました。うーん……こうなると二三時間は起きないでしょう。

さてさて、そろそろありんすちゃんのお昼寝が終わった頃です。まだ、ベッドの中でボンヤリしていますね。仕方ありませんよね。だってありんすちゃんは5歳児位の女の子なのですから。おやおや、またおやつを食べるみたいです。

うーん……さっきのは十時のお茶の時間で今度が三時のおやつ。時間なんですって。なんだかおやつばかり食べているような気がします。

ところでズーラーノーンの仕事はしないのですか？ ……なにになに……ズーラーノーンにはおやつ。の時間が無いからやめた？ ……うーん……どうなんでしょう？

特にアインズ様から潜入を命じられた訳でも無いし、良いのでしようか？

まあ、ありんすちゃんらしいと言えばありんすちゃんらしいのですが……

あらあら……おやつのだーナツをくわえたままベッドに……砂糖でベトベトの手をシートで……ちよつとお行儀が悪いですね。

今度は片手にドーナツを持ったまま、うつらうつらし始めてしまいました。中途半端な時間に眠ると後で眠れなくなりますよ？

それにありんすちゃん、寝る前にトイレに行っておいた方が……ダメです。もうスヤスヤと寝息をたてています。

と、まあ、こんな訳でありんすちゃんのズーラーノーン所属は三日坊主ならぬ一日で終わってしまったようです。

仕方ありませんよね。ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

066ありんすちゃんかしこくなる

まだ夜明け前の屍鑑玄室のベッドではありんすちゃんがスヤスヤ眠っています。こうして眠っている姿はまるで天使みたいですね。

ゴロゴロゴロ。ゴロゴロゴロ。大きなベッドなのでありんすちゃんがいくら寝返りをうつても大丈夫です。……多分。

ゴロゴロゴロゴロゴロ。ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ……ゴチン！

大変です！ ありんすちゃんが真つ逆さまにベッドから落ちてしまいました。

ありんすちゃんは何が起きたのかわからないようにボンヤリしていますね。もしかしたら単に寝ぼけているだけかもしれないかもしれませんが……何はともあれ大事なかつたみたいで良かったですね。

※ ※ ※

——ナザリック第九階層アインズ執務室——

「アインズ様、これが本日の報告書でございます」

アインズはアルベドから書類の山を受け取って中から一枚の報告書が無作為に取り出して目を通しました。

(……なにになに……何やらデータみたいだな。よくわからないがエ・ランテルに於ける物資の在庫状況みたいだな)

「……うむ。問題は無いだろう。アルベドよ、良い働きだ」

「勿体なきお言葉、ありがとうございます」

重々しく頭を下げるアルベドの後ろで扉をノックする音がしました。

「アインズ様、ありんすちゃん様がお目通りしたいとの事です」

アインズはデクリメントに指示してありんすちゃんを中に招き入れました。ありんすちゃんはアインズの前で可愛らしくちよこんとお辞儀をしました。

「至高のお方、アインズジュチャまにはご機嫌うるわしく、ご尊顔を拝し

誠にきょうえちゆしごきゆ……」

「うむ……」

アインズはありんすちゃんの口上を片手を上げて制止すると尋ねました。

「さて、私に何か用かな？ ……気兼ねなく申してみよ」

「アインジュちやまのお手伝いをしたのでありんちゆ」

「ありんすちゃん、アインズ様はこの私と大切な仕事の最中です。遊び相手が欲しいなら他を当たりなさい」

「いや……さて、アルベドよ。そうだ、せつかくだからこの国を良くする為のアイデアの検討にありんすちゃんも参加させてみよう。子供ならではの斬新な視点が得られるかもしれぬ」

「……アインズ様がさようにおっしゃるならば、この私に異存は御座いません」

アルベドの同意を得てアインズはありんすちゃんに話しかけました。

「どうだろうか？ ありんすちゃんよ。是非とも忌憚のない——ああ、素直な、という事だな——意見を聞かせて欲しい」

「わかりましたでありんちゆ」

アインズは用意していた紙を取り出しました。

「まずは……『魔導国にアインズ様を主神としたアインズ教団を設立してアインズ様の慈愛を国民全てに知らしめては如何でしょうか』……ふむ……」

アルベドは潤んだ瞳でアインズを見つめながら答えました。

「私もその提案には賛成です。我々にとって至高の方以上の存在等考えようがありません。至高の方を蔑ろにして神を信仰するなどという行為はむしろ根絶すべきかと思えます」

「ちよつと待つでありんちゆ。ありんちゆちゃんは反対でありんちゆ」

「——な……」

不意をつかれてアルベドは思わずありんすちゃんを睨みつけました。しかしありんすちゃんはアルベドの鋭い視線に全く動じる様子

がありませんでした。

「……意見を申してみよ」

アインズに促されてありんすちゃんは言葉が続けました。

「歴史を紐解くと宗教の違いはかじゆかじゆの争いをもたらしてきたでありんちゆ。今ある教会を無くす事は新たな混乱を招くだけでありんちゆ。教会や神はちよのまままでアインジュちやまは更にその頂点を統べる存在として君臨すべきでありんちゆ」

「ふむふむ。なかなか的を得た指摘だな。このアイデアはもつと様々な角度から検討すべきだろう」

アインズは次の提案を取り出しました。

「……こほん。なになに……『アインズ・ウール・ゴウンの紋章をデザインしたTシャツを国民全てに配布して団結力を高めると良いと思います』か……ふむ。これは是非ともけ——」

「——あまりにも下等な発想です。このような下らない意見が至高のお方の手を煩わすなど言語道断」

即座にアルベドが否定しました。と、静かにありんすちゃんが口を開きます。

「待つでありんちゆ」

アインズもアルベドもありんすちゃんをじつと見つめました。そういうえば先ほどからのありんすちゃんはいつもと別人みたいですね。

「魔導国の国民に自覚と誇りを持たせる政策は黎明期の現在、真剣に検討すべき案件でありんちゆ。Tシャツは下策でありんちゆが、アインズ・ウール・ゴウンの紋章を使ったオリジナルグッズの販売等は是非とも検討すべきでありんちゆ」

「……ありんすちゃん？ ……どうしちゃったのかしら？」

「アルベド、アインジュちやまの補佐役ならばアインジュちやまの真意に気づけなければならぬでありんちゆ。わぎわぎアインジュちやまが自ら手書きで書き直すのはそもそも——」

「よ、よい。ありんすちゃんよご苦勞であった。もうよい」

ありんすちゃんは恭しくアインズとアルベドに会釈すると部屋か

ら出ていきました。二人だけになるとアインズはアルベドと顔を見合わせました。

「……ありんすちゃん、だよな？」

「……は、はい。……おそらく」

※ ※ ※

さて、賢くなったありんすちゃんですが……これからアインズの片腕として活躍してくれるに違いありません。これまでありんすちゃんの事を少しばかり残念な……ゲフンゲフン……思考する習慣が少なめだと思っていました……

その夜、ありんすちゃんは寝返りを打ち……

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ……ゴチン！

翌朝にはいつものありんすちゃんに戻ってしまいました。

仕方ありませんよね。だってありんすちゃんは5歳児位の女の子なのですから。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

067 ありんすちゃんのスぺしやるカレー

今日のありんすちゃんは鼻歌まじりでとても上機嫌です。いつもよりソワソワして落ち着きなく、時間ばかり気にしています。

ありんすちゃんはお昼が来るのが待ちきれないのでした。そんなんです。今日は月に一回の『カレーの日』なんです。

毎日のナザリックでの執務の一つのナザリック改善についての提案で、唯一アインズの発案が実現したのがこの『月に一回のカレーの日』だったのです。

いよいよお昼になりました。ありんすちゃんは早速で食堂に向かいます。そして厨房の前で大きな声で注文しました。

「ありんちゅちゃんすぺしやるカレーでありんちゅ」

説明しましょう。『ありんすちゃんすぺしやるカレー』とはリンゴと蜂蜜をふんだんに使った甘口の、いわゆるお子様カレーです。ありんすちゃんはまだまだお子様ですから仕方ないですよ。ちなみに辛口カレーが好きなのはマーレ、意外にもアウラとコキュートスは甘口派だったりします。

ありんすちゃんは甘口カレーライスを早速頬張ります。この最初の一口がたまりません。

次にトッピングの半熟玉子をスプーンで割ります。固ゆで玉子でなく半熟なのはありんすちゃんのこだわりです。スプーンの先でトロリ出てくるまったりとした黄身を一緒にすくって口に……まさに至高のひとときです。

「おや？ ありんすちゃんはまたお子様カレーっすね」

目を閉じてうつとりとしていたありんすちゃんに容赦ないルプスレギナの声がありました。ルプスレギナはカレーライスにハムカツ、茹で玉子、ラッキョウに福神漬けとてんこ盛りしたトレイを持っていました。

「辛くないカレーなんてカレーじゃないっすよ。せめて中辛にしないと大人になれないっすよ」

そういうルプスレギナはいつも中辛のカレーライスです。実はあ

りんすちゃんも一度だけ中辛のカレーにチャレンジしてみた事がありませんが……大人にはまだまだ遠いという実感を得るだけでした。「お子ちゃまカレーではないでありんちゅ。ありんちゅちゃんすべしやるカレーでありんちゅ」

ありんすちゃんは一生懸命に主張しました。とは言っても本当はただの『甘口カレー』なんですけどね。

「ふーん。ま、良いっすけど……そういえば今度カルネ村でエンちゃん、ああ、人間のエンちゃんっす——がカレー作るみたいっすね」
「……………もぐもぐ」

「この前、カルネ村にカレーを小さな鍋で持って行ったんすけど、大好評だったんすよ。で、料理長にレシピ貰ってあげたら挑戦したいってなったっすよ」

そういえばありんすちゃんはしばらくカルネ村に行ってませんでした。ネムは元気でしようか？

「……………もぐもぐ。もぐもぐ」

うーん……ありんすちゃんはルプスレギナの話には全く興味が無いみたいですよ。目の前のカレーを味わう事に集中しているみたいです。仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳時位の女の子なのですから。

※ ※ ※

——まだバハルス帝国が魔導王国の属国化する前——

バハルス帝国皇帝シルクニフは苦悶していました。カツツエ平野でアインズ率いる魔導王国の圧倒的な力を見せつけられた現在、帝国の行く末に明るいものが全くないからでした。

「陛下、こうなりやなるようにしかならないですよ」

バジウツドの言葉もジルクニフにはなんの気休めにならなりません。

「一体どうしたら……」

頭を抱えたジルクニフ達の目の前に突然女の子が現れました。

「ま、魔導王国の？」

確か魔導王国を訪れた際にどこかで見かけたような気がします。

「これを食べるでありんちゅ」

女の子はジルクニフに小さな鍋を差し出しました。ジルクニフが蓋を開けると中には茶色いドロツとしたものが入っていました。

(……シチューのようだが……いや、違うな……ま、まさか……いや、そんな筈は………)

ジルクニフがバジウツドを振り返って見ると彼も同様に引きつった顔をしていました。恐らくジルクニフと同じ事を考えていたのでしょう。

「おいしいカレーでありんちゅよ。早く食べるでありんちゅ」

女の子は茶色いものをスプーンですくうとジルクニフの目の前に突き出しました。思わず顔をそむけたジルクニフの口に無情にもスプーンが近づけられていきます。

「……へ、陛下……食っちゃまうんですかい？」

(………!!)

ジルクニフは観念しました。恐らく目の前の女の子は強い。バジウツド達が全員でかかっても勝てないでしょう。しかしながらこの帝国の鮮血帝として怖れられた自分が少女にウ●コを食べさせられる屈辱にあうとは……

ジルクニフは目を固く閉じて口に入れられたものを味わした。

途端にジルクニフの脳髓を刺すような閃きを感じました。

「う、うまいー」

ジルクニフの目からはいつしか涙が流れ落ちていました。なんと
いう事か……魔導王国ではウ●コすらこんなに美味しいのか……次
元が違うすぎる……

このジルクニフのちよつとした誤解が後にバハルス帝国が魔導王国の属国化する要因になった事はあまり知られていないそうです。

※ありんすちゃんが挿絵を描いてくれました

068 ありんすちゃんむくちになる

今日もありんすちゃんは二人のヴァンパイア・ブライドに抱えられて自分の階層を見回りにしています。あれ？ ありんすちゃんはやらと手をバタバタさせ始めました。ヴァンパイア・ブライド達はありんすちゃんの意図がわからなくて困っているみたいですね。

手足をバタバタさせながら、ひたすらイヤイヤをするように頭を振っています。

あんまり激しく手足をばたつかせていたのでありんすちゃんは落ちてしまいました。大丈夫でしょうか？

ありんすちゃんは勢いよく走り出すとどこかに行ってしまいました。後に残されたヴァンパイア・ブライド達は互いに顔を見合わせてため息をつきました。

なんでも今日のありんすちゃんは朝から喋れないみたいなんですって。一体ありんすちゃんに何が起きたのでしょうか？

しばらくすると爽やかな表情のありんすちゃんが戻って来ました。もしかしたらオシッコがしたかったのかもしれないですね。

さて、そろそろお昼です。ありんすちゃんは何を食べるのでしよう？

食堂にやって来たありんすちゃんは難しい顔をしています。うーん……もしかしたら何も食べられないのでしょうか？

よく見るとありんすちゃんは口をモゴモゴ動かしています。まるで飴玉でも舐めているみたいですね。

結局、ありんすちゃんはお昼に何も飲み食いしませんでした。まあ、アンデッドなので問題はなさそうですが……

へありんすちゃん、貴女にカルネ村のドワーフ達に物資を送ってもらいたいんだけど

アルベドからのメッセージです。

へモゴモゴモゴ……

へちよつと、返事なさい？

へ……モゴモゴ……

へ……わかったわ。貴女には頼まない

うーん……ありんすちゃんはどうかやらアルベドを怒らせちゃった
かもしれないね。大丈夫でしょうか？

ありんすちゃんが喋れなくなった事はアインズの耳に入りました。
（うーむ……まさかNPC特有の感染症とかじゃないよな？ ……と
りあえずシモベ達から少し情報を集めておくか……）

アインズは自らヴァンパイア・ブライド達からありんすちゃんに何
が起きたのか尋ねました。その結果、昨夜プレアデスの面々と『セツ・
ブーン』を祝っていた事、そしてそれからずっと喋っていないらしい
事がわかりました。

次にプレアデスのユリ、シズを呼び出して話を聞いてみました。

彼女達の話では昨夜は『セツ・ブーン』では『エホ・マ・キー』な
るご飯と具をノリで巻いた食べ物を食べるという事で、試しに挑戦し
てみたとの事でした。細長い『エホ・マ・キー』を食べ終わるまで一
言も喋ってはいけないという決まりがあるとの事でした。もしかし
たらその『エホ・マ・キー』に理由があるのかもしれない。

「うーむ……他の戦闘メイド達には影響が出ていないが……もしかし
たらヴァンパイアか子供にだけ影響があるという事も有り得るかも
しれぬ。ユリよ、その『エホ・マ・キー』とやらを再現してみてください
ぬか？」

「かしこまりました。至急、作りましてお持ち致します」

※ ※ ※

しばらくして執務室のアインズ、アルベドのもとにユリとシズが
『エホ・マ・キー』を持参して来ました。ありんすちゃんも一緒です。

アインズは『エホ・マ・キー』を見てふと関西出身のメンバーから
聞いた風習の話を思い出しました。

（確か長い巻き寿司を家族揃って無言で食べる風習だったかな……あ
れは誰から聞いた話だったか……）

アインズは『エホ・マ・キー』を崩して中身を調べ始めました。玉

子、カンピョウ、シイタケ、キュウリ、そして……梅干し。

「もしかしたら……ありんすちゃんよ、口を開けてみよ」

ありんすちゃんが口を開けると中に梅干しの種がありました。

真相はこうです。ありんすちゃんは『食べ終わるまで一言も喋ってはいけない』と言われた為、梅干しの種が無くならないからまだ『食べ終わっていない』と思い込んで喋れなかった、というわけです。

仕方ないですよ。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なので。から。

069 ありんすちちゃんのバレンタインデー

ありんすちちゃんとはとってもご機嫌みたいです。なんでも今日はバレンタインデーとかいうチョコレートをたくさん食べられる日なんですって。うーん……ちよつと違う気がしますけど……

ありんすちちゃんは第六階層にやって来ました。アウラとマーレにチョコレートをご馳走して貰うつもりですね。

「あれ？ ありんすちちゃんじゃん。え？ ばれんたいんでい？ ……チョコレート？ マーレはわかる？」

「えーと……チョコ、チョコレートなら料理長に……」

どうやら二人共バレンタインデーについて全く知らないみたいですね。仕方ありません。ここは賢いありんすちちゃんが先生になつてバレンタインデーとはなんたるかを教えなくてはいけませんね。

ありんすちちゃんは胸を張りました。

「二人共だめでありんちゅね。バレンタインデーとはバレンタインという神ちゃまがチョコレートをプレゼントしてくれる日なんでありんちゅ」

双子の感心した眼差しを受けてありんすちちゃんはエヘンと得意そうです。

「……うーん……じゃあ、僕達もチョコレート、貰えるのかな？」

おずおずとマーレが尋ねました。

「マーレはありんちゅちゃんにチョコレートあげなくてはならないのでありんちゅ。アウアウもありんちゅちゃんにチョコレートあげるのでちゅよ」

アウラとマーレはよくわかりませんが、ありんすちちゃんにチョコレートを差し出しました。ありんすちちゃんは大喜びです。うまくすればナザリツクのチョコレートを全て独り占め出来るかもしれせん。

ありんすちちゃんは次に第五階層にやって来ました。

「コレハ……アリンス殿、メズラシイ」

「コキユトチュ、今日はバレンタインデーでありんちゅよ」

ありんすちゃんはコキユートスに手を出して催促しました。コキユートスは意味がわからずにきよとんとしました。

「バレンタインデーはありんちゅちゃんにチョコレートをあげなくてはならないのでありんちゅよ。まちやか知らなかったでありんちゅ？」

「グヌヌ……サヨウナ風習ヲシラス、面目ゴザラヌ。チョコレートトハ一体？」

ありんすちゃんは先程アウラ達から貰ったチョコレートを見せました。コキユートスはシモベの雪女郎達にチョコレートを持って来させるとありんすちゃんに渡しました。

両手一杯のチョコレートを手に入れたありんすちゃんは自分の階層に戻り、一人で全部食べる事にしました。

うーん……本当はバレンタインデーってそんな風習じゃないと思います……ま、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子ですから仕方ありませんよね。ありんすちゃんにとって大満足な一日だったみたいです。

※ ※ ※

「……バレンタインデーですか？……なにやら女性が男性にチョコをプレゼントするとかいう人間共の習慣ですな。……私が女だったらアインズ様に差し上げるのだがね。……おや、誰か来たみたいだね？」

ありんすちゃんはデミウルゴスからもチョコレートを貰おうと第七階層にやって来ました。両手一杯のチョコレートを持って。

ありんすちゃんは一旦自分の階層に戻ったのですが、どうやら欲が出てもつとチョコレートを貰おうとやって来たみたいですね。

「これはこれは。ありんすちゃん、バレンタインデーのチョコレートですね。ありがとう。……しかし、女性が男性にチョコレートを贈るバレンタインデーをよく知っていましたね」

ありんすちゃんはイヤイヤをしましたが、バレンタインデーを知っ

ていたデミウルゴスには逆らえませんでした。

※ ※ ※

第九階層アインズの執務室——アルベドは少しイライラしていました。先程いきなりやって来たアウラの愚痴をずっと聞かされていたからです。

「ありんすちゃんばかりズルいよね？ あたしだって『ばれんたいんでい』のチョコレートを欲しいんだよね。ありんすちゃんだけって不公平じゃん」

「あのね、アウラ。バレンタインデーっていうのはね——」

アルベドは「女性が好意を持つ男性にチョコレートなどのプレゼントをする習慣なのよ」と言いかけてやめました。アウラ達はそもそもバレンタインデーを知らないか誤解をしているが、確か至高の方々の話題に上がった事もかつてあったのだからアインズ様は知っている筈です。ここでアルベドがアインズにプレゼントをしたら高ポイントを稼げるのではないのでしょうか？

アルベドはアウラが訝しげに自分を見つめているのに気が付くと小さく咳をして話を続けました。

「まあ、そうね。小さい子供の事を羨んでも仕方ないわね。それともアウラはまだまだ子供なのかしら」

途端にアウラは真っ赤になり、あれこれ言い訳しながら出て行きました。残されたアルベドは一人、あれこれと思い悩むのでした。

※ ※ ※

その夜、ナザリック地下大墳墓に戻ったアインズは執務室の扉を開けました。中には花で囲まれたチョコレートの山が置かれています。

「そうか……今日は聖バレンタインデーだったな……」

カードを見るとデミウルゴスからでした。

「……うーん……まさか、その気はないと思うが……単なる好意と受け止めておこう」

次に寝室に行くとなにやら大きな箱があります。リボンがかけられている事からどうやら贈り物みたいです。アインズ番の一般メイドが箱を開けると中に等身大のアルベドのチョコレートが入っていました。

「……これは……!」

チョコレートは全裸だったのでアインズが目のやり場に困っていると、突然、チョコレートはアルベドの目が開き動き出しました。なんとチョコレートはアルベドはアルベド本人にチョコレートでコーティングしたものでしたのです。

「お、落ち着けアルベドよ! ……うわ……ちよ……」

※ ※ ※

第二階層屍蠟玄室——ありんすちゃんのため息をつきました。せっかく集めたチョコレート全てデミウルゴスに持っていかれてしまった事が残念でたまらなかつたみたいです。せめて三月にキャンデーでも貰えると良いですね。

やっぱり欲張らずに程々にしておくべきでしたが……仕方ありませんよね。ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

070 劇場版 ふしぎのくにのありんすちゃん??

ナザリック地下大墳墓玉座の間に各階層守護者が集められていました。守護者統括アルベドが玉座の前で跪き恭しく口上を述べます。「ナザリック地下大墳墓の主にして至高のお方のまとめ役、アインズ・ウール・ゴウン魔導王陛下、第四第八階層を除く守護者一堂御身の前に」

玉座のアインズはアルベドの挨拶に片手を上げて答えると要件を切り出しました。

「さて、諸君。いよいよ劇場版オーバーロード総集編の公開が迫っている。丸山くがね氏の特典小説目当てで前売り状況はなかなか好調のようである。実に喜ばしい事だ」

階層守護者の顔に喜色が広がります。もちろんありんすちゃんも大喜びです。

「しかし、だ。……今回劇場版後編での最大の山場である私、アインズとシャルティアとのバトルシーンを新しく撮影し直す事となった」
「なんと……あれはスタントや吹き替えやCGを使わないガチンコバトルであったはず……そんな事が……」

真つ先にデミウルゴスから危惧する意見が出ました。かのシャルティア戦について一番否定的であったのですからもつともな話です。声に出さないまでも他の階層守護者達も同じ思いのようでした。若干一名を除いては。

「頑張るでありんちゅ」

見るとありんすちゃんやんが既に真紅のフルアーマーを身に纏い、スポイトランスをしきりに振り上げていました。ありんすちゃんはやる気満々みたいですね。

アインズはそんなありんすちゃんを少し憐れみを含んだ目で眺めながら言葉を続けました。

「……ふむ。結構。ありんすちゃんよ、そのやる気は評価したい。しかし、だ。その……今の状態ではちよつとまずいのでな」

「たしかに……今のありんすちゃんでは過去のシャルティアとの繋が

りがありません。これは困りましたね」

アイنزの意を汲んだデミウルゴスが問題を指摘します。そうでした。シャルティアがあらんすちゃんになってしまったのは復活後なのですから、アイنزVSシャルティアの時にあらんすちゃんではまずい訳です。

「くふふふ。皆はまだ気がつかないのかしら？ アイنز様がこれ位の事を見越していなかったと本気で考えているのかしら？」

「……なる程。アルベド、そういう事ですか。さすがはアイنز様。既に手を打っていたとは」

含み笑いをするアルベドに同意して、デミウルゴスが大きく頷いてみせました。

二人を除く階層守護者達は一樣にわけがわからないでキョトンとしています。内心ではアイنزも何のことか全くわかりませんでした。

「どゆことであらんちゆか？ せちゆめいするでんちゆ」

アイنزは鷹揚に頷いて見せてからデミウルゴスを促しました。

「他の者達はまだわからないようだ。デミウルゴス。説明してあげなさい。……あらんすちゃんにも理解出来るように」

「全くもってアイنز様には不可能な事など無いとしか思えませぬ。私めなどは到底至りませぬ」

（お世辞は良いから説明してくれよ……一体どうしたら良いのか……そうだ、アルベドだ。アルベドならば……）

「コホン……では、アルベド。お前から説明してあげなさい。……あらんすちゃんにも理解出来るように」

「そもそも何故シャルティアが復活の折、あらんすちゃんとなつてしまったのか？ ……そこに至ればアイنز様のお考えに至ると思われませぬ」

アルベドは訳知り顔で微笑むと平伏しました。

「……ふむ。……そうか」

アイنزは目を閉じて感慨深く俯くのがやっとでした。デミウルゴスもアルベドも何を言っているのか全くわかりませんでしたから。

「あ！……アタシわかったかも！」

唐突にアウラが叫びました。

「この前、アインズ様はこの二次作品の作者を捕まえて餓食狐蟲王の穴に放り込んでおいたじゃん。あの作者に書き直させたら良いんだね」

「……ウム、ソレハ一体ドウイウ事ナノカ？」

「つまりさー、作者にありんすちゃんが元のシヤルティアに戻る話を書かせたら解決する——」

「わかったでありんちゅ！　ありんちゅちゃんが主役の映画をちゅくれば良いでありんちゅね！」

得意気に説明するアウラを遮ってありんすちゃんが叫びました。

「ちよつとありんすちゃん。アタシの見せ場を横取りしないでくれる？」

アウラが抗議しますがありんすちゃんは全く聞きません。もうすっかり自分の考えに酔ってしまっています。

「アインズ様、如何いたしますか？」

アルベドが困った様子でアインズに尋ねました。次善の案としてパンドラズ・アクターがシヤルティアに成り代わって撮影しても良いのですが、そうなればおそらくありんすちゃんがヘソを曲げてしまう事でしょう。

それはそれで非常に厄介な事態といえました。アインズは目を閉じて絞り出すような声で決断しました。

「……良かろう。ありんすちゃんの好きにさせるが良い。……まあ、所詮は読者も少ない二次作品で映画などありえないのだがな」

※ ※ ※

その後どうなったか、ですって？ありんすちゃんは自分で脚本を書くんだと言って張り切っていました。案の定、ほんの数時間で飽き

て投げ出してしまいました。仕方ないですよ。だってありません
ちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

ちなみに劇場版総集編オーバーロード後編はなんとかあったとか
ならなかったとか……まあ、上映されたら皆さんのご自分の眼で確か
められる事をお薦め致します。

071 ありんすちゃんせがのびる

今日のありんすちゃんはヴァンパイア・ブライドに身長を計ってもらっています。背筋を伸ばして息を止めて、少しでも高くなるうと力んでいますよ。そんなに頑張っても背は伸びないのですが……あれ？ ありんすちゃんつま先立ちでズルをしています。すぐさま見つかってしまいました……まあ、気持ちはわかりますが、それでは身長測定する意味がないですからね。

ギョツと目をつぶっておまじないのように「伸びろ伸びろ」って呟いていますが、効果あるのでしょうか？

ヴァンパイア・ブライドがびっくりした表情でありんすちゃんの耳元で何やら呟くと、途端にありんすちゃんは跳ね回って喜びだしました。なんと、ありんすちゃんの身長が少し伸びたみたいです。

あまりにも喜び過ぎて転んでしまいました。ちつとも痛くないみたいです。そのまま飛び跳ねながらどこかへ行ってしまうました。

※ ※ ※

「あれ？ ありんすちゃんじゃん。随分ご機嫌みたいだけど、何かあった？」

相変わらずに飛び跳ね続けているありんすちゃんがやって来たのは第六階層でした。

「あ、ありんすちゃん。転んじゃうんじゃないかな？ ……その、危ないよ」

明らかに興奮して浮かれているありんすちゃんをアウラとマーレが心配しています。ですが、浮かれて飛び跳ねているありんすちゃんには届かないみたいです。

「背がのびたでありんちゅ！ のびたでありんちゅよ！」

きつといつかはアウラよりも身長が伸びて、かつてのようにアウラの事を『ちびすけ』と呼べるようになるかも知れませぬ。

「……ふーん。でもさあ、アタシだっていつかはおつきくなってバイ

ンバインになるんだよ？」

アウラが口を尖らせて言い返します。

「ありんちゅちゃんもバインバインでありんちゅ！ バインバイン！
バインバイン！」

相変わらず飛び跳ねながらありんすちゅちゃんはどこかに行っていました。

※ ※ ※

「ありんちゅちゃん、背が伸びた！ 伸びたでありんちゅ！」

第七階層を叫びながら走り抜けるありんすちゅちゃんを、呆気にとられながら強欲と憤怒の魔将が見送りました。

どうやら何度か転んでしまったので飛び跳ねるのは止めたみたいです
ですね。

※ ※ ※

第九階層の食堂にありんすちゅちゃんがいました。ありんすちゅちゃんの前には大きなケーキが置かれています。ケーキには『ありんすちゅちゃん 成長おめでとう』とデコレートされたチョコレートプレートが飾られています。

「ありんすちゅちゃん、おめでとう！」

「良かったね！ ありんすちゅちゃん」

食堂にいた一般メイド達も揃って祝福しました。ありんすちゅちゃんは切り分けられたケーキをフォークで刺すとかぶりつきました。あ
らあら。顔が生クリームだらけです。

ケーキは居合わせた一般メイド達にもお裾分けされました。こう
してありんすちゅちゃんの成長をみんなでお祝いしました。

※ ※ ※

ありんすちやんの身長が伸びた話はすぐにアインズにも届きました。

(……これは、アンデッドであっても成長や進化が可能という事なのだろうか？ ……今後のナザリック強化や自身の将来に関わる重大なファクターとなるかも知れないぞ。以前にデスナイトが武技を会得出来ないかという実験が不首尾に終わったが、単にやり方がまずかっただけかもしれない)

アインズは執務室のソファーに深く腰掛けて考えました。と、扉をトントンとノックする音がしました。

「アインズ様、ありんすちやんがお見えになりました」

一般メイドのシクスに許可を出すと、得意そうな表情のありんすちやんが入って来ました。

「アインジュちやま、ありんちゅちゃん来ましたでありんちゅ」

アインズは手を上げてありんすちやんに座るよう示すと優しく声をかけました。

「ありんすちやん。何でも最近身長が伸びたと聞いたが、それは本当かね？」

「背が伸びたでありんちゅ！ 伸びたでありんちゅよ！」

ありんすちやんは興奮しながら答えました。

「素晴らしい！ ……む、感情が抑制されたか……ありんすちやんよ。これはアンデッドの可能性を示す一大事と言えるかもしれぬ。良くやった」

ありんすちやんの顔がみるみる紅潮していきました。今にも爆発しそうな位、得意絶頂な状態です。

「……で、ちなみにどれ位身長が伸びたのかね？」

「……………5ミリ……………でありんちゅ」

「はっ。」

うーん……まあ、ほんのわずかでも身長が伸びたのが余程嬉しかったのでしょう。仕方ありませんよね。何しろありんすちやんはまだ5歳児位の女の子に過ぎないのですから。

072 特別番外編 ルベドでありんす

第一階層の奥にナザリックの精鋭部隊が今まさに出動の時を迎えています。アインズの特命『至高のメンバーを捜索せよ』を実現する為の守護者統括アルベド直属の部隊——アルベド、パンドラズ・アクター、ルベド、さらにアインズ謹製のレベル90台のシモベ達が揃っている様はなかなか壮観ですね。

「守護者統括殿、一つばかり質問があるのですが、よろしいですか？」

パンドラズ・アクターが仰々しく挙手しながら発言しました。アルベドは投げやりな様子で許可を出すとパンドラズ・アクターは大げさに胸をそらして疑問をぶつけました。

「その……なんと申しますか……ルベド殿はルベド殿ではなくありんすちや——」

パンドラズ・アクターの質問が終わる前にアルベドとルベドが叫びました。

「ルベドよ！ 紛れもなく!!」

「ルベドでんちゅー!」

そこにはこの件に関する他者の意見を抹殺するかのような明確な意志が込められていて、質問を許さない圧力がありました。

「……他に何かあるかしら?」

「……アリマセン」

すっかり意気消沈したパンドラズ・アクターは大人しく引き下がるしかありませんでした。客観的にはパンドラズ・アクターの指摘は正しいでしょう。明らかにルベドはありんすちやんと同一にしか見えません。しかしながらこのプロジェクトに於いてはプロジェクトリーダーたるアルベドに全権があり、アルベドと自称ルベド本人がルベドだと断言する限り否定する事は不可能でしょう。

重い沈黙を破ってルベドが口を開きました。

「アルベド、目的はなんでありんちゅか?」

アルベドは小さいルベドを諭すかのように答えました。

「アインズ様の勅命を受けて他の至高の方がこの世界にいないか探す事が私達に与えられた任務よ。……そして、それは他の守護者達にも秘密に行わなくてはならないの」

アルベドはメンバーを見回してから言葉を続けました。

「まずは……そうね。至高のお方の情報を探す事が必要ね。漠然と探すよりも誰かしら絞って探した方が良いかしら？」

「それならペロロンチーノちゃまの行方を探するのが良いでありんちゅ」

「ふむ、確かにペロロンチーノ様はアインズ様とも特に仲が良かったのでしたね。私も是非、見つけて差し上げるべきかと」

ルベドの案にパンドラズ・アクターも同意するのです。

アルベドは少しばかり考え事をしてから結論を出しました。

「良いでしょう。まずはペロロンチーノ様の情報を優先して集めてみましょう」

アルベドは静かに夢想し始めるのです。

『よくやった。アルベドよ。まさに私の願いを叶えてくれた。』

『……畏れ多いお褒めの言葉。これも守護者統括たる務め。当たり前前の事に御座います』

『私の前で謙遜はいらぬ。私にとってお前は唯一無二の存在なのだ』

『ああ……アインズ様。このアルベドは身も心もアインズ様、いいえ、モモンガ様に捧げております』

『お前の忠義、嬉しく思う。アルベドよ。そしてお前の全てが私の物だと言うのであれば、この私の全てはお前の物だ』

アインズは強くアルベドを抱きしめて――

「――ベド？ アルベド？ ……どうちたでありんちゅか？」

いつの間にかアルベドは妄想の世界をさまよっていたようでした。心配そうに覗き込む小さな妹――ルベド――をわざとらしく咳払いでごまかしながら言葉を続けるのです。

「ゴホンゴホン。さて、それではペロロンチーノ様の情報を集める為

のアイデアを出していきましようか」

ありん——ルベドがすぐさま手を上げました。

「ペロロンチーノちゃまはエロエロ大王とも言われてまちたでありんちゆ。『えろげ』なる物で誘うと良いでありんちゆよ」

「ふむ。『えろげ』とは……確か『あだるとげーむ』とかいう物でしたな。私の管理する宝物庫には残念ながらありませんね」

パンドラズ・アクターの言葉にアルベドはため息をつきました。

「残念ね。私も『あだるとげーむ』という言葉が何を指すのかはわからないわ。至高の方々の何人かはお持ちだったようだったけれど……」
「ペロロンチーノちゃまは『えろげ』でぶくぶく茶釜ちゃまの声でなえた、とかおっしゃっていまちたね。積んだりする物だとも……」

「——という話をありんちゆちゃんから聞いたでありんちゆ」

ルベドは慌てて言い足しました。あくまでもここにいるのはありんすちゃんではなくルベドなのでした。たとえ少しばかり共通点があるとしても……

※ ※ ※

「大変つす！ どうやらありんすちゃんが お亡くなりみたいす！」

突然、ルプスレギナが飛び込んで来ました。あり——ルベドは目をまん丸に見開いて驚いています。

「ありんちゆちゃん死んでしまったでありんちゆか！」

ありん——えっと……ルベド役のありんすちゃんの目にみるみるうちに涙が溢れてきました。

「うわーん！ ありんちゆ、ヒック、あり、ありんちゆちゃん死んぢやっただんちゆ！ うわーん！」

ありんすちゃんはとうとう泣きながらかけ出して行ってしまいました。

うーん……ありんすちゃんは死んでいないと思いますが……仕方ないですね。何しろありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子に過ぎないのですから。

073 ありんすちゃんへのいぼんないちにち

ありんすちゃんが珍しくアルベドといいます。アルベドから大きな荷物を受け取ってスキップしながら自分の階層に帰っていききます。とはいってもありんすちゃんの場合には右足右足、左足左足と交互に出しているだけなのでスキップになっていませんが。

さて、ありんすちゃんのお家の屍蟻玄室を覗いてみましょう。

あれあれ？ さつきまで元気一杯だったありんすちゃんがベッドで寝ています。スッポリ毛布にくるまって頭のとっぺんしか見えませんね。

お昼になりました。ありんすちゃんは……まだ寝ていますね。うーん……。

「こんちはー。ありんすちゃん、いるかな？」

元気良くアウラがやって来ました。ありんすちゃんは頭までスッポリと毛布をかぶったまま相変わらず寝たままです。

「今日のお昼はカレーライスだって。早く食べに行こう。ありんすちゃん？」

ありんすちゃんは相変わらず無反応です。アウラはしばらくありんすちゃんを誘っていました。諦めて一人で行ってしまいました。部屋に残されたありんすちゃんは身動きひとつしないで寝ています。うーん……少し寝過ぎではないでしょうか？

夕方になりました。ありんすちゃんは相変わらず頭までスッポリ毛布をかぶって寝ています。

「ありんす様、起きていらっしやいますか？」

今度は戦闘メイドのユリ・アルファがやって来ました。ユリはベッドを見下ろして腕組みをしました。

「さて、いい加減に起きませうね？ ……起きないとボク、私が叱られてしまいますから」

ユリは強引にありんすちゃんから毛布を剥がします。あれ？ よく見るとありんすちゃんは本物ではなくて編みぐるみの身替わりみたいですね。

「さあ、ありんす様。起きましようね」

ユリはありんすちゃん本人だと思い込んでいるみたいです。ありんすちゃんの肩に手をかけて引き起こしました。

「……………」

当然ながら編みぐるみのありんすちゃんは無反応です。ユリはまだ眠っていると思い、ありんすちゃんを強く揺さぶりました。

「!!!」

ユリが強く揺さぶり過ぎたからか、ありんすちゃんの頭がポロリと落ちてしまいました。編みぐるみなので継ぎ目が弱かったからでしょう。しかしながらありんすちゃん本人だと思い込んでいたユリは驚きました。

「大変！　ありんす様が——」

「どうしたつすか？　ユリ姉。あんまり慌てると頭が落ちるつすよ」

ユリが顔を上げると、ルプスレギナの覗き込んだ顔がありました。

「ありんす様の頭が——もげて死んじゃった」

「マジつすか？　…………こりや大変つす！」

ルプスレギナは大騒ぎしながら走り去っていきました。

※ ※ ※

大騒ぎするルプスレギナから加速した騒動は結局、ありんすちゃんの等身大編みぐるみだとわかり終局しました。

ありんすちゃんも今ではニコニコしています。良かったですね、ありんすちゃん。

その夜、アルベドに直してもらったありんすちゃん編みぐるみを抱きしめてありんすちゃんはぐっすりです。なんでもアルベドからルベドの代役を頼まれた際に報酬としておねだりしたんですって。ようやく編みぐるみが出来上がったので、早速ルベド役を張り切っていただけで身替わりのつもりではなかったみたいですよ。

おやすみ、ありんすちゃん。良い夢を……

074 ありんすちゃんはるがくる

春ですね。だんだんと過ごしやすい気候になって来ました。ナザリック地下大墳墓もポカポカ陽気でみんなのんびりしています。

ありんすちゃんはマーレのハンモックでお昼寝しています。とても気持ち良さそうですね。

おや？ ……ありんすちゃんの頭に花が……？ 一輪の花が生えています。一体どうしたのでしょうか？ ありんすちゃんはスヤスヤ眠っていて、気がついていないみたいです。

しばらくするとありんすちゃんが目覚めました。寝ぼけ眼でボンヤリと周りを見回してからウーンと背伸びをします。それからハンモックから降りるとヨチヨチと歩き出しました。ありんすちゃんの頭の花もユラユラ揺れます。

水がめの水で顔を洗い、タオルできれいに拭きます。第六階層のアウラとマーレの居住区ですが、まるで自分の家みたいに手慣れていますね。

さらにヨチヨチと歩き出すと戦闘メイドのソリュシヤンと会いました。

「おや、ありんす様。アウラ様はどちらにいらつしやるかご存知でしょうか？」

「アウアウは……わからないでありんちゅ」

ありんすちゃんは可愛らしく小首を傾げながら答えました。頭の花がプルンと大きく揺れます。

「……さようですか。では、失礼致します」

ソリュシヤンは丁寧にお辞儀をするとありんすちゃんに背を向けました。

「待つでありんちゅ。ありんちゅちゃんも一緒に探すでありんちゅよ」

ありんすちゃんはソリュシヤンを呼び止めて一緒にアウラを探しに行く事にしました。

「あの……ありんす様。質問があるのですが……」

「なんでありんちゆか?」

ありんすちゃんが頭の花を揺らしながら振り向きました。

「……その、ありんす様はアインズ様の妻の座はもう望んでいないのでしょうか?」

「うーん……難しいでありんちゆね……」

ありんすちゃんは腕を組んで悩みました。かつてシャルティアだった頃にはソリュシヤンが指摘したようにアインズの妻の座をアルベドと争ったものでした。では、今はどうでしょう?

「うーん……アインジュちやまの娘でありんちゆね」

ありんすちゃんは考え考えゆっくりと答えました。

「アインジュちやまのかわいい娘でありんちゆね」

改めて言葉を足してもう一度言いました。

「……残念です。私はありんす様、シャルティア様こそがアインズ様に相応しいと思っておりますので……」

ありんすちゃんはソリュシヤンの言葉に答えずにヨチヨチと歩いていきます。それにつれて頭の花もユラユラ揺れました。

「あれえ? ソーちゃんとありんすちゃんじゃないっすか? アウラ様でも探しに来たっすか?」

木の上から突然声が聞こえてきました。「ほいッ」とかけ声と共にルプスレギナが飛び降りてきました。

「ブヒヤヒヤヒヤ! なんすか、これ? ありんすちゃんの頭に花が生えてるっすけど」

ありんすちゃんは慌てて頭に手をやりましたが、よくわかりません。

「本当です! なんか生えています!」

今頃になってソリュシヤンも気が付き驚いて叫びました。

ソリュシヤンは小さな手鏡を取り出してありんすちゃんに見せます。確かに小さな花がありんすちゃんの頭で揺れていました。もしかしたらさつきからやたらと眠かったり、ヨチヨチ歩きになっていたのはこの花のせいかもしれません。

「ありんすちゃん、引っこ抜いていいっすか?」

ありんすちやんが頷いたので、ルプスレギナはありんすちやんの頭の花を引つ張りました。

「イタタタ……イタいでんちゅー！」

ありんすちやんが痛がるのでルプスレギナは花から手を離しました。

「なんでしたら私が食べてしまいいましようか？」

「……このままでよいでありんちゅー」

よほど痛かったからか、ありんすちやんはソリュシヤンの申し出を拒絶してしまいました。

「これはほつとくと大木になって、面白い事になるっすよ、きつと」

ルプスレギナは他人ごとなので面白がっています。

「そうだ！ きつとアウラ様マーレ様ならなんとかして貰えますよ。きつと」

ソリュシヤンがありんすちやんを励ました丁度その時――

「あれ？ ありんすちやんじゃん。アタシになんか用？」

「ソリュシヤン、ルプスレギナも、こ、こんにちは」

アウラとマーレが現れました。

なんと……二人の頭にもありんすちやんと同じ花がユラユラ揺れていました。

075 ありんすちゃんががんばる

今日のありんすちゃんはいつもとちよつと違います。難しい顔をして、腕を組んでなにやら悩んでいるみたいです。いったいどうしたのでしょうか？

正直な話、悩み事をしているありんすちゃんって少しばかり違和感がありますよね。悩むにしても「今日のおやつは何かな？」とか「今晚のおかずは何かな？」という程度の悩みしか無いような……あくまでもイメージの話ですが……多分、この話を読んでいる全員がそう思っていると思います。

とりあえずありんすちゃんに聞いてみるとしましょうか。え？

……なにに？ ……ありんすちゃんは頑張る事にした。……で、何を頑張れば良いかわからないから悩んでいる、ですって。

……うーん……これは難しいですね。

そもそもありんすちゃん、考え方が間違っていますよね。普通はなにかしら目標があつて、それを叶える為に頑張るものなのですが……まあ、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子ですから仕方ないですよ。

しかし、困りましたね。ありんすちゃんはいったい何を頑張ったら良いでしょうか？

ふと、ありんすちゃんが顔を上げました。なにやら思いついたみたいです。ありんすちゃんはトテトテと駆け出しました。

※ ※ ※

「えー？ 何を頑張ったら良いか、だつて？」

真剣な表情のありんすちゃんにアウラは戸惑っていました。

「あたしにそんな事聞かれてもねー……ありんすちゃんがやりたい事すれば？」

「それが思いつかないでありんちゆよ」

「あの、ええつと……きつとアインズ様なら教えてくれるんじゃない

かな？」

マーレの意見でありんすちゃんの瞳が突然煌めきだしました。そうです。確かに至高の方々の束ね役をされていて、アルベドやデミウルゴスですら遠く及ばないアインズ様ならばきつと悩めるありんすちゃんに道を示してくれるに違いありません。

ありんすちゃんは嬉しそうにトテトテと駆けていきました。

※ ※ ※

「うむ……何か頑張ってみたい、だど？」

アインズは真剣な眼差しでありんすちゃんを凝視しました。

(ふむ。……これはNPCが自ら成長しようとするひとつのモデルケースとなるかもしれない。もし、NPC達が自ら成長出来るならばナザリックにとって実に有意義な事となるが……)

「素晴らしい！ ありんすちゃんよ。……うむ……そうだな……では、アルベドの補佐などどうかな？ 将来ナザリックの運営を任せられる信頼出来る人材は多いにこした事はない」

「わかりましたでありんちゅ。アルベドのお手伝い頑張るでありんちゅ」

真剣な眼差しのありんすちゃんはなんだかいつもと違って頼もしいですね。アインズは満足そうに頷くのでした。

※ ※ ※

アインズの執務室を出たありんすちゃんは真剣な表情で歩いていきます。そしてアルベドの居室を……おやおや？ そのまま通り過ぎて自分の住居がある第二階層に戻って来てしまいました。〈死蝟玄室〉に帰ってくると、ありんすちゃんはいつものようにお風呂に入っ
て……お昼寝してしまいました。

一方、アルベドは自らの居室でありんすちゃんを待っていました。が、ありんすちゃんは来ません。当然ですよ。ありんすちゃんは自

分の屍蟻玄室でお昼寝中なのですから。アルベドは戦闘メイドのユリ・アルファにありんすちゃんの様子を見に行かせる事にしました。しばらくしてユリが戻って来ました。

「……………その……………ありんす様は『明日から頑張る』そうです……………」

うーん……………仕方ないですよ。なにしろありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

076ありんすちゃんどひみつかいぎ

ナザリック第十階層にある巨大図書室——アツシユールバニバルにおいて密かに行われている会合、それが通称『賢人会議』です。

「お集まりの諸兄、本日はまず、我が賢人会議に今回特別に御参加頂きます御方をご紹介致します。……至高の方々のもとめ役であり我がナザリックの絶対的支配者、アインズ・ウール・ゴウン様——からの推薦によりまして参加されるありんすちゃんです」

ありんすちゃんは立ち上がって丁寧にお辞儀をしました。

「では、各員宣誓を。私ティトウス・アンナエウス・セクンドウスはこの集まりでの内容を未来永劫秘匿する事をここに誓います」

「……かいまちゆでありんちゆ」

各司書達に混ざってありんすちゃんも宣誓します。秘密の会議なんてワクワクしますね。

「……ゴホン。前はアインズ様の下着のあるべき方向性について実に有意義な議論が出来ました。ブリーフ派とトランクス派の熾烈な戦い、伏兵のふんどし案、さらには『はかない案』……最終的にボクサーパンツに行き着くまでの徹底した議論が出来ました」

ティトウスは感慨深げに目を閉じました。

「さて……本日の議題ですが……『階層守護者マーレ殿の下着は男ものであるべきか女ものであるべきか』です」

オーと一堂から静かな歓声が上がりました。

「ゴホン……かのナザリック地下大墳墓においても『純潔の乙女』という表現が相応しいマーレ嬢、ゴホン、マーレ殿にはやはり純白のシルクのレース模様のショーツこそが似合うと私は愚考致します」

LV80のオーバーロードの司書の一人、コツケイウスが発言しました。ありんすちゃんはマーレこそが『純潔の乙女』という主張に納得いきませんでした。我慢して黙っています。

すぐさま反対意見が上がりました。挙手をして自らの意見を述べ、機会を得たアウレリウスが重々しく意見を述べます。

「意外性の妙、これこそが我々が目指すべき究極の美ではないでしょうか？ ……私は美少女にしか見えないマーレ殿が実は男である、というそもそもかの創造主である至高のお方、ぶくぶく茶釜様の意図を汲んでこそ最善の案と考えます。よってマーレ殿には男性用のブリーフ、しかも真っ白でG U N Z Eのロゴが入ったものこそ相応しいと考えます」

アウレリウスの意見に賛同する意図を込めてありんすちゃんは手を叩きました。つられたかのように二三人がパラパラと拍手をしました。

「ちよつとよろしいか？」

ウルピウスが手を上げました。

「……アウレリウス殿の意外性が大切という意見は誠に結構。私も重要だと思えます。……が、それが男性用ブリーフが相応しいというのは戴けません。……マーレ殿の顔かたちはまさに天使であるならば、その肌にまとうのは小悪魔たるべき装いこそが相応しい！ ……でーあーるーなーらーばーあー……」

ここで興奮し過ぎたウルピウスがカツと白目を剥いて仰向けに倒れ込んでしまいました。

「……く、黒じや……ガーターベルトに網のすと、きんぐ……」

シモベ達に担がれて退場する際にウルピウスは讒言のように呟いていました。

「同志ウルピウスの執念、実に素晴らしい。その遺志は我らが継ぐ事にしよう」

議長のアイトウスが重々しく言い渡します。

「……では、そろそろ結論を出すでしょう。皆様方はいつものように挙手で多数決を……」

「まちゆでありんちゆ！」

アイトウスの言葉を遮ってありんすちゃんがり立ち上がりました。その瞳には強い意志が満ち溢れ、とても5歳位の女の子には思えないものでした。

「ヘグレーターテレポーターチョン！」

次の瞬間、天井に向かって伸ばされたありんすちゃんの右手には水色地に白の水玉模様のビキニタイプのブリーフがありました。

「これがマールレがはいていたパンツでありんちゅ」

ありんすちゃんはタイトウスにパンツを突きつけて得意そうに笑いました。

※ ※ ※

その後会議は紛糾し、ありんすちゃんは外に連れ出されてしまい、プンスカしていたそうです。まあ、ありんすちゃんは間違っていないなかつたと思いますが、仕方ありませんよね。

※ ※ ※

「——クシユン……」

マールレは不意に寒さを感じてくしゃみをしました。

「ちよつと、マールレ。風邪ならうつさないでよねー?」

一緒にいたアウラが露骨に嫌そうな顔をしました。その時、一陣の風がマールレのミニスカートを翻していききました。

数分間の沈黙が二人の間に過ぎていき——

「……マールレ……あんた変態みたいだよ……」

マールレをジトつとした目で見つめるアウラがぼそりと呟きました。

077 ありんすちゃんチャイナドレスをひろう

いつものようにありんすちゃんは目覚めました。そして久しぶりにくしやみをしました。

「くちゅんー」

とてもとても小さなくしやみでしたが、久しぶりに本当に久しぶりにテレポートしちやいました。

ゴチン!!!

おや？ ありんすちゃんは誰かの上に転移してしまったようです。怪しげなマントを頭からスッポリ被った女のような男のような人がありんすちゃんの下敷きになって気絶していました。

よく見ると怪しげな人は大事そうに鍵付きの箱を抱えていました。ありんすちゃんは箱をもぎ取ろうとしてみましたが、しっかりと抱え込んで放そうとしません。気絶してまで手放すまいとしているのですから、きつと高価なお宝が入っているのかもしれない。

ありんすちゃんはニツコリしながら爪を伸ばして鍵穴に差し込みました。カチャリと音がして箱が開くと中には薄い生地が入っていただけでした。

「これは食べられないでありんちゅね……」

ありんすちゃんはちよつぴりがっかりしましたが、生地を広げるとなかなか可愛いチャイナドレスだったので嬉しくなりました。オマケに何故だかなり魔力が高いマジックアイテムみたいです。

ありんすちゃんがチャイナドレスを着てみるとありんすちゃんのサイズにぴったりになりました。

ありんすちゃんはクルクル回ってみました。足元にスリットがあつてなかなか動きやすく、角がある蛇の模様もなかなか可愛いので気に入りました。それまで着ていたボールガウンをクルクルと畳んでいると、ポケットから一枚の布が落ちました。ありんすちゃんではありません。両手で布を広げると水色地に白の水玉模様のビキニタイプのブリーフでした。

いつの間にポケットに入っていたのでしょうか？　ありんすちゃんには記憶がありませんでしたが、なんとなくマーレのもののような気がするのです。

ありんすちゃんはしばらく考えていましたが、ビキニブリーフを箱に入れて鍵を掛けるとニツコリしました。

ちよつと肌寒くなって来たのでありんすちゃんは上からボールガウンを着ました。今更ながら周りを見回してみましたが、全く見覚えがない場所でした。

「ちよつと探検してみるでありんちゅ」
ありんすちゃんは歩き出しました。

※ ※ ※

ありんすちゃんが立ち去ってしばらくすると気絶していた怪しい人が呻き声を上げました。

「……う、うーん……な、何が起きた？」

すぐさま両手で抱え込んでいた箱を確かめます。大丈夫。鍵が掛かったままでした。彼——女ではなく男でしたが——の使命はこの法国の至宝を無事に届ける事でしたから、安堵のため息をついたのでした。

「はやく神官長様に届けなくては」

男は大急ぎで走り去っていきました。

※ ※ ※

「むう？　……こ、これは？　……いったい？」

土の神官長　レイモンは思わず呻きました。スレイン法国に伝わる秘宝、ケイセケコウクを宝物庫に仕舞う為、箱を開けたのですがその形状が変化していたからです。

「ふむ。……かつての神々の言い伝えでは、始原の魔法が込められし秘宝の中にはその形態を変えるものがあると聞く……よもや現実に

目の当たりにするとは思わなんだが」

水の神官長老ジネディーヌが重々しく口を開きました。

「破滅の竜王の復活、そして百年の揺り返しと思われる強大な吸血鬼の出現と始原の魔法すら行使する魔導王。……時が来たという事か」
「すると……ケイセケコウクが進化してこの姿になったのでしょうか？」

老ジネディーヌにレイモンが問いかけました。

「そうとしか思えぬ。お主も知っているようにこの箱には魔法で鍵が掛けられており、我ら神官長クラスでなければ開けられぬ。しかも、見よ。強大な力を感じるマジックアイテムではないか」

ジネディーヌは水色地に白の水玉模様のビキニタイプのブリーフを広げました。

「G U N Z E……魔法の刻印でしょうか？ ……この進化したケイセケコウクならば魔導王にも使えるのでは？」

「かもしれない。……しかしながら焦りは禁物じゃろう。……まずは神官長会議にて報告すべきじゃな」

箱を再び閉めると二人の男は出ていきました。

※ ※ ※

カチャカチャ……

ありんすちゃんはその部屋を覗いてみると一人の少女がうずくまっています。白と黒の二色に別れた長髪の少女は熱心に小さな箱で遊んでいました。

「なんでありんちゆか？ それ」

ありんすちゃんが尋ねましたが少女は見向きもしないで答えました。

「……ルビクキュー」

「ありんちゅちゃんもやってみたいでありんちゅ」

「……………ヤダ。もう少しで二面そろってから話しかけないで」

なんとということでしょうか？こんなに可愛らしいありんすちゃんが

頼んでいるのに拒否するなんて……とんでもないですよね。

「ありんちゅちゃんもやってみたいでありんちゅー！」

「……………」

今度は無視されてしまいました。おやおや？　ありんすちやんの顔が真っ赤になってきました。このままではありんすちやんが爆発してしまいますよ。

「……………」

と、少女が相変わらずルビクキューを弄りながらあごで部屋の片隅を指しました。なんと、そこにはもう一つルビクキューがあるではありませんか。ありんすちやんは喜んで少女の隣でルビクキューで遊び始めました。

ありんすちやんはしばらく遊んでいましたが、お腹が減ってきたのでナザリックに帰りました。帰りはくしゃみではなくてグレーターテレポーターションでしたが。

その日からしばらくありんすちやんはルビクキューで遊んでいましたが、一面も揃えられずに飽きてしまったそうです。

仕方ありませんよね。ありんすちやんは5歳児位の女の子なのですから。

※ありんすちやんが挿絵を描いてくれました

078 ありんすちゃんあなにおちる

ナザリツク地下大墳墓第二階層 屍蟻玄室、ありんすちゃんの居室です。さつきからありんすちゃんは姿見の前でいろんなポーズをしています。この前にスレイン法国で手に入れたチャイナドレスを着た自分自身の姿に見入っているみたいです。普段と違って髪型もお団子二つに結っていてかわいらしいですよ。

ちよつとばかり前屈みになってパチパチとまばたきしていました。が、多分、ありんすちゃんはセクシーポーズでウインクしているつもりかもしれませんが。

ひとしきりいろんなポーズをとっているうちになにやら思いついたみたいです。屍蟻玄室の扉を開けっ放しにして部屋を飛び出して行っちゃいました。

※ ※ ※

ありんすちゃんは第一階層にやって来ました。いつもなら元気いっぱいに走るのですが、チャイナドレスを着たありんすちゃんは少し落ち着いた様子で歩いて来ます。気分は淑女、といった所でしょうか？ ……もつとも気分だけで、周りの印象はいつものありんすちゃんだと思えますが……

どうやらありんすちゃんが目指しているのは地表のログハウスのようです。なる程、ログハウスならば当番の戦闘メイドがいますからありんすちゃんのチャイナドレスを見せるのはうってつけですね。ログハウスの近くまでありんすちゃんがやってくると、なにやら丸い落とし穴みたいなものがありました。周りをロープで囲って看板まであります。

「んん……んちいりんん……おめか？ でありんちゅ」

うーん……看板には『危険 立ち入り禁止 オメガ』と書いてあったのですがありんすちゃんは漢字が読めなかつたみたいです。まあ、もつとも仮に読めたとしても好奇心旺盛なありんすちゃんが素直に

指示に従ったかどうか疑問に思いますが……

「おもちゃろそうでありんちゅね」

ありんすちゃんは独り言を言うど辺りを見回しました。

周りに誰もいませんから誰の反応もありません。ありんすちゃん
はもつと大きな声で言いました。

「おもちゃろそうでありんちゅから入つてみるでありんちゅ」

ありんすちゃんはまた周りを見回しました。もちろん何の反応も
ありません。

「おーもーちーろーちよーでーあーりーんーちゅーねー！ はー
いーつちやーうーでーあーりーんーちゅー!!」

ありんすちゃんは大きな声で叫びました。何かとログハウスか
ら誰かが飛び出して来ました。

「ちよ、ちよつと待つつすよ！ ……そこはオーちゃんが危険が危な
いって言つていたつすよ！」

ありんすちゃんはルプスレギナの慌てる様子を見てようやく満足
そうに笑うと落とし穴に飛び込みました。

——と、同時に——

ありんすちゃん「!!!」

ルプスレギナ「!!!」

オーレオール「え？」

男「使え！」

シャルティア「くっ!!」

カイレ「な？」

——凄まじい閃光と衝撃が起こり、様々な事態が一斉に起こりまし
た。

「……大変つす！ なんか大変な事が起きたつす！」

ありんすちゃんの姿はどこにもありませんでした。後にはルプス

レギナと慌てて周囲に撒き散らしてしまったポテトチップスが残されてしまいました。

「……ルプス姉さん、大変です。どうやら次元の狭間が生じてしまったみたいですよ」

「オーちゃんつつすか？　ありんすちゃんが消えちゃったつす。……あー！」

「どうしましたか？」

「ポテトチップス全部こぼしちゃったつす!!」

「プレイアデスの末妹、桜花領域守護者のオーレオール・オメガはルプスレギナに対し冷静に指示を出します。」

「ヘルプス姉さんはシモベ達にこの空間の狭間を警戒して下さい。私はアインズ様に報告して対策を練ります。ありんすちゃんはきつと連れ戻します」

「了解つす」

「ナザリック地下大墳墓ではこれから総力を上げてありんすちゃんの帰還を目指す事になりました。一方、ありんすちゃんはどうなったのでしょうか？」

「……びっくりしたでありんちゅ」

「ありんすちゃんは周りを見回しました。さっきまであったログハウスもルプスレギナの姿もありません。どうやら落とし穴の発動に驚いてグレーターテレポーターションを発動させてしまったのかもしれない。」

「ふと、ありんすちゃんは自分が誰かの上に座り込んでいた事に気が付きました。なんと、ありんすちゃんと同じチャイナドレスを着たシワシワのお婆さんが倒れていました。どうやらありんすちゃんはこのお婆さんの上に落ちてきてしまったみたいです。」

「……ちんできているみたいでありんちゅ」

「そういえばありんすちゃんが落ちた時にありんすちゃんのチャイナドレスの竜の模様が光ってなにやら魔法が発動したような気がします。もしかしたらありんすちゃんも魔法を使い過ぎるとシワシワのお婆さんになってしまいかもしれません。」

「……シワシワになりたくないでありんちゅね」

ありんすちゃんは今程強大な魔力の放出が着ているチャイナドレスから起きた事から、このまま着続けているところのお婆さんみたいにシワシワになってしまおうに違いないと思いました。

「帰ったらチャイナドレスはしまおう事にちまちゅか……」

ありんすちゃんは残念そうにチャイナドレスを着た自分自身を見下ろしました。と、不意にメッセージが聞こえてきました。

「……ちゅちゃん、あーりんすちゃん……聞こえますかー？」

なんと、桜花領域守護者のオーレオール・オメガです。

「……ありんちゅちゃんでありんちゅ」

「……良かった！ ええと、ですなー今から私の座標にテレポーションを試して下さい。多分、次元の狭間が閉じる前ならナザリックの時空間に戻るはずですよ」

「……わかりましたでありんちゅ！」

ありんすちゃんは「グレーターテレポーション」を発動させました。と、次の瞬間、ありんすちゃんはナザリック地下大墳墓の入り口のログハウス側にいました。

「良かったわ。無事にありんすちゃんが戻ってきて……アインズ様のお留守に問題を起こしたくないものね」

「おかえりー。良かったねーもう少しで大変な事になる所だったんだよー」

ありんすちゃんをアルベドとアウラが出迎えてくれました。とりあえずありんすちゃんは疲れていたその日は休む事にして、屍蟻玄室に帰りました。

チャイナドレスは魔封じの箱に入れてベッドの下にしまったそうです。何はともあれ良かったですね。もう少しでありんすちゃんの話が終わる所でしたから。

おやすみ。ありんすちゃん。

079 ありんすちゃんプーさんになる

ありんすちゃんは今日もヴァンパイア・プライドに抱っこされて階層の巡回をしています。

「……プスウ……」

何やら妙な音がしました。

「……プー……プー……プー……」

ヴァンパイア・プライドの歩みに合わせて変な音が続きました。ありんすちゃんは二人のヴァンパイア・プライドの顔を代わる代わる見ました。二人ともブルブルと顔を振って否定します。

ありんすちゃんは不満足そうでしたが、それ以上追求しませんでした。

お昼になり、ありんすちゃんが本日のスペシャルメニューのトリプルチーズバーガーにかぶりついた時にまたもや「プププスウー」という音がしました。

すぐさまありんすちゃんは周りを見回してみましたが、誰もいません。そこにはありんすちゃんだけで、他には離れた席に一般メイドが三人いるだけです。

「プププププー」

突然、ありんすちゃんのすぐ近くで音がしました。一般メイド達が遠巻きにありんすちゃんを見つめていました。ああ、なんという事でしょう？ 彼女達はきつと今の音がありました。ああ、なんと思っっているに違いありません。ありんすちゃんは知らず知らず顔が赤くなつていくのを感じました。仕方なく食事を止めてそそくさと食堂を出て行くのでした。

第二階層屍蠟玄室のありんすちゃんの部屋のベッドに仰向けになつて天井を眺めながら、ありんすちゃんは考え事をします。

時折、「ププー」と音がします。この部屋にはありんすちゃんしかいませんから音はありんすちゃんからしていると思えません。

ありんすちゃんは真つ赤になつて恥じらうのでした。

「このままではプーさんになつてちまうであります」

ありんすちゃん昨日ルプスレギナから聞いた『くまのプーさん』という話を思い出すのでした。

『くまのプーさん』とは……

※ ※ ※

「ありんすちゃんは知っているっすか？ 『くまのプーさん』の話」

ありんすちゃんは首をブルンブルンと振りました。

「うーん……知らないなら幸せかもしれないっすね。……じゃあこの話はおしまいっす」

ルプスレギナは唐突に話を打ち切りました。しかしありんすちゃんは気になって仕方ありません。

「……やめた方が良いっす。ありんすちゃん夜トイレに行けなくなっても知らないっすよ？」

「いいから話すでありんちゅ」

ありんすちゃんに促されてルプスレギナは話始めました。

「あるところに熊の男の子がいたっす。ある日男の子は友達のおやつをこっそり食べちゃったっすよ。それ以来男の子はオナラが止まらなくなったらしいっす。皆は男の子を『くまのプーさん』って呼んで馬鹿にしたらしいっす。そのうちお腹のガスが溜まり過ぎて……」

ルプスレギナはそこで口を閉じました。

「どうなったでありんちゅ？」

ルプスレギナは意地悪そうな笑いを浮かべました。

「ドツカーン！ ……って爆発しちゃったっすよ。……馬鹿っすね。オナラが止まらなくなった時にあることをすればたすかっ……」

丁度その時にルプスレギナを呼びにシズが来たので話はそこで終わったのでした。

ありんすちゃんは立ちあがると裸になって姿見に自分の姿を映してみました。心なしかお腹が膨らんでいるみたいです。オナラは相変わらず止まりません。泣きそうになりながらありんすちゃんはルプスレギナを探す事にしました。

第一階層からログハウスにやって来たありんすちゃんはルプスレギナがいないか尋ねましたが、残念なありませんでした。

次に第六階層に行くとアウラとマーレがいたので尋ねてみました。アウラは一瞬怪訝な表情をしましたが、ありんすちゃんのただならぬい様子に気がつくとう優しく語りかけました。

「あのさ、ありんすちゃん。ルプスレギナを探しているのはどうしてなのかな？ 良かったらあたしに話してみなよ」

「ありんちゅちや、プーさん、プーさん……ありんちゅちや、ぼくはちゅ、ヒック……」

アウラの優しい言葉に気持ちが悪くなったのか、ありんすちゃんはとうとう泣き出してしまいました。アウラはありんすちゃんを優しく抱き抱えてあげました。

「いるんでしょう？ ルプスレギナ、もういい加減にしときなよ？」

「なんだ、やっぱり気付かれていたっすね。ちよつとした可愛いイタズラっすよ」

不可視化を解除したルプスレギナが姿を現しました。ありんすちゃんは事態がよく解らさずきよとんとしています。実はありんすちゃんの止まらないオナラはすべてルプスレギナのイタズラだったのです。

そもそも『くまのプーさん』なんて話もすべてルプスレギナのもまかせだったのでした。何はともあれありんすちゃん、無事で良かったですね。

080 ありんすちゃんねぼける

ナザリック地下大墳墓第六階層に朝が来ました。マールはハンモックの中で目覚めてうーんと伸びをしました。するとハンモックに他の誰かがいることに気がつききました。

なんと、ありんすちゃんがマールに寄り添うようにすやすやと寝息を立てています。

「あ、ありんすちゃん？ ……あ、あれ？ どうして？」

マールは混乱しました。どうやら夜中にいつの間にかありんすちゃんがマールのハンモックに潜り込んで来たようです。

「んー……おはよー」

寝ぼけ眼をこすりながらやって来たアウラがマールに声をかけます。と、ありんすちゃんがいることに気がついて目を丸くしました。

「あれ？ ……ありんすちゃんじゃん？ えっ？ ……なんで？」

何故かアウラの脳裏にはマールとありんすちゃんが結婚式をあげる光景が浮かびました。そしてウエディングドレスを着たありんすちゃんがアウラに『お姉ちゃま、よろちく』と挨拶を……

「いやいやいや、そんなのあり得ないから……マ、マール？ あんた一体？」

「違うよ、お姉ちゃん。僕も何がなんだか……」

何が違うのかはわかりませんがマールは慌てて首を振りました。アウラはジトつとした視線を相変わらずマールに向けています。

「う、うーん……うるちやいでありんちゆ。 ……まだ寝ているでちゆよ」

啞然とする双子の前でありんすちゃんはマールの毛布をかぶって再び寝息を立て始めました。

※ ※ ※

「……うむ。それはなかなか興味深い話だね。なるほど、なるほど」

アウラの話聞いていたデミウルゴスはいかにも楽しそうに言い

ました。アウラにはなにがなにやらわかりません。デミウルゴスはそのようなアウラの表情に気がつくと言葉を続けました。

「これはまだ推測の域を出ないのだけど、マーレとありんすちゃん二人は特別な関係かもしれないね」

アウラの脳裏にはまたしても二人の結婚式の光景が浮かびました。

「アウラ、君は姉として二人の恋を暖かく見守っていくべきだね。……しかしながらNPC同士のカップリングとはね……全く盲点でしたよ」

※ ※ ※

「アウラ、デミウルゴスから聞いたのだけれど……シャルティア、いえ、ありんすちゃんが貴女の義妹になるんですって?」

アウラが振り向くと守護者統括のアルベドが慌てた様子でいました。若干興奮気味で紅潮したアルベドは続けて言いました。

「早速、マーレとありんすちゃんとの結婚式をあげるとしましょう。こういう事は急いだ方が良いと思うの。仲人にはアインズ様にお願いしたら良いわね。私もアインズ様に付き添って、まるで妻みたいで誤解されてしまうかも……いいえ、どうせならば私とアインズ様の結婚式も一緒に……」

「結構です」

このままこの話が大きく広がってアインズ様の耳に入ってしまうと大変です。アウラはなんとかしなければ、と思いました。

※ ※ ※

第六階層のアウラの住居にありんすちゃん、アウラ、マーレが集まっています。アウラは少し緊張気味です。アウラに脇をつつかれたマーレが口を開きました。

「あ、あの……その……ありんすちゃんは、ぼ、僕の好きなのかな?」
マーレからの質問にありんすちゃんは可愛らしく小首を傾げなが

ら答えました。

「うーん……好きでありんちゆね」

「じゃ、じゃあ、その……僕と結婚……」

「結婚ならアインジユちやまとでありんちゆ。マーレはおこちやま
ちゆぎまちゆね」

アウラは思わずありんすちゃんに叫びました。

「えー……じゃあなんでマーレのハンモックにいたのよ？」

「マーレは……焼きたてアップルパイの匂いがするんでありんちゆ」

ありんすちゃんの予想外の答えに双子は呆れてしまいました。仕方ありませんよね。ありんすちゃんは5歳児くらいの女の子に過ぎませんから。

※ ※ ※

翌朝、ハンモックで目覚めたマーレはまたしても隣に誰かが寝ている事に気がつきました。もしかしたらまたありんすちゃんが来ているのかもしれないね。起き上がったマーレは思わず叫びました。

「お、お姉ちゃん？」

081 ありんすちゃんとお風呂

今日もありんすちゃんは自分の階層の見廻りを早々と終えてお風呂でくつろいでいます。浴槽に泡を満たして、お気に入りのアヒルを泳がせながら思いました。

大好きなお風呂をずっと楽しむ事が出来たらとても素晴らしいのに、と。そしてありんすちゃんは閃きました。そうです。いつそのこととお風呂で生活したら良いのではないのでしょうか？

思い付いたら即実行です。シモベ達を浴槽の周りに集めてありんすちゃんは宣言するのです。

「これからありんちゅちゃは、お風呂から出ないでありんちゅ」

シモベ達は大混乱です。いつものありんすちゃんの気まぐれだとは思いましたが、いろいろと問題がありそうでしたから。

「あ、あの……巡回はどうなさるのでしょう？」

おずおずと遠慮がちにヴァンパイア・ブライドが尋ねました。

「やめるでありんちゅね」

ありんすちゃんは即答しました。それを聞いてシモベ達は真つ青になりました。階層の巡回は至高のお方から命じられた仕事です。それを簡単に放棄するとなればただでは済みません。なんとかありんすちゃんを宥めないと大変な事になってしまうでしょう。

「では、あの……湯船に入ったまま巡回するのは如何でしょう？ ソウルイーターに馬車を着けてそこに浴槽を乗せればお風呂に入りながら巡回出来ます」

ありんすちゃんは悩んでいるみたいでした。シモベ達は必死です。なんとしても主であるありんすちゃんを言いくるめなくてはなりません。

「それでは馬車を花で飾りましょう。湯船にも花びらをたくさん浮かべましょう。きっと素敵だと思いますよ」

ヴァンパイア・ブライド達は交互にありんすちゃんを説得しました。そのうちにありんすちゃんもその気になってきたみたいです。

「それはなかなか良さそうでありんちゅね。わかったでありんちゅ」

シモベ達は皆、ホツと胸をなでおろしました。とりあえずなんとか巡回はこれからも続けてくれる事になりました。

ありんすちゃんがお風呂で暮らし始めてすぐに一つの問題が起きました。それはお風呂の温度を保つ事でした。最初は第七階層から溶岩を運んでいましたが、思いの外の重労働なものと、運ぶ際に床を焦がしたり、火傷をするシモベが続出したりでうまくいきません。

最終的には釜を作り、そこにエルダーリツチが並んでファイヤーボールを撃ち込む事でなんとか解決しました。

さらに大変だったのはありんすちゃんがお風呂で寝ると言い出した時でした。さすがにお湯に浸かったままで寝る事は思いとどまってもらい、お湯を抜いた浴槽に布団を敷いて寝る事になりました。

やがて、ありんすちゃんがお風呂で暮らすと宣言して一週間が経ち——ありんすちゃんは結局元のようになり戻っていません。なんでもお風呂でアイスクリームを食べていたらうっかり湯船に落としたりしたからやめたんですって。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子ですから。

082 ありんすちやんとオツパイ

ナザリック地下大墳墓第九階層——ありんすちやんが誰かを探すかのようにキョロキョロしながら歩いています。どうやら誰かに用事があるみたいですね。

「これはこれは……ありんすちや、様では」

ありんすちやんが振り返ると戦闘メイドのユリとシズがいました。ありんすちやんは二人を交互に眺めてから小さく呟きました。

「ま、これくらいで我慢するでありんちゆか……」

「な、なにを!?!」

思わずユリは叫びました。ありんすちやんがいきなり両手でユリの胸をわしづかみにしたからです。ありんすちやんは両手をわきわきさせてユリの胸を揉み始めました。

「ありんす様?… 一体なにを?」

ありんすちやんはユリの胸を揉んだ手を自分の胸に当てます。

「これでよし」

ありんすちやんは満足したように頷くと、トテトテと駆け出しました。

「ありんす様ー? ボクの胸をなんでー?」

ユリはありんすちやんに問いかけましたがそのままありんすちやんは走り去ってしまいました。

※ ※ ※

次にありんすちやんが姿を見せたのは第六階層でした。

「おやー? ありんすちやんじゃん。あたしに用かな?」

アウラがありんすちやんに声を掛けましたが、ありんすちやんは無言でアウラの胸元をじつと見ています。やがて小さく「プツ」と笑うとトテトテと走り去っていきました。

「うーん……なんか感じ悪い」

※ ※ ※

アルベドはアインズの部屋のベッドの中で思い出に浸っていました。ナザリック地下大墳墓の玉座の間でアインズがアルベドに触れてよいかと尋ねた時の事を——そして「構わないな？」と力強く言いながら胸に手を伸ばして——

「モミモミモミ……」

アルベドが我に帰るといつの間にかありんすちゃんがいいて、アルベドの胸を両手で揉んでいました。ひとしきり揉み終わると今度は自分の胸を触ります。

「ちよ、ありんすちゃん？ ……あんた……」

※ ※ ※

「オツパイが大きくなるおまじないでありんちゅ」

アインズの執務室に連れてこられたありんすちゃんは胸を張って答えました。アインズは子供のする事と笑って済ましたかったのですが、いかんせん被害者がたくさんいすぎました。ここは穏便に解決しなくてはならないでしょう。

アインズは考え考え言葉を絞りだしました。

「ありんすちゃんよ。私はお前の創造主のペロロンチーノさんとは仲が良かった。おそらくパンドラス・アクターを除けばありんすちゃん、つまりシャルティアについて一番詳しいかもしれない」

ありんすちゃんは神妙そうな表情でアインズの言葉に耳を傾けています。

「ある日、ペロロンチーノさんが酷く愚痴をこぼしていた事があった。その時、ペロロンチーノさんははつきりと言った。『オツパイなんて飾りです。エロい人にはわからないのです』と。そして更に『貧乳はステータスだ。稀少価値だ』とも」

ありんすちゃんの顔はみるみる明るくなっていきました。

「無理に背伸びする事はペロロンチーノさんも望まないだろう」

「わかりました……」

ありんすちゃんはアインズに向かって深々とお辞儀をしました。アインズはほっとしました。どうやらこれで無事に解決出来たみたいです。

※ ※ ※

ちなみに翌日、アウラとマーレからありんすちゃんが胸を撫でに来るといふ苦情があがったそうです。まあ、ありんすちゃんは5歳児位の女の子ですから、仕方ありませんよね。

083 ありんすちゃんとからっぼのヨロイ

今日のありんすちゃんはナザリツクの地表部に建てられたログハウスにいました。忙しそうにしている戦闘メイド——今日はソリュシャンとエントマがいましたが——にお構い無しに、窓に顔をつき出した格好でうとうとしています。

「どうでもいいんだけど、ここはあ、託児所じゃあないんだけどおー？」

エントマがありんすちゃんに聞こえるように愚痴を言いましたが、ありんすちゃんは自分の事を言われたとは気づかないみたいです。気持ち良い春のポカポカとした日射しにありんすちゃんはうつらうつらしています。

と、鼻がムズムズして……

「くちゅんー」

小さなくしやみと共にありんすちゃんの姿が消えてしまいました。

※ ※ ※

気がつくとありんすちゃんは狭い所にいました。どうやらテレポーテーションでどこかに移動してしまっただけですね。窮屈な中で懸命にもがいているとピヨコンと頭が外に飛び出しました。周りを見回すとどうやら洞窟のようでした。

「綺麗な剣でありんちゅね」

洞窟の壁には大きくて綺麗な飾りが一杯ついた剣が飾られていたので、つい、ありんすちゃんはため息をつきました。きつとありんすちゃんはこの剣の持ち主になる為にテレポーテーションしたに違いありません。偶然たまたまテレポーテーションしたら剣があった、なんていう夢のない話では無いと思います。多分。

ありんすちゃんは剣に手を伸ばそうとしましたが、頭を出している

場所の他に出口が無いみたいで手を出すことが出来ません。すぐ近くに綺麗で素敵な剣があるのに手が届きません。こんな素敵な剣をアインズ様にプレゼントしたらきつとアインズ様は大喜びしてくれるでしょう。ありんすちゃんは身体ごと倒して剣の側まで転がる事にしました。

「ゴオオオンー！」

ありんすちゃんが倒れると大きな音がしました。なんという事でしょう。ありんすちゃんが入っていたのは金属製の鎧でした。そして——ありんすちゃんは今まで気がつきませんでした。剣のすぐ下に白金の鱗の竜がいました。白金の竜はゆつくりと起き上がり辺りを見回します。

きつとあの剣の番をしている竜王に違いありません。戦えばおそらく勝てない相手ではなさそうですが、今のありんすちゃんは鎧にはまっっているで文字どおり手も足も出ない状態です。

(……これはみちゆからないようにちないといけないでありんちゆ) ありんすちゃんはほつぺたを膨らませて鎧のような顔をしました。「なんだ……君か。ずいぶん久しぶりだね。まだ冒険者をしているのかい?」

「冒険者はどうに引退したさ。代わりにインベルンの泣き虫に任せて、じゃな」

いつの間にか白金の竜王の隣に老婆が来ていて、仲良さそうに話をしています。

「彼女を泣き虫呼ばわりするのは君位のものだよ。……しかしまあ、よく冒険者になる事を認めたものだね?」

「簡単さ。ちよつとばかりボコボコにやつつけてやったのさ」

老婆はニヤリと笑いました。

「そうか。それは彼女にとっては大良かったかもしれないね。……魔王との戦いでは彼女にも世話になったから幸せになって欲しいものだね」

「……ふん。それは難しいじやろうて。魔王との戦いで儂と一緒に戦った仲間はお主ではなくてあそこに転がっている空つぽの鎧だっ

たがの」

二人はじつとありんすちゃんを見つめました。ありんすちゃんはさらにほっぺたを膨らませて鎧の真似をします。

ありんすちゃん渾身の演技で二人共ありんすちゃんの存在に気がつかないようです。

「……昔の事さ。それに別に騙そうとした訳じゃない。」

白金の竜王の言葉を老婆は聞き流して尋ねた。

「激しい戦いじゃったみたいじゃな？ ……これも揺り戻しかの？」

老婆の鋭い視線は鎧に大きく開いた穴から顔を出しているありんすちゃんを居抜きました。ありんすちゃんは更に更にほっぺたを膨らませて鎧の真似をします。

「それはどうか……確かに強大な力を持った吸血鬼だったけれど。邪悪な存在なのは間違いなみみたいだった」

「お主が全力で戦えば勝てない相手はいないじゃろうて」

白金の竜王はありんすちゃんをじつと見つめながら答えました。

「ところで君に渡した指輪はどうしたのかい？」

「あんなもの、小僧めにくれてしまったわ」

老婆の答えを聞いて白金の竜王は少し悲しそうな顔をしました。が、ありんすちゃんは鎧の真似で必死な為、気がつきませんでした。さすがにほっぺたを膨らませ続けてきたありんすちゃんも我慢出来なくなってきたので――

「へテレポーテーチヨン」でありんちゅー！」

初めてありんすちゃんの存在に気がついた白金の竜王と老婆の驚く顔がぼやけ……ありんすちゃんはナザリツクの入り口に戻ってきました。

「おちっこー！」

そして――ありんすちゃんは大急ぎでお手洗いに向かうのでした。仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

084 ありんすちゃん07211919

ポカポカとした穏やかな昼下がり、ありんすちゃんとアウラはナザリック地下大墳墓の第六階層にある山小屋でのんびりとお茶をしていました。ありんすちゃんはアップルティーに角砂糖を三ついれて、ちよつと悩んでからもうひとつ入れました。

「やっぱりちやとうはよつちゆ、でありんちゆね」

ありんすちゃんはカップをすすると満足そうに言いました。

「……うーん……そうだね」

アウラが相づちを打ちましたが、なんだか上の空みたいです。

「アップルティーだとケーキが食べたいでありんちゆね。ありんちゆちはモンブランがしゆきでありんちゆ」

「……うーん……そうだね」

どうやらアウラはありんすちゃんの言葉を聞き流していただけないですね。それもそのはず、アウラはさつきからアインズ様に頂いたぶくぶく茶釜様の声が入ったバンドをうつとりしながら眺めていたのです。

ありんすちゃんだって、アインズ様からペロロンチーノ様の百科事典を頂いたのですから羨ましくなんてないですよ。ね？

ニヤニヤと笑みが崩れているアウラをじつと羨ましそうに眺めていたありんすちゃんはアウラに尋ねました。

「ちよう言えばアインズジュちゆまがタイマーをセットしないように言つてた時間があるんでありんちゆよね？」

「うーん……たしか0721と1919にはセットしちやいけないつてアインズ様に命じられているよ」

ありんすちゃんの瞳がキラーンと光りました。

「ちよのしゆうじ、きつと意味があるんでありんちゆよ」

「うーん……でもアインズ様から命じられているからね。やめておくね」

「ちよういえば……この前変な箱をみちゆけたでありんちゆ」

ありんすちゃんは最近、屍蠟玄室の奥で見つけた謎の箱の話をしま

した。頑丈で鍵がかかっており、どうやらテンキー部分で暗証番号を入力しないと開けられないみたいです。

「へー。面白そうだね。もしかしたら07211919で開いちやつたりするかもね?」

ありんすちやんとアウラは屍蠟玄室で見つけた箱を開けてみる事にしました。

「ありんすちゃん、じゃああたしが番号を押すからね。えーと……07211919……」

アウラが07211919と押すとカチャリと音がして箱が開きました。そして中には金色のおしゃぶりが入っていました。

※ ※ ※

「……うむ……、これは……」

ありんすちやん達が持ってきたアイテムを魔法——へ道具上位鑑定をかけたアイズは思わず唸りました。ありんすちやんとアウラは緊張した面持ちでアイズの言葉を待ちました。

「うむ。このアイテムは『星に願いを』と良く似た効果がある。肉体の変化に限定されるものの、三回だけ発動出来るアイテムだったようだな。既に一回発動した後なので残りは二回みただが……これはきつとペロロンチーノさんが所持していたアイテムだろうね。だからありんすちやんが持っているといい」

※ ※ ※

再び第六階層に戻って来たありんすちやんとアウラはとても興奮していました。この金のおしゃぶりは大変なアイテムだったのでしたから。

「ありんすちゃん、これはよくよく考えて使わないといけないね——え?。」

アウラがありんすちゃんを見るとなんとありんすちゃんは金のおしやぶりをくわえていました。どうやら金のおしやぶりを発動させるつもりみたいです。

「ちよ、ちよっと待ってっ!。」

「おつきくなるでありんちゅ!。」

ありんすちゃんが願い事を叫ぶと同時に金のおしやぶりが光りました。

——そして——なんとありんすちゃんは10Mの大きさになってしまいました。

ありんすちゃんは大人になるつもりで『大きく』して欲しかったのですが、金のおしやぶりはそのまま『大きく』してしまったのですね。

その後最後の発動でもとの大きさになんとか戻る事が出来ました。結局、せつかくのアイテムが無駄になってしまいました。仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

085ありんすちゃんひきこもる

守護者統括アルベドはいささか緊張していました。ナザリックの繁栄の為のある計画の為、アインズ様とデミウルゴスが当分不在となっていたからです。

「アインズ様の留守をしっかりと守らなくては……ナザリックはいわば家族。まるで家族の長たるアインズ様の留守を守る新妻の気分ね。そうね、新妻。……ああ……アインズ様……」

アルベドがありんすちゃんを訪ねて第二階層にやって来ると屍蠟玄室の周りにシモベ達が集まっていました。

「……これはなんの騒ぎ？ シャルティア……ありんすちゃんはいるかしら？」

「……アルベド様。その……ありんす様はいらっしゃるのですが……その……」

シモベのヴァンパイア・プライドが言いにくそうに答えました。代わりに他のアンデッドのシモベが答えました。

「……恐れながら……ありんす様は自室にこもって出てこないのです……至高の御方から与えられた仕事もせずこうして籠っておられます」

アルベドは金色の瞳を細くしました。これは至高の御方への反逆にも等しい行為、まさかまたしてもありんすちゃんが反逆したという事なのでは——が、しかし——アルベドは思い直しました。いまのシャルティアはシャルティアではなくありんすちゃん。所詮は幼児、大それた考えなしに仕事をサボっただけかもしれないません。

ましてやアインズ様が不在の最中に最悪な事件——シャルティアが再び反逆する——などあってはならないのです。

「わかったわ。この件は私がかします。あなた達はありんすちゃんの代わりに階層の巡回と警戒をしっかりとっておきなさい」

（……さて……アインズ様の留守にこの問題を片付けてしまわなくては……）

※ ※ ※

アルベドの命を受けてアウラが屍蟻玄室の前にやって来ました。アウラはまず室内の様子を窺います。どうやらありんすちゃんは誰かと会話をしているようでした。

『……………』

『ちようでありんちゆか。やっぱりちようでありんちゆよね』

『……………』

『もつと言うでありんちゆ』

アウラは扉をノックしてみました。

「ありんすちゃん？ いるんでしょ？あたしだけど、開けて」

途端に室内がシーンと静まり返りました。どうやらありんすちゃんは息を殺して居留守を使っているようです。

「ありんすちゃん？ いないの？」

アウラはなにやら閃いたみたいです。

「ありんすちゃんいないのかな？ いないのなら『いない』って返事をしたら諦めるけど？」

「ありんちゆちやいないでありんちゆ！」

ありんすちゃんはついつい返事をしてしまいました。すぐに騙された事に気がつきましたが後の祭りです。仕方なくしぶしぶとアウラを招き入れました。

アウラが中に入るとありんすちゃんは死の宝珠の言葉に聞き入っているところでした。

「なんと美しい、なんと賢い、誠に素晴らしいありんす様……」

「当然でありんちゆ」

「世界中で最も凛々しく賢く美しいありんす様は正に我が全てを捧げるに相応しい」

「もつと言うでありんちゆ」

アウラは何も言わずに死の宝珠を掴むと持って来た袋に押し込んでしまいました。ありんすちゃんは口を尖らせて抗議をしましたが、

アウラは黙って首を振るのでした。

「ところでありんすちゃん。この宝珠、何処で拾ったの？」

ありんすちゃんはなかなか答えようとしません。アウラは肩をすくめて言いました。

「これはアインズ様がハムスケに預けた宝珠じゃん。どうせハムスケが口から落としたのを拾ったんじゃないの？ ……とりあえずこれはあたしがアルベドに渡すから」

ありんすちゃんはいやいやをしましたが、アウラは怒った顔で『仕事しろ』と睨むので諦めざるを得ませんでした。

泣きそうなありんすちゃんを少し可哀想に思ったアウラは優しく声をかけました。

「ま、この宝珠の言葉なんて単なるゴマすりだから、聞く必要ないんだよ。与えられた仕事を放ったらかしてこんなおべっかに喜ぶなんてアインズ様は望まないと思うよ」

※ ※ ※

それからしばらくたつてエ・ランテルの町を用事で訪れたアウラはハムスケに声をかけられました。

「大変でござる。それがしが殿より預かった玉を何処かに落としたでござる。なんとか殿が帰ってくる前に見つけないと命が無いでござる」

アウラはハムスケをなだめ、その夜、ナザリック地下大墳墓第九階層のアルベドの私室の前にやって来ると……

部屋の中からアルベドが誰かと話しながらくつつふつと笑う声が聞こえてきたのでした。

仕方ありませんよね。ありんすちゃんはまだ5歳児位の………

あれ？ 失礼しました。

086 ありんすちゃんこまらす

アルベドが考え事をしながらナザリック地下大墳墓第二階層を歩いていた時の事です。いきなり屍蟻玄室の扉が開いて、中からズロース一枚の姿のありんすちゃんが飛び出してきました。

「ありんす様、この服を着てください」

「キヤツキヤツ！ イヤでありんちゅ」

ありんすちゃんの後をヴァンパイア・プライドがいつものボールガウンを持って追いかけます。二人はアルベドの周りをグルグル回って追いかけてつこを続けていました。

「いい加減にしなさい！ これは何の騒ぎなの！」

アルベドの叫びにヴァンパイア・プライドが立ちすくむと、ありんすちゃんはスルリと脇を抜けて逃げて行ってしまいました。

アルベドは平伏するヴァンパイア・プライドを起こすと優しく尋ねました。

「一体これは何の騒ぎかしら？」

ヴァンパイア・プライドはまたもや平伏して答えました。

「恐れながら……ありんす様は服を着たくない気分だと仰せになりまして、その……裸で逃げまわっているのでございます。なんでもハダカンボ天国わーい、だそうで……」

アルベドはため息をつきました。ありんすちゃんは幼児ではあるものの、階層守護者であり、シモベ風情ではどうしようもありません。「わかったわ。ありんすちゃんには誰か適任者をお目付け役にする事にしましょう」

アルベドはとりあえずヴァンパイア・プライドを戻らせると戦闘メイドのユリ・アルファにメッセージを飛ばしました。

「ユリ、貴女は確か暇だったわよね？ ちよつと力を借りたいのだけれど」

「これはアルベド様。実は現在アインズ様のご下命にてエ・ランテルに孤児院と学校を作っております……」

へ……そう。それなら良いわ。貴女はアインズ様の命令をしつかりこなしなさい

アルベドは悩みました。こういう事は普段ならアウラに頼むのですが、アインズ不在の折りに階層守護者をありんすちゃんのお守りにする訳にはいきません。せめて戦闘メイドの誰かに……と、アルベドは適任者を思い浮かべて即座にメッセージを発動しました。

※ ※ ※

「なんかあーよくわかんないけどおー私がありんすちゃんの面倒みるんだってー」

戦闘メイドのエントマ・ヴァシリッサがだるそうな口調で言いました。ありんすちゃんは相変わらずズローズ一枚の格好でふざけています。

「……そおれえでえ、ありんすちゃんは真面目にする事おー。ふざけているとおーこれだよおー」

と、ありんすちゃんの目の前で不意にエントマの顔が外れて落ちました。ありんすちゃんはよほど怖かったらしく、表情がこわばり足下にはなにやら温かいものが……

それ以来ありんすちゃんはおとなしくなったそうです。

※ ※ ※

実はその後、エントマはありんすちゃんのお目付け役を外されてしまいました。

ある晩の事です。アルベドの部屋に一人の領域守護者が訪ねてきました。彼はありんすちゃんのお目付け役が第二階層にいる事で眷属達が恐慌状態になっているのでアルベドの居室に避難させて欲し

い、という要望をしてきたのです。

アルベドはその要望を断るかわりにエントマをありんすちゃんのお目付け役から降ろしたのです。

それでもありんすちゃんはその後もおとなしくしていたそうです。よほど怖い思いをしたのでしょうね。

仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の子なのですから。

087 ありんすちやんとアウアウちゃん

ありんすちやんが階層の見回りをしています。今日は随分と気合が入っているのでゴッズアイテムのスポイトランスを振り回しながら一人で見回りをしています。いつもだったらヴァンパイア・ブライドに抱っこされての見回りですから偉いですね。遠目で見るとありんすちやんが歩いているのかスポイトランスが歩いているのかわかりませんが……

「クッククック……こうして完全不可視化で近づいてありんすちやんを驚かせてやるっすよ。あー楽しみっす」

おや？ 姿が見えませんが何やらありんすちやんにイタズラしようとする誰かがいるみたいですね。ありんすちやんは気がつかないみたいです。

「ありんすちやん。やつほー！ ……ん？ ルプスレギナじゃん」
ちょうどアウラがやって来ました。アウラはどうやら隠れているルプスレギナに気がついたみたいですね。

ありんすちやんはアウラに気がついて手をふっています。と、いきなりルプスレギナが完全不可視化したままありんすちやんを突き飛ばしました。

「――あぶないー！」

ありんすちやんがコロコロ転がっていくのをアウラが慌てて止めます。その時スポイトランスがアウラを直撃してしまいました。

※ ※ ※

「あちやー……これはまずいっすね。まさかこんな事になるとは思わなかったっすよ」

「可愛いでありんちゅ」

ルプスレギナとありんすちやんは変わり果てたアウラを目の前に

していました。ありんすちやんのスポイトランスが運悪くアウラのお尻に刺さってしまった、精気を一気に吸われたアウラがなんと赤ちやんになってしまったのでした。

「シユポイトランチュにこんな能力があったとはちらなかったでありんちゆ。アウアウ可愛いでありんちゆ」

「あうー。だあーだあー」

完全に赤ちやんになってしまったアウラはネツクレスの金のドングリをおしやぶりのように舐め始めました。

「あうー。おちまんちやん、だうー」

「……お、お姉ちゃん？ ……あ、あの……」

金のドングリはマールレの銀のドングリと通話するマジックアイテムだった為、マールレの困惑する声が聞こえてきました。

「マールレも第三階層に来るでありんちゆ。アウアウが大変なんでありんちゆ」

「えー！ お、お姉ちゃんが？ ……すぐ行きます」

「マンレあきちゆるちゆるんね。だうー」

赤ちやんになったアウラ——アウアウちゃんは何やら一生懸命にしゃべっていますが何を言っているかわかりませんでした。

「——おね、お姉ちゃん！ えー！」

到着したマールレが目を丸くしました。無理ありません。まさかアウラが赤ちやんになってしまうなんて、ありんすちやんも予想していませんでしたから。

「今日からはマールレがアウアウのお兄ちゃんでありんちゆね。良かったでありんちゆ」

アウアウちゃんはマールレにハイハイで近づくと登ろうとし始めました。

「マールレ、抱っこしゆるでありんちゆ」

マールレがアウアウちゃんを抱っこするとアウアウちゃんはマールレの耳に手を伸ばして掴もうとしました。マールレが嫌がって頭を降ると……

「う、うわーん！ うわわわーん！」

アウアウちゃんが泣き出しました。と、アウアウちゃんの近くで空
間が歪み……なんと大きな魔獣が次々と召喚されました。

※ ※ ※

「……………これはなんとかしないとまずいですね。うーん……………」

「このままだとありんちゅちゅのお家もこわちゃれちやうでありん
ちゅ」

「お、お姉ちゃん……………耳をしゃぶるのはやめて……………はふん」

三人はマールレの耳をしゃぶりながらご機嫌のアウアウちゃんを眺
めながらため息をつくのでした。

仕方ありませんよね。だってアウアウちゃんはまだ小さな赤ちや
んに過ぎませんから。

その後、スポイトランスのエネルギーを戻す事が出来て、なんとか
アウラを元に戻せたそうです。

088ありんすちやんとスポイトランスとマーレとおしり

今日もありんすちやんが階層の見回りをしています。うーん……前回、あんな事があつたのにまたもや真紅のフルプレートにゴツズアイテムのスポイトランスを片手にしていますね。これはまた何かトラプルが起きそうです。

おや？ スポイトランスを振り振り歩くありんすちやんのすぐ後ろにまたもや完全不可視化したルプスレギナがいます。また、ありんすちやんをびっくりさせるつもりなのでしょう。

そのルプスレギナのすぐ後ろに、やはり完全不可視化したアウラがいます。ルプスレギナは全く気づいていないようです。

「あれ？ ……ありんすちやん。お、お姉ちゃん来ませんでしたか？」
マーレがありんすちやんに声をかけてきました。その瞬間——アウラが姿を現し、ルプスレギナがびっくりして駆け出し、ルプスレギナにぶつかったありんすちやんがコロコロと転がって……

「ぶすうー」

なんとありんすちやんのスポイトランスがマーレのお尻に刺さってしまいました。

「ちよつと、マーレ！ あんた赤ちゃんに？」

アウラがマーレに駆け寄りました。マーレは身体をくの字に曲げてお尻を突きだした姿勢で気絶していました。

「おやおや？ マーレ様は赤ちゃんになっっていないっすね？」

ルプスレギナは感心したように言いました。ありんすちやんはマーレのお尻に刺さったままのスポイトランスを見て、感激していました。

「さすがはゴツドアイテムでありんちゆね……マーレのお尻にみごちよに刺さっているでありんちゆ」

ありんすちやんはスポイトランスを突っついてみました。すると

スポイトランスはマーレのお尻の上でユラーンと揺れました。

「……う、うーん……あれ？ お姉ちゃん？」

しばらくするとマーレが目を覚めました。すぐに起き上がろうとしましたが、スポイトランスが地面に当たってまた倒れてしまいました。

「え、えー？ ……どうなってるの？」

「マーレにはしっぽが生えちゃでありんちゅよ」

得意そうにありんすちゃんが説明します。確かに現在のマーレはお尻からスポイトランスが生えているように見えなくてもいいですが……

「ヒヤッハッハッハ……確かにマーレ様にはしっぽが出来たみたいっすよ？ ……どうします？」

「……こ、こんなのイヤだよ。……すぐにぬ、抜いて欲しいな」

ありんすちゃんはちよつとガツカリしました。偶然とはいえスポイトランスの刺さり方がまさに芸術的だったのですから。このま模型をとって銅像にして飾りたいくらい、気に入っていたのです。

「……マーレ、じゃああたし達が引っこ抜くから。……いくよー！」

「——あいたたた。お姉ちゃん、痛い」

なんとという事でしよう。スポイトランスの先がひっかかっているのかなか抜けません。ありんすちゃんはこのままマーレがスポイトランスのしっぽを付けたままにしたら良いのに、と思いました。

「うーん……困ったっすね。このままだとトイレでふんばってもらうしかなさそうっすね。ありんすちゃん、このままだとせつかくのスポイトランス、臭くなっちゃうっす」

……それは大変です。ありんすちゃんは事の重大さがようやくわかってきました。トイレから拾ったスポイトランスをこれまでと同じように使えるでしょうか？ 答えはノーです。デリケートなありんすちゃんにはとても無理です。

「ち、ちよつと、ありんすちゃん……な、何を？ ……いたっ！ イタ

タタタ！ イタタタタ——」

——スツポーン!! ——

マーレのお尻に刺さったスポイトランスはありんすちゃんにより、
なんとか無事に引き抜く事が出来ました。尚、マーレはしばらく安静
にしなくてはならなくなつたそうです。

仕方ありませんよね。ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子な
のですから。

089 ありんすちゃんときんのはくちよう

ナザリック地下大墳墓第二階層——ここには領域守護者の恐怖公がいます。おや？ 戦闘メイドの一人、エントマがやって来ました。珍しく鼻唄混じりでスキップしながらやって来ますね。

「ふんふん♪」

エントマは恐怖公の眷属が蠢くへ黒棺へ繋がっている穴へ飛び込みました。

他の女性NPC達が苦手にしている恐怖公の眷属達ですが、エントマにとっては単なるおやつなんですよね。

「今日はあ、料理長にたのんでえ、カレースパイスう。振りかけるともつとおーいしーサイコー！」

小瓶から振りかけて黄色くなつたのをポリポリ食べ始めました。音だけ聞いていると、美味しそうなんですが……

「あの……せめて一週間おき位にしてみませんか？」

王冠を着けた恐怖公が丁寧な物腰で嘆願しますが、エントマは聞こえないふりをしています。それどころか、その内恐怖公にまでカレースパイスを振りかけてきたので、恐怖公は慌てて逃げます。

「ちよ……ねえ、ありんすちゃん様、エントマ嬢に何か言つてはくれませんか？」

辺りを良く見るとへ黒棺へに珍しくありんすちゃんがいました。普段は恐怖公が苦手なのですが、今日はボケーとしながら座り込んでいたのです。

「うーん……キレイでありんちゆね」

ありんすちゃんは恐怖公の『シルバー・ゴーレム・コックローチ』が放つ銀色の輝きに見とれていたのです。

「なんだあ。ありんすちゃんいたんだあ？ ……それ、欲しいの？」

エントマがありんすちゃんに訊ねるとありんすちゃんは即答します。

「欲ちいでありんちゆ。ありんちゆちゃんもピカピカの乗り物欲ちいでありんちゆね」

恐怖公は慌てました。

「いや、これは私めがかの至高のお方、るし☆ふぁー様より賜わりし物。たとえ階層守護者殿といえどお譲りする事は出来ませぬな」

色をなす恐怖公をよ所に相変わらずカレー味の恐怖公の眷属をポリポリ食べていたエントマが耳寄りな情報を話しました。

「そおいえばあ、この間アインズ様の命令でえ、宝物庫を片付けたユリ姉が色々貰って来たんだけどお。その中から探してみたらあ？」

ありんすちゃんは大喜びでエントマの案内で倉庫に向かいました。

※ ※ ※

「ほら、ちらかったままだけどお。探してみればあ？」

「探ちてみるで、ありんちゆう」

倉庫には宝物庫から運ばれてきた比較的価値の低い物が山積みになっていました。とはいえ、宝物庫の中では価値が低くてもどれも中々の物ばかりで、まさに宝の山です。

恐怖公のシルバー・ゴレム・コックローチが銀色で出来ているので、ありんすちゃんには金で出来た乗り物が良さそうですね。まあ、どうせ本物の金で出来ていなくても金色なら満足すると思えますが

……

「見ちゆけたでありんちゆ！　これが気に入ったでありんちゆ」

ありんすちゃんは金の白鳥を引っ張り出してきました。ありんすちゃんが座るのに丁度良い大きさで、しかも頭の部分の両側につきまりやすい棒まで付いています。

ありんすちゃんは金の白鳥に跨がると、魔法を発動させてふわふわと飛んでいきました。

それからしばらく、ありんすちゃんはどこへ行くのにも金の白鳥に股がついていくのでした。

※ ※ ※

——そんなある日

アインズは久しぶりにナザリツク地下大墳墓に戻って来ました。そこにふわふわと金の白鳥に股がったありんすちやんがやって来ました。

アインズは金の白鳥のおまるに得意そうに股がってふわふわ飛んでいるありんすちやんの姿に、思わず言葉を失ってしまっていた。仕方ありませんよね。ありんすちやんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

090ありんすちゃんのショー・マスト・ゴー・オン

——ナザリック地下大墳墓第九階層アイنزの居室——アルベドがそわそわしながらアイنزの寝室にいました。

「……アイズ様はまだお戻りになっていないみたいね……では、失礼して……そーれ！ ……はあはあはあ……今のうちにアイズ様の香りをお腹の中に溜め込んでおかないと……すうはあ、すうはあ……！ ……足音？ まさかアイズ様がお戻りに！」

部屋の主が戻って来た気配にアルベドはベッドから立ち上がると急いでベッドの下に潜り込みました。

「！」

するとそこには既に先客——いつの間にか転移していたありんすちゃんがいたのでした。騒ぎだそうとしたありんすちゃんの口を塞ぐとアルベドはありんすちゃんを宥めました。アルベドの真剣な様子にありんすちゃんも静かになりました。

アイズは部屋に入るとベッドに寝そべりました。

「……ん？ ……何だか生暖かい？」

「しゃつきまでアルベ——」

ベッドの下で喋ろうとするありんすちゃんの口をアルベドが慌てて塞ぎます。幸いアイズは気が付かなかったようです。

「……威厳か……確かに大事な事だよ……組織のトップに立つものが弱腰だったら着いていこうとは思わないからな。とはいえ、いつでも威厳があるように振る舞えるとは限らぬ……うーん。もつと演技力があれば良いのにな……」

アイズの独り言を聞いてありんすちゃんの目が光りました。そうです。ありんすちゃんは以前に『赤ずきんちゃん』を演じていますから、演技力には自信があります。

アルベドはベッドの下から出ようとするありんすちゃんを必死に止めます。

「さて、仕事に戻るとするか……ん？ 気のせいかな」

アイズは立ちあがり、ちよつとだけ不審げな視線をベッドの下の

空間に向けましたが何事もなかったかの様に部屋を後にしました。

アルベドとありんすちゃんベッドの下から這い出すと、深くため息をつきました。

(アインズ様は演技力を求めていらっしやるの? ……主君の求めるものを捧げるのが臣下の努め……くつつふつふ……)

ニヤニヤしながら部屋を出ていくアルベドをよそにありんすちゃんはじっと坐り込んでいました。

※ ※ ※

「アインズ様!」

ナザリック地下大墳墓第九階層の廊下を歩いていたアインズはアルベドに呼び止められました。

「アルベド。どうしたのだ?」

「はい、アインズ様。あの、先日議題にありました……ふくり? ……」

「福利厚生か?」

先日、アインズは各階層守護者を集めてナザリックの今後に関する意見を出させる為、組織における福利厚生の必要性の話をしたのでした。

「ナザリックに劇場を建設しては如何でしょうか? ナザリックの住人の中には娯楽を求める者も少なくないと思います。一定の需要はあるのではないのでしょうか」

アルベドは熱く語り続けました。いにしえの為政者が支配の為にいかに娯楽を活用してきたか、といった話を聞いている内にアインズの心も決まりました。

「うむ。で、演目はどうするのだ? まずは台本が必要であろう?」

アルベドは胸元に抱えていた一冊の本を差し出しました。

「この書物はかつてアインズ様の世界から持ち込まれたもので『ロミオとジュリエット』で御座います。司書のティトウス曰く、文学的かつエンターテイメント性に溢れた作品との事でして、演目には最適か

と」

「うむ」

アインズが頷きかけた瞬間――

「ちよつと待ちゆでありんちゆー!」

一冊の本を抱えたありんすちやんが走って来ました。

「ありんちゆちやは赤じゆきん、しゆるでありんちゆー!」

ありんすちやんは持っていた絵本『赤ずきんちゃん』をアインズに向けました。

「ちよつと、ありんすちやん。こちらに来なさい」

アルベドはありんすちやんを脇に連れ出すと説得を試みました。ありんすちやんは以前に演じた『赤ずきんちゃん』に思い入れがあるので、なかなか折れませんでした。それでも最終的にはモンブランケーキ三十個で演目を『ロミオとジュリエット』にする事に同意する事にしました。

「で、演目は『ロミオとジュリエット』で良いのかな?」

「はい。アインズ様」

「仕方ないから良いでありんちゆ」

そこに騒ぎを聞きつけてデミウルゴスがやって来ました。

「随分と盛り上がっているみたいですね。で、配役はどうするおつもりですか?」

アルベドが口を開きました。

「主人公のロミオ様は高貴な貴族の長子でもありますから、アインズ様にお願ひしたく存じます。そして、ヒロインのジュリエットには――」

「ありんちゆちやー!」

ありんすちやんが手を挙げました。鼻息もとても荒くなっています。

「え、えつと……それで良いのかね?」

デミウルゴスが困惑した面持ちで周りを見ます。

「よくないわよ! ジュリエットには私が!」

アルベドも一歩も引かないようです。

「……では、公平にオーディションで決める、というのはどうでしょう？」

しかし、ありんすちゃんが首を縦に振りません。仕方ないので結局、ヒロインのジュリエットはアルベドとありんすちゃんのダブルキャストにする事になりました。

(いろいろ手間取ってしまったけれども劇のラストシーンでアインズ様とキス出来そうだから良しとすべきね)

アルベドは公演までの時を夢見ながら稽古に励むのでした。

※ ※ ※

いよいよ公演当日――

ロミオとジュリエットで有名なバルコニーのシーンが始まりました。アインズのロミオが庭からバルコニーに呼び掛けると、バルコニーの窓からジュリエットのありんすちゃんが出てきます。

「おお、ロミオ……あなたちゃはどうちて……」

おやおや？ ありんすちゃんがセリフにつまってしまったみたいですね。大丈夫でしょうか？

「ロミオ……あなたちゃのお口はどうちてちよんなにおっきいの？」

……ありんすちゃん……そのセリフは『赤ずきんちゃん』ですよ？ 仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

※ ※ ※

「ふう……何だか今日は疲れたな」

その日、ロミオを演じきったアインズは自分の居室に戻ってきました。

「うん？ ……何だか濡れている？」

アインズが訝しげに見た場所は先日ありんすちゃん座り込んでいた場所でした。

091 ありんすちやんのたなばた

ナザリツク地下大墳墓 第十階層玉座の間——玉座のアインズの前に各階層守護者が揃いました。

「アインズ様、守護者統括アルベド以下各階層守護者、ガルガンチュア及びヴェイクティムを除き御身の前に揃いまして御座います」

「うむ。ご苦労。……さて、皆に集まって貰ったのは、実は明日が七夕でな。たまには皆で七夕祭りをするのも悪くないと思つてな」

「たなばた……ですか？アインズ様、それは一体どの様な？」

アルベド以下階層守護者達は七夕について初耳だったようでした。ただ、一人を除いて——ありんすちやんは鼻からフンスと息を吐き出しながらアインズの前に進み出ました。

「アルベドはちらないでありんちゆか？『たなばた』とはぼた餅が降ってくるでありんちゆ」

ありんすちやんは昨日ルプスレギナから教わった知識を早速披露しました。残念ながらそれは七夕ではなくてタナばたでしたが……もしかしたらルプスレギナはわざと間違つた情報を与えたのかもかもしれません。

「ゴホン……七夕とは毎年七月七日の一日だけ、天の川を隔てて離ればなれになつていた恋人が会えるという言い伝えがあつてな、笹の葉に願い事を書いた短冊を吊るすと叶えてくれる、という風習なのだ」

「それはなかなか風情がありますな。では、早速準備するのでしょうか。さいわい、短冊には私の所の羊皮紙が使えると思います。笹という植物は……」

デミウルゴスが思案しているとアウラが意見を出しました。

「あたしの階層のザイトルクワエを使つたらいいんじゃないかな？最近また枝が伸びてきたから短冊を沢山ぶら下げるのに丁度いいと思います」

「それは丁度良いわね。そうだわ。せっかくだから、短冊もカラフルにしましょう。メイド達には飾りを作らせて……主だったシモベ達にも短冊に願い事を書かせても良いわね？」

アルベドの意見にデミウルゴスも頷きました。

「では、カラフルな短冊の準備と配布は私、ザイトルクワエの飾り作りと飾り付けはアルベドとアウラに任せて、他の者はシモベ達に知らせたり、準備をするという事で良いかな？」

「おっけー。任せておいて。……では、アインズ様、失礼します」

「了解シタ……全テハ御方ノ思シ召シノタメニ……」

各階層守護者達は忙しそうにそれぞれアインズに挨拶をすると準備に向かいました。後に残っていたデミウルゴスはアインズにお辞儀をすると言いました。

「……今回の一件、アインズ様の意図は理解して御座います。さすがはアインズ様」

（え？……なんの事？……いやあ、ただ、七夕祭りをしたいと思っただけで別に……）

「……うむ。さすがはデミウルゴス。お前には見抜かれてしまったか」

デミウルゴスは言葉を続けました。

「今回、願い事を短冊に書かせる事で配下の欲求や不満をいち早く発見しようとするアインズ様の真意には誠に畏れ入ります」

（……成程。確かに短冊を見れば階層守護者達やシモベ達の望みがわかるな）

「うむ。まあ、そんな所だ。ではデミウルゴス、頼んだぞ」

「はっ。お任せ下さい」

※ ※ ※

ナザリック地下大墳墓第六階層のザイトルクワエには色紙を鎖状に繋げた飾りやカラフルな短冊が沢山付けられていました。

アインズはコツソリ短冊を見て回ります。

『世界征服 デミウルゴス』

『日々コレ鍛練アルノミ コキユートス』

『ロロロが欲しい アウラ』

それぞれの階層守護者が書いた短冊を見ながらアインズは心暖まる気持ちになりました。

『アインズ様のお嫁さん マーレ』

「——ん？」

マーレの短冊を見たアインズは一瞬、硬直してしまいました。そして——

『アインズ様の赤ちゃんを授かりますように アルベド』

(——こ、これは……)

茫然としたアインズはしばらくしてようやく我に返りました。と、ある事に気がつきました。

セバス、プレイアデス、領域守護者から一般メイドまで短冊を吊るしていましたが、階層守護者のありんすちゃんの短冊がありませんでした。

アインズは第二階層の屍蠟玄室の様子を見に行く事にしました。

※ ※ ※

屍蠟玄室ではありんすちゃんが居眠りしていました。どうやら沢山の短冊に願い事を書いている内に眠ってしまったようでした。

アインズはありんすちゃんの周りに落ちている短冊を拾い上げました。

『おおきくなりたい』

『いなりずし』

『しよーとけーき』

(……子供らしい願い事じゃないか。七夕らしくて良いな)

『きんののべぼう』

『うちゅうろけつ』

(……子供らしく夢があって良いな)

『とろろいも』

『もんぶらん』

(……食べ物が多いみたいだな?)

そして、最後の書きかけの短冊を拾い上げたアインズは悩みました。

『んっ』

(……うっ……ウンっ……?)

ありんすちゃんは願い事を短冊に書いている内に『しりとりに夢中になっちゃったみたいですね。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の子なのですから。

092ありんすちゃんあこがれる

今日もありんすちゃんは二人のヴァンパイア・ブライドと一緒にナザリック地下大墳墓の第一階層から第三階層の巡回をしています。

おや？ なんだかいつもと違いますね。いつもなら、すぐに飽きてしまったり抱っこをせがむのに今日のありんすちゃんはそんな様子がありません。顔つきもなんだか少し凛々しく見えます。

第三階層まで巡回を終えると、ヴァンパイア・ブライドがありんすちゃんに向き直り、号令をかけます。

「Achtung! Heil Alliancechan!」

号令、そしてありんすちゃんに対して敬礼をします。

「じーくなじやりつく、でありんちゅ」

うーん……なんだかイヤな予感がしますが……

※ ※ ※

アインズは暫くぶりにエ・ランテルの街のモモンの住居を訪れていました。

「……うん？ アンデッド反応があるな。……二つ？」

一つはハムスケが抱き枕がわりにしているデスナイトでした。そしてもう一つは……どうやら建物内から反応しているようです。

(モモン、いや、パンドラス・アクターにアンデッドの来客か？ ……それともズーラーノンの関係者か?)

アインズは〈完全不可視化〉を発動すると建物の中に入り、様子を伺いました。見ると居間でパンドラス・アクターと一緒に小さな人影がありました。

「では、次のカツコいいセリフですが、愛していますという意味の言葉です。では、『Riebt!』はい！」

「リーベ！ ……でありんちゅ」

「うーん……もつと情熱的に感情を、そう、溢れる愛を込めて下さい」
「りーべー！……でありんちゅ」

なんとパンドラズ・アクターと一緒にいるのはありんすちやんでした。ありんすちやんはキラキラとした瞳でパンドラズ・アクターの大げさなジェスチャーに見とれています。

「……………」
アインズはそんな二人の様子にため息をつくとき、静かに扉を閉めて立ち去って行きました。

※ ※ ※

それから暫くしたある日、ありんすちやんの姿がナザリック地下大墳墓の第九階層にあるアインズの執務室にありました。

「うむ。……その、だな。最近、シモベ達に敬礼をさせているそうだが？……………」

アインズの問いかけにありんすちやんは瞳をキラキラさせて答えました。

「カッコいいでありんちゅ」

「…………ゴホン…………そうか。格好が良いのか…………うーむ」

ありんすちやんは興奮しながら更に言葉を続けました。

「パンドラジュ・アクターカッコいいでありんちゅ。ありんちゅちやもカッコいくなりたいでありんちゅ」

ありんすちやんは大袈裟な手振りを交えながらパンドラズ・アクターの格好の良さを力説します。そんな有り様を前にしたアインズは力が抜けていくのを感じました。

（まさに黒歴史だ。こんな形で胃の痛くなる様な思いをするとは思わなかったな…………）

「…………そ、そうか…………わかった。戻ってよろしい」

ありんすちやんはアインズに向かい気を付けの姿勢を取ると――

「はいる、アインジュちやま、でありんちゅ」

――敬礼をし、踵を打ち鳴らして退出していきました。

「——パンドラズ・アクターを。パンドラズ・アクターにすぐ来るよう伝えよ」

ありんすちゃんが居なくなるとすぐにアインズは控えていた一般メイドに命じるのでした。

※ ※ ※

「——なんですと！ それではアインズ様はこのわたくしめにありんすちゃんが憧れるのを辞めさせよと？ ……それはアインズ様の本心なので御座いましょうか？」

目の前で仰々しい身振りで話すパンドラズ・アクターを眺めながら、アインズは喉元に酸っぱいものがこみ上げてくるような感覚に苦しめられていました。

(まさに黒歴史だ。でもさ、格好が良いって思っていたんだよな。若気の至りみたいなのなんだろうけどさ……)

「ふむ。しかしな、パンドラズ・アクターよ。貴様がその身振りやドイツ語の言い回しをする様に設定したのはこの私だ。そして私はお前以外のものがそれらを真似る事は許すべきではないと思うのだ」

アインズの言葉にパンドラズ・アクターはいたく感銘を受けたみたいでした。

「畏まりました。アインズ様。では私に一つ考えが御座います。それならありんすちゃんが私の真似を諦めてくれる事でしよう」

※ ※ ※

「ちゅまり、ありんちゅちゅがありんちゅと言ってはいけない、でありんちゅか？」

翌日、第二階層の屍蠟玄室に訪れたパンドラズ・アクターの言葉に

ありんすちゃんは目を真ん丸くしました。

「実は私の話すドイツ語は完成された言語でして、『ありんす』等の形容詞や助動詞は加える事は赦されないのです」

つまり、ありんすちゃんがパンドラズ・アクターの真似をするには『ありんす禁止』だと言うのです。ありんすちゃんはじつと考え込みました。

でも、答えは一つに決まっていますよね。もし、ありんすちゃんが『ありんす禁止』になったら、この物語は『ふしぎのくにの？ちゃん』になってしまいますから。

目をつぶって考え込んでいたありんすちゃんがパツチリと目を開きました。

「決めたでありんちゅ。ありんちゅ封印、するでありんちゅ」
「えー？」

※ ※ ※

パンドラズ・アクターからの「ヘメツセージ」を受けたアイNZは酷く動揺しました。

「アイNZ様、かくなる上はいつそドイツ語をナザリツクで流行らすのは――」

アイNZにとって幸いな事にありんすちゃんのお熱はすぐに醒めて、翌日にはいつものありんすちゃんに戻っていたそうです。可哀相だったのはパンドラズ・アクターで、あれだけファンだったありんすちゃんから『キモいでありんちゅ』と言われてショックだったみたいです。

仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の子なのですから。

093 ありんすちゃんのがーるずとーく

今日のありんすちゃんは朝からプリプリしていて不機嫌でした。実は昨日、アルベドとアウラのガールズトークから締め出されてしまったのでした。

「ありんすちゃん様、いかがなさいますか？」

ありんすちゃんに恐る恐るシモベのヴァンパイア・ブライドがお伺いを立てます。

「こうなつたらありんちゅちやも『がーるずとーく』しるでありんちゅ。すぐにプレアデシユ呼んでくるでありんちゅ」

なるほど。アルベド達とは別にガールズトークをするのですね。主催者だつたら仲間外れにはならないですよ。

問題はありんすちゃん主催のガールズトークのティーパーティーに参加者がどれだけいるかですが……

三十分程して、ヴァンパイア・ブライド達が戻って来ました。なんという事でしょう！ ありんすちゃんのガールズトークに戦闘メイドは誰も来れないとの事でした。

「皆さんお忙しいらしく、どなたも都合がつかないそうです。仕方ありませんから私達だけでガールズトークしてはいかがでしょう？」

怒りに真つ赤になつているありんすちゃんにヴァンパイア・ブライドが提案しましたが、ありんすちゃんにはとても受け入れる事は出来ませんでした。このメンバーだけではいつもと何も変わりません。せめて、一人でも良いから参加者を増やさなくては意味が無いのです。

「今しゆぐ、エ・ランテルに行つて誰かちゅれて来るでありんちゅ。出来たらアンデッドが良いでありんちゅね」

すぐさまヴァンパイア・ブライドが十人、エ・ランテルの街に向かうのでした。

ヴァンパイア・ブライド達が戻るまでにありんすちゃんはナザリツク地下大墳墓の第二階層の屍蟻玄室からティーセットやらテーブルとイスとかを運び出します。配下のシモベ達によって地表のログハ

ウスの脇にティーパーティーの会場が出来上がりました。

ここならばエ・ランテルからやって来たお客さんをナザリック内に入れずに済みますし、ログハウスのプレアデスにありんすちやんのティーパーティーを見せつける事が出来ます。もしかしたらソリュシャンカルプーあたりは途中から参加したいと心変わりするかもしれませんね。

「うむ。お前がありんすちやんか？ その、ガールズトークに参加すれば、も、モモン殿の秘密を教えてください、と聞いたが……その……私はイビ、いや、キノノという。その……たまたまエ・ランテルに来ていた通りすがりのヴァンパイアだ」

そこには二人のヴァンパイア・ブライドに挟まれて、十四五歳くらいの金髪で赤いローブを着た少女が立っていました。ありんすちやんはホスト役としてキノノと二人のヴァンパイア・ブライドを席につかせます。

次々と他のヴァンパイア・ブライドも戻ってきましたが、残念ながら連れてこれた客は結局キノノだけでした。でも、とりあえずこれでありんすちやんの面目は保てたので、シモベのヴァンパイア・ブライドから更に二人を席につかせてガールズトークを始める事にしました。

残りのヴァンパイア・ブライドとシモベ達はナザリックに返し、六人で紅茶を楽しみます。おや、今回の参加者は全員がアンデッドですが、偶然、全員がヴァンパイアです。

「ヴァンパイアあるある、言い合うのもおもしろいでありんちゆね」

「……いや、私はモモン殿の——」

ありんすちやんは横から遮ろうとしたキノノの口にシユークリームを押し込んで黙らせました。とても美味しいシユークリームなんですよ、それ。

「ええと、鏡に映らないと言われますが、映りますよね？」

早速ヴァンパイア・ブライドの一人が話題に乗ります。

「この前、急流で溺れかけちゃでありんちゆ。水は気をちゆけないとダメでありんちゆ」

ヴァンパイア・ブライドは全員がおりんすちゃんが溺れかけたのは単に背が届かなかっただけだと知っていました。黙っていました。「初めてのお家は『上がってくだちやい』と言われるまで上がっちゃいけないでありんちゅ」

「……いや、それは迷信……それよりモモン——むぐぐ……モグモグ」
おりんすちゃんは今度は大きなエクレアをキーノの口に押し込みます。キーノは顔中をクリームだらけにして、モゴモゴしていました。

「銀製品は少しだけ苦手です。十字架は別に好きでも嫌いでも無いですが」

「ちょうどおりんちゅね。あと、トマトジューチュよりオレンジジューチュがしゅきでありんちゅ」

最初のうちはいろんなヴァンパイアあるあるの話題に盛り上がっていましたが、おりんすちゃんはどうかやら飽きてきたみたいです。

「たまにはキーノの話を聞くでありんちゅ」

「モモン殿の秘密とは是非、教えて頂きたい！」

キーノは勢いよくおりんすちゃんに詰め寄りました。と、いきなりおりんすちゃんは意を決したかのような真剣な表情で立ちあがりました。

おりんすちゃんはこれでもナザリック地下大墳墓の階層守護者の一人です。ですから当然、アダマントイト級冒険者「漆黒」のモモンが実はアインズの仮の姿である事を知っています。

しかし、目の前にいる『通りすがりのヴァンパイア』キーノが実は王国のアダマントイト級冒険者蒼の薔薇のマジックキャスターであるイビルアイだという事をおりんすちゃんは知りません。

このままおりんすちゃんはモモンの秘密をばらしてしまうのでしょうか？

おりんすちゃんの言葉をキーノもヴァンパイア・ブライド達も、そしてログハウスの中にいるプレアデスも固唾を飲んで待ちます。ピョンと張り詰めた空気の中、おりんすちゃんが口を開きました。

「……おちっこに行ってくるでありんちゅ」

仕方ありませんよね。ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

094 ありんすちやんとねむれないよる

ナザリック地下大墳墓 第二階層 屍蟻玄室の寝室——大きな天盖のダブルベッドで頭までタオルケットにくるまってありんすちやんが寝ています。

おや？ モゾモゾして、タオルケットから少しだけ頭を覗かせてキョロキョロしています。熱帯夜で寝つけないのでしょうか？ しばらくするとまた頭までスツポリとタオルケットを被りました。

ありんすちやんはベッドの中でモゾモゾしています。どうやらオシッコがしたいのを我慢しているみたいです。

ありんすちやん、早くトイレに行くといいですよ？ 一人で行けないならシモベのヴァンパイア・プライドを呼んだら良いのではないのでしょうか？

「……ヤチュメウナギが怖いでありんちゅ」

うーん……ありんすちやんはどうやら昼間にルプスレギナがした話を真に受けてしまっているみたいです。

※ ※ ※

「ありんすちやん、こんにちは。今日は夏の土曜日っすね。土曜の丑三つ時はウナギっすよ」

その日の昼頃、ありんすちやんがヴァンパイア・プライドとのんびりしている所に戦闘メイドのルプスレギナがやって来ました。

「ウナギでありんちゅか？」

ありんすちやんは小首を傾けながら聞き返しました。

「あの、ニユルニユルのやちゅでありんちゅね」

ありんすちやんは得意そうに言葉を足しました。賢いありんすちやんはちゃんとウナギを知っているんです。

「そうっすよ。そのウナギのお化けが出るっすよ。土曜日の丑三つ時、つまり今晚っすね」

どうやらルプスレギナはありんすちやんを怖がらせようと、いい加減な事を言っているみたいですね。しかしありんすちやんもヴァンパイア、それも真祖。元々がアンデッドですからお化けなんて怖がるはずがありません。

「……お化けなんて、怖く、ない……でありんちゆ。ありんちゆ」

……おや？　ありんすちやんの顔が強ばっています。うーん……どうやらありんすちやんはお化けが苦手みたいですね。アンデッドなのに……

そんなありんすちやんの様子を眺めながら、ルプスレギナが続けます。

「ただのウナギのお化けじゃないっすよ。ヤツメウナギっす。こーんなにデカイ口をガバーって開けると中にはビッシリと尖った牙がグルリとあるっす。不気味で凶悪なヤツメウナギ、よりによってこの屍蠟玄室で見た事があるっすよ」

ヴァンパイア・プライドが何か言おうとしましたが、ルプスレギナが制止します。

「……ありんちゆちやは見ちや事ないでありんちゆ。ヤチユメウナギなんていないでありんちゆ」

ありんすちやんは必死に否定しました。もし、そんな怪物が居たらありんすちやんは安心して眠れません。

「……ヤツメウナギの怪物は間違いなく居るっすよ。せいぜい頭をかじられないように気をつけるっす」

そして夜になり、ありんすちやんはベッドに入りましたが、ヤツメウナギの怪物の事をあれこれ考えている内に怖くて眠れなくなってしまうた、という訳です。

※ ※ ※

ヴァンパイア・プライドに付き添ってもらい、用を済ませたありんすちやんはベッドに戻りました。そして相変わらず頭を出したり引っ込めたり、タオルケットを被ったりめくったりしています。

どうも眠れないみたいですね……

とうとう意を決してムクリと起き上がりました。愛用の枕とお気に入りのウサギのぬいぐるみのつかむと屍蟻玄室を後にしました。

※ ※ ※

「……なあに？ こんな夜中にやって来て……あたしは寝てたんだけど？」

ありんすちゃんがやって来たのは第六階層のアウラとマーレの住居でした。アウラは熟睡中だった所を起こされてひどく不機嫌でした。

「……え？ ヤツメウナギの怪物？ 屍蟻玄室に？」

ありんすちゃんは一生懸命にヤツメウナギの怪物の怖さを伝えます。しばく黙って話を聞いていたアウラは呆れた様子でため息をつきました。

「——あのさ、それってありんすちゃんの事じゃん。真祖の姿ってまんなまヤツメウナギそっくりだよね？……じゃ、おやすみ」

アウラは冷たくいい放つとありんすちゃんの前で扉を閉めました。

うーん……考えてみたら真祖の姿を本人は鏡で見る事はあまりなさそうですね。まさか自分の事を怖がっていたなんて……仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

※ありんすちゃんが挿し絵を描いてくれました

095ありんすちゃんとかキユートス

ナザリック地下大墳墓 第五階層——氷河——。階層守護者のコキユートスは久しぶりに戻ってきました。

〈大雪球——スノーボールアース〉で留守を預かっていた雪女郎——フロストヴァージン——達が出迎えます。

「……留守番、ゴ苦労。……特二変ワツタ事ハナカツタカ？」

「コキユートス様の留守中に特に何も御座いませんでしたが……あの……」

雪女郎の一人が言いにくそうに言葉を濁しました。

「……ナンダ？ 何かアルナラ申シテミヨ？」

「……実はその、……ありんすちゃん様がコキユートス様をお待ちになっただけです」

コキユートスは思わず息を吐き出しました。白い息がコキユートスの外装に薄い氷を作ります。

「……アリンスチャンカ……？ 珍シイ客ダナ。……マタ氷河デ凍ラセタ死体デモ必要ニナツタノカモシレヌ。……デ、アリンスチャンハ何処ニイルノカ？」

「あの、コキユートス様のお戻りになる時間がわからないと申し上げましたら、ご自分で〈スノーボールアース〉の中で待つと……」

「……ウム。ワカツタ。マズハ会ツテ話ヲ聞ク事ニシヨウ」

コキユートスはありんすちゃんが待つ〈大雪球——スノーボールアース——〉に入りました。

中ではノンビリとくつろぐありんすちゃんの姿がありました。

「待っていたでありんすちゃん。コキユートシユにお願いがあるんでありんすちゃんよ」

「……ウム。ドンナ願イカ聞カセテモラオウカ。……ダガ、断ツテオクガ、リザードマンノ財産ニカカワル事ハ認メラレナイゾ……」

コキユートスはあらかじめ予防線を張りました。アウラが以前にリザードマンのペットのヒュドラのロロロをねだった事があつたからです。

「ちよんなごちよはしないでありんちゅ。ただ、コキユートシユに第二かいちように来てお仕事して欲ちいだけでありんちゅ」

※ ※ ※

ありんすちやんに連れられてコキユートスは第二階層のへ屍蟻玄室の前にやつて来ました。ありんすちやんは広場になっている場所を示しながら言いました。

「ここに雪山をちゅくって欲ちいでありんちゅ。こーんな、こーんなおつきいなのでありんちゅ」

ありんすちやんは両手をいっぱい広げて説明します。どうやら最近暑いので涼しくする為に雪山が欲しいみたいです。

「……シカシ……涼シクスルナラバ第五階層カラ氷ノカタマリヲ運ンダホウガ良イノデハナイカ？ 雪ヲ降ラセテモスグニ溶ケテシマウダロウ……」

ありんすちやんは首を振りました。

「雪が良いでありんちゅ。雪じゃないとダメなんでありんちゅ」

ありんすちやんに言われるまま、コキユートスはスキルを発動してあつという間に十メートル程の高さの雪山を作りました。

ありんすちやんは大喜びです。大きな鍋に入ったメロンシロップを雪山にかけると、屍蟻玄室の上から雪山——いや、巨大なかき氷に飛び込みました。

これがありんすちやんがやりたかったのですね。

その日、一日中かき氷を食べ続けたありんすちやんはお腹を壊してしまつたそうです。アンデッドなのに……

仕方ありませんよね。だって、ありんすちやんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

096 ありんすちゃんおえかきする

「フーンフーンンンールルラール」

ナザリツク地下大墳墓第二階層の屍蠟玄室では、ありんすちゃんが寝転がってお絵かきに夢中になっています。

画用紙に肌色のマーカーで大きな丸を描いて丁寧塗りつぶします。それから赤のマーカーで目と口を描きます。髪は灰色のマーカーで描きます。左右に伸びた髪はクルクルとカールさせます。

ピンクでフリフリの帽子と大きなリボンを描き足せばあつという間にありんすちゃんの出来上がりです。

画面一杯の大きなありんすちゃんの自画像をしばらく眺めていたありんすちゃんは今度はサインペンを手にします。

ありんすちゃんの顔の上に『ありんすちゃん』と書きました。『す』が左右逆さなのはご愛嬌です。またもやしばらく眺めていたありんすちゃんはサインペンで『かわいい』と書き加えました。そして、それから『とつても』と書き加えました。

これで『とつても かわいい ありんすちゃん』の絵が完成しました。ありんすちゃんは満足そうです。

床に今まで描いた絵を広げてみます。どの絵も真ん中に楽しそうなありんすちゃんが描かれています。

ありんすちゃんはふと、これまでの出来事を絵に描いてみたくなりました。さてさて、どの出来事を書いてみましょう？

いろんな事がありましたから、たくさん描けそうですね。

ありんすちゃんが最初に描いてみたのは戦闘メイドのナーベラルを追いかけてアインズ扮する冒険者モモンと一緒にになった様子でした。

次にありんすちゃんはトブの大森林でザイトルクワエと戦った様子を描いてみました。ありんすちゃんと他の階層守護者達とが合体した姿を一生懸命描きました。コキュートスが複雑な形態なのでも苦労したそうです。絵ではありんすちゃんが目からビーム光線を出しているようですが……まあ、5歳児位の女の子のありんすちゃ

んの記憶ですから仕方ありませんよね。

次の絵を描こうとしてありんすちゃんは鏡の中の自分の姿を見ましたが、どうもうまく描けないみたいです。ありんすちゃんは画用紙とマーカーを握りしめると何処かに走って行きました。

※ ※ ※

ナザリック地下大墳墓 第九階層を歩いていた守護者統括 アルベドはいきなり走って来たありんすちゃんとぶつかりました。

「ちよ……なんなの？ ありんすちゃん？ そんなに慌てて」

「モデルがひちゅようなんでありんちゅ」

ありんすちゃんはそう言うといきなりアルベドの胸を両手で揉みました。

「ちよ……なに？ また……」

なるほど。おそらくありんすちゃんは以前にユリやアルベドの胸を揉んだ時の事を描こうとしているのですね。

しかしながら、当然アルベドには全く理解出来ません。しばらくアルベドの胸を揉んでいたありんすちゃんはガツクリと肩を落としました。

「モミモミしてるちよ描けないでありんちゅ……描いているちよモミモミ出来ないでありんちゅ……」

うーん……それは仕方ないと思いますが……

それから一時間もの間、アルベドは訳が分からないままにありんすちゃんに胸を揉まれ続けたそうです。仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

ちなみにありんすちゃんがお絵かきした作品はそれぞれの話のあとがきに掲載していきますので、興味がある方はご覧下さい。

097 ありんすちゃんはみた

ナザリツク地下大墳墓 第二階層〈屍蟻玄室〉——もうじきお昼になるというのにありんすちゃんはまだぐっすり眠っているようです。あれ？ 起きてる……と思ったら目玉が書いてあるアイマスクをしていたんですね。びっくりしました。

モゾモゾしながら大きなあくびをして、どうやらようやくお目覚めのようです。

うーん……どうも最近睡眠が浅いみたい？ なんだか疲れが抜けない？ なんだか年寄りみたいな事をブツブツ言っていますね。

ありんすちゃんは育ち盛りの子供なんですから、とはいってもアンデッドだから育たないのかも知れませんが——とにかく子供らしく元気に過ごして欲しいものです。

ベッドの上でありんすちゃんがボンヤリしていると、シモベのヴァンパイア・ブライドが顔を出しました。

「ありんすちゃん様、コキュートス様がお見えになりました」

ありんすちゃんがうなずくと、冷氣と共に階層守護者のコキュートスが入って来ました。

「……アリンスチャン、オ目覚メノヨウダナ。我が階層デ作ツタ天然氷ノカキ氷デモ食ベテクレ」

ありんすちゃんは大喜びです。ありんすちゃんの大好きな宇治金時の山盛りかき氷です。コキュートスはかき氷に手を伸ばすありんすちゃんを制すると言いました。

「——ソノカワリ、アノ事ハ内密ニシテモライタイ。タノム」

ありんすちゃんは何の事かさっぱりわかりませんが、力強く頷きました。

「まかちえるでありんちゅ！」

決してかき氷を早く食べたかったからではないと思いますが……

コキュートスが去ると、今度はアウラがやって来ました。なんだかモジモジしていて、いつものアウラらしくありません。

「あ、ありんすちゃん。やつほー。……とても美味しいモンブラン

ケーキを持ってきたよ。ほら、栗も大きいでしょ?」

「モンブラン!」

ありんすちゃんはまたまた大喜びです。さっそくモンブランケーキをわしづかみにしようと手を伸ばします。

「——その前に! ……ありんすちゃん、あたしのあんな所を見られちゃったけどさ、たまたまなんだから忘れて欲しいんだけど? ね?」

「わかったでありんちゅ」

ありんすちゃんはまたしても力強く頷きました。うーん……モンブランケーキを食べたいから、かもしれませぬね。

アウラはホツとした様子で帰っていききました。

「これはきつと幸運のアイマシユクでありんちゅね!」

ありんすちゃんは目玉が書いてあるアイマスクをマジマジと眺めました。このアイマスクをつけて眠って起きたらこんなに良い事があるなんて。もしかしたらたまたまなのかも知れませんが。

※ ※ ※

さかのぼる事、数時間前——

ナザリツク地下大墳墓第五階層へ大雪球◇——コキュートスが真っ赤なビキニブリーフを前にして腕組みしてなにやら考え込んでいます。

「……コノママ全裸キャラトシテ変態扱イサレ続ケルカ、ソレトモセメテパンツヲハクベキカ……悩ミ所ダナ……」

しばらく考え込んでいたコキュートスは意を決すると、赤いビキニブリーフをつかんで足を通しました。が、なんという事でしょう! しつぽが引っ掛かって上まであげられません。なんとも微妙な格好で、まるでパンツをずり下げた変態に思われかねない状態になってしまいました。

「……マズイナ、コレハ。シモベ達ニハトテモ見セラレン……ナ、アリンスチャン？」

慌てるコキュートスの前に突然ありんすちやんが現れました。実はありんすちやんは寝呆けてへグレーターテレポーションを発動させてしまっただけで、ぐっすりと熟睡中だったので……たま目玉が書いてあるアイマスクをしていたのでじつとコキュートスを見つめていると勘違いさせたのでした。

動揺したコキュートスを残してありんすちやんはまたもや何処かに転移してしまいました。

※ ※ ※

ナザリック地下大墳墓 第六階層——守護者のアウラがマールレの衣装タンスの前でなにやら思い詰めていました。

(……この間、アインズ様が『アウラが好きだ』って言ってたけど、もしかしたらアルベドでなくてあたしが正妻に……)

アウラはタンスからマールレのミニスカートを取り出しました。

(その内あたしもグラマーになって、女らしい衣装も似合うようになるかも……)

アウラはミニスカートを履いて鏡の前でセクシーポーズをとりました。

「……ウツフーン。パンチラサービスう——う！ ゲッ！ ……あ、り、ん、す、ちゃん？」

アウラの目の前にありんすちやんの姿がありました。とはいってもありんすちやんは熟睡中だったんですが……結局、アウラもありんすちやんに恥ずかしい格好を見られたと思ひ込んだそうです。

まあ、ありんすちやんはなにも見ていませんから、単純にかき氷やモンブランケーキが食べられて良かった位しか思っていますんですけどが……

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

098ありんすちゃんしようせつをかく

ナザリック地下大墳墓第二階層〈屍蟻玄室〉——今日もありんすちゃんは床に寝転がって一生懸命になにやら書いています。また、お絵かきしているのかと思つたら、どうやら文章を書いているみたいですね。

「ふしぎのくにのありんちゅちゃはありんちゅちゃが書くでありんちゅ」

うーん……二次小説の主人公が自分が登場する小説を書くなんて聞いた事がありませんが……

それによりんすちゃんにまともな文章が書けるとは思えません。ハーメルンに投稿出来るのは最低文字数が一千文字で、四百字詰め原稿用紙で二枚半です。

「ありんちゅちゃが書いて評価をまっかかにしゆるでありんちゅ」
うーん……無理です。それ。

まあ、ありんすちゃんの事ですからしばらくしたら飽きてしまうでしょうし、オーバーロード本編の最新刊の12巻が九月末にならないと出ないので、ネタ切れ気味な私としてはありんすちゃんが話を書いてくれるのは有り難い事ではありますが……

それにこのままだとありんすちゃんが『スクリームアイドル』を結成してしまったりしそうなので……そうなるよりは幾分ましかもしれません。

※ ※ ※

「できたでありんちゅ！ 傑作が書けちゃでありんちゅ！」

どうやらありんすちゃんの小説が書き上がったみたいですね。どれどれ——

『ありんすちやんかわいいとてもかわいいびじん

ナザリックありんすちやんおうちでおふるあわあわブクブク

ありんすちやんはちんちんありません

ありんすちやんはいいました

ありんすちやんにちんちんください

あいんずさまにちんちんもらいます

はえたはえた

ありんすちやんにちんちんはえました

によきによきちんちん

こりでたちしよんできます

とぼしつこでかちます

ありんすちやんはちんちんふつてでかけました

まあれとあうらがいました

ありんすちやんはちんちんみせます

すごいちんちん

あうらはくやしくなるす

あたしもほしいあうらいいます

ありんすちやんとくいです

ちんちんがとんでいきました

ちんちんはどこいったかな

あるいていくとちんちんおちてた

ありんすちやんがひろうと

ちんちんがこんにちわしました

ぼくはちんちんです

ありんすちやんかわいいです

ありんすちやんけこんしましたよ

ありんすちやんはおこたわりします

ありんすちやんはあいんずさまにおむこするからだめです

ちんちんはなきました

えんえんありんすちやんのいじわる

ちんちんはなきつつけました

しるとちんちんはとけてました
さよならちんちん
ありがとうちんちん

——おわり——』

これ……だめですよね。ちなみに作中のちんちん——いや、やめてお
きましよう。……うーん……仕方ありませんよね。だって、ありんす
ちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

099 ありんすちゃんどパッド

ナザリック地下大墳墓第二階層〈屍蟻玄室〉——今日の階層の見回りを既に終えたありんすちゃんは自分の部屋でのんびりしています。

普段使っていないクローゼットの引き出しを開けてみたありんすちゃんは、綺麗に並べて仕舞われているたくさんの胸パッドを見つけました。

「ありんすちゃん様、これは全てかつてシャルティア様であつた頃にお使いになつていました胸を大きくするパッドでございます」

ありんすちゃんの質問にヴァンパイア・ブライドが答えます。シャルティアだつた頃ならともかく、5歳児位の女の子に過ぎない現在のありんすちゃんには全く無用な物ですから、今までありんすちゃんは存在する事すら気がつかなかつたのも仕方ありませんね。

「ぱっど、でありんちゅか？ 色んな種類があるんでありんちゅね」

ベッドの上に並べられたたくさんのパッドを眺めながらありんすちゃんはため息をつきました。デザインや色も様々で、素材もいろんなものがあります。以前のシャルティアのパッドにかける情熱がこのコレクションから垣間見る事が出来ます。

「シャルティア様はこちらのシリコン製の品をお試しになられましたか、重さで落ちてしまい、結局こちらの布製のパッドを左右それぞれ三枚ずつ重ねて着用される事が多かつたそうです」

ありんすちゃんにはシャルティアだつた頃の記憶がほとんどありません。ですが、ひどくこだわっていた事らしく、今のありんすちゃんにも惹かれる気持ちがありました。

「……あの……ありんすちゃん様、お試しになりますか？」

ありんすちゃんの気持ちを察してヴァンパイア・ブライドが声をかけました。勧められるままに、ありんすちゃんは胸にパッドをつけてみましたが残念です……さすがにサイズが合わないので無理でした。

本来の用途での使用はあきらめたありんすちゃんですが、まだまだ興味が尽きないようです。ベッドの上に広げられたコレクションを一つ一つ、じっくりと見比べるのです。

「こっちのはプルプルでありんちゅね」

ありんすちゃんが気に入ったのは肌色のシリコン製のパッドでした。本物のオツパイ同様の感触で、指先で突つくとプルンと揺れます。

「……気持ちいいでありんちゅ」

ありんすちゃんはパッドに顔をすりすりしてみました。少しひんやりしていて病みつきになりそうです。その内になにやら閃いたありんすちゃんは頭にパッドを乗せるとリボンで縛りました。

「ひんやりして気持ちいいでありんちゅ」

すごいですね。ありんすちゃんは時々ただの5歳児位の女の子に思えない発想力を発揮しますよね。

ちなみにこのありんすちゃんの発案のひんやり帽子『ヒヤリハット』はその後商品化され、エ・ランテルで大人気商品となったそうです。

100ありんすちやんとルビクキュー

その日のありんすちやんは暇でした。ですから部屋の片隅にほったらかしにしていたルビクキューを取り出して遊んでいました。

ルビクキューというのは四角い形のパズルで、それぞれの面が違う色になっています。それが上下左右に回転するようになっていて、色をバラバラにしたりまた色を揃えたり出来ます。……ありんすちやんには出来ませんでした……

それまでは一面ですら揃えられなかったありんすちやんでしたが、なんと二面が揃ってしまいました。まったくの偶然だっただけなんです。ありんすちやんは得意満面です。

誰かに見せびらかして自慢したくなりました。シモベ達を集めてありんすちやんが如何に素晴らしい偉業を達成したかを褒め称えさせましょうか？ ありんすちやんは静かに首を振りました。ダメです。このところありんすちやんはやたらとシモベ達を集めて自慢ばかりし過ぎていたので、最近はどうもシモベ達がウンザリしてきているのでした。

では、第六階層に行つて双子のダークエルフに自慢してみても如何でしょう？ ありんすちやんはまたしても首を振ります。そもそもアウラもマールもルビクキュー自体を知りません。ですからありんすちやんが二面を揃えた事がどれ程凄い事かわからないでしょう。それどころかきつとこう言うでしょう。「面白そうじゃん。あたしにもやらせて」……器用なアウラの事です。たちまち一面はおろか六面を揃えてしまうかもしれません。

「……アウアウのばーかばーかばーか！」

思わずありんすちやんはアウラに悪態をつきましたが、アウラは何も悪くないですよ？

「ちようでありんちゆ。あの子に見せるでありんちゆ」

ありんすちやんはかつてルビクキューを手に入れた時に会った女の子を思い出しました。名前は知りませんが髪が白黒の変なハーフエルフの女の子です。確かスレイン法国とかいう国でした。すぐさ

まありんすちやんはヘグレーターテレポーテーションを発動させ——
—ようとして止めました。そして部屋の本棚から一冊の本を取って
ニツコリしました。

「これをお土産にあげるでありんちゅ」

そして改めて魔法を発動させたのでした。

※ ※ ※

スレイン法国最奥部 神聖執行会議室——最高執機関十二名による
会議が行われる場所——の手前の最高神官長の執務室では現在、重
要な打ち合わせの為周辺にまで人払いがされていました。

誰もいないその廊下に転移魔法（ヘグレーターテレポーテーション）
で転移してきたありんすちやんがやって来ました。

「たちかこの辺りの部屋で会ったでありんちゅ」

ありんすちやんはトコトコと最高神官長の執務室の前にやって来
ました。部屋の扉には法国語で『重要秘密会議中 立ち入り禁止』と
書かれたプレートが掛けられていましたが、勿論ありんすちやんには
読めません。仮にナザリックで使われている日本語で書いてあった
としても、ひらがなしか読めないの『ちり』しか読めなかった事
でしょうが……

ありんすちやん扉の前でしばらく考えこんでいましたが、すぐに明
るい顔で叫びました。

「えっと、『ありんちゅちや、ようこそ、いらつちやいまちた』って書
いてあるでありんちゅ！ 開けるでありんちゅ」

ありんすちやんは扉を思いきり開けました。勿論、扉には魔法で鍵
が掛かっていたのですが、ありんすちやんにはなんの意味もありません
でした。

「……な！」

部屋の中では黒の女性用下着を身につけた最高神官長と、下着姿の

土の神官長——レイモンがびつくりした顔でありんすちゃんを見ました。

「……うーん……違ったでありんちゅね」

二人がパクパクと口を開きありんすちゃんに何か言いかけた瞬間——ありんすちゃんはくしやみをして姿を消してしまいました。

※ ※ ※

「……あれは転移魔法……恐らく第六位階以上の……」

最高神官長の執務室に残された二人は先程起きた事柄について話し合っていました。

「間違いありません。あの少女も恐らくは……」

最高神官長にレイモンも同意しました。ちなみに二人は既に着替えていました。

「……さらにこの本……魔導王国で作られたものようだ。この暴露本がガゼフの命を奪ったのかもしれない」

「……まさか？ ……だとするとかの戦士長は自殺……？」

最高神官長は顔をしかめました。

「これだけの醜聞を広められてしまったては、な。聞くところによると蘇生を拒否して死んでいったという」

「……………」

部屋には沈黙が訪れました。二人にはこれから自分達の身に起ころうであろう事がまざまざと思ひ描かれたからです。

「……恐ろしい……明日は我が身、か。……我らは秘密を握られてしまった……おそらくは、かの邪悪な魔導王に……な」

力なく呟く最高神官長の横顔を見ながらレイモンは項垂れるのでした。

……かのガゼフのように我々の醜聞が明らかにされた時、自分は死を持って名誉を守るだろうか？ 魔導王の恐ろしさをこうして体験する事になろうとは……

レイモンはただただ震えるのでした。

※ ※ ※

結局、ありんすちゃんはルビクキューを自慢する事は出来ませんでした。髪が白黒の変なハーフエルフの女の子の名前すら知らないので結局見つからなかったので諦めちゃったんですって。

仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

101 ありんすちやんとみつまめ

ナザリツク地下大墳墓 第二階層〈屍蟻玄室〉では今まさにありんすちやんがおやつを食べている最中でした。今日のおやつはなめらかなこし餡をたつぷりのせたみつ豆です。

ありんすちやんはあんみつだけでなくフルーツみつ豆も大好きです。こし餡を少し溶かして寒天と一緒にスプーンですくってほお張ります。完全に溶かさずに少し残した状態がありんすちやんのこだわりです。

目を閉じてうっとりとした表情はとても幸せそうですね。

おや、ありんすちやんが何やら器の中を覗んでいます。なにかあったのでしょうか？

ありんすちやんに給仕をしていたヴァンパイア・ブライド達が表情を硬くします。ありんすちやんはじつと器から視線を動かしません。どうやらありんすちやんが覗んでいたのは小さな黒豆のようです。

「この豆はいらないでありんちゆ。美味しくないでありんちゆ」

どうやらありんすちやんは黒豆が嫌いなようですね。

「黒豆、入れちゃダメって、ありんちゆちや、言ったでありんちゆよね？」

ありんすちやんが鋭い視線をヴァンパイア・ブライドの一人に向けました。ヴァンパイア・ブライドはおろおろしながら答えました。

「……それがその……副料理長が言うには『みつ豆から豆を抜いたらみつ豆とは言えません』と……」

ありんすちやんは思いもしない答えにしばらくポカンと口を開けたままでした。

ありんすちやん、これは副料理長の方が正しいと思いますよ。とはいえ、私もみつ豆の黒豆はいらなと思います……

ありんすちやんはヴァンパイア・ブライドから器の中の黒豆に視線を戻しました。じつと黒豆を覗んでいます。どうやら頭の中でどうかして黒豆を懲らしめてやろう、とでも考えているのでしょうか？ しばらく黒豆を腕組みしながら見詰めていたありんすちやんは何

か閃いたらしく、笑いだしました。

「この黒豆はこうちてやるでありんちゅ」

ありんすちゃんは黒豆をつまみ上げると自分の鼻の穴に詰めました。そしてフンスと鼻息の吹くとまるで弾丸のように黒豆が飛び出してヴァンパイア・ブライドの額にくつつきました。

ありんすちゃんは大喜びです。今度は左右の鼻の穴に黒豆を詰めます。

「フンス！ フンス！」

的はまたしても哀れなヴァンパイア・ブライドです。

「おもちゃろいでありんちゅ！ もっとやるでありんちゅ！」

今度は片方の鼻の穴に黒豆を二個詰めてみました。さて、どんな飛び方をするでしょうか？ありんすちゃんはワクワクしながら反対側の鼻の穴をふさぎ――

「!!」

フスー……ありんすちゃんは力一杯鼻息を出そうとしますが黒豆は出てきません。鼻に指を差し込んでみましたが、黒豆はさらに奥にいつて取れません。大変です！

「おやおや？ 大変っすね。そのうち黒豆から芽が出てきてありんすちゃんの顔にニヨキニヨキ豆の木が生えてくるっすよ」

ありんすちゃんが見るといつの間にか姿を現したルプスレギナがニヤニヤしていました。

ルプスレギナの言葉にありんすちゃんは真っ青です。いやいや、みつ豆に入っていた黒豆は発芽しないと思いますよ？

※ ※ ※

大騒ぎの末、結局ニューロストが持っている道具でありんすちゃんの鼻の穴の黒豆は無事に吸い出されました。やはり、食べ物で遊んではいけませんよね。

翌日の昼食はチャーハンでした。ありんすちゃんは早速ペロリと平らげます。あれ？ お皿の上には綺麗な緑色のグリーンピースが四つ残っていますね。

ありんすちゃんは腕組みをして皿の上のグリーンピースを睨みます。うーん……もしかしたらありんすちゃんはグリーンピースが嫌いなのでしょうか？

しばらく睨んでいたありんすちゃんはいきなりグリーンピースをつかむとまたしても鼻の穴に……うーん……懲りませんね。

かくして鼻からグリーンピースが取れなくなったありんすちゃん
は、**またもや大騒ぎ**するのでした。

仕方ありませんよね。ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

102番外編・「美姫」ありんすちゃん

(おかしいな……ナーベラルがいない。……まさか、まだかくれんぼなんて事は無いだろうが……急に「漆黒」のモモンとして仕事をしなくてはならないのに困ったな。……先方は『ナーベさんも是非』というたつての願いだから俺一人ではまずいんだよね。……はあ。どうしたものかな?)

ナザリック地下大墳墓の執務室でアインズは頭を抱えていました。脳裏に以前ナザリックに戻ってきた晩に、椅子の後ろに隠れたつもり
のナーベラルの姿を思い出しました。かれこれ一週間前の事になりますが、それがナーベラルの姿を見た最後でした。

(……まさかな。あのままずっと隠れたままとは思えないが……それにかくれんぼならすぐに見つかるだろう。そもそもあれから随分経つし、いくらナーベラルでもまさか、ね? ……いくら融通がきかない性格とはいえってもまさかあれから一週間もかくれんぼを続けるなんていう事は……うーん……)

アインズはこの所忙しくしていた為、ナーベラルの不在に全く気がつかなかった自分を恨めしく思うのでした。

「アインズ様、シャルティア様がおみえになりました」

アインズが頷くと、ありんすちゃんが部屋に入ってきました。見ると銀色だった髪を黒くしてポニーテールに結んでいます。服装もいつものボールガウンではなく茶色のローブを着ていました。

(……うん? ……これはまるで……)

「アインジュちやまにはご機嫌うるわちく、ナーベのかわりにわたちが行くますでありんちゅ」

緊張していたので『行きます』を『行きます』と言ってしまいました。

「……シャルティアよ。気持ちは嬉しいのだが、ナーベのかわりにはちよつと……」

「大丈夫でありんちゅ! あ、り、ん、ちゅ!」

駄目です。ありんすちゃんにはもはや聞く耳を持ちません。それも

そうです。アインズ様がナーベラルの所在を探しているという話を聞いて、時間をかけてありんすちゃんはナーベラルに変装したのでしたから。本当は本物のナーベラルと間違っで見つけてもらい、アインズ様の所に連れていってもらおう計画だったのですが、さすがに無理がありますとメイドに断られてしまったのでした。

結局、ありんすちゃんの激しい熱意に負けて「美姫」ナーベの代役をさせる事になってしまいました。

※ ※ ※

「依頼人は貴族と聞いていたが……あの若者かな？ ……しかし……何ゆえ私をあんなに睨み付けてくるんだ？」

依頼人との待ち合わせ場所に来たアインズとありんすちゃんは依頼人からの視線に戸惑うのでした。

「わらわがあんまり、可愛いからでありんちゆ」

ありんすちゃんは可愛く小首を傾げてから続けました。

「——ころちましゆか？」

(……いや、そんな変な所だけナーベラルの真似をしなくていいから……)

アインズは少しばかりウンザリしながらありんすちゃんをたしなめます。

「……その『取り敢えず殺せばいいや』という考えはよせ。死なせてしまえば利用出来なくもなる。良いな？」

ありんすちゃんは少し考えてから平伏しました。

「さしゆがアインジュちゃま。えつと、モモンしゃ——ん」

(いや、そんな所ばかり真似しなくて良いから……うーん……やつぱりシャルティアを連れて来たのは失敗だったかな……)

「お二人は、仲が、よろしいんですね！」

アインズとありんすちゃんに依頼人の若者が棘のある言い方で呼

掛けて来ました。

「まあ、仲間ですから……初めまして。今回は名指しの指命だそうで……私がアダマントタイト級冒険者チーム『漆黒』のモモン、こつちが――」

「ナーベでありんちゅ」

ありんすちやんが胸を張って名乗ります。

「モモンさんにナーベさん。この度は依頼を引き受けて下さってありがとうございます。私はアンドレと申します。そしてこちらが――」

「トーケル・カラン・デイル・ビョルケン Heim だ」

依頼人の若者はありんすちやんを見てとても驚いた顔をしました。

「……あの……ナーベさんが少し若返ったりしていませんか？ 少し幼くなった――」

「まさか。ご冗談を……気のせい、ですよ。気のせい。ハハハハハ」

トーケルも釣られて笑いだしました。

「気のせいでしたか。ハハハハ……」

「そうですよ。ハハハハハ……」

「そうですね。ハハハハハ……」

互いに腹を探りあうような空虚な響きの笑い声がしばらく続きました。

「ところで……組合から話は聞いていますが、ビョルケン Heim 卿が――」

「まだ、家督を継いだ訳でないので卿ではないがな」

アインズという言葉をとーケルが遮りました。そんなとーケルにむつとしたありんすちやんが呟きました。

「……ちゅまんないゴミムシでありんちゅね」

ありんすちやんの呟きにとーケルは真っ青になりました。

「いや、その……この成人の儀を澄ませれば家督を継いだも同じというか……ですから私の事はビョルケン Heim 卿と呼んでいただいても構いませんとも。問題ありません……」

「……では、なんとお呼びすれば？」

とーケルはありんすちやんの顔色を伺いながら答えました。

「ビョルケンヘイムで構わない……です。あ、トーケルでも……」

「了解しました。ではビョルケンヘイムさん。今回の依頼は身辺警護という事でよろしいですね？ ビョルケンヘイムさんはお家の掟によりモンスターを討伐しなくてはならないとの事ですが」

トーケルの代わりにアンドレが答えました。

「出来れば人型のモンスターがいいですね。モモンさんは以前、ゴブリンの集団を追い払ったと聞きましたが？」

「ああ、南方の森から出現したゴブリンの件ですか？ それはナーベがやったんです」

「ほーう。やっぱり凄いですね。ナーベさんは！」

トーケルがわざとらしく叫びました。ありんすちゃんは自分が今、ナーベだという事を思い出して胸を張りました。

「わたちがナーベでありんちゅ！ しゅごいでありんちゅ」

そして打ち合わせの結果、ゴブリンの残党を討伐しに行く事になりました。

※ ※ ※

「どう思う？… アンドレ」

一頭の馬に相乗りするモモンとナーベから距離を保ちつつ移動しているトーケルはアンドレに尋ねました。アンドレは頭をかきながら答えます。

「……うーん……やはり坊ちゃんには脈が無さそうですね。ああしてあからさまに代役を立てられたって事は、拒絶とみた方が良いでしょうね」

「アンドレもそう思うか……しかし……何故ナーベさんはそんな事をするんだろうか？ しかもよりにもよってあんな少女が代役など……」

「うーん……そうですね。明らかにすぐばれる代役、しかもモモンさ

んはそれを認めていません。これはあまり深く追求しない方がよさそうです」

一人なにやら考え事をしていたトーケルは顔を上げました。

「アンドレわかったぞ。これはきつと試験に違いない。ナーベさんは私を試しているんだ。考えてもみる？　いくら代役とはいえ全く無関係な少女を代役にする筈はない。それに少女とはいえあの美貌……おそらくはナーベさんの妹かなにかなのだろう。そして彼女にいかにか紳士的に振る舞うかをナーベさんは試しているのに違いない」

※ ※ ※

「ビョルクケン Heim さん、アンドレさん、なにか悲鳴のようなものが聞こえてきませんか？」

先頭のモモンがいくらか緊張した様子で振り返りました。すかさずナーベが魔法を発動させます。

「モモンしゃ——ん。うさみみ、可愛いでありんちゅ。悲鳴がよおく聞こえて便利でありんちゅ」

いつの間にかうさみみ姿のナーベが答えます。

「ふむ。どうやら私達が向かっている村でゴブリン達が何者かに襲われているようです。私達は依頼人の要望を第一に考えますが……」

トーケルは結局偽ナーベのうさみみは何だったのだろう、と疑問に思いましたが口には出さずにいました。

「モモンさん。私達を守ってくれますか？　そしてもう少し村の状況がわかる場所まで移動しましょう」

「わかりました。私達は依頼人の安全を守りつつ要望をかなえてみせます。もしもの場合には私達が後ろを押さえますので振り返らずに逃げて下さい。では、一気にいきますよ。ハイヤー！」

※ ※ ※

一行が村の近くまでやって来るとひとときわ大きな悲鳴が上がりました。見ると巨大なモンスターがゴブリンを襲っていました。

「――八本の足、頭部に王冠のようなトサカ、バジリスク！ しかもあの大きさはギガントバジリスク！ 石化の視線や猛毒の体液、そしてあの皮膚はミスリル製の鎧に匹敵する固さ！ 最悪の相手です！ 逃げましょう！ モモンさん！」

モンスターを見たアンドレが叫びました。と、アンドレの前に小さな影が立ちはだかりました。

「ここは、チャル――ナーベにまかちえるでありんちゅ！」

なんと小さなナーベがギガントバジリスクに向かっていきます。と、次の瞬間――

――パクリ！

なんとありんすちゃん扮するナーベはギガントバジリスクに一呑みにされてしまいました。

「――ナーベさああん！」

※ ※ ※

ナーベを一呑みにしたギガントバジリスクは今度はモモンに向かいました。と、突然ギガントバジリスクの腹部が光りだして――

「ヴアーミリオン・ノヴァア！」でありんちゅ

ありんすちゃんの超位魔法、ヴアーミリオン・ノヴァアによりギガントバジリスクは消滅してしまいました。

「ベチョベチョで気持ち悪いでありんちゅ……クチュン！」

ギガントバジリスクの腹の中で体液まみれになったありんすちゃんはいくしやみをしました。すると、ナザリック地下大墳墓の第九階層でかくれんぼを続けていたナーベラルの姿が現れました。

「お風呂入るでありんちゅ」

ありんすちゃんを着ていたローブ等を脱ぎ捨てて裸になるとヘグレーターテレポーターションを発動させてナザリックに帰ってしまいました。

尚、その後で残されたアインズと事情を知らないナーベラルがトール主従に説明をするはめになったのですが……ありんすちゃんはその事も知らずにのんびりお風呂に入っていたそうです。仕方ありませんよね。ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのでから。

103 ありんすちゃんぶきをもつ

ローブル聖王国にありんすちゃんの姿がありました。

「あんまり賑わっていないでありんちゅね」

ありんすちゃんはつまらなさそうに呟きました。デミウルゴスの話ではローブル聖王国には海があると聞いていて、ありんすちゃんは海水浴なるものを楽しもうとこっそりお忍びで来たのでした。

デミウルゴスに教えてもらった座標にヘグレーターテレポーターシヨンでやって来たのでした。海はありません。どうやら聖王国の首都のようです。人影はまばらで城壁に囲まれた街はどことなく陰気でありんすちゃんはがっかりです。

と、慌ただしく人混みを散らして王城に向かう聖騎士の一団が駆け抜けていき、ありんすちゃんの持っていたイルカの浮き輪を踏んづけていきました。

「ありんちゅちゅのイルカ！ まちゅでありんちゅ！」

ありんすちゃんは聖騎士団の先頭の白いサーコートの子聖騎士を睨んで叫びましたが、届かなかったようで騎士の一団はそのまま王城に入ってしまった。

「……もうちゅかえないでありんちゅ」

ありんすちゃんはペツチャンコにしばらくでしまったイルカの浮き輪をつまみ上げてため息をつきました。まあ、すぐそばに海がなかった時点でふくらませたイルカの浮き輪は邪魔だったので……

「ちえつかくだからお散歩するでありんちゅ」

ありんすちゃんはチョコチョコとした足取りで歩き出しました。

※ ※ ※

——ガッシャーン！

「——なんだか騒がしいでありんちゅね？」

いつの間にか広場で眠っていたありんすちゃんは建物が壊れる音で目をさしました。壊れた建物を囲んで聖騎士達が緊張した面持ちで見守っていました。

「姉様！ やりましたね！」

「まだだ！ 奴は自分から飛んだんだ！」

先程の白いサーコートの女聖騎士が怒鳴ります。

「——ふふふ。そろそろ、こちらにも本気を出す頃合いのようですね」

「ほーう。だったらさっさと力を見せてくれないか？ ……カルカ様、ケラルト、下がって」

次の瞬間、倒壊した瓦礫の山から何か巨大なものが立ちあがりました。

「……ヤルダバオト？」

なんだかよくわかりませんがどうやらこれからヤルダバオトと女聖騎士達の戦いが始まるみたいです。

「おもちゃろちようでありんちゅ」

ありんすちゃんはドキドキしながら広場の中央に建っている銅像の台座の横に座って見学する事にしました。

「——でやああああ!!」

先程の白いサーコートの女聖騎士がヤルダバオトに攻撃します。女聖騎士の渾身の一撃は簡単にヤルダバオトに弾かれました。

「素手で相手も面倒……いや、いい武器があるな」

ヤルダバオトはそう呟くと女聖騎士に背を向けました。そして女聖騎士が切りかかった瞬間——

「ふむ——〈グレーターテレポーション〉」

姿が消えたヤルダバオトは次の瞬間、棒立ちになった二人の女の背後に現れました。

「カルカ様ああ！」

ヤルダバオトは女聖騎士がカルカ様と呼ぶ女の足首を掴んでぶら下げました。

「いい武器だ」

ヤルダバオトは手に掴んだカルカを振り上げると女聖騎士に降り

おろしました。

「おもちゃろいでありんちゅー！」

ありんすちゃんは大喜びです。人間を武器代わりに戦うなんて、なんて面白そうなのでしよう。

「ありんちゅちゅもやるでありんちゅー！」

ありんすちゃんは立ち上がると戦いの中に入っていく、女聖騎士の足首を掴むとヤルダバオトに降り下ろします。

バチンバチン！

ありんすちゃんとヤルダバオトはそれぞれの武器——聖王女カルカと聖騎士団長レメディオス——を激しく打ち合いました。

「……これはこれは。まさかこんな場所でこれだけの相手にまみえるとは思いませんでしたね」

「この遊びはおもちゃろいでありんちゅー！ こっちの武器のが丈夫だから勝ちゅでありんちゅー！」

女聖騎士はなにやら聞き取れない叫び声を上げていましたが、その内静かになりました。

二人は三十分程戦いましたが、なかなか勝負がつきません。仕方なく一時的に休憩する事にしました。

「……だいぶぎちやなくなつたでありんちゅ。〈大回復〉こりてまた丈夫になつたでありんちゅ」

ありんすちゃんが女聖騎士を回復させると弱々しい声で話しかけてきました。

「……私はローブル聖王国聖騎士団長レメディオスだ。私は、テニスが得意なんだが……」

レメディオスはありつただけの知恵を振り絞って考えた台詞を口にしました。このままこん棒の代わりに振り回されては死んでしまう。少なくともカルカ様の命は無い。せめてボールならば……

「てにす、でありんちゅか？ ……おもちゃろそうでありんちゅ」

レメディオスの狙い通り、ありんすちゃんは乗って来ました。命懸けの説得により、レメディオスとカルカはラケットの代わりとなりテニスの試合として戦いが再開される事になりました。

※ ※ ※

「やーめーた！ でありんちゅー！」

突然、ありんすちやんはぐったりとしたレメデイオスをポイと投げ捨てるとヤルダバオトに背を向けて去っていききました。うーん……さつきまで楽しそうにラケット（レメデイオス）を振り回しながらボールを追いかけていたのに……勝負に負けそうになった途端につまらなくなつたようですね。まあ、仕方ありませんよね。ありんすちやんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

※ ※ ※

後に残されたヤルダバオトは一人、小さな独り言を呟くのでした。「ここにありんすちやんが登場するとは……さすがはアインズ様。私ごとときには全く予想出来ない展開……これは実に楽しみです」

104 ありんすちゃんテニスをする

「え？ テニス？ ……ふーん。面白そうだね」

ローブル聖王国から戻ってから数日後、ありんすちゃんはアウラとマーレを訪ねてナザリック地下大墳墓の第六階層に来ていました。

「あの、ありんすちゃん。…そのラケットって、その…シモベを使うのは、あの、まずいんじゃないかな？」

マーレの言葉にアウラも腕組みして頷きます。

「うん。うん。シモベ達もさ、ナザリックの仲間なんだし、あたしも物扱いするのはどうかと思うけどな？ ……そういや、ありんすちゃんってシモベの扱い、酷くない？ この間ヴァンパイア・ブライドを立てせて『ぼうりんぐ遊び』とかってやっていたらしいじゃん」

ありんすちゃんは二人の批判を受けて、思わず口をパクパクさせました。上手く言い訳をしようと思いますが、言葉が出てきません。

「シモベを大切にしないとさ、その内にありんすちゃんのシモベがみんないなくなっちゃうんじゃないかな？」

「…ちよんな事ゆるしやないでありんちゆ」

ありんすちゃんは否定しますが、内心では戦々恐々としていました。もしもありんすちゃんの階層からシモベがいなくなってしまうとすちやんが一人になってしまったらどうでしょう？ 階層の見廻りもありんすちゃん一人ではなりません。それにお風呂で頭を洗うのは…？ 着替えもどうしましょう？

真つ青な顔で呆然と立ち竦むありんすちゃんを見ていたアウラに憐れむような表情が浮かびました。

「とりあえず、さ…ラケットにシモベを使うのはやめておこうよ？」

別に丈夫な人間だったら大丈夫なんじゃないの？

アウラのさりげない一言にありんすちゃんの顔がパアーツと明るくなりました。そうです。手頃な人間ならいましたよね？

※ ※ ※

「ヘックション!!」

魔導国傘下となり、暫定帝国の暫定皇帝と立場が変わったジルクニフは盛大なくしゃみをしました。

「うへえ。……陛下、鼻水が垂れていますぞ?」

近侍の一人、バジウツトがおどけた様子で大袈裟な身振りで避ける真似をしました。

「……風邪なら気をつけて下さいね。陛下にはまだまだ頑張ってくださいと……」

同じく近侍のニンブルが口を開きました。

(……ふん。今更この私がどう頑張れば良いと言うのだ?)

ジルクニフは口の中に苦々しいものを感じながら二人の顔を交互に眺めました。かつての帝国四騎士も、一人は死亡、一人は職を辞して今ではこの二人だけになってしまいました。噂ではかの「重爆」は魔導国で解呪されて冒険者になったとか……

「……私も皇帝でなかったらな」

ジルクニフは誰にも聞こえない位の小さな声で呟きました。そうです。もし、皇帝でなければ、現在のように魔導国から暫定皇帝として任命されなかったら――

「――一介の冒険者も良いものだな」

思わず口から出てしまった本音に早速バジウツトが続けます。

「……俺はそうは思いませんね。あれはあれでなかなか大変ですよ?」

とはいえ今の俺達程じゃ無いとは思いますがね……と。あれ……不味いんじゃないすか?」

バジウツトが空の彼方を指で指しました。遥か彼方の空に点のような小さな影が見えてきました。だんだんと大きくなる影は――

「……あれはドラゴン! 魔導国の……まあ、もう属国となったのだ。まさか無茶はすまい」

「……だと良いですがね」

ジルクニフの目はドラゴンの背中の三人の子供達を捉えていました。そしてこれまでの理不尽な出来事の一つ一つを思い返していた

のでした。

「……なんにせよ、だ。魔導国からのご使者殿だ。出迎えるぞ」

※ ※ ※

「なんだ。テニスラケットを借りただけか。それなら——」

ジルクニフは魔導国から来た子供達の望みを聞いて安堵しました。テニスというのはかつて「口だけ賢者」が発明した遊びの一つで、帝国ではさほど流行っていないもののラケット等の道具はあります。

「ありんちゅちはこっち！」

「それじゃ、あたしはこっちにするね！」

二人の子供がジルクニフの両側の二人を引つたくりまです。あまりの事にバジウツトもニンブルも声一つ上げられませんでした。慌てたのはジルクニフです。さつき子供達は『ラケットを借りに来た』と言っていないませんでしたっけ？

「ありんちゅちやからいくでありんちゅ」

ありんすちゃんは片手でバジウツトを軽々と持ち上げるとブルンブルンと振ります。対するアウラは同じくニンブルを構えてポンポン叩きます。

「やーめーてー!!」

これから始まるであろう地獄絵図を思い描きながら、ジルクニフはただただ絶叫するのでした。

一時間程の死闘の後、ぐったりして身動き一つしないバジウツトを放り投げたありんすちゃんがジルクニフを振り返りニッコリしました。

「次は皇帝の番でありんちゅよ？」

仕方ありませんよね。ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

105 ありんすちゃんアイドルになる

ナザリック地下大墳墓 第六階層へアンフィテアトルム——円形劇場の脇に建てられた舞台劇場（経緯はありんすちゃんのショー・ラスト・ゴー・オンをご覧下さい）のステージではありんすちゃん、アウラ、マールレの三人が踊っています。

「はいはい。そこまで。マールレはもつと動きを大きく躍動的に。アウラは左右に動く時は相手との距離感を意識して」

三人にアルベドからの叱責が飛びます。ありんすちゃんはじつとアルベドを見つめて訊ねました。

「ありんちゅちゅはどうでありんちゅか？」

「ありんすちゃんは………」

アルベドはしばらく口を閉じて考え込む様子を見せました。

「ありんすちゃんは……そうね、そのままが良いわ」

アルベドの言葉にアウラがキツと睨み返しました。

「ちよつと！ アルベドさあ、ありんすちゃんに甘いんじゃないの？」

アルベドはアウラの耳元に囁きました。

「アウラ、我慢して頂戴。ありんすちゃんにあれこれ指導して果たして良くなるかしら？ それどころか反発して拗ねてしまうだけだとは思わない？」

「……それはそうだけどさあ……」

アウラは言葉に詰まりました。確かにありんすちゃんの性格ではせつかくの指導は全て無駄になるでしょう。ありんすちゃんが三人のセンターに選ばれたのも、単にありんすちゃんが目立つポジションをやりたがったからだけでなく、左右からアウラとマールレがフォロー出来るから、でもありました。少なくともアルベドの説明では、でした。

※ ※ ※

「アインズ様、これは？」

「うむ。実は普段アルベドと共に、こうしてナザリツクの皆から集めた様々なアイデアの中から良いものがないか検討していてな……」

デミウルゴスはいたく感動しました、と大袈裟に一礼すると、紙の一枚一枚に鋭い視線を送りました。

「……なるほど。公平を期する為、全て同じ筆跡で清書されている……さすがはアインズ様」

「……よくわかったな。デミウルゴス。……所で今回付き合って貰って済まないな。いろいろ忙しいだろうに」

「……いえいえアインズ様。アルベドが不在なれば、このデミウルゴスが代わりをつとめるのに何の問題がありません？ 幸いに私の仕事は現在一段落しておりますのでご懸念には及びません」

「……ゴホン。それならば始めるとしようか。まず——」

アインズはデミウルゴスの顔色を伺いつつ一枚目の紙を選びます。このアイデアが書かれた紙の中にはアインズ自身のものも混ざっています。普段のアルベドが相手の場合にはさりげなさを装って何枚か検討した後に選ぶのですが、今回は思いきって一枚目に自分のアイデアが書かれた紙を選びました。

「……ゴホン。えーなになに。『魔導国の冒険者を増やす為、ナザリツク戦闘メイドでアイドル冒険者チームを結成してみては如何でしょうか』……うーむ」

アインズはチラリとデミウルゴスの表情を伺います。アルベドなら『いったい誰がこんな愚孝を……却下です』と即座に否定した事でしょう。

「……ふむ。なるほど。……アインズ様がこの提案をお選びになったのには何らかの意図があるのですね。そういえばここに同じような意図の提案が——なになに、『ありんちゅちゅやはすくうるあいどるになります』……どうやらありんすちゅちゃんの提案のようですね？」

デミウルゴスは瞳を細めながら嗤いました。

「アイドル冒険者チーム。魔導国の広告塔……なかなか素晴らしい提案ではないですか」

かくて『スクールアイドル』ならぬ『スクリームアイドル』として
ありんすちゃん、アウラ、マーレの三人組ユニットが急ぎよ結成され
たのでした。

※ ※ ※

アルベドがナザリックに戻るとすぐに留守中にアインズとデミウ
ルゴスで協議されたアイドル冒険者チーム案を知り、心の中で歯ぎし
りしました。しかしながらそんな胸のうちは押し隠してアインズに
進言します。

「アインズ様。そのアイドル冒険者チームの件、是非ともわたくしに
お任せ下さい。きつと最高の成果をご覧頂きます」

それからありんすちゃん、アウラ、マーレの厳しいレッスンが始ま
りました。そしていよいよアインズや階層守護者達へのお披露目の
日――

三人の踊りは完璧でした。

日頃のレッスンの成果は間違いなく披露できていて、非の打ち所は
ありませんでした。……踊りに関して、は。

ですが、残念な事に――

「ごちゃえーはあーどこにいいー」

「イエーイ！ イエーイ！ オー！」

メインボーカルのありんすちゃんはなんと……音痴だったのだし
た。

本人は気持ち良さそうに歌っていましたが……ね。仕方ありませ
ん。だって、ありんすちゃんは5歳児位の女の子なのですから。

106 ありんすちゃんきがえる

「あーあ。なんか残念だったねー」

「……ボ、僕もが、頑張ったんだけどな」

ナザリック地下大墳墓 第六階層のアウラ達の部屋ではありんすちゃん、アウラ、マールレがため息をついていました。前回アイドルユニットとしてのお披露目で、ありんすちゃんが音痴だという決定的な欠点が明らかになり、計画は消滅してしまったのでした。

「……ありんすちゃんだけ口パクにしたら良いのにねー。今度あたしから『中の人』に頼んでみようか?」

アウラさん……それはダメです。

「——ゴホンゴホン。お、お姉ちゃん、な、中の人なんてい、いないと思うな……」

「……ふーん」

アウラは納得いかないみたいで口を尖らせました。

「……じゃあさ、上坂す●れに頼んでみたら良いじゃん。ありんすちゃんの声にそっくりだし」

「……うーん。無理じゃないかな。オバロ二次でもマイナーな作品だから、あの、上●すみれさんはありんすちゃんなんて、その、知らないんじゃないかな? それに今は鬼灯のれ——」

——ゲフンゲフン。少々お待ち下さい——

ここはアウラとマールレの部屋。先程からありんすちゃん、アウラ、マールレの三人がアイドルユニットの反省会をしています。

「……残念だったねー。ありんすちゃんがもつと歌が上手だったら良かったね。今度はあたしがセンターでやってみる?」

「……お、お姉ちゃん。ありんすちゃんだって一生懸命だったんだから……」

ありんすちゃんを擁護するマールレをアウラはジト目で見ます。

「……なあに? 世の中には一生懸命だからって許されるなんて甘い事は無いと思うけど? 下手くそは下手くそって言ってるなんか悪い?」

「……お姉ちゃん。ありんすちゃんを責めると……」

マーレはおどおどしながらありんすちゃんを振り返りました。するとありんすちゃんはマーレの衣装タンスを開けて楽しそうに様々な服を広げてご満悦でした。

「アウアウは衣装持ちでありんちゅね?」

「……え? 違うよ。それはみんなあたしのじゃなくてマーレのだよ。ぶくぶく茶釜様がよくマーレの着せ替えをしていたんだよ。そういうばありんすちゃんだって沢山の衣装をペロロンチーノ様から頂いているんでしょ?」

ありんすちゃんはため息をつきました。

「ありんちゅちはかわいいの、あまり無いでありんちゅ。ナーシユ服やシエーラー服や布が少ないかわいくないのが一杯なんでありんちゅ」

アウラはペロロンチーノの性格を思い出してありんすちゃんに少し同情するのでした。かつて姉のぶくぶく茶釜様から『エロ大魔王』と呼ばれていた所以を。

「あ、あの……気に入ったのがあったら、着てみたら、あの、どうかな?」

「そうだよ。着てみたら? たまにはイメチェンも良いんじゃないかなあ?」

双子のダークエルフに薦められてありんすちゃんはマーレの衣装タンスから服を選んでみる事にしました。

「決めちゃでありんちゅ!」

あれこれ楽しそうに悩んでいたありんすちゃんは黒地に花の模様が綺麗な着物を選びました。

「へー。綺麗な着物だね。これには確か黒髪のウィッグがあつたよね? あ、これだよ」

マーレが黒髪のおかつぱのウィッグを持ってきました。確かに金髪や銀髪よりも黒髪の方が着物に似合いますよね。

うーん。黒髪おかつぱで着物姿のありんすちゃん。とても似合つて可愛らしいのですが……なんだか座敷わらしみたいにも見えます。

「ありんすちゃん、似合う似合う」

「……本当に似合うと、あの……僕も思います」

双子の賞賛を受けてありんすちゃんは得意満面です。片手を横に上げてポーズを取りました。

「……いっぺんちんでみる、でありんちゅ」

——あ……ありんすちゃんそれはのと……

うーん。ありんすちゃんには大人の事情は関係ないみたいですね。仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

107 ありんすちゃんどぶしぎなダンジョン

魔導国郊外——ここにマーレが冒険者訓練用のダンジョンを作っています。おやおや？ ありんすちゃんがやって来ましたが……邪魔にならないと良いですね。

「マーレ。ここは何があるんでありんちゅ？」

「……えっと、あの……落とし穴で……グリーンスライムだらけになるんです。あの、いそいで上がらないと溶けちゃうんです」

ありんすちゃんはマーレの説明を聞くといきなり提案しました。

「じゃあここで空からチョコレートが雨みたいにたくちゃん降るんでありんちゅ。ありんちゅちやが口おつきく開けていっぱい食べるでありんちゅ」

二人は次のトラップに行きます。

「えっと……ここでは次から次へとスケルトンが、あの、出てきます。

あの、全てを一気に全体攻撃魔法で倒したら、あのクリアです」

「しようでありんちゅ。シケルトの頭にドーナツのしえるでありんちゅ。ありんちゅちやはオールジョファツシヨドーナツが良いでありんちゅ」

うーん……ありんすちゃんの要望を聞かない方が良さそうですが……

マーレは奥の部屋の宝箱を開けました。すると中からアンデッドモンスターのレイスが飛び出しました。ありんすちゃんはビククリして尻餅をついてしまいました。

「あ、ありんすちゃん、大丈夫、かな？」

マーレが手を延ばして引き起こしてあげました。ありんすちゃんは何事もなかったかのように取り繕います。

「ありんちゅちやをビククリさしえるにはまだまだでありんちゅ」

ありんすちゃんは胸を張りました。

「ちゅぎに行くでありんちゅ」

マーレとありんすちゃんは次のフロアにやって来ました。

「えっと……ここは赤い石だけを踏んでいきます。あの、違う場所を

踏んだら——」

マーレが説明をしている最中にありんすちは黒い石を踏んでしまい、落とし穴に落ちてしまいました。マーレは落とし穴に呼びかけます。

「そのー落とし穴にはー恐怖公ーさんのー眷属がーいーいーまーすー！ー！」

ありんすちはパラパラと顔に降ってくるゴキブリを払いながら答えます。

「ちよーでーありんーちゅーかー！」

マーレはまた落とし穴に呼びかけます。

「はーやーくーあーがってーきーてーくーだーさーいー！」

ありんすちは穴の底から呼び返します。

「あーがーりーちやいーでーありんーちゅーがー恐怖公ーのーけんじよくがーふりやーまーなーいーのーでーあーがーれーなーいーでーありんーちゅー！」

マーレは困りました。そこで恐怖公に呼びかけました。

「あーのー恐怖公ーさーんー眷属ーをーふーらーせーるーのーとーめーてーもーらーえーまーせーんーかー？」

ありんすちは周囲を見回しますが、穴の底には恐怖公はいないみたいでした。

「マーレーー恐怖公ーはーるーちゅーでーありんーちゅー！」

マーレはありんすちやんの『るーちゅーでー』のあたりがよく聞き取れませんでした。

「あーりーんーすーちやーんーもーうーいっーかーいーいっーてーもーらーえーまーせーんーかー？」

ありんすちは叫び返しました。

「なーにーをーあーりーんーちゅーかー？」

マーレは穴に叫びます。

「さつきーなーんーてー言っただかーおーしーえーてーくーだーさーいー！ー！」

※ ※ ※

ナザリツク地下大墳墓 第九階層にあるアインズの執務室にありんすちやんとマールレが冒険者向けダンジョンの報告にやって来ました。

「マールレ、それでありんすちやんよ。ご苦労だった。早速報告をしてくれ」

「……は、はい。今現在で、あの、八割位の、あの、完成だと思えます」マールレが答えました。

「ふむ。で、ありんすちやんよ。率直な感想を聞かせてくれ。子供らしい自由な感性で、な」

ありんすちやんはコクリと頷くと口を開きました。

「おーもーちーろーかったーでーあーりーんーちゅー！」

うーん……仕方ありませんよね。だって、ありんすちやんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

108 ありんすちゃんとかくさんのランス

ナザリック地下大墳墓に一枚の回覧が回ってきました。

『ありんちゅちゅのむちぼちてつだいくららい』

アインズは首を傾げました。どうやら回覧を書いたのはありんすちゃんのようなようです。アインズは第二階層の屍蟻玄室に向かいました。

屍蟻玄室には既に他の階層守護者達も集まっています。ありんすちゃんも忙しそうに屍蟻玄室からいろいろな品物を外に運び出していました。なるほど。これらを虫干しするんですね。

「ふーん。随分衣装があるね？　でも、この衣装箱にはナース服ばかりだけどさあ、なんで？」

アウラの疑問にありんすちゃんが答えます。

「ペロロンチイノしやまは、『やきんびようと』のナーチュ服、『ナーチュにおまかしえ』のナーチュ服と『によによむらびよいんのしとし』のナーチュ服だって言ってたでありんちゅ」

ありんすちゃんは説明しますがあまりよくわかっていないみたいです。

「——うん？　……なんだか聞いた事があるような……確かペロロンチーノさんが以前話していたような……なんだっけ？」

「あ、あの、セーラー服やブレザーとかの箱もありますね？」

マールが開けた箱には赤や紺、黒や紫といった様々な色の学校制服が入っていました。

「ちよれは『ちゅはーと』でありんちゅ。ペロロンチイノしやまは『ちようはちよ』って言ってたでありんちゅ。他にも『でえす入れ』ちよか『すぐるでーず』『どきゆうせい』ちよか沢山あるでありんちゅ（——うーん。やっぱり聞いた事がある。何だったかな？　……キヤラメルコーンみたいなの……東鳩だ。……たしか……ペロロンチーノさんが集めていた……フィギュア？　ゲーム？　だったかな……何だっけ？）

「何かしら？　これは服なのかしら？　あら？　これならわたくしも持っているわ。確か『ガーターベルト』よね？」

アルベドの言葉にマーレも頷きます。

「……あ、はい。そうですね。あの、ぼ、僕も持っています。ぶくぶく茶釜様に戴いたんです」

ちなみにその箱の衣装はありんすちゃんは今一つ気に入らないみたいでした。

「ちよの箱はいらないでありんちゅ。可愛いのも無いでありんちゅ」

（うーん。これは……そうか。ペロロンチーノさんの趣味、だよな？

いやいや、ユグドラシルでこんなどうやったら手にはいるんだよ

？ ペロロンチーノさん）

「……おや？ こちらの箱には水着みたいですね？」

デミウルゴスが開けた箱には同じ形のワンピースタイプの水着が入っていました。白や紺、ブルーと色違いのもので、なかには『しやるていあ』と書かれた白い布が胸元に張り付けてあるのもあります。

（……これ、スクール水着だよな？ スクール水着……ペロロンチーノさん！ なんとなくヤバいんじゃない？）

「……ホウ。コレハナカナカノコレクシヨンデハナイカ。素晴ラシイ！」

コキユートスが開けた箱にはなんと沢山のランスがありました。ゴッズアイテムのスポイトランスには及びませんがどれも聖遺物級です。

「しよれもペロロンチーノしやまは『きちくおランス』『しえんごくランス』『ランススマグナン』ちよ名じゅけてありんちゅ。でもちゅかえないでありんちゅ。どゆわけか、前からちようびできないでありんちゅ。ありんちゅちやと書いてありんちゅに……」

（……これは……一から作られているオリジナルアイテムだな。うーん……データクリスタルが特殊みたいだ。ペロロンチーノさんはこんなものを作っていたなんて知らなかったな。……おや？——）

アインズがそれぞれのランスを裏返してみると『18禁アインズソフト』というシールが貼ってありました。アインズは思わず心の中で『ペロロンチーノ！』と叫ぶのでした。

仕方ありませんよね。だってペロロンチーノさんはエロゲ大王な

のでしたから。

109 ありんすちゃんはある

ナザリック地下大墳墓 第二階層 屍蟻玄室——あらあら。ありんすちゃんは部屋を散らかし放題です。食べかけのお菓子があちこちに落ちていますが気にならないのでしょうか？

あらら。ほら言わんこっちゃありません。ポテトチップスをお尻でふんずけていますよ？ ポテトチップスって油が多いから服にシミが残ってしまいますよ？

そういえばシモベのヴァンパイア・ブライドの姿がありませんね？

え！ なんと！ ストライキ、ですか……うーん。いつかはそんな事になる気がしていましたが……ありんすちゃん、反省しましょうかね？

ありんすちゃんはチョコレート系のお菓子が大好きなんですって。両手にお菓子を持ったまま、コックリコックリ頭が揺れだしました。そしてそのままお菓子が散らばったままの上で眠ってしまいました。普段ならヴァンパイア・ブライドがありんすちゃんをベッドに運んでくれますが……うーん。

結局、ありんすちゃんはそのまま朝まで眠ってしまいました。

目が覚めたありんすちゃんは起き上がると洗面所に行きました。そして鏡を見てビックリしました。なんと……ありんすちゃんの顔——丁度頬つぺたの辺りに小さなキノコが生えています。

もしかしたらアンデッドにはキノコが生えてしまうのかもしれないですね。特にありんすちゃんはお風呂が好きですからキノコに丁度良い湿度に保たれているのかも知れません。

ありんすちゃんにキノコが生えた、という話は階層守護者に知れ渡りました。早速皆が集まります。

「ありんすちゃん。ちよつと教えて欲しいのだけど、キノコはアンデッドなら誰でも生えるかしら？ ……その……例えばアインズ様にも、とか」

「……わからないでありんちゅ。ありんちゅちゃもはじゆめちえキノコ生えたでありんちゅ」

アルベドは妙にモジモジしながらまた訊ねました。

「……その……キノコは頬つぺた以外にも生えてくるかしら？ ……た、例えば……もつと下の方……とか、なんて……キヤツ！ 恥ずかしい……」

「それよりさ、アルベド。このキノコが食べられるか試してみない？ あたしはそっちの方が重要だと思うけどな？」

アウラは今にもありんすちゃんのキノコを食べようとしています。ありんすちゃんはイヤイヤをしました。だって、ありんすちゃんのキノコですから、ありんすちゃんに食べる権利がありますよね？

「……そのキノコ、例えばもつと大きなマツタケみたいなのが生えないかしら？ 言っておくけどこれはナザリックにとつてとっても大切な事よ？ ……そうだ！ すぐにもニューロニストにこのキノコが生えたありんすちゃんを調べさせなくては」

アルベドがありんすちゃんをがっしりと捕まえます。大変です。このままだとありんすちゃんは解剖されてしまうかも知れません。

ありんすちゃんは激しく頭を振ってイヤイヤをしました。
すると――

「ポトリ」

ありんすちゃんの顔からキノコが落ちました。

「あー！ これってキノコの形のお菓子だ！ チョコレートとビスケットのやつ！」

ありんすちゃんがお菓子だらけの中で寝ていたから頬つぺたにくっついてしまったのですね。

仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の子なのですから。

――皆は安心して思い思いに帰っていきました。ですが独りだけアルベドだけはまだその場で呆然と立ち、何やらブツブツ言っていました。

「アインズ様……キノコ……子供……」

もしかしたら顔に付いたのがタケノコだったらこんな騒ぎには
ならなかったかもしれないね。ちなみにありんすちゃん断然キ
ノコ派だそうです。

110 ありんすちゃんはんせいする

前回、キノコ事件で大騒ぎしたありんすちゃんですが、あれから反省してみたんです。

ありんすちゃんは第五階層にやって来ました。成る程。各階層守護者からシモベに対する姿勢を学ぶつもりようです。コキュートスはありんすちゃんの目的を聞くと、少し感動したみたいです。

「……フム。ソレハ良イ心掛ケダナ。守護者タル者ハ日々鍛練ニ務メテシモベノ見本タルベキダナ」

ありんすちゃんはメモ帳に『たんれん みほん』と書き込みました。

次は第六階層です。同じ様にアウラとマールから話を聞きます。

「……うーん。あたしが心掛けているのはスキンシップかなあ？ 特に魔獣達は運動する事が好きなき子が多いからね。散歩がわりに魔獣に乗って巡回したりしてるよ？」

「……あの、ぼ、僕はドラゴン位しかいないけど、まあ、植物系モンスターに水や栄養がある土とかを、あの、あげたりしています」

ありんすちゃんはメモ帳に『のってじゅんかい みず』と書き込みました。

次にありんすちゃんは第七階層にやって来ました。ここでもありんすちゃんは階層守護者のデミウルゴスから話を聞きます。

「ほう？ シモベ達への階層守護者としての心掛ける点、ですか？

成る程。……そうですね。私は適材適所、が肝要だと思えますね。配下のシモベの長所短所を見極めて、それを生かす仕事を与える。それこそが階層守護者たる者の務めかと思えますがね」

ありんすちゃんはメモ帳に『てきだいてきしよ』と書き込みました。

ナザリック地下大墳墓 第二階層の屍蟻玄室に戻ってきたありんすちゃんはメモ帳を開きます。そして、しばらく考え込んでいたが、『たんれん みほん』にバツ印を書きます。さらに、『てきだいてきしよ』にもバツ印を書きました。

最後に『のってじゅんかい』にマル印を書くことニツコリします。

「……ありんちゅちゃ、ちゃんと出来てるでありんちゅ」

——いやいやいや。出来ていたらシモベ達にストライキなんてされませんって。

ありんすちゃんは第三階層にシモベ達を集めました。そして各階層守護者から様々な話を聞いて学んだことを語ります。そして最後に宣言しました。

「これからありんちゅちはしゆてきな守護者になるでありんちゅエヘンと胸を張るありんすちゃんとは対照的にシモベ達の表情はどうも信じられない、といった感じでした。無理もありませんよね。」

と、ここでヴァンパイア・ブライトの一人がおずおずと手を上げました。ありんすちゃんは発言を許可します。

「……あの……ありんすちゃん様、もう私達で『ぼうりんぐ』をするのは止めて頂けませんか?」

「俺たちも『ぼうりんぐ』の玉として投げられるのは懲り懲りです」スケルトンもヒビだらけになった頭を撫でながら発言しました。

ありんすちゃんは口をパクパクさせながら、ようやくにして答えます。

「……あ、ありんちゅちはしよんな事ぢらないで、ありんちゅ」

シモベ達からは次々と発言が出てきます。

「……ありんすちゃん様。私からのお願いです。鼻をほじったあとで私の顔になすりつけるのはやめて下さい」

「……ありんすちゃん様、私達をバラバラにしてパズル代わりにするのはやめて下さい」

ありんすちゃんはシモベ達の声に反論出来ないまま、約束させられてしまいました。

※ ※ ※

翌日、ありんすちゃんは機嫌良さにヴァンパイア・ブライドを集めます。そしてまたしてもボーリング遊びの的にしようとして、早速反発されます。うーん。昨日の事を忘れているのでしょうか?

しばらく考えていたありんすちゃんは今度は地面に線を引き、その

線を引いた区画の中にヴァンパイア・ブライドを入れます。

「……ぼうりんぐはやめるでありんちゆ。ヴィンバールイで遊ぶでありんちゆ」※

(※ヴィンバールイはロシアのドッジボールみたいな遊び)

そう言うとありんすちゃんはスケルトンの頭を構えました。

その後、またしてもシモベ達からストライキされてしまったありんすちゃんは今後はヴィンバールイもしません、と約束させられてしまふのでした。仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子に過ぎないのですから。

1111ありんすちゃんはねつきをする

オーバーロード13巻が発売されるまで続く2017年の冬はまだまだ終わりそうにありませんね。

ありんすちゃんとアウラとマーレがそれぞれ振り袖と紋付き袴で揃いました。良いですね。たまにはこうした正月っぽいのも……

改めましてあけましておめでとうございます。本年もありんすちゃんを宜しくお願い致します。

三人がいるのはナザリック地下大墳墓の第六階層にあるアンフィテアトルムです。なんでもこれから羽根つきをするんですって。

「……羽根つきってさ、この板の所でこの羽根が付いた玉を打ち合うんだよ。で、落としたり負け。負けたら顔にこれで落書きするんだよ？ ね、面白そうじゃん」

ありんすちゃんも大喜びです。ありんすちゃんが勝ってアウラとマーレの顔を真っ黒にしてやろうと、鼻息が荒くなっています。

あれ？ アウラがマーレとアイコンタクトでニヤリと笑いましたよ？ そうです。実はアウラとマーレは年末に羽子板を見つけてから今日まで猛特訓してきたのでした。危うし！ ありんすちゃん。

「いくでありんちゅー！」

ありんすちゃんは張り切ってつまんだ羽根を離すと羽子板で思いつきり打ち上げます。羽根はまるでロケットのように飛んでいききました。さすがはかつて守護者でも一二を争う猛者だったありんすちゃんですね。

※ ※ ※

「……落ちてきませんか？」

手をかざしながらマーレがため息をつきました。

「しようがないなあ。ありんすちゃん力の入れすぎだよ？ きつと天井に突き刺さつちやつたんだよ。今度はあたしがやってみるよ？」

アウラは憤慨するありんすちゃんを尻目に羽根を羽子板で打ち上げました。羽根はありんすちゃんが打った時と同じように飛んで行き――

「――お姉ちゃん……落ちてこないね」

羽子板を構えながらずっと空を見上げたままのマールレが呟きました。

「……あれー？ おつかしいな……随分加減した筈だけどねー？」

あ、そうだ。やつぱり外でやろう？ ね？」

ありんすちゃんはアウラに文句を言いたかったのですが、アウラの勢いに気圧されて言えませんでした。

※ ※ ※

三人はログハウスから地上にやって来ました。これなら思いつきり羽根つきが出来そうです。ありんすちゃんは羽子板をブンブン振ると鼻からフンスと息を吐きました。

「……いくでありんちゅー！」

ありんすちゃんは羽根を放り上げると羽子板で打ちました。カシューイイーンと音を立てて羽根はミサイルみたいに飛んでいきました。すぐさまマールレはシモベのドラゴンを呼び出すと背に飛び乗って飛び立ちました。

※ ※ ※

魔導国の傘下となったバハルス帝国首都アーウィンター——新年から平和を楽しむ人々が賑い活気があります。

「……民衆がうらやましいものだな」

城下を見下ろしながら皇帝ジルクニフはため息をつきました。

「……新年ですぜ？　せめて新年くらいは楽しくいきましようや？」

バジウツドはほんのり赤く染まった顔で笑いかけます。

こいつめ。酔っていやがる——ジルクニフは忌々しく思いながら窓の外に目をやります。

「——うん？　あれは……まさか？」

皇城に向かって何かすごい勢いで飛んできます。それはみるみるうちに大きくなっていき、ドラゴンだとわかりました。

「——あ、あれは魔導国の——」

間違いありません。以前に魔導国の使者を乗せてきたドラゴンです。ドラゴンの巨体が目の前に迫り——ドガツシャーン！

——皇城にドラゴンの尾が直撃しました。

「なんなんだ！　なんなんだ！　一体？」

あわやの所で助け出されたジルクニフは悪態をつきました。

「パキーン!!」

甲高い音と同時にドラゴンは元来た方角に飛び去っていきました。

「なんなんだ？　あれはなんだったんだ？」

ジルクニフは力なくうなだれるのでした。

※ ※ ※

ありんすちゃん、アウラ、マーレの羽根つき勝負は互角のまま進み、夕方になりました。ありんすちゃんは焦って羽子板を投げ棄てると代わりのモノをへグレーターテレポーターションで取り寄せました。「うわ？　なんだこれは？」

「あー！　ありんすちゃんは反則したので失格だねー！」

突然羽子板代りにテレポーターションさせられた白いサーコート
の女騎士を指しながらアウラが宣言しました。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

112ありんすちゃんとおわらないふゆ

ナザリツク地下大墳墓 第二階層〈屍蟻玄室〉でありんすちゃんはため息をつきました。だってなかなかオーバーロードの13巻が発売されないのです。確か予定では2017年の冬には発売される筈でした。

『くがねちゃんの冬は終わらない』

きつと冬が終わらないと無理みたいですね。現在の最新刊は聖王国編の前編です。ですから続きの後編が気になるんですよ。

「……はあ……こんなこちよなら十二巻、一ページじゅちゅ読んだんでありんちゅ」

ありんすちゃんは後悔していました。そもそもありんすちゃんは平仮名しか読めませんからシモベのヴァンパイア・ブライドに読み聞かせて貰ったのでした。続きが気になったありんすちゃんがヴァンパイア・ブライドにおねだりして続きをドンドン進めさせて、結局最初の晩に朝までかかって十二巻を読みきってしまった事はもう忘れてしまったようです。

「……きつとネイアはちんじやうでありんちゅ。ドツペルはきつとお兄ちゃんでありんちゅ。アインジュちやまがピンチでチャルチエがたしゆけるでありんちゅ。……そうでありんちゅー！」

おやおや？ ありんすちゃんは何やら思いついたみたいですね？

屍蟻玄室を飛び出して行ってしまいました。

※ ※ ※

「……えつと、その……つまり〈天候操作〉じゃなくて季節を変える、あの……そういう事ですか？」

ありんすちゃんは腕を組んで頭をブンブン振ります。ありんすちゃんの期待の眼差しを受けたマーレは気まずそうにモジモジしています。

「しゅぐに春にしるでありんちゅよ。マーレ」

「……あの……ありんすちゃん。それはちよつとボ、僕には……その……」

言葉に詰まるマーレを見かねてアウラがやれやれと首を振ります。「あのさあ、マーレの〈天候操作〉はあくまでも気候を変える事は出来ても季節を変える事は出来ないんだよ？ 考えてみてごらんよ？ 季節が変わるつてのはさ、それだけ時間が経たないといけないって訳。わかる？」

ありんすちゃんは口を真つ直ぐに結んで真つ赤な顔をしています。「……冬が……冬が終わらないと……オバロドちゆぢゆき、見れないでありんちゆ！ うわわーん！」

ありんすちゃんは泣きながら第六階層を飛び出して行っちやいました。

※ ※ ※

さてさて、ありんすちゃんは何処に行ったのでしょうか？

ありんすちゃんは屍蠟玄室に戻ってベッドに寝そべって何やら書いているみたいです。また落書き——ゲフンゲフン。挿絵を書いているのかと思ったら、どうやら文章を書いているようです。成る程、自分自身でオーバーロード十二巻の続きの話を書くんですね。

部屋のドアにはありんすちゃん直筆で『はいるな』との貼り紙が貼られていて、今回はどうやら本気みたいですな。

※ ※ ※

「ありんすちゃん、ちわつす。はかどっているっすか？」

ありんすちゃんの寝室にルプスレグナが入って来ました。しかし、ありんすちゃんの姿はありません。どうやらお風呂に入っているみたいですな。隣接する浴室からありんすちゃんの鼻唄が聞こえてきます。

「おや？… どうやら原稿みたいっす」

ルプスレギナは足元に落ちていた何枚かの原稿用紙を拾い上げました。それは平仮名でありんすちゃんが書いた『オーバーロード 聖王国の聖騎士編 下』——『おぼろど せいおこくのせいき した』でした。

※ ※ ※

登場人物で聖騎士団長が最初、何度も登場してきますが、レメディオスの名前をありんすちゃんは『れでめおす』とか『めれでおす』という風に間違えています。その内に面倒になってきたみたいで『ねいあさけびまくす れでめおすだんちよしんじやいました』——原文は全て平がななので修正すると——『ネイアが叫びました。レメディオス団長が死んじやいました』として退場してしまいました。

魔皇ヤルダバオトとの対決でアインズは倒れてしまいます。危うしアインズ、という場面で深紅のフルアーマーのシャルティアがヘグレーターテレポーションで現れます。

シャルティアは激戦の末にヤルダバオトを倒します。と、次の瞬間

ルプスレギナは紙をめくりました。

——『ハツハツハツ！ よくぞヤルダバオトを倒したな！ 私はヤルダバオトの弟のヤルバデオトだ！ 私は兄より強いぞ！』

シャルティアは激闘の末にヤルバデオトを倒します。すると今度はヤルバデオトの義理の弟のヤバルデオトが——

「これは駄目っすね。ありんすちゃんには文才は無いつす」

ルプスレギナはやれやれと頭を降りながら部屋を出て行きました。浴室からは上機嫌なありんすちゃんの鼻唄がまだ聞こえてきます。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子に過ぎないのですから。

113ありんすちやんとマーレとさんにんのエルフ

ある所に仲の良いダークエルフの双子が住んでいました。二人には三人のシモベのエルフがいました。

ある日、三人のエルフはダークエルフにお願いしました。

「どうか私達に名前を下さい」

ダークエルフの弟は彼女達にそれぞれ『ブー』『フー』『ウー』と名付けて言いました。

「……あの、皆さんもそれぞれ自立して家を建てて下さい。この第六階層は広いですから」

そこで三人はそれぞれ家を建てる事にしました。ブーは藁の家、フーは木の家、ウーはレンガの家を建てました。

「……おやおや？　なんかチャチな掘っ建て小屋があるっすね。ルプーさんが綺麗に片付けてやるっすよ」

通りがかった狼が背中の大きな聖印を振りかぶると藁の家を叩き壊しました。

「ぎゃッー！」

壊れた藁の家から慌てて逃げ出したブーを狼が抱き締めました。

「なかなか美味しそうっすね。頂きますっす」

ブーは狼に食べられてしまいました。

次に狼とブーは木の家にやって来ました。そしてまたしても狼は木の家を叩き壊してフーを食べてしまいました。

狼とブーとフーはレンガの家にやって来ました。

「ルプスレギナ様、ウーの家は丈夫なので壊れないのでは？」

狼は黙ってまたしても聖印を振りかぶりました。

ドカツシャッーン！

レンガの家は簡単に壊れてウーも狼に食べられてしまいました。

狼が代わる代わるエルフを食べているとダークエルフの弟がやって来ました。

「……うひひひ。マーレも食べてやるっすよ。かかれっす！」

狼に命令されて三人のエルフ達はダークエルフの弟の服を脱がし

てしまいました。

そこに猟師の女の子が通りかかりました。猟師は狼をチラリと見ましたが興味ない様子でそのまま通り過ぎてしまいました。

「気持ち良いー。モフモフ」

猟師は一円と書かれたシールだらけのフワフワの魔獣に抱きついていきます。

「た、助けてー。お姉ちゃん」

ダークエルフの男の子は首から下げた銀のドングリに叫びました。

「マーレ？ どうしたの？」

「お姉ちゃん、ルプスレギナさんとエルフさん達が大変——」

「——あ、ごめん。アインズ様と呼んでるみたいだから。後でね」

ルプスレギナは手をワキワキさせながらマーレに近付いて来ます。あやうしマーレ。

「何をちているんでありんちゅ？」

マーレが顔を上げると5歳位の少女が目を丸くして立っています。た。

※ ※ ※

ありんすちゃん第六階層にやって来ました。楽しそうに鼻唄を歌いながらスキップします。

とはいえ、ありんすちゃんの場合は交互に足を出しているだけのニセ物スキップですが。

ふと、ありんすちゃんは立ち止まりました。見るとルプスレギナと三人のエルフ達がマーレを羽交い締めになっている所でした。マーレは服を脱がされて下着だけになっています。

ありんすちゃんは大きく口を開けて叫びました。

「何をちているんでありんちゅ？」

ルプスレギナは困惑した面持ちで言葉に詰まってしまいました。

「……あの、ありんすちゃん……これは、その……あ、あの……た、助けて……」

弱々しいマーレの言葉にありんすちゃんは力強く頷きました。

「まかちえるでありんちゅ！」

そう言うときありんすちゃんはマーレ達に背を向けて走り去って
いってしまいました。

しばらくして戻って来たありんすちゃんはピンク色のシャンプー
ハットを持って来ていました。

「こりで大丈夫でありんちゅ！」

ありんすちゃんはシャンプーハットをマーレの頭にはめると得意
気に帰って行きました。

※ ※ ※

ありんすちゃんが去って微妙な空気の中でルプスレギナが呟きま
した。

「……せつかくつすから、これから皆でスパにでも行くつすか？」

仕方ありませんよね。ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子な
のですから。

114 ありんすちゃんまたしてもメイドになる

ナザリツク地下大墳墓の第九階層にある食堂は今しもメイド達の食事時で賑わっていました。

ありんすちゃんもメイド——プレアデスの一人、ソリュシヤンと向かい合って食事をしています。ソリュシヤンは野菜サラダ、ありんすちゃんはペペロンチーノですね。

「……あの、ありんすちゃん様。ありんすちゃん様はアインズ様の正妻におなりにはならないのですか?」

ありんすちゃんは器用にスプーンの上でパスタをフォークでクルクルツと巻き取るとスポポポーンツと吸い込みます。それから人さし指を頬に当てて首を傾げました。

「……うーん。どうでありんちゆかね? ありんちゆちはアインジュちやまの娘、みたいなものでありんちゆ」

突然、ソリュシヤンが立ちあがりました。

「このままではアルベド様にアインズ様の正妻の座を奪われてしまいます! 以前のシャルティア様でしたら間違ひなくアインズ様の正妻に……それなのに……私は今でもシャルティア様こそアインズ様に相応しいと思っています!」

ありんすちゃんはソリュシヤンを見向きもしないでパスタをフォークで巻き取っています。パクリ。

「……おいちいでありんちゆ。チヨリチャも食べるでありんちゆ」

相変わらずモグモグと食べているありんすちゃんの様子にソリュシヤンは思わずテーブルをダン! と叩きました。

「——ソーちゃん、なに苛立っているっすか? あー……もしかしてあの日っすか?」

激高するソリュシヤンの後ろに同じくプレアデスの一人、ルプスレギナが現れました。

「ありんちゆちはちらないでありんちゆ。チヨリュシヤが勝手にバンバンなんでありんちゆ……ルプーも食事でありんちゆ?」

ありんすちゃんは平然としてフォークでパスタをクルクルしながら

ら尋ねました。

「……いやあ、食事はもう済ましたつすよ。ちょっとユリ姉を探しているんですけど……来月のアインズ様当番について……」

ちなみにアインズ様当番とは一般メイドが交替でアインズ様のお世話をする、という仕事なのですが……

「——それだわ!」

突然ソリユシャンが顔を上げました。そして小脇にありんすちゃんを抱えるとルプスレギナをひっぱって食堂を出ていきました。

ありんすちゃんはまだペロンチーノを半分しか食べていなかったのに……

※ ※ ※

翌日、アインズがベッドから起き上がるとアインズ番の一般メイドのシクススが立ち上がりました。と、丁度その時扉がノックされ、対応したシクススがアインズに報告します。

「……あの、アインズ様。交替のメイドが到着致しました」

アインズが頷くとシクススが扉を開けて交替のアインズ様当番のメイドを入れます。

「ありんちゅちゃでありんちゅ」

なんとメイド服を着たありんすちゃんでしたのでアインズは驚きました。

「……ありんすちゃんではないか? これは一体……?」

シクススが平伏して答えます。

「なんでもペストーニヤ様とユリ様から今日のアインズ様当番はありんすちゃん様がなさるとの事でございます」

「……しかし……」

アインズが見るとありんすちゃんは胸を張り、張り切っているようでした。

「……頑張るでありんちゅ」

アイنزは悩んだ末にありんすちやんのアイنز番を許可するの
でした。

※ ※ ※

「……………これは一体……………」

「……………ああ。気にしなくとも良いアルベドよ。今日はありんすちやん
がメイドの当番だそうだ」

ナザリック地下大墳墓の第九階層にあるアイنزの執務室の扉を
開けたアルベドは凍りつきました。無理ありません。

毎日の日課であるアイنزとの政策協議の場に、かつてのライバル
の姿を見いだしたからです。

凄まじい目付きで睨んでいるアルベドをよそにありんすちやんは
アイنزの膝の上に座り、足をブラブラさせながらお絵かきに夢中
です。

「……………まあ、その……………なんだ。たまには子供の意見を聞いてみるのも
良いのではないだろうか？ それに、な……………ありんすちやんが描いた
絵は挿絵として有効活用——」

「——なりません！ アイنز様の膝の上に乗るなんてもつての他で
す！ アイنز様の膝の上はわたくしのものです！」

アルベドは思わず叫びました。ありんすちやんはゆっくりアイ
ズの膝から降りるとアルベドに言いました。

「……………ちかたないでありんちゆね。アルベドにゆじゆつてあげるであ
りんちゆ」

アルベドは歓喜しながらアイنزの膝の上に座るのでした。

——やれやれ。これではどちらが子供かわからないな……………

アイنزは思わずため息をついたのでした。

※ ※ ※

どうにかこうにかありんすちやんの一日アイنز番は夜を迎えま

した。普段ならばアインズの寝室で椅子に座って見守るのですが……

「……ありんすちゃんよ。無理せずに眠って構わないぞ……ん？」

ありんすちゃんに振り向いたアインズは思わず破顔しました。

なんと、ありんすちゃんは椅子に座ったままコックリコックリ居眠りしていたのです。無理ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

アインズは優しくありんすちゃんを抱き上げると自分のベッドに寝かせてあげるのでした。

良かったね。ありんすちゃん。良い夢を。

※ ※ ※

翌朝やって来た交替のメイドを見てアインズは驚きました。

「……くっくっくっ……おはようございますアインズ様。本日、アインズ様当番をさせていただきますアルベドに御座います」

※ありんすちゃんが挿し絵を描いてくれました

115 ありんすちゃんスイーツになる

ナザリック地下大墳墓の第九階層にある一般メイドの控え室——
戦闘メイドに用意されたものよりは質素ながらも、倍くらいの広さ
の部屋が二部屋あり。そこにはメイド達に交ざってありんすちゃん
とエクレアの姿がありました。

「へー……ちらかなかったでありんちゆが、ペストニヤワンワンは
シヨートケーキだったでありんちゆか？」

ありんすちゃんが感心すると、エクレアがエヘンと胸を張ります。
「うむ。ペストーニヤ殿は正式にはペストーニヤ・シヨートケーキ・ワ
ンコという名前です、まあ、一般にはシヨートケーキをSに略する
ようですが。何を隠そうこの私、エクレア・エクレール・エイクレアー
めも同じ至高の御方、餡ころもっちもち様に創造されたのです！」
「オー……そりはしゅごいでありんちゆ！」

いやいや、ありんすちゃんことシャルティア・ブラッドフォールン
だって同じく至高の御方のペロロンチーノ様が創造されたんですよ
？ まあ、立派な方だったかは諸説あるみたいですが……

ありんすちゃんは腕を組んで何やら考え始めました。うーん……
こういう時つてろくな事にならない気がします……

「決めちゃでありんちゆ！ ありんちゆちやも名前、お菓子しるであ
りんちゆ！」

ありんすちゃんはそう宣言しました。

※ ※ ※

ナザリック地下大墳墓 第二階層〈屍蠟玄室〉——表にありんす
ちゃんの手書きの貼紙がありました。

『かんがえちう』

うーん。多分『考え中』という事みたいです。

中ではありんすちゃんが寝転がっていろんな名前を考えていまし

た。

『モンブラン・ブランブラン・ありんすちゃん』

『アイス・アイスクリーム・ありんすちゃん』

『シャーベット・ブラッドありんすちゃん』

『どらやき・まんじゅう・ありんすちゃん』

『モンブラン・チーズケーキ・タバタイ』

うーん……最後は単なる欲求にかわってしまいますが……大丈夫で
しょうか？

不意にありんすちゃんは起き上がると飛び出して行ってしまった。
した。

※ ※ ※

「……うむ。そうか。私に素敵な名前を考えて欲しいと？ スイーツ
な名前か……うむ。私は名前を考えるのに少しばかり自信があつて
な」

ありんすちゃんの姿が今度は第九階層にあるアイنز様の執務室に
ありました。なるほど、至高の御方であるアイنز様に素敵な名前を
つけて貰おうという考えですね。

アイنزはいきなりやつて来たありんすちゃんの願いを聞き、腕組
みをして考え込むのでした。

(スイーツな名前か……やはり『大福』か？ いや、それはそもそもハ
ムスケに考えた名前だからまずいだろうな。……うーん……いつそ
ペロロンチーノさんにちなんだ名前にするか？ ……なんだったか
な……ペロロンチーノさんが好きだったゲームに出てくる妹キャラ
の……うーん……ああ、音夢だ。……いや、だめだ。カルネ村のネム
と被る。しかもスイーツとは関係ないな。……うーむ……なかなか
難しいものだな)

と、突然、思い悩むアイنزの頭に一つの名前が閃きました。

「よし！ 決めた。これだ！ 『ずんだ餅』にしよう！」
ありんすちゃんは喜びました。早速ありんすちゃんは名前を『ずんだ餅ちゃん』にかえる事にしました。

※ ※ ※

こうして新たに『ずんだ餅ちゃん』になったありんすちゃんでしたが……翌朝目覚めた時にはすっかり忘れてしまい、もとのありんすちゃんに戻っていましたとさ。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

※ありんすちゃんが挿し絵を描いてくれました

116ありんすちやんとエロさいあく

ナザリック地下大墳墓 第九階層 アインズ執務室——ありんすちやんはアインズの膝の上に座ってお絵かきに夢中です。

フンフンと鼻唄を歌いながら上機嫌のありんすちやんですが、隣のアルベドの顔が鬼のようです。

「こりは恐怖公でありんちゅ」

得意そうに振り返るありんすちやんにアインズは思わず破顔します。

「……うむ。なるほど。良く描けているな」

「——アインズ様。わたくし、少し外の空気を吸ってきます」

アルベドは一般メイドが扉を開けようとするのを制して自ら扉を開けて部屋を出ていきました。

「……ちよういえば恐怖公は拠点最悪でありんちゅね。しよれからガチョコクコチュオは生最悪、ニユロシユトは役職最悪でありんちた。エロ最悪ってどんなでありんちゅ?」

「——わたくしも是非知りたく存じます」

いつの間にか戻っていたアルベドも興味深い様子で身を乗り出します。アインズは重たい口を開きました。

「……うむ。エロ最悪か……なかなか説明が難しいな……」

アインズはかつてのギルドメンバーとのやり取りを思い返すのでした。

※ ※ ※

「うわ! えげつない!」

「いやあいくらなんでもGはまずいつしょ? まんまじやないすか」

「ギルド長、どうします?」

恐怖公が作成された時、かなり批判的な声が他のメンバーから上が

りました。

製作者のるし☆ふぁーさんはまさにこの混乱した状況を狙っていたかのようにほくそ笑んでいます。否定的な意見に皆が傾きかけた時にふにと萌えさんが発言しました。

「いや、これはこれで有りだよ。いつそゴキブリの姿のPOPモンスターだらけのトラップを作ったら面白そうだよね。これは最悪だ」
「なるほど。確かに対敵に考えたなら精神的にも強烈な一撃がありますね。皆さん、どうでしょう？ 異存がなければナザリック地下大墳墓に恐怖公の管轄する対人トラップを加える、という事で」

モモンガの呼掛けに皆が応じて正式に拠点最悪がナザリックに加わる事になりました。

その後もメンバーの悪のりが続き、次々と様々な最悪——五大最悪——が作られる事になりました。

エロ最悪はローバーをベースに様々な触手攻撃や女性プレイヤーの装備を溶かす体液等の攻撃、様々な性的な嗜好をテキストに盛り込んでみたのですが、ユグドラシルでの禁止項目との兼ね合いでなかなかうまくいきません。

そんな時にペロロンチーノがやって来たのでした。

「モモンガさん、なんか皆で面白い事しているんですって？」

ペロロンチーノはエロゲ大王との異名がある人物なだけあって、その変態的嗜好に関する造詣は他人の追隨を許さない程に深いものでした。

エロ最悪の制作はとあるペロロンチーノが発した一言で終わりを迎えました。

「……あれ？ これならシャルティアの設定の方が……」

結局エロ最悪はシャルティア・ブラッドフォールンを超える事は出来ませんでした。そしてシャルティアこそが『真のエロ最悪』である、というのがギルドメンバー間の暗黙の了解となったのでした。

※ ※ ※

アインズはふと我に返ると、ずっと見つめ続けているありんすちゃんに気がつききました。

(まずいな。かつての姿とはいえこんな小さな子供に『お前こそが真のエロ最悪だ』なんて言えないぞ。どうしたものか……)

アインズの言葉を待ち続けるありんすちゃんとアルベドに対して「近い内にエロ最悪を紹介する」と約束して、アインズはようやくその場を逃れる事にしました。

※ ※ ※

それから数日が経ち、アルベドとありんすちゃんはアインズと共に宝物殿にやって来ました。そこにはパンドラズ・アクターが待ち受けていて、一人の至高の方に姿を変えました。

「私がエロ最悪だ」

黄金に輝くバードマンを見てアルベドもありんすちゃんも納得したようでした。

※ ※ ※

翌日、いつものようにアインズがナザリック内で集めた投書を清書している時、全てひらがなで書かれた一枚がありました。

それには「えろさいあくになりたい」と書いてありました。仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

117ありんすちゃんふたたびせいおうこくにいく

今日のありんすちゃんは魔導国の首都、エ・ランテルの街中を散歩しています。

門の近くまでやって来ると、何やら物々しい鎧姿の一団がいました。

「何をちているでありんちゅ？」

ありんすちゃんが門番に訊ねると代わりに白銀の鎧に白のサーコートを纏った女聖騎士が答えました。

「子供には関係ない。さっさと母親のもとに帰れ」

たちまち門番の顔は真っ青になりました。反対にありんすちゃんの顔は真っ赤に染まっていきます。

ドガツシャーン！ ガラガラドガツシャーン！

ありんすちゃんが女聖騎士を叩くと女聖騎士は馬に跨がったまま、ゴロゴロと転げていき、巨大なアインズ像にぶつかって停まりました。

「だ、団長！」

副団長のグスターボが慌てて駆け寄りレメディオスを抱き起こしました。

「な、何が起きた？ 雷でも落ちたか？」

レメディオスがヨロヨロと起き上がり周りを見回すと他の聖騎士達は言葉を失い震える指で小さな女の子を指しています。

「……あの……団長を殴ったのは……その少女です」

「馬鹿な。そんな事あるわけ無かろう。こんな子供が——ングワッ！」

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロドガツシャーン！

またしてもレメディオスはありんすちゃんに殴られて転がっていききました。

「……馬鹿な！ いや、までよ？ もしかしてその者は以前に会った事は無いか？」

「ちらないでありんちゅ」

ありんすちゃんはまだもや拳を握ります。レメデイオスの転げかたが面白くて病みつきになってきたみたいですね。

「——ま、待て。待ってくれ。そう何度も殴らないでくれ。私は別に敵対するつもりは——ングワッ！」

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロドガツシヤーン！

「ありんちゅちはあちよんでるだけでありんちゅ」

「……待て待て！……グスターボ！ 従者！ なんとかしないか！」
「……とありんすちゃんの前に目付きの悪い少女が立ちます。

「……あの……餡あげますから、団長を許して下さい」

ありんすちゃんは餡玉を二個貰うと左右の頬っぺたでモゴモゴ舐め始めました。

「……従者ネイア、なんだその言い方は？ まるで私に非があるかのようではないか？」

「……すみませんでした」

餡玉を舐めているありんすちゃんの後ろでは何やら険悪な雰囲気です。ありんすちゃんは腕をグルグル回しました。

「……ちよつ、まあ待て！ ……そんなに誰かを殴りたいなら……そうだ！ 私の国に来てヤルダバオトを殴ってくれないか？ うん。それは実に名案だ！」

「——団長！ まだ幼い少女になにをい——」

「うるさい！ もう私は決めたぞ！ 私をこれだけ殴れる強さがあるのだ。この少女にヤルダバオトを討伐して貰うぞ！」

かくてありんすちゃんは餡玉四個と引き替えにローブル聖王国へ行き、魔皇ヤルダバオトを討伐する事になりました。

※ ※ ※

ナザリック地下大墳墓 第九階層玉座の間——そこにはひたすらローブル聖王国からの使者の訪れを待つ、アインズとアルベドの姿がありました。

「……アインズ様……レメディオス団長主従はリ・エステイーゼ王国からエ・ランテルに向かったとの報告は入っておりますが……その……魔導国に入国したという報告はまだありません」
「……うむ。そのようだな。……まあ、待つより仕方あるまい」
結局、ローブル聖王国の聖騎士団主従はやって来ませんでした。

※ ※ ※

聖王国へ向かう馬車ではありんすちゃんの従者としてネイアが同席となりました。

「……睨んでもありんちゅちゃの飴玉、あげないでありんちゅ」

「……いや、ありんすちゃん様、私は生まれつきこの様な目付きでして……その……」

ネイアは目尻を指で押さえ、グリグリと動かししました。

「……ふーん。ちょうどでありんちゅか。……ちょうど……」

ありんすちゃんはおかしいウサギが付いたお出掛け用のリュックサックの中をゴソゴソ探します。

「あつたでありんちゅ！」

ありんすちゃんはおやすみ用のアイマスクを取り出すとネイアに渡しました。

「……ありんすちゃん様、これを私に？」

「……ただ、ちよつとだけ貸すだけでありんちゅ」

ネイアはこんな幼い少女までが慈しみの心を持っている魔導国の素晴らしさに感動するのでした。

道中は何事もなく、聖騎士団の馬車は無事に解放軍のアジトに到着しました。聖騎士団が整列し、レメディオス団長自らが馬車の扉を開きます。

——しかし中にありんすちゃんの姿はありませんでした。

「……これはどういう事だ？ 従者ネイア・バラハ！」

「……それがその……三時になりますとありんすちゃん様は『おやつ
の時間でありんちゅ』とおっしゃって、〈ゲート〉の魔法を発動させる
と中に入って消えてしまいました」

「な——」

い並ぶ聖騎士達は皆、茫然と立ち尽くすのでした。仕方ありません
よね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですか
ら。

118ありんすちゃんまたしてもせいおうこくにいく

「……全く……結局二度手間だったな」

魔導国の首都エ・ランテルに再びローブル聖王国聖騎士団長主従が訪れていました。

「……最初からあんな得たいのしれない少女の力を借りずにモモン殿に助勢を請えば良かったのだ」

団長レメディオスの言葉にネイアは（いや、ありんすちゃん様に助けを求めたのは貴女ではないですか）と心の中で突っ込みをいれま

す。
「団長、今もヤルダバオトに苦しめられ続けている民の為、我慢して下さい」

副団長のグスターボがレメディオスに言い聞かせます。やがて主従は門にやって来ました。

「ようこそ、魔導国都市エ・ランテルへ。聖騎士様方は初めていらっしやいましたか？」

門番とおぼしき衛兵に声を掛けられて主従は顔を見合わせました。前回は門の所でありんすちゃんと出会った為、今回が初めてになります。

レメディオスの代わりにグスターボが頷くと衛兵は皆に馬から降りるよう言い、片隅にある部屋に案内されました。

衛兵の説明では入国にあたって簡単なレクチャーを受ける決まりだそうです。

「ようこそよ、魔導国へ。わたしが説明するでありんちゆ」

部屋の中にはどこかで会った事がある少女が待ち受けていました。

※ ※ ※

「……なんなんだ？　なんでこうなるのだ？」

ローブル聖王国に戻る馬車の中でレメディオスはグスターボに不満をぶつけます。

「团长、落ち着いて下さい。こうなっては今度こそありんすちゃん様にヤルダバオトを倒してもらいましょう。……幸いな事に当人はやる気みたいですし、報酬をもっと吊り上げればきつと上手くいきますよ」

レメディオスはグスターボを睨みました。

「……ふん。子供のやる気等あてになるものか？　今度も好き放題に転がしおつて……いいか？　もしヤルダバオトを倒せなかったら貴様が責任を取るのだぞ？」

レメディオスは腫れ上がった頬にハンカチをあてがいながら文句を言います。

無理もありません。

再びエ・ランテルを訪れて今度こそ「漆黒」のモモンの助勢を得る筈が、またしてもありんすちゃんと一緒に聖王国に戻る事になってしまったのです。

「ありんちゅちやが行ってあげるでありんちゅ」

そうありんすちゃんが言い出した時、レメディオスは即座に「だが断る！」と叫びましたが、その後ありんすちゃんにまたしても殴られて転がされ、やむ無く改めて助けを乞う事になってしまったのでした。

「……結局またもや魔導国の中には入れませんでしたね……」

グスターボはため息混じりに呟きました。

「……ふん。アンデッドが支配する国など入らずともわかる。恐怖で民衆を押さえ付けているのだ」

「……そうでしょうか？　……いや、なんでもありません」

グスターボはレメディオスの鋭い視線に口を閉ざしました。でも

——門から見えた風景はごく普通だったがな——と思うのでした。

※ ※ ※

ネイアはありんすちゃんと同じ馬車の中で緊張していました。今回のネイアの任務は重大です。なんとしてもありんすちゃんをロール聖王国まで連れて行かなくてはなりません。

「——あ、あの、ありんすちゃん様。この間はありがとうございました」

ネイアは以前にありんすちゃんからアイマスクを貰ったお礼を言います。

「ありんちゅちはまだまだ持つてありんちゅ」

ありんすちゃんは空間からアイマスクを取り出しました。

「……………えっと。ルーン！ こりはしゅごいルーンでありんちゅ！」

ネイアも自分が預かっていたアイマスクを取り出してしみじみと眺めました。

（改めて見るとこれは凄いマジックアイテムに違いない。何か見たことがない記号が……………これがルーン？）

「……………あ、あの……………」

ネイアがありんすちゃんに訊ねようと顔を上げるてありんすちゃんはアイマスクをかけてぐっすり眠っていました。

※ ※ ※

「くっ！ 全員後ろに下がれ！」

海辺の捕虜収容所を解放する為に亜人のバフォルクと対していた解放軍の聖騎士団長レメディオスは叫びました。

「もつとだ！ もつと下がれ！ さもなくば人質の命は無い！」

バフオルクの強者は捕虜の少女の喉元に剣を突きつけています。

——豪王バザーだ！

聖騎士の中で彼を知る者が小さく呟きました。

「ええい！ 下がれ！ 下がるのだ！」

レメデイオスはバザーを睨みながら聖騎士達を更に下げます。バザーは勝ち誇ったように人質を示しながら進みます。と、バザーの足が止まりました。

「あ！ ありんすちゃん様！」

バザーが足もとを見下ろすとそこにはアイマスクをしてスヤスヤと眠る少女がいたのです。

退屈のあまり眠たくなっていたありんすちゃんは解放軍の後方で昼寝をしていたのですが、軍が後退した為に取り残されてしまったのです。

「……………」

ムクリと起き上がったありんすちゃんはアイマスクをずり上げるとバザーの顔をボンヤリ見つめました。そして何事もなかったかのようにまたアイマスクをすると横になりました。

「——なんだこの子供は！ 一口で喰ってやる！ ——グハア！」

バザーを自分の身に何が起こったのがわからないまま絶命してしまいました。

せっかくの昼寝を邪魔されたありんすちゃんにより、ペッチャンコにされてしまったのです。

あまりの出来事に解放軍はそつとありんすちゃんの眠りを妨げないように遠巻きに見守るのです。

※ ※ ※

二時間経ってありんすちゃんはムクリと起き上がりました。

「ありんすちゃんよ。豪王バザーを見事に打ち倒してくれた！」

聖騎士団長レメデイオスが歩み寄り手を差し出しました。その手を掻い潜りありんすちゃんは走って行きます。

「…………おちっく」

仕方ありませんよね。だって、ありんすちちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

119 ありんすちゃんVSヤルダバオト

ネイア・バラハはアイマスクの奥の瞳を閉じて周囲に神経を研ぎ澄ませました。そしてボンヤリと脳裏に浮かぶ的に弓を引き絞ります。数日前の事です。ネイアの顔をマジマジと覗き込んだありんすちゃんは言いました。

「ちゅよくなりたいたいならこのルーンのアイマスク、いつもちゅけているでありんちゅ」

最初はアイマスクをつけると前が全く見えなくなり戸惑いましたが、数日間着け続けている内にありんすちゃんの意図がネイアにも理解する事が出来たそうです。

(……成る程。こうして視界を遮る事で感覚を研ぎ澄まし、矢の威力を高めるマジックアイテムなのだ。……それにルーンか……凄い)

うーん……ありんすちゃんは単にネイアの目付きが悪いからアイマスクを渡したのかと……それにルーンはありんすちゃんがサインペンで書いたものですが……

何はさておきネイアは一心不乱に練習した為、アイマスクをつけたまま的を正確に射る事が出来るようになりました。

と、建物のどこかでドガツシャーンと大きな音がしました。ネイアは急いで音の方へ向かいました。

※ ※ ※

「——私を出迎えてくれた事に感謝しよう」

解放軍の執務室にいた皆は突如壁を壊して現れた悪魔の姿に息を呑みました。最近収容所から救出されて指揮をとっている王兄カスポンドは真っ青な顔になっています。

「……ヤ、ヤルダバオトー!」

その瞬間、レメディオスが動きました。

「キエエエエー!」

レメディオスが手にした聖剣が神聖な光を帯び聖なる波動をヤルダバオトに叩きつけます。しかし――

「……ん？ 眩しいな。なんだ？ 邪魔だ」

ヤルダバオトは何事もなかったかのようにレメディオスを壁に突き飛ばすとカスポンドらに向き直りました。

「……何故だ！ 邪悪なる存在に何故攻撃が効かぬ！」

レメディオスはうずくまって茫然としています。

「――ヤルダバト！ ちょこまででありんちゅ！」

そこにありんすちやんとネイアが駆けつけてきました。ヤルダバオトは驚愕します。

「そのアイマスク……まさか失われたルーンの――」

ヤルダバオトの言葉はネイアの弓に消されます。ネイアが放った矢はヤルダバオトが避けた手に刺さりります。

「ううむ。流石はルーンが宿るアイマスクの力。これならば私を倒せるかもしれないな」

ヤルダバオトはそう言うと言っていた武器――聖王女カルカを構えます。

「――カルカ様！ 従者ネイア、貸せ！ こ、これさえあれば！」

レメディオスはネイアからアイマスクを奪うと自ら装着しました。

「カルカ様を返せ！」

アイマスクをつけて視界を自ら遮ったレメディオスが放った幾つもの漸撃は尽くカルカに命中し……………

※ ※ ※

「……やっちゃったね」

「……やっちゃいましたね」

「……それでは私はこの先の広場で待っていますので……そこで決戦しましょう」

「……わかったでありんちゅ」

皆が去っていきました。ネイアは呆然自失するレメディオスからアイマスクを取り返すと皆に続きます。

後には微動ともしないレメディオスと変わり果てた聖王女の成れの果てが残されました。

※ ※ ※

傷心のレメディオスが広場にやって来るとそこではありんすちやんとヤルダバオトが激しく戦っていました。

「聖騎士サビカス！ 聖騎士エステバン！」

ヤルダバオトはまるで二本の刀を構えるように二人の聖騎士を手にしていきます。

「聖騎士フランコに聖騎士ガルバン！ 思い出した！ お前はあの時の——！」

同じように二人の聖騎士を振り回すありんすちやんを見てレメディオスは思い出しました。以前、ヤルダバオトと対峙した時に現れた少女——それがありんすちやんだったのです。

ありんすちやんは二人の聖騎士を放り捨てるとレメディオスとネイアを掴みます。そしてそのままヤルダバオトに打ちかかりました。

「……なんと！ さすがはルーンのカ！ この従者の硬さには歯が立ちそうにない！」

確かにレメディオスがすぐにボロボロになっているのに対してネイアの緑の鎧には傷ひとつありません。

(……いや、アイマスクのおかげというよりありんすちやん様に頂いた豪王バザーの鎧が丈夫だからなのだと思うけれど……)

ネイアはバツチンバツチンと打ち付けられながら思いますが黙っていました。

既に日没になろうとした頃、ヤルダバオトが口を開きました。

「その少女よ。このままでは勝負が着かぬ。ここは一旦互いに矛を

納めるとしよう」

「わかったでありんちゅ」

二人は互いの武器を捨てました。

「……ま、まて………」

虫の息になったレメデイオスは聖剣を構えようとして気を失なっていました。

※ ※ ※

ベッドで目覚めたレメデイオスは起き上がるなり激しい痛みに気が遠くなりかけます。

「——誰か！ ヤルダバオトはどうした！」

すると天幕の後ろからひよっこりありんすちゃんが顔を出しました。

「目が覚めちゃでありんちゅか？ 丁度良かったでありんちゅ。カルカ、強力ボンドでなおちたでありんちゅ」

レメデイオスが見るとボンドだらけのありんすちゃんの足もとに聖王女カルカの変わり果てた姿がありました。

レメデイオスによつてバラバラになったカルカの身体はバフオルク等の様々のパーツと合わさりまさに異形と呼べるおぞましい姿になってしまっていました。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

120ありんすちゃんカリンシヤに行く

「えー、であるからして我々は王都をヤルダバオトから取り戻す。その為にはヤルダバオトに反逆する亜人と手を結ぼうと思う」

王兄カスポンドの発言に皆の間にざわめきが起こりました。カスポンドの意をくんで副団長のグスターボが話を続けます。

「ここでまず我々はカリンシヤを解放しようと思う。カリンシヤにはゼルの王子が囚われていて、王子を救出するならゼルンが一族をあげて我々に協力してくれるという手筈になっている」

そこでグスターボは言葉を切り、チラリと団長の様子を窺います。口の中でブツブツ呟き続けているレメディオスの様子に小さくため息をつくど、また話を続けました。

「……ここでカリンシヤにありんすちゃん様と従者ネイアの二人に潜入してもらい、ゼルンの王子を救出してもらいたいと思う」

「——いや、それは困——」

「——まかちえるでありんちゅー！」

即座に断ろうとしたネイアの言葉はありんすちゃんに遮られてしまいました。ありんすちゃんはふんぞり返るようになってムハーと荒く鼻息を吐き出しました。

「…………妹さえ生きていればカルカ様を復活…………妹さえ…………ケラルトならカルカ様をきつと…………」

相変わらずブツブツ呟き続けているレメディオスに目をやり、小さく首を振るとグスターボはありんすちゃんとネイアに向き直りました。

「…………従者ネイアよ。本来ならば団長がありんすちゃんと共に潜入すべきなのだろうが…………」グスターボは言葉を切るとレメディオスを顎で指す。「…………いかんせん団長はあれからあの調子なのでお願いする…………」

「…………従者ネイア・バラハよ。私からも頼む」

王兄カスポンドからも頼まれてしまつてはネイアに断る事など出来ません。かくてありんすちゃんとネイアは手引きする役のゼルン

と共にカリンシャに潜入する事になりました。

※ ※ ※

首尾よくカリンシャに潜入したありんすちゃん達三人は無事にゼルの王子のビービーゼーを無事救出します。

「……勇者よ。しかしこのカリンシャにはヤルダバオトの大幹部、枯れ木のような身体をして頭部に人間の頭を飾った大悪魔——サークレットがいる。あれにはまず勝てない」

サークレットという悪魔は頭部に二つまで首を飾り、その首が持つ魔法を最高で六位階まで使える強敵です。ビービーゼーが躊躇するのは当然でした。しかしありんすちゃんはそんな事お構い無し、です。

「ありんちゅちやがやつちゅけるでありんちゅ！」

ありんすちゃんはいつの間にか真紅のフルアーマーに巨大なランスを持った姿に変わるとトコトコと歩き出しました。

やがて、広間にたどり着いた一行に大悪魔サークレットが姿を見せます。

「！……ケラルト様！」

サークレットの頭部に飾られた生首を見てネイアは思わず叫びました。間違いありません。ローブル聖王国で最高司祭である神官団団長ケラルト・カストディオオその人のものだったのです。

スポイトランスを構え、既に臨戦態勢だったありんすちゃんはネイアを振り返りました。

「……ありがケラルトでありんちゅか？ ありんちゅちやにまかちえるでありんちゅ！」

そう叫ぶとありんすちゃんは突進します。

「へブラインドネス！」

サークレットの頭部のケラルトが呪文を唱えるとたちまちネイア

の視界が真っ暗になりました。しかしネイアは慌てずにアイマスクをかけます。そう、これまでの修行の成果で暗闇に神経を研ぎ澄ませます。

「……見える！ 私にも敵が見える！ ……え？ ……ありんすちゃん様？」

大悪魔サークレットとの戦いは呆気なく終わりました。

※ ※ ※

ゼルン達の協力もあり、解放軍は大した被害も無くカリンシヤを奪還する事が出来ました。

ありんすちゃん達は揃ってレメディオスの元を訪れました。

「レメディオ、喜ぶでありんちゅ。妹ケラルを見ちゅけてきたでありんちゅ」

「——な！」

変わり果てた妹の姿を見て、力無く崩れ落ちるレメディオスにサークレットが自己紹介しました。

「——我が名は大悪魔サークレット。今後ともよろしく」

サークレットの頭部に飾られたケラルトの生首がレメディオスにウインクしました。

サークレットと対峙したありんすちゃんはどうかやらサークレットがケラルトだと勘違いしたようでした。あの時、ありんすちゃんはサークレットの手を掴み「たちゅけてあげるでありんちゅ」といきなり走り出したので戦闘そのものが起きなかつたのでした。

あまりの出来事に立ち竦むレメディオスとは対称的に、ありんすちゃんは姉妹の再会を演出出来て得意満面です。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

121 ありんすちゃんとかいほうぐん

カリンシャの南に位置する大都市プラートに向けて進軍する解放軍は南の貴族たちが率いていた軍と合流して、その数五万五千になっていました。

ありんすちゃんとネイアは後方の弓部隊三千を率います。この弓部隊の各小隊長はルーン文字が書かれたアイマスク——目の所に穴があいていて見えるようになっていました——を装備していました。彼らはネイアの話すありんすちゃんの逸話に感動して、いわば『ありんす教』の信者でもありました。

「先鋒レメディオス騎士団団長、亜人軍と交戦！ 幹部大悪魔の鱗の悪魔撃破！」

「——な！」

ありんすちゃんはサークレットに訊ねます。

「鱗のやちゆ、ちゆよいでありんちゆか？」

「いや、鱗の悪魔は雑魚ですね。あの聖騎士でも倒せます」

「……ふーん……でありんちゆ」

サークレットは結局レメディオスが拒絶した為、ありんすちゃんの部隊に配属されたのでした。

と、突然前方に火柱が上がりました。

「……まずいな……ヤルダバオトだ！」

そこへレメディオスがやって来ました。

「ありんすちゃんよ。私に奴に通用する武器を貸せ。私がお前の剣になろう！」

「わかったでありんちゆ！」

ありんすちゃんはレメディオスの両足首を握ると剣のように振り回しながら駆け出しました。

「——ち、ちがーう！ 剣になると言ったがそういう意味ではないのだ！ や、やめ——」

ありんすちゃんはレメディオスを振りかぶってヤルダバオトに叩きつけます。

「……これはこれは……ん？ ルーンが無いか……うむむ」

困った様子のヤルダバオトに容赦ないありんすちやんの攻撃が続きます。

激しいありんすちやんとヤルダバオトの戦いは夕方にまで続きました。

そこに土煙を上げて援軍がやって来ました。それぞれ魔導国の旗を掲げています。解放軍は歓声を上げました。

「私はアインズ・ウール・ゴウン。ローブル聖王国救援の為、アベリオ丘陵の亜人達を束ねて来た。ヤルダバオトは私に任せろ！」

ヤルダバオトに向かうアインズの姿を見てありんすちは小さく呟きました。

「勝ったでありんちゅ」

ヤルダバオトを倒したアインズにありんすちは駆け寄りました。

「アインジュちやま！」

解放軍の皆はアインズとありんすちやんに喝采を贈るのです。

※ ※ ※

帰りの馬車の中でアインズは訊ねました。

「……しかし、どうしてアルティメイトシューティングスター・スターを使わなかったのかね？」

ありんすちはきよとんとしています。

「……うむ。ルーンの宣伝の為にアルティメイトシューティングスター・スターという弓をドツペルケンガーに託しておいたのだがな？ ずんだ餅ちゃんに渡すように、と」

「……ずんだ餅？ 知らないでありんちゅ」

「……な……」

アインズは愕然としました。うーん……ありんすちやん、すっかり忘れていますね。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

1222ありんすちゃんまたまたせいおうこくにいく

ローブル聖王国 首都ホバンスの王城では聖王になったカスボンドとケラルトの頭を飾ったサークレットが会議をしていました。

「うむ。ケラルトなのかサークレットなのか……とりあえずカルカ聖王女の復活は無理、という事だな」

カスボンドの問いかけにサークレットが頷きます。

カルカ聖王女の遺体はバラバラになった後で亜人のパーツと混ぜられてしまったのでした。

——と、突然大きな音と共に壁が崩れました。

「——何事か！」

部屋の外で待機していた聖騎士団団長のレメディオスと副団長のグスターボが飛び込んできました。

「——な！」

全員がその場に凍りつき言葉を失いました。

「——貴様は……ヤルダバオト！……」

絞り出すような声でレメディオスが叫びました。

「……ちようでありんちゅ」

レメディオスに答えたのはヤルダバオトではなく、赤いフルアーマーの小さな女の子でした。

「……な？ ありんすちゃん殿……これはどういう——」

「——やり直しでありんちゅ」

意味がわからず呆然とする一同を尻目にありんすちゃんはへげトを発動させます。

「私たちはエ・ランテルで待ってるでありんちゅ。ヤルダバト後はよろちくでありんちゅ」

ありんすちゃんの姿が消えるとヤルダバオトがへメテオを唱え辺りは赤い光に包まれるのでした。

※ ※ ※

「……なんという事だ……カスボンド聖王陛下はご無事だろうか？」

レメディオスは深くため息をつきました。

「ありんすちゃん様はエ・ランテルで待つと言っていましたよね。やはりここはまたもや助力を乞うしか……」

「……しかし明らかに今回はありんすちゃん殿がヤルダバオトを連れて来たのではないか。共犯に違いないぞ？」

レメディオスはふと閃きました。

「そうだ。法国だ。スレイン法国ならばヤルダバオトを倒せるのではないか？」

グスターボは悲しそうに首を振りしました。

「……ぐぬぬ。なんという事だ……」

再び現れたヤルダバオトは首都ホバンスを占領、更にカリンシヤマでを占領してしまいました。現聖王であるカスボンド陛下は行方が知れません。唯一幸いな点はありんすちゃんが「民は殺ちちやダメでありんちゆ」と言い残していった為、死者が出なかった事です……

レメディオスは唇を噛み締めました。

「……仕方あるまい。エ・ランテルに向かうぞ」

かくしてレメディオス団長の一行はまたしてもエ・ランテルに向かうのでした。

※ ※ ※

「ありんちゅちやにまかちえるでありんちゅ！」

ローブル聖王国に向かう馬車の中で真紅のフルアーマーの姿のありんすちゃんは上機嫌な様子でスポイトランスを振ります。

今回のヤルダバオトの再来の経緯を聞いている従者ネイア・バラハはため息をつきました。

レメディオス団長からは今回のヤルダバオトはどういうわけかありんすちゃんが使役しているらしい事、ありんすちゃんを上手く宥めてヤルダバオトに去ってもらうように誘導する事を命じられてい

ました。

「ちようでありんちゆ！」

不意にありんすちやんが空間から素晴らしい装飾のある弓を取り出しました。

「こりはアルテムメ……アルテムシユ……シユ……」

ありんすちやんは背中のおでかけリュックを降ろしました。可愛いピンクのウサギがついたリュックの中からクシャクシャになった紙きれを取り出します。

「……こりはアルテムシユテン……グスタースーパー……でありんちゆ。しゅごいルーン、しゅごい力を持ちたルーン……っているでありんちゆ。しんこきゆる。ゴホン、せきしてから……貸してあげますで……貸してあげる……ありんちゆ」

ありんすちやんはネイアの前にルーンの弓——アルテムイトシューティンググスタースーパーを差し出しました。

ネイアが恐る恐るアルテムイトシューティンググスタースーパーを受け取るとありんすちやんが言いました。

「こりをちゆかう時は……ええと……『よみがえりし秘術によりしルーンの力よ』と叫ぶんでありんちゆ」

ネイアが領くとありんすちやんはニッコリしました。

※ ※ ※

ありんすちやんを乗せた馬車は無事にカリンシャ郊外の解放軍の本陣に着きました。レメディオスは複雑な表情で聖騎士を整列させます。

「ありんすちやん様に敬礼！」

副団長のグスターボが号令をかけるとい並んだ聖騎士が一斉に敬礼をしました。

馬車の扉が開くと従者ネイアが素晴らしい装飾がある弓を抱えな

がら気まずそうに降りてきました。

一緒に降りてくる筈のありんすちゃん姿はありません。

「従者ネイア、これはどうした事か？」

レメデイオスが険しい表情で訊ねました。

「……それがその……ありんすちゃんはまだしても三時に『おやちゆの時間でありんちゆ』とおっしゃるなり〈ゲート〉の魔法で……」

「——なんだ……と……」

うーん。仕方ありませんよね。ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

123番外編 ジルクニフとリユロ

その日のジルクニフは上機嫌でした。魔導国の属国となり、国内は安定してきました。時折、理不尽な事がごくごく稀に起きたりしますが概ね平和だといえました。

今日はジルクニフと同じ境遇を経験した友人がアーウエンタールを訪れる予定です。ジルクニフはソワソワしながら友——クアゴアの王リユロの登場を待ちます。

「我が友ジルクニフよ。今回はお招き頂きありがとうございます」

「よく来てくれたね。我が友リユロよ。今日は君の好物を沢山用意したから楽しみにしてくれ」

リユロはジルクニフと熱い抱擁を交わしました。その際に鋭い爪がジルクニフを傷つけないようそつと手のひらを返す優しさにジルクニフは感動するのです。

※ ※ ※

「……そういえばこの前、例の女の子が来たんだが……」

豪華な食事を終えて二人は歓談に移りました。

「赤いフルアーマーで例の大きなランスを振りながらアウラ様とマール様と一緒に見えてね……」

リユロはそこで言葉を切り、顔を歪ませました。

「私が出迎えてひれ伏すと例の女の子は叫んだんだ。『こりからモグラ叩きゲームしるでありんちゅ』と」

ジルクニフも顔を歪ませます。

「……それは酷いな……」

二人は無言でため息をつきました。しばらくの空白の後、ジルクニフが口を開きました。

「私の所では先週……あの三人が来たよ」

ジルクニフは遠い目をしました。

「……三人、か。するとやはり——」

リユロの言葉にジルクニフは力なく笑います。

「……ああ。お察しの通りまたしても、だ。そう、『ありんすちゃん当てゲーム』だ」

ジルクニフは目を閉じました。

「あの女の子は『アウアウはどれでしょう?』と聞いてきたんだ。——仕方ないだろ? アウアウなんていないんだから——」

突然ジルクニフが荒々しく叫びました。リユロにはジルクニフの気持ち痛い程わかりました。

そうです。確かに『アウアウ』なんて名前の幹部はナザリックにはいません。だからジルクニフか『アウアウなんていない』と答えたのは間違いではないのです。

ですがあの女の子——ありんすちゃんにとっては『アウアウ』とは『アウラ』の事なのでした。

またしても沈黙が訪れました。

しばらくしてまたジルクニフが口を開きました。

「……あの女の子は今、ローブル聖王国に行っているらしい」

リユロはため息をつきました。見ず知らずのローブル聖王国に微かにあわれみを感じながら、です。

「……あの女の子は無邪気ゆえに恐ろしい。聖王国も可哀相にな」

ジルクニフはまたしてもため息をつきました。何故なのだろう。魔導国の属国になったのにあまり脅威は変わらないのは何故なのだろう。

ジルクニフとリユロはありんすちゃんがローブル聖王国に出かけている、つかの間の平和をせめて楽しもうと思うのでした。

そして小さな赤い悪魔が一日でも長くローブル聖王国に滞在してくれる事を願うのでした。

124 ありんすちゃんまたまたまたまたまたせいおうこ
くにいく

「ルーンは輝く希望の光！」

シズの言葉に兵たちが唱和します。

「ルーンは輝く希望の光！」

「もう一度でありんちゅー！」

「ルーンは輝く希望の光！」

ありんすちゃんは満足そうに頷くとシズに合図しました。

「……ルーンはすごいなサイコーだ！」

「ルーンはすごいな最高だ！ ルーンはすごいな最高だ！」

「……あなたも私もルーンルーン！」

「貴方も私もルーンルーン！ 貴方も私もルーンルーン！」

※ ※ ※

前回突然おやつを食べに魔導国に戻ったありんすちゃんでしたが、
唐突に今度は何故か戦闘メイドのシズと一緒にローブル聖王国に現
れるのでした。

「……アインズ様の命でサポートする。頑張る」

聖騎士団の皆は訳がわからないまま、とりあえず不問にするのでし
た。

ありんすちゃんとシズは兵たちを集めると皆に唱和させ始めます。
意味がわからない言葉でしたが兵たちは声を出している内に力がわ
いてくるのでした。

次にありんすちゃんは従者ネイアを壇上に上げると、彼女の弓を皆
に示しながら叫びました。

「……そして、こりがしゅごいルーンちゅいた、アルテメシユテン、グ
スタンンスーパ、でありんちゅー！ 我らに勝利をー！ ……でありん

ちゆ」

兵たちの歓声が壇上のありんすちゃん、シズ、ネイアを包み込むの
でした。

※ ※ ※

「……うむ。これはいけるな。これならば勝てるぞ」

騎士団の士気の高まりを見てレメディオスは喜びました。しかし
ながら副団長のグスターポの胸中は複雑でした。

そもそも一旦倒した筈のヤルダバオトがまたしても現れたのはあ
りんすちゃんのせいでしたから。

ありんすちゃんとシズは壇上から降りると一画にシートを広げて
どこから取り出した武器や防具を並べ始めました。

「しゅごいルーンちゆいた武器が今ならお買い得でありんちゆよ！」

「……ルーンの刻まれた武器。支払いは分割払いのローンでも良い」

どうやら魔導国製のルーンが刻まれた武器や防具を販売し始めた
ようでした。

「——なんだ……と！ ルーンの武器か！ 私も買うぞ！」

レメディオスの顔色が変わりました。すぐさま並べられた商品か
ら一番高そうな武器を手に入れます。

「——この剣なら、この剣ならヤルダバオトにダメージを与えられる
か？」

「……それは『こうてつつけん』にルーンを刻んで強化したものだ。
ダメージは——」

「——金貨三十枚のちよころ二十枚におまけしるでありんちゆ！」

「——よし！ 買った！」

シズの説明を遮ったありんすちゃんの言葉にレメディオスは即決
してしまいました。聖騎士達は「どうのつるぎ」、民衆兵達は「ひのき
のぼう」や「たびびとのナイフ」をそれぞれルーンが刻まれて強化さ
れたものを、あるものは即金で、また、あるものはローンで購入する

のでした。

※ ※ ※

いよいよヤルダバオトと再対決です。いつの間にか聖王のカスポンド陛下も無事に合流しました。

「いよいよ改めて決戦だ。ヤルダバオトを倒し聖王国を取り戻すのだ！」

カスポンドに並んだレメディオスが剣を抜きます。

「ごやー。」

聖騎士団を中心とした解放軍二万が城外に陣形を組みます。対するヤルダバオト率いる亜人の軍勢は同じく一万です。

「貴方も私もルーンルーン！ 貴方も私もルーンルーン！」

思い思いにルーン武器を装備した解放軍の士気は高く、誰もが勝利を疑いませんでした。

やがて亜人軍が左右に割れ、ヤルダバオトが進み出てきました。

「全軍前にー！」

レメディオスを筆頭に聖騎士団の騎馬隊が突入して戦闘が始まりました。

※ ※ ※

「……くっ。……何故だ？ 何故勝てないのだ？」

カリンシャ城内に敗走したレメディオスは壁を叩きました。

「……ちよれはルーンが一つだったからでありんちゆ。ルーンがふたちゆならもつとちゆよいでありんちゆ。……ただ……」

ありんすちやんが小首を傾げて続けました。

「……ルーン、一つ増えると倍の金額になるでありんちゆ」

「……その……ルーンはいくつまで刻めるのですか？」

副団長のイサンドロの質問にシズが答えました。

「……ルーンは現在の所、最大で三つまで。値段は一つ増える毎に倍になるからルーン三つなら倍の倍で四倍の金額になる。……分割払いのローンで購入するのがお薦め」

かくしてシズの前には聖騎士の列が出来るのでした。

※ ※ ※

「——くらえ！ ルーンの輝き！ アルティメイト・シユータイングスター・スーパ―！」

ネイアが放った矢は避けようとしたヤルダバオトの右腕に刺さりました。

「……恐るべしルーンのカ！ かつて封印されし秘術、ルーンとはここまで凄まじいものだとは！」

「——ちが——わない！」

ヤルダバオトは驚愕し、思わずネイアも叫びます。

「……さすがはルーンが刻まれた武器のカ！。すごいー。……ルーン最ー高ー」

抑揚のないシズのやや棒読みで投げやりなセリフが続きます。

「……ありんちゅちやがとどめ、しるでありんちゅ！ へヴァーミリオンノヴァ〜！」

ヤルダバオトはありんすちやんが放つ光に包まれていきます。

「……最後ルーン……関係ない……」

シズの小さな呟きは巨大な爆発にかき消されてしまいました。

ヤルダバオトは消滅し、ありんすちやんとルーンのカによつて聖王国に平和が訪れるのでした。

※ ※ ※

ナザリツク地下大墳墓 第十階層へ玉座の間——玉座のアインズの前にありんすちやんとシズが跪きます。

「二人ともご苦労だった。……で、ルーンのカは上手くいったかね

？」

ありんすちやんが顔を上げて答えます。

「ありんちゅちや頑張ってローン、いっぱい契約したのでありんちゅ」

うーん……ありんすちやんは目的のローンがいつしかローンになつてしまったみたいですよ。

……うーん……仕方ありませんよね。だって、ありんすちやんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

125 特別編・ありんすちゃん理解テーブルゲーム ドラマCD 人間理解テーブルゲーム より

ナザリック地下大墳墓 第二階層屍蟻玄室——ありんすちゃんが寝そべってなにやら書いてます。

また落書き……ゲフンゲフン……挿絵を描いてくれているのでしょうか？

「かんしえいしたでありんちゅー！」

どうやら完成したみたいです。大学ノートをかざして得意そうな顔です。ノートの表紙には『ありんちゅちやりかいてぶるげいむ』とあります。ありんすちゃんはノートを片手に飛び出して行ってしまいました。

※ ※ ※

ナザリック地下大墳墓 第六階層の〈アンフィテアトルム〉に集められたプレアデスとアウラは不満そうです。無理ありません。彼女たちは理由もわからないまま、ありんすちゃんに引つ張ってこられたからでした。

台に登ったありんすちゃんが得意そうに説明を始めます。

「……コホン。こりからありんちゅちやのテーブルゲームしるでありんちゅー」

ありんすちゃんは手にしていたノートをみんなに見せます。

「……なんすかコレ？ ありんすちゃんが書いたつすか？」

「……テーブルゲーム……もしかしたらテーブルトークロールプレイングゲームの事か？ 確か最近アインズ様が守護者たちとされたらしい……」

プレアデスの面々は興味しんしんみたいです。

「……確かアインズ様は守護者たちに人間について理解してもらいたいの目的で人間理解テーブルゲームをやったとかでしたね。ボク——私は直接見てはいませんが……ありんす様は階層守護者として参加されたんですよね?」

ユリの問いかけにありんすちゃんはエヘンと胸を張りました。

「ちようでありんちゆ。今度はプレアデシユがありんちゆちやになるテーブルゲームしるでありんちゆ」

「……ハイハイ。じゃあたしは帰っていい? これでもいろいろ忙しいんだけど?」

アウラの言葉は無視されてしまいました。

ありんすちゃんは得意そうに『ありんちゆちやりかいてぶるげいむ』と書かれたノートを広げます。

「……えと……えと……ユリはありんちゆちやレベル1でありんちゆ。ルプーもありんちゆちやレベル1でありんちゆ。ナーベもありんちゆちやレベル1でありんちゆ。ソリシヤはありんちゆちやレベル2でありんちゆ。エントマはありんちゆちやレベル1でありんちゆ。シズはありんちゆちやレベル1でありんちゆ。ありんちゆちやはこりからお風呂はいるありんちゆ」

ありんすちゃんはパタンとノートを閉じるとプレアデスを眺めます。

「……そりぞれありんちゆちやになりきって行動しるでありんちゆ」

どうやらそれぞれありんすちゃんがやりそうな事を、出していく遊びみたいです。

「……えーコホン。ありんすちゃんはお風呂で洗いずきたら身体が削れてしまったつす。……なんと胸はペツタンコになりました。『大変! 私の胸がなくなっっているす!』……ぶぶぶ……」

ルプスレギナは自分の言葉に吹き出してしまいました。ありんすちゃんは少し面白くありませんでした。

「……えっと……ありんすちゃんがお風呂に入っていました。……ありんすちゃんはまだお風呂に入っています。……まだまだお風呂に入っています」

シズの話にありんすちゃんは興味しんしんです。

「……ありんちゅちやのお風呂、ずいぶん長いでありんちゅね？」

「……えーコホン。ありんす様はあまりにも長くお風呂に浸かっていたのでドロドロに溶けてしまいました。めでたしめでたし」

ありんすちゃんのほつべたがプクーと膨れてきました。

「……次は私が。……ありんすちゃんがお風呂に入っていると湯船の栓に気がつきました。ありんすちゃんは「こりを抜いてみるでありんちゅ」と言つて栓を抜きました。ありんすちゃんは流れていつてしまいました」

「……今度はあ、わあたあしい。ナーベラルに続けるねえ。……ありんすちゃんはあブラックカプセルに流れてえきましいたあ。恐怖公のお眷属があ……おいしくういただきましたあ」

ありんすちゃんは真つ赤になって目には涙を浮かべています。

ウワーンと泣きながらありんすちゃんはどこかへ行つてしまいました。

「……あの、さ……あたしはもう帰つていいよね？」

最後にアウラがポツリと眩きました。

※ ※ ※

翌日、ありんすちゃんはシモベのヴァンパイア・ブライドを集めて言いました。

「……こりからありんちゅちやのテブルゲームしるでありんちゅ！」

懲りないですねありんすちゃんは。仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

126 ありんすちゃんおもいだす

ナザリツク地下大墳墓 第二階層〈屍蟻玄室〉——ベッドの上でありんすちゃんがマカロンをほおぼっています。時刻はもうお昼近くなんです……

ありんすちゃんは中でもピンクのマカロンがお気にいりみたいですね。もつとも色が違うだけで味はどれもおんなじなんですけれど。マカロンを三つつかんで大きく開けた口に放ります。あらあら。さすがにありんすちゃんの口では小さすぎたみたいでマカロンが一つベッドの下に転がっていつてしまいました。

ありんすちゃんはベッドの下を覗きこんでマカロンを見つけます。「……ありんちゅちゅの口から逃げ出したふとどきなマカロンはこちてやるでありんちゅ」

ありんすちゃんはマカロンを拾うと上に放り投げ大きく口を開けました。

残念。マカロンはありんすちゃんの唇に当たってまたベッドの下に転がってしまいました。

「……逃がさないでありんちゅ」

ありんすちゃんは逃げたマカロンをつかみます。と、ベッドの下になにやら箱があるのに気がつきました。

マカロンをいそいで食べてしまおうとその箱をベッドの上にあげました。

「……しゅごい箱でありんちゅね。中身はなんでありんちゅ」

その箱は魔封じの箱でした。……うーん。その箱の中にはたしか……

ありんすちゃんは躊躇せずに箱を開けます。なんと中には可愛らしいチャイナドレスが入っていました。

……たしかそのマジックアイテムは……うーん……

ありんすちゃんはチャイナドレスを自分にあてて鏡を見てみました。とてもありんすちゃんにお似合いですね。

……しかしそれは……

ありんすちゃんはさっそくチャイナドレスに着替える事にしました。

※ ※ ※

チャイナドレスを着たありんすちゃんは鏡の前に立ちます。それから悩んだすえに長い銀髪を結ってお団子二つにしてみました。

次に鏡にむかってウイंकしてみます。もっともありんすちゃんは片目だけ閉じる事が出来ないのてただ両目をつぶるだけでしたか……

突然ありんすちゃんの脳裏にかつて見た光景が甦りました。ありんすちゃんがシャルティア・ブラッドフォールンとして行動不能になった瞬間に確かに見たのが鏡の中の女の子だったのです。

ありんすちゃんは口を大きく開けて呆然としました。やがて正氣に戻ると手足をバタバタさせながら駆け出していきました。

※ ※ ※

「……どうしたのだ？　ありんすちゃんよ？」

第九階層のアインズの執務室にいきなり飛び込んできたありんすちゃんにアインズは驚きます。

「ありんすちゃん。今わたくしはアインズ様と大切な仕事をしているのよ？　遊びたいなら他に行きなさい」

ありんすちゃんは手をバタバタさせるばかりで何が言いたいのかわかりませんでした。実はこの時ありんすちゃんの喉に食べかけのマカロンがへばりついていたのでありんすちゃんは喋ることが出来なかつたのです。

「……アインズ様。ありんすちゃんの事はプレアデスに任せては如何でしょうか？　彼女たちならうまくありんすちゃんから聞き出せると思います」

アインズは頷くのでした。

※ ※ ※

プレアデスを前にありんすちゃんは身ぶり手振りで伝えます。

(……頭にお団子……チャイナドレス……光でまっ白……動けなくなる……)

……そう。かつてシャルティアとしての自分に起きた事態を懸命に伝えてみました。

「……えつと。なにになに？ ……タヌキが……えーと……お腹でポンポコ……ビククリして……死んだふりっすね？」

「……違うわ。きつとタンコブだわ」

「……残念。ゼスチャーのレベル低すぎ……解読不能……」

「……やっぱいい……人間が美味しいわよう……」

「……だめね。誰もわからないみたいね」

プレアデスにもどうやらお手上げみたいでした。

「——あ！ わかったかもっす！」

突然ルプスレギナが叫びました。

「……今日はカレーライス……お腹一杯食べて……お昼寝……っす！
完璧っす！」

ありんすちゃんは首を振りますが……ググウ……と思わずお腹が鳴ってしまいました。

「それなら早速食堂に行きましょう」

ありんすちゃんはプレアデスと一緒に食堂に行きました。

※ ※ ※

「……お腹一杯でありんちゅ」

カレーライスを食べたありんすちゃん、いつの間にかはりついていたらマカロロンも飲み込んでいつも通りです。

「……おや？　ありんすちゃんカレーの染みが付いちやったつすね。急いで洗わないと大変つす」

ありんすちゃんは万歳してルプスレギナにチャイナドレスを脱がせてもらいます。

「これは私が洗っておいてあげるつす。ありんすちゃんは気にせずデザート食べていて良いつすよ」

ありんすちゃんはデザートのリンゴを食べました。可愛くウサギになっっているやつです。

ありんすちゃんは満腹になるとせっかく思い出した事をすっかり忘れてしまいました。

仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

※ ※ ※

ルプスレギナはチャイナドレスを広げて自分にあててみました。

「……これはなかなか素敵つすね。このルプーさんのセクシーさが120%アップ間違いなしつす。……今度カルネ村で悩殺しまくりつす」

127 ありんすちゃんダイエットする

秋です。天高く馬肥ゆる秋、といいますが……ナザリック第二階層〈屍蟬玄室〉では……

ありんすちゃんがベッドの中でお菓子を食べています。うーん……

朝起きて朝食を食べ……お風呂。十時にはお茶の時間にお菓子……お昼に食事……その後はお昼寝……三時にはおやつ。それから階層の巡回。

自分の足で歩かないでヴァンパイア・プライドにおぶさつての巡回ですね……うーん……

巡回から戻るとお風呂……夕方に食事……で就寝……夜中に起きてお菓子……なんだかほとんどの運動していませんね。それにお菓子を食べる回数が多すぎるような気がします。

そう言えば……気のせいかもしれませんが、まん丸くなってきたよ
うな……

ありんすちゃんは鏡をマジマジと見つめました。間違いありません。ありんすちゃんは確実に太っていました。

「……ありんすちゃん様！ そのお姿はいつたい？」
ありんすちゃんが振り替えるとプレアデスの一人、ソリュシャンが驚愕の表情で立ち竦んでいました。

「……ありんすちゃん様……これではアインズ様の寵愛を受ける事が出来なくなつてしまいます！」

「……ありんちゅちゃは悪くないでありんちゅ。ちよつと……ちよつと食べしゆぎなだけでありんちゅ」

ありんすちゃんは口を尖らせます。うーん……なんか起きあがりこぼしみたい……ゴホンゴホン。

「……ありんすちゃん様……ハッキリと言わせていただきます。今のありんすちゃん様は『デブ』でございます。『デブデブ』の『おデブ』以外の何ものでもありません！」

ありんすちゃんの顔がたちまち赤く染まっていきます。口をパク

パクさせますが言葉が出てこないようです。

ソリュシヤンは腕を組むと静かに宣言しました。

「ありんすちゃん様はこれからダイエットしなくてはなりません！
全てはありんすちゃん様の為でございますー！」

ありんすちゃんは必死に反論しようと口をパクパクさせますがソリュシヤンは頑として認めません。

「反論は認めません！ よいですね？」

それからソリュシヤンはありんすちゃんに付きつきりでダイエットのコーチをするのでした。

※ ※ ※

「ピッピッ！ ピッピッ！ ピッピッ！」

第一階層から第三階層までありんすちゃんは走らされました。ソリュシヤンは笛を鳴らしてありんすちゃんを急かします。

「……ありんちゅちゃはちゅかれたでありんちゅ」

ありんすちゃんはすぐに泣き言を言い出します。

「ダメです！ よいですか？ このままではアルベド様に負けるだけでなく正妃候補からも脱落してしまいますー！」

「……ありんちゅちゃはべちゅにかまわない、でありんちゅ」

「いいえ！ ありんすちゃん様には必ずアインズ様の正妃になっていただくなくてはならないのですー！」

ありんすちゃんはイヤイヤながらも走り続けるのでした。

「これはこれは我が階層の主、ありんすちゃん様。どうやらソリュシヤン殿と一緒にダイエットに励んでおられるご様子……うむ。これは是非ともわたくしめに一肌脱がさせていただけませんか？」

ありんすちゃんとソリュシヤンが振り向くと領域守護者の恐怖公が丁寧にお辞儀をしていました。

「……ダイエットならば我が眷族に余分な脂肪を食べさせればあつという間に——」

「……チヨリユチャ、もっとペーシユ上げるでありんちゅ！」

「ハイッ！　ありんすちちゃん様！」

ありんすちちゃんとソリユシヤンの姿はあつという間に遠ざかっていきました。

※ ※ ※

ありんすちちゃんがダイエットに挑戦している事は瞬く間に知れわたり、プレアデスや他の階層守護者たちはみな応援するのでした。

しかしながらありんすちちゃんの体重はなかなか減りません。

それもそのはずです。ソリユシヤンの目を盗んではお菓子を食べる事をやめませんでしたから……

仕方ありませんよね。だってありんすちちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

※ ※ ※

ソリユシヤンが側にいない間にドーナツを食べるありんすちちゃんをぞつと見つめる人物がいました。

「……くっふっふっ。素晴らしいわ。八本指が見つけてきたこのマジックアイテムの効果がこんなに素晴らしいものだとは……これでライバルを全て脱落させてこのわたくしがアインズ様の正妃になつてみせるわ。……次は誰の名前を書こうかしらね？　やはりアインズ様と行動を共にする事が多いナーベラルかしら。あの娘はわたくしを支持しているけれど油断出来ないのですからね……」

彼女は手にした一冊のノートを広げました。黒い表紙にはDebu Noteとありました。

128 ありんすちゃんたちしよんする

ナザリック地下大墳墓 第九階層 アインズ執務室——今日もアインズとアルベドの二人が魔導国の運営についての打ち合わせをしています。

と、唐突にありんすちゃんがアインズの膝の上に現れました。

眠そうに目をこすっていますからまだ寝ぼけているみたいですね。

ありんすちゃんはネグリジエ姿で片手にウサギのぬいぐるみ、反対の手にはタオルケットを持っています。

ボンヤリとアインズの顔を眺めていたありんすちゃんは——

「アインジュちゃま……おちんちん、ほちいでありんちゅ」

「——な？」

驚愕のあまり固まるアインズ。

「——ダメです！ アインズ様の………はこのわたくしのものよ！

ありんすちゃん、貴女は子供だと思つてつい油断していたけれど、やっぱりシャルティアなんだわ。……いいえ、かの至高の御方の中でも要注意人物だったペロロンチーノ様が作られた存在——」

冷静になったアインズは興奮するアルベドを制してやさしくありんすちゃんに尋ねました。

「……うむ。ありんすちゃんよ。なぜ私のおちんちんが欲しいのかね？」

ありんすちゃんはアインズの顔をキョトンと見つめます。

「……アインジュちゃまはおちんちんあるでありんちゅか？」

今度はアインズがキョトンとしました。

「……うん？ それは……無い……うむ。無いな」

アルベドは少しだけ衰しそうでした。

「……ありんちゅちゃ、おちんちんほちいでありんちゅ！」

「うん？ すると……ありんすちゃんは男になりたいのかね？」

「なりたいでありんちゅ！ ありんちゅちゃはたちしよん、しるでありんちゅ！」

と、いきなりアルベドが顔を上げました。

「アインズ様！ このありんすちゃん願いは是非ともかなえてあげるのがよろしいかと……いえ……叶えなくてはなりません」

（かつてシャルティアはわたくしとアインズ様の正妻の座を争った、いわばライバル。子供になつたとはいえ正妻争いから脱落するに越した事はないわ。それにもし……もしもアインズ様に………が生えるならば……このわたくしはアインズ様のお子を授かる事も夢ではなくなるのだし……）

アルベドの強い後押しもあり、結局アインズは〈星に願いを〉を使いありんすちゃんにおちんちんを生やす事にしました。

※ ※ ※

アインズが高々と〈シューティングスター〉を掲げます。

「我は願う——」

ありんすちゃんの体が光に包まれました。そして——

ニヨキニヨキ……ありんすちゃんにおにんが生えてきました。

ありんすちゃんは大喜び。早速第六階層に駆けていきました。

※ ※ ※

ありんすちゃんは第六階層に着くとザイトルクワエの所に行きました。

「……君は誰だい？ 見たような見たことないような……ああ……いったいなにを？」

ザイトルクワエの根元にジョウロで水をかけていたドライアドのピニスは慌てました。

ありんすちゃんはお構いなしにザイトルクワエの側に立つとスカートをまくりあげました。

——ジョロジョロジョロジョロ……

ありんすちゃんは念願だったタチシヨンなるものが出来て大満足です。

——ジョロジョロジョロジョロジョロジョロジョロ……
静まり返る第六階層に水の音がいつまでも続くのでした。

※ ※ ※

ありんすちゃんはベッドの中で目を開きました。第二階層のへ屍蟻玄室のありんすちゃんのベッドの中です。

回りを見回しますがザイトルクワエもピンスンもいません。

ありんすちゃんはお尻がヒンヤリしていたので布団をめくってみました。

なんとという事でしょう！ ありんすちゃんはビショビショのシートの上に座っていました。ありんすちゃん……これはおねしよ——
「まちや水をこぼしちやでありんちゆ。水でありんちゆ。ぜたいにぜーたいに水であ・り・ん・ちゆ！」

ありんすちゃん顔を真っ赤にしながら強い口調で断言するのです。……うーん。

まあ、本人が断言するのですからおねしよではないのでしょうか。……たぶん。……いや、きつと……

ありんすちゃんは慣れた動作で濡れたシーツをクルクルつと丸めます。

「へグレーターテレポーターチョン」でありんちゆ！」

ありんすちゃんが魔法を唱えるとあら不思議……乾いたシーツにかわっていました。

このシート……やたらとハートマークだらけの生地であまりセンスがなさそうですが……

ありんすちゃんハート柄のシートを敷き直すとまたスヤスヤと寝はじめるのでした。

※ ※ ※

「……これは……まさか……いや、そんなはずは……」

ヒンヤリとした感触にイビルアイは思わず起き上がりました。

ハート柄のパジャマの下半身が濡れています。

(……ありえない。まさか……これは……いや……既に二百年以上もしていないのに……まさか……これは……おねしよをしたというのか?)

イビルアイはハートマークだらけの枕をギュツと抱きしめました。

「……よう。イビルアイ、もう起きているんだろ?　しかしよ、マイシートにマイ枕でないと眠れないなんて贅沢だな。この宿屋のベッドだつて充分に——ん?」

騒がしく入ってきたガガーランは急に黙りました。ベッドに座り込んで枕を抱きしめたイビルアイのオドオドした顔を眺め——イビルアイの座っている辺りにひろがったシートのシミを眺めてニヤリと笑いかけました。

「……ああ……なるほど。それで自分のシートを……ね」

「いや、違う!　違うんだ!　こ、これは……」

イビルアイは必死に否定しましたが……

その後しばらくイビルアイはガガーランから『チビるアイ』とからかわれたそうです。

もちろんありんすちゃんはそんな事は知りませんでしたけど……仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

129 ありんすちやんとメロン

ナザリック地下大墳墓 第六階層——ここには焔が作られていてドライアドたちが世話をしています。

「たいへんだよ！ もうじき収穫予定だったメロンがなくなっちゃったよ！」

アウラとマーレがお茶をしているところにドライアドのピニスンが駆け込んできました。

「……騒がしいなあ。ねえ？ 本当に無くなったの？ ナザリックの中にそんなことするNPCはいないんじゃないのかな？」

「……あの、僕もそう思います。ピニスンさんの勘違い、とかじゃないでしょうか？」

ピニスンはどもりながら答えました。

「……昨日までは確かにありましたよ。丁度収穫時期のメロンが二個、間違いなく今朝無くなっていきます」

アウラとマーレはピニスンの案内で様子を見に行くことにしました。

※ ※ ※

「……うーん。確かになにか鋭利な刃物で切られているみたいだね。あたしの知る限りこの階層にいるシモベのいたずらじゃないみたいだよ」

「……すると、もしかして侵入者が……あの、いるのかな？」

マーレがおどおどした口調で尋ねました。アウラは口もとに笑みを浮かべると言いました。

「そうだ。確かありんすちやんって探偵としていくつか事件を解決しているんだよね？ ありんすちやんを呼んできたら解決するんじゃないかな？」

アウラはなぜかニヤニヤしながら提案をしました。そこでマーレ

が第二階層にありんすちゃんを呼びに行くことになりました。

※ ※ ※

マーレが第二階層の屍蟻玄室にやって来るとシモベのヴァンパイア・プライドが言いました。

「マーレ様、ありんすちゃん様はただいま身支度をされていらっしやいますので少しお待ちください」

三十分ほど待たされるとようやくありんすちゃんが姿を現しました。

「……またしえたでありんちゆ。めいたんてありんちゆちやの出演でありんちゆ」

ありんすちゃんを見てマーレは驚きました。まだ5歳児位のありんすちゃんの胸が不釣合に大きくなっていたのでした。

「なにしちえるでありんちゆか？ マーレ置いてくでありんちゆよ？」

ありんすちゃんの言葉に我にかえったマーレはあわてて後を追いかけるのでした。

※ ※ ※

「めいたんてありんちゆちやにまかちえるでありんちゆ！」

腕を組んで胸をそらすありんすちゃんをアウラはジト目で眺めます。

「……あのさあ、あたし犯人が誰だかわかつちやつただけ……」
アウラは宣言しました。

「犯人はこの場所にいるー！」

ありんすちゃんは明らかに動揺したみたいでした。

「……ありんちゆちやは何のこちやじえんじえんわからないでありん

ちゆ

フースーと口笛を吹くそぶりをしました。

「……ありんすちゃんさ、その胸のところにあたしのメロンが入ってるよね？」

「……何のこちやじえんじえんわからないでありんちゆ。ありんちゆちやのボインボインは男のロマンでありんちゆ」

ありんすちゃんの必死な主張にアウラは首を振りました。

「……その『男のロマン』とやらが落っこちかけてきてんだけど？」

ありんすちゃんはあわてて自分の胸もとを見ました。なんと膨らみがお腹のあたりにずれてしまっています。

咄嗟に押さえようとしましたが、時すでに遅くありんすちゃんの足下にゴロンゴロンとメロンが二個、落ちてしまいました。

※ ※ ※

翌朝、またしてもピニスンが騒ぎだしました。

「たいへんだよ！ 今度はスイカが七個も無くなっているよ！」

アウラはすぐにはありんすちゃんを呼び出しましたが今回は全くの無関係のようでした。アウラ、マーレ、ありんすちゃんはスイカの行方についてあれこれ悩むのでした。

※ ※ ※

「——なん、だ、と？」

恭しく平伏するアルベドとプレアデスに対してアイNZは思わず叫んでいました。

「——お前たちが私の子供を身ごもった、だど？」

アルベドとユリ、ルプスレギナ、ソリュシヤン、ナーベラル、シズ、

エントマのそれぞれの腹部はまるまると膨れ上がっていたのです。

それにしてもスイカは一体どこにいつてしまったのでしょうか？

130 ありんすちやんのあけおめ

あけましておめでとうございます。

ナザリック地下大墳墓 第二階層の屍蟻玄室の前には赤い鳥居が建てられています。更にお賽銭箱まで置かれています。

お賽銭箱の前ではありんすちやんが得意そうにしています。

今日のありんすちやんは巫女服を着ていても可愛いですね。ありんすちやんに巫女服を着せる為、シモベのヴァンパイア・プライドが大変な苦勞をしたのは秘密です。

「この箱におちやいちゃん、入れるでありんちゅ」

ありんすちやんはシモベ達を集めて言いました。そして少し考え込むと言葉を続けました。

「……おちやいちゃんじゃなくてもお菓子でも良いでありんちゅ。ありんちゅちやの好物入れて良いでありんちゅ」

フンスと鼻息を荒くするありんすちやんにヴァンパイア・プライドの一人が恐る恐る声をかけます。

「……ありんすちやん様、恐れながら私たちシモベはお菓子も持ってありませんが……かといって屍蟻玄室から持ち出すのも意味がないかと……」

ありんすちやんはしばらく考え込むと何か閃いたようです。

「……しよれなら他の階層からありんちゅちやのお参りしやしえるるありんちゅ！」

それからありんすちやんはヴァンパイア・プライド達を各階層に行かせて『ありんすちやん神社にお参りをするよう』伝えさせます。ありんすちやんは大きな紙に『ありんちやのじんじやこち』と貼紙を作りました。

第二階層のゲート入り口に貼るんだそうです。

そうして準備をするとありんすちやんは巫女さんとしてお賽銭箱の側に待機をします。

「……こりでいぱいパーイお年玉あちゅめるでありんちゅ」

※ ※ ※

新年そうそう第二階層に初めてやって来たのはアウラとマールでした。

「やほー。ありんすちゃん、あけましておめでとう。あたし達と羽根つきしようよ」

「……あの、あけましておめでとう、ございます」

アウラは紋付き羽織に袴、マールは振り袖を着ていました。

ありんすちゃんは首をふります。

「ありんちゅちは巫女ちゃんしるでありんちゅからダメでありんちゅ」

「……ふーん。あつそ」

アウラとマールはあつさりと頷きます。

「……そうだ。マール。確か食堂にアインズ様がお雑煮とお汁粉を用意してくれているらしいね。これからアインズ様に新年のご挨拶にいこうか?」

途端にありんすちゃんのお腹がグウ〜と鳴りましたが双子は気がつかないふりをします。

「……あの、そ、そうですね。せっかくの晴れ着をアインズ様に、あの、ご覧いただきたいですよね」

賑やかに去っていく二人をちよつと羨ましくなったありんすちゃんでした。

※ ※ ※

お雑煮もお汁粉も我慢して頑張り続けたありんすちゃん神社でしたが、残念ながら次の来客によっておしまいとなってしまいました。

「……お賽銭箱かあ。わたしいの好物のお、おいしい栄養満点のおやつう、たくさん入れてあげるう〜」

みるみる黒くてピカピカ光沢がある『おやつ』が溢れ出す賽銭箱からありんすちゃんは逃げ出すのでした。

「……もうありんちゅちゅや神社やらないでありんちゅ」

ありんすちゃん、新年そうそうに災難でしたね。

翌日になつたらすっかり忘れてしまい、またしてもありんすちゃん神社が復活したりしますが……仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

131 ありんすちゃんひなまつり

今日は三月三日、ひな祭りです。

ありんすちゃんはアウラとマーレに誘われてナザリック地下大墳墓 第六階層にやって来ています。

「ほら、すごいでしょ？ やまいこ様のコレクションなんだよ？」

アウラは五段飾りのひな人形の前で得意そうに胸をそらします。

「やまいこ様は、あの……ぶくぶく茶釜様と館ころもっちもち様と女子会を、あの、よく開いていらっしやっていたんです」

「……………ふーん」

ありんすちゃんは気のない返事をしていましたが、視線は可愛らしいひな人形に釘付けでした。

8センチ程の小ぶりな人形はネコやイヌなどの動物を模していて、どれも綺麗な装束をまとっています。なかでも男雛女雛は実に素晴らしく、ありんすちゃんは思わずため息をついてしまいました。

「ね、あたし達のひな人形、すごいでしょ？」

アウラが更に胸をそらします。

「……………別にうらまやしくないのでありんちゅ。……あ・り・ん・ちゅー！」

ありんすちゃんはそう言いきましたが、相変わらず視線はひな人形に釘付けのままです。

「……………ふーん」

アウラはありんすちゃんの視線を遮るようにひな人形の前に立ちました。

「……………ありんちゅちやもひな人形、もってるでありんちゅ。ペロロンチーノしやまから貰ったでありんちゅ。ほんちよでありんちゅ」

「……………ふーん」

アウラはジト目でありんすちゃんを見つめます。

「……………じゃあさ、ありんすちゃんのひな人形をあたし達に見せてくれない？」

「わかったでありんちゅ」

ありんすちゃんは真つ赤な顔で出ていこうとします。

「……その前にポケットからあたし達の女雛様、返してほしいんだけど?」

ありんすちゃんはしらをきろうと頑張りましたが、双子にひな人形を取り返されてしまいました。

※ ※ ※

「……ありんちゅちやのひな人形、探すでありんちゅ」

第二階層に戻ったありんすちゃんは早速シモベを集めます。

「……あの……ありんすちゃん様。恐れながらありんすちゃん様はひな人形をお持ちではありませんが……」

ヴァンパイア・ブライドはおずおずと意見します。

「……ちようでありんちゅ。今から第六階層へ行つてひな人形もつてくるでありんちゅ。あれはほんとはありんちゅちやのひな人形でありんちゅ」

ありんすちゃんは鼻からフンスと息をはきながらシモベに命じます。しかし誰一人として動こうとしません。

「ありんすちゃん様。この屍蠟玄室の階段に赤い絨毯を敷いてひな人形みたいに人形を飾つてはいかがでしょうか?」

別のヴァンパイア・ブライドがありんすちゃんに提案します。ありんすちゃんはニツコリすると飾る人形を探し始めました。

※ ※ ※

最上段の内裏びなはすぐに決まりました。男雛は以前にリ・エステイゼ王国に行つた時に手に入れた超合金アインズ様人形です。女雛にはいつも寝る時に抱いているウサギのぬいぐるみにしました。

問題はその他の三人官女や五人囃子といったひな人形です。ありんすちゃんは他の人形もぬいぐるみありませんでした。

「……困つたでありんちゅ」

そこに先程のヴァンパイア・ブライドが明るい顔でやって来ました。見ると人形の形をしたクツキーを手にしています。

「ありんすちゃん様。このジンジャーブレッドを人形の代わりにしてはいかがでしょう？ カラフルな紙で衣装を作ればだいぶ見映えがよくなると思います」

ありんすちゃんは手を叩いて喜びました。

「ちようだ。ありんちゅちゅのお雛様は十人囃ししるでありんちゅ。アウアウよりたくさんしるてありんちゅ！」

なにやらお囃子というよりちよつとしたオーケストラになりそうですね。

※ ※ ※

そしていよいよアウラとマーレにありんすちゃんのひな人形をお披露目する時がやってきました。

ありんすちゃんは得意そうに屍蟻玄室の扉を開きます。

ありんすちゃんのひな人形を目にしたアウラとマーレは言葉を失いました。

※ ※ ※

「これはこれは我が階層守護者たるありんすちゃん様。この度は我が眷属の為にご馳走をご用意頂きまして誠に恐悦至極にございます——」

恭しくお辞儀をする恐怖公の後ろにはありんすちゃんのひな人形のジンジャーブレッドを食う眷属の大群が——

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の子なのですから。

——あれ？

132 ありんすちゃんけししようをする

ナザリック地下大墳墓 第二階層〈屍蠟玄室〉——今日のありんすちゃんは不機嫌そうです。

真つ赤な口紅を手にしてドレッサーの前にチョココンと座っているのですが鏡に届かないのです。うーん……どうやらドレッサーを使うにはありんすちゃんが小さ過ぎてしまうようです。

しばらくムツとした顔で睨んでいたありんすちゃんでしたが、何やら閃いたみたいです。

しばらくすると、どこからかいくつもの木箱を持って来ました。そしてドレッサーのスツールの上に積み始めました。

なるほど。こうして高くすればありんすちゃんでもドレッサーに届きますね。しかし……ああ！ 危ない！

あつという間に木箱が崩れてありんすちゃんは落ちてしまいました。

うーん……ありんすちゃん、もう少し安全なやり方を探した方が……

こまりました。ありんすちゃんはまたしてもスツールの上に木箱を積み始めます。

ほらほら言わんこつちやありません。またしてもありんすちゃんは落ちてしまいます。

ふうふう言いながら、真つ赤な顔で木箱にあれこれ怒っています……うーん。そんな事では解決しないと思いますよ。たぶん。

やがて、とうとう木箱をスツールに積み上げるのを諦めたありんすちゃんは食堂から椅子を借りてきました。

いつもありんすちゃんが使っている、幼児用の補助椅子です。よくファミレスで小さな子供が使うあれです。

ありんすちゃんは補助椅子に登ると腰を下ろします。うーん……ドレッサーと反対の向きに座ってしまったのでやり直します。

椅子の上に立ち上がり、両足をスポンと補助テーブルの下にくぐらせます。

大成功です。ありんすちゃんは口紅を持つとドレッサーを眺めます。

大変です！ なんとという事でしょう！ せっかく苦勞してドレッサーに届いたというのに……ドレッサーの鏡にはありんすちゃんの姿がありません。

うーん……どうやらありんすちゃんは吸血鬼なので鏡には写らないようですね。

と、ありんすちゃんは何やら思いついたみたいです。補助椅子から降りると何やら紙に描き始めました。

うーん……いったいどうするのでしょうか？

※ ※ ※

その後真っ赤な口紅を顔中に塗りたくったありんすちゃんはシモベのヴァンパイア・ブライド達を恐惶させ、皆に無理矢理お風呂でゴシゴシ洗われ……疲れきって眠りりにつくのでした。

翌朝、ありんすちゃんはおねしよをしてしまいました。

「……ありんちゅちや、あちよこからオバケ覗きこんでいるから、おトイレいけなかつちやでありんちゅ……」

ありんすちゃんが指を指したドレッサーの鏡には昨日ありんすちゃんが描いた絵が貼ってありました。なるほど。鏡に写らないから自分の顔を描いてそれを鏡に見立ててお化粧をしたのですね。

なかなか良い考えですが、それをすっかり忘れてオバケだと思ってしまうとは……

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

1333ありんすちゃんツインテールにする

ナザリック地下大墳墓 第二階層〈屍蟻玄室〉——今日のありんすちゃんはご機嫌です。

三人のヴァンパイア・ブライドに髪をツインテールにしてもらっています。ありんすちゃんの長くて艶やかな銀髪はツインテールが良く似合いそうですね。

ツインテールの根元にはピンク色のサクランボみたいなのをつけてます。服装は白のフリルがたくさんワンピースです。

ありんすちゃんは椅子から降りるとクルリクルリとワンピースを翻しながら回ってみせました。

「ありんすちゃん様。とってもお似合いです」
「本当にお似合いです」

シモベのヴァンパイア・ブライド達の賞賛にありんすちゃんの小鼻が膨らみます。

「……と、とうじえんでありんちゅ。ありんちゅちは可愛いでありんちゅから……ふん！」

ありんすちゃんの頬がみるみる紅潮していきます。

「では、こりから見回り、しるでありんちゅ」

ありんすちゃんはフンスと鼻から息を吐き出すと階層の巡回に出かけて行きました。興奮のあまり、ぎこちなく手足を揃えて歩いてしまっています……

※ ※ ※

翌日もありんすちゃんは髪をツインテールにしました。今回は前より少し上から分けていますね。細い銀色の髪がユラユラ揺れています。

「おはよー！ ありんすちゃん」

いきなり扉が開き、アウラが入ってきました。アウラはありんすちゃんを見つけるとマジマジと見つめます。

「……へえー……思ったより似合ってるじゃん。あーあ。あたしも髪が長かったらツインテールにしてみるんだけどな……」

残念そうなアウラを見て、ありんすちゃんは得意になります。

「ふふん。ツインテールはありんちゅちやにとおっても、とおおつても似合うんでありんちゅー！」

ありんすちゃんは鼻からフンスと息を吐きました。

「……うー……なんかムカつく……あたしも髪を伸ばすんだ。じゃあね、ありんすちゃん」

アウラは乱暴に出ていってしまいました。

ありんすちゃんはご機嫌です。シモベ達の賞賛を浴びながらまたしても階層の巡回に出かけていくのでした。

※ ※ ※

やがて、ありんすちゃんがツインテールにし始めてから一週間が経とうとしていたある日のことです。

ありんすちゃんがいつものようにヴァンパイア・ブライド達に髪をすいてもらっていると、来訪者がありました。

ありんすちゃんが部屋に入れるとそれは領域守護者の恐怖公でした。

恐怖公は真っ白のタキシードに身を固め、恭しく赤い薔薇の花束を差し出しながら言いました。

「この数日間というものの貴女の美しい銀色の触角に心奪われておりました。身分の違いこそあれど、この恋心はいかにもしようなく、ここに想いのたけをぶつけたく思います。願わくは我が宿世の伴侶となつて頂きたく……」

その日からありんすちゃんは二度とツインテールにする事はありませんでした。仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

134 ありんすちゃん、ゆかたをきる

ナザリツク地下大墳墓 第二階層〈屍蠟玄室〉のありんすちゃんの部屋の扉に一枚の貼り紙がありました。

『きがえちう』

中ではありんすちゃんがドツタンボタン大騒ぎです。どうやらありんすちゃんは浴衣を着ようとしているみたいですが……うーん。一人で浴衣を着るのは無理みたいですね。

あまりの騒ぎにヴァンパイア・ブライド達が駆けつけてきました。総出でありんすちゃんに巻き付いた布をほどいていきます。ようやくにしてありんすちゃんの顔が出てきました。

「ぶはー！ グルグル巻きになっちゃでありんちゅ」

夏祭りの季節ですからありんすちゃんが浴衣を着るのは良いと思います……

ヴァンパイア・ブライド三人がかりでようやく帯をほどき、きちんと浴衣を着せ直します。最初からそうすれば良かったのではないのでしょうか？ それともまたしてもシモベ達からストライキされてしまったのでしょうか？

なにはともあれ、ありんすちゃん、浴衣がとってもよく似合います。可愛い朝顔の柄がありんすちゃんの魅力を引き出していますよ。長い銀髪は結びあげられてピンク色の金魚の飾りの簪で留めてあります。

「ちよれでは浴衣をアインジュしやまに見てもらおうでありんちゅ！」

ありんすちゃんは胸をそらせると、鼻息も荒く屍蠟玄室を出ていくのでした。

※ ※ ※

ありんすちゃんは真っ直ぐ第九階層にやって来ました。アインズの執務室の前で止まると扉にノックをします。ありんすちゃんつてなかなか行儀が良いですね。

135 ありんすちゃんにじいろのみずたまり

ありんすちゃんがナザリック地下大墳墓 第三階層にやって来ました。いつもの巡回のお仕事です。

「あめあめふれふれかーちゃんがー」

おやおや？ 今日のありんすちゃんは可愛らしい赤のレインコートと長靴、そしてピンクの傘をさしています。

先程まで降っていた雨はすでにやんでいますが、ありんすちゃん、とつても似合っていますよ。

ナザリック地下大墳墓では時折マーレが魔法で雨を降らせているんですね。

「ビッチビッチジャブジャブらんらん」

うーん……なんだか歌詞が微妙に違うみたいですが……

ありんすちゃんは水溜まりを見つけると飛び込んでいきます。

「おもちゃろいでありんちゅー！」

水溜まりの中でありんすちゃんの笑い顔が波紋で揺れます。吸血鬼は流れる水が苦手だったりしますが、こうした水溜まりは問題ないみたいですね。

「……あちよこ、綺麗でありんちゅー！」

ありんすちゃんが駆け出していきます。

「こりは綺麗なみじゆたまりでありんちゅね……」

そこにあつたのは虹色の水溜まりでした。いったい何の水溜まりなんでしょう？ 確かに綺麗な虹色なんです……

ありんすちゃんはしばし虹色の水溜まりにうっとり見とれていましたが、突然何かを閃いたみたいです。

「ちようだ！ こりがどこから出ているかしらべるありんちゅー！」

ありんすちゃんはウソソコのスキップをしながら歩きだしました。

「冒険でくありんちゅうく冒険がくありんちゅうく♪」

何やら即興の歌を口ずさみながら、ありんすちゃんはどんどん進んでいきます。どこまでもどこまでも進んでいくと、何やら物音が聞こえてきました。

※ ※ ※

「……オエエエエ！ ゲホツゲホツ！ オエルルルエエエエ！」

ありんすちゃんはどうとう虹色の水溜まりの発生源を突き止めました。

なんとナザリツクのアンデッド、シルクハットに取りつけられた金髪の少女の頭の口から滝のように虹色の液体が溢れていました。

「……これは、オエルルルエエエエ！ ありんすちゃん様、オエルルルエエエエ！ 申し訳ありません、オエエエエ！ この首が、オエエエエ！ 吐くのをやめ、オエルルルエエエエ！ ないので申し訳あり、オエエエエ！ その、ありんすちゃん様が、オエエエエ、近づいた途端に、オエエエエ！ 吐くのがとまらなく、オエルルルエエエエ！」

まるで噴水のように虹色の液体を吹き出すシルクハットをありんすちゃんはうらやましそうに見つめました。

「ありんちゅちゅもそりがほちいでありんちゅ、おえちたいでありんちゅ」

階層守護者の不興を買うかとビクビクしていたシルクハットは困ってしまいました。

「……この頭を、オエエエエエ！ ありんすちゃん様が、オエエエエエ！ お持ちになつても、オエエエエエ！ 意味はないかと、オエエエエエ！ 思いますが、オエエエエエ！」

「ありんちゅちゅも、オエオエエエしるでありんちゅ！ きれいな虹色、オエオエしるでありんちゅ！」

シルクハットは丁寧でありんすちゃんに説明をしました。このままありんすちゃんにアルシエの首を渡しても腐らせてしまうだけです。せつかくアインズ様から賜ったのに無駄にする事は出来ません。シルクハットによるありんすちゃんの説得は三時間にもおよびました。

「……わかっちゃでありんちゅ」

ありんすちゃんはしぶしぶとシルクハットから首をもらう事をあきらめると、何処かへ走り去っていきました。

「いいもーん！　ありんちゅちやの方がもっともつとしゅてきな頭、飾るでありんちゅもん！」

うーん……嫌な予感しかشませんが……

※ ※ ※

その後、アイズはユリ・アルファの頭を頭の上に結びつけて得意そうにありんすちゃんからユリ・アルファの首を返させるのに苦労したそうです。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ五歳児位の女の子なのですから。

136 ありんすちやんとしゃっくり

「……ヒックッ……」

ナザリック地下大墳墓の第九階層にある食堂でひととき大きな音が響きわたりました。

「……ヒック―!」

食事中の一般メイド達が一斉に振り向いた視線の先にいたのはなんと! ありんすちやんでした。

ありんすちやんは目を見開いて口を両手で押さえています。

「……ヒック! しゃっくり、とまらない……ヒック! でありんちゅ……ヒック―!」

どうやらありんすちやんはしゃっくりが止まらなくなってしまうようです。

ありんすちやんは昼食にペペロンチーノを食べていたのですが……口に入れようとする度にしゃっくりが出て、フオークに巻かれたペペロンチーノが弾みで飛んでいっちゃうのでした。

「……全く……このナザリックの次期支配者たる私、エクレア・エクレル・エイクレアーに先程からパスタを投げつけているのはいったいどなたですか?……」

エクレアが頭の上からパスタをたらしてありんすちやんのもとにやってきました。

「……ありんちゅちや、ヒック! わざとじや、ヒック! ないで………ヒヤックション―!」

ありんすちやんがくしゃみとしゃっくりを同時にした為にへグレートーテレポーテーションが発動してエクレアは何処かへ転移してしまいました。

「……ヒヤック……ヒック……」

ありんすちやんのしゃっくりは止まりそうにありません。

「おやおや? ありんすちやん、17回目のしゃっくりっすね。知ってたっすか? しゃっくりつて止まらずに百回続けていたら死んじやうっすよ?」

唐突に姿を見せたルプスレギナの言葉にありんすの顔色が真っ青になります。

「……ヒクツ……なんちよかちないと……ヒクツ……ちんじやうで……ヒクツ……ありんちゆ……」

ありんすちゃんは食事を中断すると走り出していきました。

※ ※ ※

「えー？　しゃつくりを止める方法が知りたい？」

突然のありんすちゃんの来訪にアウラがすつとんきような声を上げます。

「……うーん……いろんな方法があったと思うけど……どうしようかな？」

腕を組んで考え込むアウラをありんすちゃんは期待のこもった眼差しで見つめます。

「わっ!!　ど、どうかな？　あの、びつくりするとしゃつくりが止まりますよね」

突然現れたマーレがありんすちゃんを驚かしました。でも……
「……………ヒクツ」

残念ながらありんすちゃんのしゃつくりは止まりません。

「……そうだ！　たしか茶釜様に教えてもらった方法があった！」
アウラが手を叩きました。

「うんうん。これなら大丈夫だよ。こうして鼻をつまんで水を一気に沢山飲み込んだよ。そうすれば一発で止まるはずだよ」

ありんすちゃんは頑張って水を沢山飲み続けました。沢山飲んでお腹はチャポンチャポンです。

「……………ヒクツ」
うーん……残念ながらありんすちゃんのしゃつくりは相当手強いみたいですよ。

「……ヒクツ……ヒクツ……ヒクツ……」
大変です。しゃつくりが収まるどころかむしろひどくなってきた

ようです。

「……ヒック……ありんゆちや、ヒック……ちにたかないでありんゆちや……ヒック……うわわああん！」

ありんすちやんは泣きながら飛び出していってしまいました。

※ ※ ※

「……え？　ありんすちやんのしゃっくりが止まらないと……ありんすちやんが死んでしまう、ですって？」

ありんすちやんが泣きながら訴えています。アルベドは落ち着いていました。

うーん……さすがは守護者統括ですね。アインズ様が留守中のナザリックを任せるだけの事はあります。

「……ありんすちやん、一言だけよいかしら？」
ありんすちやんは真っ赤に腫らした目をこすりながらアルベドを見上げました。

「……アンデッドは死なないんじゃないかしら？」
「……………」

ありんすちやんはポカーンと口を開けたまま固まりました。

「……………」
「……………」

しばらく二人は無言で向き合っていました……

「あー！　しゃっくり、止まったでありんちゆ！　ありんちゆちや、こりでぢないでありんちゆ！」

ありんすちやんは踊りながら飛び出していきました。仕方ありませんよね。だって、ありんすちやんはまだ5歳児位の女の子なのでから。

137 番外編 ティラの忍者修行

バハルス帝国の暗殺組織の首領だったティラは強引にナザリックにスカウトされてしまいました。

「うむ。ユグドラシルでは忍者は最低60レベルだったはずだが……それにしても現地の忍者はレアだな。しかもクノイチとアサシンの職業を持っているのか……是非とも鍛えてみたいものだ」

アインズはメッセージでシモベのハンゾウを呼び出しました。

「はい。アインズ様。……うわ……むぐぐ……」

「……ん？ ハンゾウよ。どうかしたか？」

「……ハンゾウでありんちゅ。なんでも、なーんでもーないでありんちゅ」

アインズは嫌な予感がしましたが気がつかないふりで続けます。

「……すぐに私の執務室に来るように。ティラという人間を鍛えて欲しいのだ」

「今しゅぐ行きますでありんちゅ」

メッセージを切ると同時にアインズの前にありんすちゃんが現れました。どうやらグレーターテレポーションを使ったみたいですね。

「ありんちゅちゃ、じゃなくてハンゾウ参上しるでありんちゅ」

ありんすちゃんは歌舞伎に出てくるようなポーズをとります。よく見ると服装がクノイチっぽいですね。

「……あー……コホン。ティラよ。この者の下で修行するのだ。よいな？」

「ハッ。かしこまりました」

かくてティラはありんすちゃんの元で忍者修行する事になりました。

※ ※ ※

「まじゅは第二階ちように行きますでありんちゅ」

「ハッ」

ありんすちゃんは鼻唄まじりで第二階層にやって来るとへ屍蟻玄室へ入っていききました。そしてお風呂身体を洗い、のんびりと湯船につかり、シモベに髪を乾かさせるとベッドに入ってしまったいました。

「……………あの……………私の修行は……………」

ありんすちゃんはベッドの中で目をパチクリさせました。

「うっかりわちゆれてちゃでありんちゅ」

※ ※ ※

ありんすちゃんはシモベのヴァンパイア・ブライドに大きなルーレットを持ってこさせました。盤上のベルトにテイラの手足を固定させると言いました。

「こりから立派な『たいまにん』なるますでありんちゅ」

テイラは手足を固定されたまま高速回転させられて絶叫するのでした。

※ ※ ※

『『たいまにん』の道はまだまだ厳しいでありんちゅ』

テイラはまだ手足をルーレットに固定されたままです。

「次の修行しるでありんちゅ」

ありんすちゃんが指示をだすと四人のヴァンパイア・ブライド達がテイラをくすぐりはじめました。

「アツハハハハハハ！　ぐるじい……………やめて！　アツハハハハハハゴホゴホッ！」

テイラは身もだえするのでした。

※ ※ ※

「だいぶ『たいまにん』らしくなっちゃでありんちゅ」

いつの間にかテイラの忍者装束はボロボロでバラバラあちこち穴

が開いています。胸もととか太ももとか晒されてちよつとエツチです
すね。

「……そりでは最後の修行しるでありんちゆ」

ありんすちやんとテイラは第六階層にやって来ました。

「あれ？　ありんすちやんじやん。そつちはアインズ様がスカウトした人間かな？　あたしの階層に用かな？」

ありんすちやんはアウラに胸をそらせてみせました。

「ありんちゆちはアインジュちやまのお仕事しるでありんちゆ。アウアウじやなくてありんちゆが頼まれたでありんちゆ！」

「……えつと……ハンゾウ様が頼まれるはずですよ……ね？」

得意そうなありんすちやんにテイラが小さな声で呟きましたが、ありんすちやんには聞こえなかつたみたいです。

「アウアウ、しゆぐにウネウネニヨロニヨロに案内しるでありんちゆ」
アウラはやれやれと首を振りながらもありんすちやん達を触手だらけの蟲が住む穴に案内するのでした。

「こりて立派な『たいまにん』なるでありんちゆ。ニヨロニヨロウネウネがつきものなのでありんちゆ」

可哀相にテイラは触手が蠢く穴に落とされてしまいました。

かくしてテイラは立派な対魔忍となり、エロエロな活躍をするのでした。

仕方ありませんよね。だってペロロンチーノさんはエロ大魔王なので
すから。

138 ありんすちやんとパワードスーツ

ナザリック地下大墳墓 第二階層〈屍蟻玄室〉——…ありんすちやんはベッドから起き上がるとお風呂に向かいました。途中でパジャマを脱ぎ散らかしています。

泡で満たされた浴槽に潜り、ブクブクと息で泡を作ったりきめ細かな泡を積み上げて息を吹き掛けて飛ばしてみたりします。

手や足でバシバシやし始めるとシモベのヴァンパイア・ブライドがバスタオルを持ってやってきます。

ありんすちやんは万歳をした格好で身体を拭いてもらうと、他のシモベがありんすちやんの衣類を持ってやって来ます。ヴァンパイア・ブライド達に着替えさせてもらったありんすちやんは小さくくしゃみをしました。

次の瞬間、ありんすちやんは何処かに転移してしまいました。

※ ※ ※

テレポーションしてしまったありんすちやんは何やら狭い場所にいきました。とりあえず手元にあったスイッチを片っ端から点けてみました。

と——ウイイ……ンと音がして目の前に画面が表示されます。何やら裸の女性といた裸の男が大きな口を開けてこちらに向かってきます。

ありんすちやんが小さく頭をふると声が聞こえてきました。

「——おい！　こら！　冗談じゃないぜ？　なあ、どうせツアーの悪戯なんだろう？　なあ？　ま、待てよー」

ありんすちやんは男の無様な姿に笑いました。うん？　頭の中にいろいろイメージが浮かんできます。どうやらありんすちやんの意思でいろいろ動かす事が出来るみたいです。

ありんすちやんは空高く飛びあがるとたちまち見えなくなっていました。

※ ※ ※

「……おいおいおい！　なんてこった！」

後に残された男——リ・エステイーゼ王国アダマントイト冒険者チーム「朱の雫」リーダーアズス・アインドラは立ち尽くしたままでありんすちゃんが消えた空を見上げていました。

ちなみに下半身も裸です。

ありんすちゃんが転移したのはアズスのパワードスーツの中だった為、アズスにしてみたらいきなりパワードスーツが勝手に飛び出していつてしまったのでした。

「くそー！　いったいどうなってやがる……！」

アズスは他の「朱の雫」メンバーに情報収集させると同時に冒険者組合のネットワークを使ってパワードスーツの行方を探させるのでした。

※ ※ ※

やがてアズスのものと思われるパワードスーツについての情報がアズスのもとに報告されました。それによるとトブの大森林の近くの開拓村のひとつで幼女が自慢気に見せびらかせていたとの事です。

うーん。間違いありません。きつとそれ、ありんすちゃんです。

アズスは「朱の雫」の仲間を伴い、その村を訪ねる事にしました。

※ ※ ※

「……うん？　カルネ村とはここのようだな。……しかし……これは……」

アズスは一介の開拓村に過ぎないはずのカルネ村のものものしきに緊張します。

村の周囲は頑丈な柵が巡らされていてちよつとした要塞のようでした。

「……ちよつと訊ねるが、この村にパワードスーツを所有するよう……少女がいると聞いたが……？」

アズスは利発そうな少女に声をかけました。

「あれ？ お客さんですか？ この列に並んでください。スッゴーイんですよ」

アズス達は仕方なく50人位の列に並びました。

しばらくするとパワードスーツが空から降りてきました。

「な、なんで腕が？ ドリル？」

思わずアズスは叫びます。パワードスーツの右手は肘の先がドリルになっていました。しかも胴体の部分が異様に太くなっています。

やがて胸のあたりのハッチが開きりんすちちゃんが出てきました。

「おまたせちたでありんちゅ。こりからありんちゅちゃのしえんようガリダムに順番あしよぶでありんちゅ！」

ありんすちちゃんが宣言をすると列に並んでいた皆が歓声を上げました。

※ ※ ※

「……………いやいやいや。子供のオモチャにするなよ……………ああ、そんな小さな子に操縦は無理だろ……………ああ。やつぱり……………いやいや、『丈夫だから大丈夫でありんちゅ』って……………いやいやいや。ダメだって……………やめろ！ 赤ちゃんに操縦はやめろ！ 無理だって……………いやいやいや……………せめて十歳以上とか身長制限を……………いやいや。ゴブリンだぞ？ ゴブリンがパワードスーツ乗っちゃう？ いやいやいや……………てかゴブリンどこから出てきたの？ せめて列に並ぼうよ？ ルール守ろうよ……………オーガ！ いや無いわあ。オーガ無いわあ。オーガに操縦さすか？ 普通……………そもそもパワードスーツ操縦が普通じゃないよね……………いやいや。『ありんちゅちゃのパワードスーツ』じゃないから。そもそも俺のだし……………」

アズスはブツブツと呟き続けていますが仲間達はスルーしていました。

やがてアズスの番になりました。

※ ※ ※

アズスはパワードスーツから降りるとありんすちゃんに返して欲しいと頼んでみました。

意外にもありんすちゃんは快く頷いてくれました。

「……ちなみに何故、ドリルをつけたんだ？」

アズスはささやかな疑問を口にしました。

「……かつこいいでありんちゆ。ドリルグルグルするでありんちゆ」

アズスは更に訊ねてみました。

「……しかし、コクピットに湯船をつけるのは全く理解できないのだが……」

ありんすちゃんは答えました。

「ありんちゅちはお風呂だしゆきでありんちゅよ」

うーん……仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ5

歳児位の女の子なのですから。

139 ありんすちゃんスライムになる

ナザリック地下大墳墓 第二階層〈屍蠟玄室〉

「ありんすちゃん様！」

ヴァンパイア・ブライドの大声にありんすちゃんは目をこすりながら起き上がりました。

プヨヨン……

ありんすちゃんは目をこすり……

プヨヨヨン……

なんとこの事でしょう！ ありんすちゃんは目をこする事が出来ませんでした。

「……恐れながら、ありんすちゃん様は……その………スライムになっっておられます」

「おずおずと意見を述べるヴァンパイア・ブライドにありんすちゃんは振り向きませんでした。

プヨヨン……

ありんすちゃんは首をねじれないので仕方なく身体全体で向き直りました。

ボヨヨン……ボヨン。

ありんすちゃんは改めて自分の身体を見下ろしてみました。すると、なんとこの事でしょう！ ありんすちゃんはピンク色のスライムになっていたのです。

スライムになったありんすちゃんの身体の表面からは汗の様に液体が染みだしていました。その液体はありんすちゃんのベッドのシーツに染みを作るのです。

※ ※ ※

「……うむ。ではスライムになった身体から出た液体がこの染みだと

「いうのかね？」

「アインズは会議室に広げて置かれたベッドのシーツを指して尋ねました。ありんすちゃん首をコクンコクンとさせます。」

「アインズは額に手をやり、軽く頭を振りました。しばらく考え事をした後でありんすちゃんに向き直りました。」

「……しかし、ありんすちゃんよ。スライムになったのならどうやってその姿に戻ったのかね？」

「ありんすちゃんはしばらく考え込むと口を開きました。」

「……ちよればベストローニヤワンワンに戻ちてもらっちゃでありんちゅ」

「……ふむ。ありんすちゃんはこう言っているが……ペストローニヤよ。どうなのだ？」

「……私は全く身に覚えがありません……ワン」

「アインズはさらにい並ぶ戦闘^{ブレイアデス}メイドに尋ねていきます。」

「……とりあえずありんすちゃんはこう言っているが、お前たちはどう思う？」

「……恐れながらアインズ様。これはただのおねしょかと……」

「……おねしょだと思えます」

「……おねしょです」

「……おねしょとしか……」

「……正確にはアンデッドの中でも吸血鬼族特有の分泌物だと分析……」

「戦闘メイド達の指摘にありんすちゃんの顔がみるみる紅潮していきます。」

「ありんちゅちゅ、おねしょなんてしないでありんちゅ！　ありんちゅちゅちはもう立派なレイレイなんでありんちゅ！」

「——その立派なレイレイが——」

「ありんすちゃんの叫びを打ち消して悲痛な声が響きわたりました。」

「——その立派なレイレイとやらは何故に罪もないメイド、ツアレのベッドのシーツをおねしょシーツに取り替えたのでしょうか？　説明をしていただきたいものです！」

執事のセバスがありんすちゃんに指を突きつけて糾弾します。

ありんすちゃんは最後には、おねしよをしてしまい、それを誤魔化す為にツアレのシートとヘグレーターテレポーションで交換し、バレそうになったのでスライムになったという話をでっち上げた事を認めました。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子に過ぎないのですから。

※ ※ ※

ちなみにセバスが激昂したのは『ツアレが自らおねしよをしたと勘違いして茫然自失した』から、というのもありましたが、一般メイド達の噂に『セバス様が激しすぎて弛んでしまったからお漏らししたのに違いない』というのが理由だったらしいです。勿論、純真なありんすちゃんにはなんの事かは全く解らないでしょうが……

140 たいまにんアリンズ

ナザリツク地下大墳墓 第二階層〈屍蟻玄室〉——階層守護者のありんすちやんが着替え中です。うーん……V字型の赤い革の生地にメッシュ素材の服装……成熟した女性ならば目のやりどころに困ってしまいそうな衣装です。

「たいまにんありんちゅちや見参しるでありんちゅ」

ありんすちやんは両手を前に合わせて胸もとを強調するポーズをとります。

うーん……どう見ても猿回しの猿が反省するポーズ——ゲフンゲフン。

かくして対魔忍となったありんすちやんは意気揚々と出かけていきました。

※ ※ ※

第六階層にやってきたありんすちやんは触手を持つ巨大な植物が住む穴に呼びかけました。

「ありんちゅちやがたいまにんのお手本しるでありんちゅ。ちやつちやと出てくるますでありんちゅ」

ありんすちやんの呼びかけに一人の女性が這い上がってきました。先日無理矢理ありんすちやんに対魔忍にさせられた元イジヤニーヤのテイラです。

「……ううう……もう触手はイヤだ……」

「……ダメでありんちゅ。せくしいさがじえんじえん、じえんじえん——ん足りないでありんちゅ」

ありんすちやんは肩をはだけると「いやーん」「ばかーん」「えっちい」と叫びながら身体をくねらせてみせます。

「テラもやるでありんちゅ」

ありんすちやんはテイラの肩をはだけさせました。

「いやーん」「……イヤーン」

「ばかーん」「……ん……バカーん」

「あーれー」「……あ、れー……」

ありんすちゃんは腕を組みました。

「まったくダメダメでありんちゅ。色っぽちゃ、じえんじえん足りないでありんちゅ」

ありんすちゃんは更にティラの肌をさらけ出させました。

「いやーん」「イヤーン」

「ばかーん」「バカーん」

「えつちい」「……エツチ」

ありんすちゃんは満足そうに頷きました。

「だいぶ良くなったでありんちゅ」

ホツとしたティラは思わずため息をつきました。

「……ふう。こんな事なら妹たちのように気楽な冒険者にでもなっていれば良かった……」

途端にありんすちゃんの目が光りました。

「……テラには妹がいるでありんちゅか？ ありんちゅちはしゆてきなアイデア、ひらめいちゃでありんちゅ！」

※ ※ ※

リ・エステイーゼ王国首都リ・エステイーゼ。アダマンタイト級冒険者チーム『蒼の薔薇』のメンバー、ティアとティナは音信不通となった暗殺組織イジャニーヤの行方を探っていました。

「……おかしい。全く痕跡が消えている。これはあり得ない」

「……やはり皇帝が関わっていると見るべき。一度バハルス帝国に行く必要があるそう」

「……しかし王国もなにやらキナ臭いのも気になる。これは皇帝の策略かも……しかし信じられないのはイジャニーヤ首領程の実力者が……」

ティアとティナは不意に武器を構えました。二人の視線の先に人影が現れました。

「……テイラ？ 貴女なのか？」

「ティア、ティナ、貴女たちに話がある。是非聞いてほしい——」

「ありんちゅちやパンチ！」

ティアとティナはテイラの隣にいた少女のパンチを受けて意識を失ってしまいました。

※ ※ ※

「……ここはいつたい？」

ティアとティナが目覚めたのは円型闘技場でした。

「こりから二人にはたいまにんなる特訓してありんちゅ。いっちょけんめしるでありんちゅ」

先程の少女が胸を反らせて言いました。テイラは少女の後ろに隠れるようにして目を伏せています。

「……そんな無理強いがきけると？」

「……シヨタなら許したが少女なら許さない」

ティアとティナはありんすちゃんに飛びかかりました。が、あつさりど気絶させられてしまいました。

※ ※ ※

それから一週間後……

「……うむ。ありんすちゃんよ。対魔忍育成の成果を披露したい、だと？ 良かろう。この私が直々に見学するでしょう」

ありんすちゃんはアインズを第六階層の円型闘技場に案内しました。やがて小さな舞台のたれ幕が開かれるとテイラがベッドに寝ていました。

（……対魔忍……大丈夫か？ そういえばペロロンさんのコレクションでもかなりハードだったよな……）

「……ゆーたいりだつー！」

テイラの身体からティアが起き上がりました。

「……からのー……更にゆーたいりだつー！」

更にティアからティナが起き上がりました。

「……………」

目を白黒させて言葉を失ったアインズとは反対にありんすちゃんは嬉しそうです。うーん……仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

141ありんすちやんスーパーロボットたいへん

リ・エステイザー王国アダマタイト級冒険者チーム「朱の雫」のリーダー、アズス・アインドラは叫びました。

「な、なんでー?」

またしてもアズスのパワードスーツがひとりでに飛び去っていつてしまったのです。

前回はテレポーションしてきたありんすちやんが勝手に動かしてしまったのでした。その後、カルネ村でみんなのおもちやになつていたので頼み込んでようやく返してもらったのです。最近ようやく右手のドリルをふつうの手に替えたばかりです。

いったい誰の仕業でしょう?

「……あのよう……少女だな。きつと……」

どうやらアズスには心当たりがあるみたいですね。

※ ※ ※

アズスたち「朱の雫」は馬を飛ばしてトブの大森林にやって来ました。すると遠くに大きな何ものかの姿がありました。

「……あれか……いや、違う。あれは巨大なゴーレムか……?」

森からヌツと半身を突きだした巨大なゴーレムの姿がありました。そしてその上空には――

「あつ! 俺のパワードスーツ!」

アズスは駆け出していきました。

※ ※ ※

「まちやしえたでありんちゅ! ありんちゅちやのガリダムでありんちゅ」

「……勝負です。ありんすちやん。僕がアインズ様からお借りしたガ

「や、やめてくれえええ！」

ありんすちゃんは次々にパワードスーツの手足を投げましたがガ
ルガンチュアはびくともしません。

「さしゆがはガルガンチャでありんちゆ。こうなったら奥の手ちゆか
うでありんちゆ！」

ありんすちゃんはパワードスーツの頭部をつかみました。

「それだけはやめろうう！ 頼む！ やめてくれえええええ！」

アズスの叫びはありんすちゃんには届きませんでした。

「ろけつちよおおおお！ あたまあああ！」

パワードスーツの頭部は無惨にもむしりとられ、投げつけられてし
まいました。

「……右手のドリルがなくなったから負けちゃでありんちゆ」

ありんすちゃんはパワードスーツの残骸を乗り捨てると言いまし
た。

「……あの、ありんすちゃん。『ロケットあたま』じゃなくて『ロケッ
トヘッド』じゃないかな？」

ありんすちゃんはマールと一緒にガルガンチャの肩に乗ってナザ
リックに帰っていききました。

残されたアズスはパワードスーツの残骸に涙するのです。仕方
ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ五歳児位の女の子な
のですから。

142 ありんすちゃんはりきる

ナザリック地下大墳墓 第九階層執務室——重厚な机の前には階層守護者が勢揃いしていました。もちろんありんすちゃんもいます。「ナザリック地下大墳墓の主たる至高のお方々のまとめ役、偉大なる魔導王陛下であらせらるアインズ様にアルベド以下各階層守護者の忠誠を——」

「——よい。かたぐるしい挨拶はよせ。アルベドよ」

アインズは片手を振ってアルベドを静止しました。スカートの裾を掴まんで会釈をしようとしていたありんすちゃんは、ちよつと止まってから優雅にお辞儀をします。

「こぬたびはありんちゅちゅちゅもガンバリングでありんちゅまちゅ」

「——ガンバリング、か。ワハハハハ」

ありんすちゃんの可愛らしさにアインズもつい破顔します。

「——うん。うむ。さて、階層守護者達よ。今回集まってもらったのは他でもない。かねがね進行していた王国の件で重大な局面となったからだ。……アルベドよ。皆に説明を」

アルベドは軽く咳払いをすると話始めました。その内容は魔導国の傘下に入ったローブル聖王国に対し食糧などの支援物資を積んだ馬車の車列が魔導国を発った事、その途中のリ・エステーゼ王国の辺境地でその車列が襲われ、支援物資が全て何ものかに奪われてしまった事、そしてその名分をもって魔導国は王国を攻め滅ぼすつもりである事、でした。

「ゆるちやないでありんちゅ！ あ、り、ん、ちゅう！」

ありんすちゃんは鼻を膨らませて叫びました。

「そうだ。王国にはそのつけを払わせてやるつもりだ。アウラ、マーレ、コキユートスはそれぞれ軍勢を率いて王都リ・エステーゼを滅ぼせ。一人たりとも生かすな……ん？」

アインズはふと、ありんすちゃんの期待のこもった眼差しに気付きました。

「……うむ。ありんすちゃんも、だ。シモベを率いて滅ぼすのだ。た

だし、無理はするな」

ありんすちやんはコクンコクンと頷きます。

「よし。では明日開戦だ。現場の総指揮はデミウルゴスに任せる。ナザリックからの兵站などはセバスに一任する。各自細かく調整して事に当たれ。ナザリックの名を天下に示すのだ」

※ ※ ※

ありんすちやんは興奮しながら第二階層に戻ってきました。鼻の穴がずいぶんと拡がっていますよ。

「明日はいよいよ王国攻めましゅでありんちゅ！」

ありんすちやんは深紅のフルアーマーを身にまとい、高々とスポイトランスをかがげます。

「ありんちゅちやが一番、やりしるでありんちゅ！」

ありんすちやんの周りのシモベ達が拍手をしました。

「そいでもって、二番、やりもありんちゅちや！」

シモベ達が一層激しく拍手します。

「そいでそいで、三番、四番もありんちゅちや！」

ありんすちやんはフンスと鼻から息を吐き出すと胸を反らします。

次にありんすちやんは明日の準備を始めました。お出かけ用のウサギのリユックに次々と着替えとお菓子を詰め込みます。うーん……ありんすちやんは遠足と勘違いしていそうですね？

まあ、ありんすちやんは階層守護者とはいってもまだ五歳児位の女の子に過ぎませんから、戦争について理解していないのかもしれないかもしれませんね。

ありんすちやんはベッドの枕もとにウサギのリユックを置くと目をつぶります。明日寝坊しないように早めに眠るのですね。感心です。

※ ※ ※

夜も更けた頃——ありんすちゃんはベッドでパチリと目を開きました。うーん……もしかしたら興奮してなかなか寝つけないのでしょうか？

ありんすちゃんはベッドから降りると深紅のフルアーマーを身につけます。手には大きなスポイトランスを握りしめています。

「ありんちゅちやが一番やり、しるでありんちゅ！」

ありんすちゃんはブンブンとスポイトランスを振り回しました。

「しよいで、二番、やりもしるでありんちゅ！」

ありんすちゃんは気合いを込めてスポイトランスを降り続けるのでした。

※ ※ ※

そして朝になり、いよいよ王国を攻める刻限になりました。

「……うん？　なんだと？　ありんすちゃんが到着していない、だと？」

アインズはデミウルゴスからのメッセージを受けて大きな声をあげました。

「……まあ、よい。とりあえず王国殲滅はありんすちゃん抜きで構わん。いや、むしろいたいけな幼女には参加させるべきでなかったかもしれぬな。では、デミウルゴス。頼んだぞ」

※ ※ ※

で、結局ありんすちゃんは……

アインズの命で様子を見に来たルプスレギナは深紅のフルアーマー着てスポイトランスを手にしてグースカ眠るありんすちゃんを見つけてるのでした。仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ五歳児位の女の子に過ぎないのでから。

143 ありんすちゃんねぼうする

ナザリック地下大墳墓 第二階層——ありんすちゃんはパチリと目を開きました。どうやら昨夜、スポイトランスを振っているうちに寝てしまったみたいです。起き上がると、目の前にルプスレギナが意地悪そうな笑みを浮かべていました。

「おんやあ、ありんすちゃん、随分とゆっくりしているっすね。アインズ様はカンカンじゃないっすかね？」

「アインジユちやまー！」

ありんすちゃんは真っ青になりました。大変です。今日は朝からナザリックの軍勢がリ・エステイーゼ王国の首都を攻略する作戦が行われているのです。

ありんすちゃんもアウラ、コキュートスと同じようにシモベを引き連れて王国の人間を殲滅する任務を与えられていたのです。

「ありんちゅちは、じえんじえん、じえーんじえーん、遅刻なんかじゃないでありんちゅ！ ちよつと、おしよくなつちやだけで、ありんしゅ」

口を尖らせて異議を唱えるありんすちゃんですが……うーん……

——まじゅいでありんちゅ……いしよいでお城しえめるでありんちゅ！

ありんすちゃんは大急ぎで〈グレーターテレポーターション〉を唱えました。

※ ※ ※

「まにあっちゃ、でありんちゅ」

ありんすちゃんは幾つもの塔がある大きな建物を見てホツとします。

マーレやコキュートスにかかれば王城もあつという間に瓦礫の山に変わってしまうでしょう。

「ありんちゅちやがチャツチャツと片付けしるでありんちゅ」

ありんすちゃんは王城に向かって……うん？ ちよつと待つてく

ださい。ありんすちゃんに向かってるのはリ・エステイーゼ王国のロ・レンテ城ではありませんよ。うーん……この建物はたしか………そうです。ありんすちゃんは間違つてスレイン法国に来てしまったみたいですよ。

「一番やり、間に合ったでありんちゅ！へヴァーミリオン・ノヴァでありんちゅ！」

ありんすちゃんは塔を次々に破壊していきました。

※ ※ ※

「た、大変です！ 何ものかが結界を破壊して攻撃してきます！」

一人の神官が慌てて駆け込むと同時に激しく建物が揺れました。

「何事じゃ！ まさかエルフ共が攻めてきたというのじゃあるまいな？」

最高神官長は厳めしい顔をさらに厳しくして咎めます。

「……それが……小さな赤い鎧の子供の姿のバケモノが……突然攻撃してきまして……」

「……バケモノ？ そんなに強い相手なら私が出ようか？」

銀と黒の髪はまだあどけない表情の少女が立ちあがりかけました。

——番外席次〈絶死絶命〉——法国最強の神人は肩に得物のバルデツシュを担いで散歩にいくように出て行こうとしました。

「……さて。お前が出るのは不味い。評議国の目もあるだろうからな」

番外席次を制止すると最高神官長は目を閉じて 何やら考え込みました。

「神官長。では、我らが……」

その場にいた何名かの漆黒聖典隊員が名乗りをあげます。彼らは法国が誇る各自が一騎当千の実力者です。

「——いや、私が出よう。法国の至宝、へケイ・セケ・コウク〈を使う〉最高神官長は力強く頷きました。

「真なる姿を得たへケイ・セケ・コウクゝならば必ずやかなの者を意のままにしてくれよう！」

※ ※ ※

ありんすちゃんはいくつもの塔や建物を壊しながら中央の一際大きな建物にやってきました。

「今度はへメテオにしているのでありんちゆ。流星、おほしちやまでありんちゆな」

「——待て！ 喰らえ！」

ありんすちゃんは突然現れた男にビックリしました。初老の男が半裸、いわゆるブーメラン水着のような物を着ているだけの裸の格好で偉そうに腕を組んで立っていたのですから。

「……おかしい？ 何故だ？ へケイ・セケ・コウクゝよ。力を示せ！ 何故だ？ 何故光らぬ？」

初老の男——最高神官長は狼狽えますが、当たり前ですよ。最高神官長が穿いている、もしくは着ているのは実はワールドアイテムではなくてマーレのパンツなのでしたから。

ありんすちゃんは器用にスポイトランスの先を使ってマーレのパンツを脱がしてしまいました。

「………なんという屈辱………か………」

股間を両手で隠した最高神官長にありんすちゃんが迫ります。

「——ふ。人類最強へ絶死絶命、この私が相手だ！ 子供相手だろうと手加減はしない！」

ありんすちゃんはバルデツシユを振るう番外席次に向き合います。
「………ありんちゆちやがやちゆけゆんでありんちゆ！」

横風ぎされるバルデツシユの刃をありんすちゃんはスポイトランスで突き上げました。番外席次の体が流れるとそこに——

「——ありんちゆちやパーンチー！」

スポイトランスから片手を離れたありんすちゃんが握りこぶしで殴りつけます。

「——ありんちゅちやキーク！」

番外席次の顔面にありんすちやんの蹴りが炸裂しました。蹴られた勢いで飛ばされた番外席次はヨロヨロと立ちあがりました。

「……強い。強いな………仕方ない。最後の手段だっ！」

番外席次は懐から何かを取り出しました。

※ ※ ※

「……あれ？ ありんすちやん、結局来なかったんすか？ おかしいっすね？ ちゃんとヘグレーターテレポーターションで移動したはずなんっすけど……」

リ・エステイゼ王国首都、リ・エステイゼを焼け野原にして完膚なきまで叩き滅ぼした魔導国陣営でルプスレギナが首を傾げました。

「……うーむ？」

アインズもまた、首を傾げるのです。

※ ※ ※

「………ありんすちやんが戻った、だと。うむ………では執務室で会おう。アルベドも同席させろ」

慌てた様子のシモベからの報告を受けたアインズは一人呟きました。

「………さて………どうしたものか………」

144 ありんすちゃんリベンジする

へん？ どうした？」

へアインズ様。先程ありんすちゃんが戻ったと姉から報告を受けました」

アインズはアルベドからの「メッセージ」を受けて思案を巡らせました。

へわかった。私もすぐに氷結牢獄へ向かう。アルベドよ。そこで落ち合おう。詳しい話はそこで聞こう」
へかしこまりました」

※ ※ ※

「さて、報告を聞こう」

ナザリック地下大墳墓 第五階層の中にある「氷結牢獄」でいつものイベント——狂乱するニグレドに赤子を模した人形を渡す——を終えたアインズはさっそく尋ねました。

「……はい。……それが……そのう……」

何故かニグレドの口が重い様子なのにアインズは不安を覚えませんでした。

「……アインズ様。ありんすちゃんはどうかやら負けたようです」

「……………なん……………だ……………と？」

姉のかわりに答えたアルベドの言葉にアインズは絶句しました。無理もありません。ありんすちゃんは幼児の姿ではありますが、ナザリックの階層守護者の中でも最強の一角を誇る実力者です。しかも念のためにワールドアイテムを渡しておいた筈です。

「……相手が何ものだったのかは不明です。突然地上のログハウスの近くに転移してきたと思ったら、泣きながら「屍蟻玄室」とじ込もってしまったそうです」

ニグレドが簡潔に報告します。

「ありんすちゃんは泣きながら『負けちうくやちいでありんちゅ』とか

『アイテムルビキュのしえいで負けたでありんちゅ』とか叫んでいました」

「……負けた、だと？ ルビキュ？ ワールドアイテムなのだろうか？」

愕然とするアインズにアルベドがとりなします。

「恐れながらアインズにおかれましては直ぐにもありんすちゃんを召喚し、事情を聞くべきかと思われます」

「うむ。そうだな。まずはありんすちゃんから詳しい話を聞かねばなるまい。……ニグレドよ。ありんすちゃんは今、どうしている？」

「あれからずっと〈屍蠟玄室〉にとじ込もっているようです。魔法障害障壁があるようで、中の様子は確認出来ませんが……」

アインズはしばらく考え込むと静かに言いました。

「……仕方ない。今日はそつとしておいてやろう。ありんすちゃんは幼児に過ぎないのだからな」

「……かしこまりました」

アインズはニグレドに引き継ぎ監視を続けさせる事になると、エイトエツジアサシンを呼び出し屍蠟玄室に向かわせました。

※ ※ ※

屍蠟玄室のベッドにもぐり込んだありんすちゃんは泣いていました。

『……くっ……こうなればこれで勝負だ！』

『ルビキュー！』

ありんすちゃんはハーフエルフの少女が取り出したアイテムを見て思わず叫びました。そのままでも勝負はありんすちゃんの勝ちで決まったはずでした。そう、ありんすちゃんがルビクキュー対決さえしなければ……

『しよの勝負うけちえあげるでありんちゅ！ どうしえありんちゅちやが勝ちますでありんちゅ』

ありんすちゃんは鼻からフンスと息を吐きました。ありんすちゃんには自信がありました。だって——『ありんすちゃん様。流石で

す。私たちでは到底敵いません』——シモベのヴァンパイア・ブライドは誰一人ありんすちゃんにルビクキューで勝てませんでした。ありんすちゃんは得意気にルビクキューの好きな色をどれでもあつという間に揃えてみせます。ありんすちゃんはナザリツクでのルビクキューチャンピオンでした。

『相手は……漆黒聖典隊長 “漆黒聖典” だッ！』

ありんすちゃんと “漆黒聖典” との対決は呆気なくつきました。ありんすちゃんは一面しか揃えられないのですが、“漆黒聖典” は3面まで揃えてしまうのでした。

『——うわわわーん！』

ありんすちゃんは大声で泣きながら腕をグルグル回しながら走り出しました。ドヤ顔のハーフェルフ、戸惑い顔の “漆黒聖典”、次々にありんすちゃんは殴りつけます。

様々なモノを殴り倒しながらありんすちゃんは駆け続けました。気がつくともありんすちゃんは別の都市にきていました。

うーん……仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

※ ※ ※

「出来ちゃでありんちゅ！ こりでありんちゅちは負けないでありんちゅ！」

〈屍蠟玄室〉にこもっていたありんすちゃんは高々とペンキまみれの立方体を掲げました。どうやらルビクキューのようです。

なるほど。この塗り替えたルビクキューと気がつかれないようにすり替えるつもりですね。ありんすちゃん、なかなかズル賢い——ゴホンゴホン。戦略的頭脳が優秀ですね。

「こりで負けないぜたい、ぜーたい、でありんちゅ！」

ありんすちゃんは鼻息も荒く、ナザリツクを飛び出していきました。

※ ※ ※

「……アインズ様。ありんすちゃんがナザリックを出ました。まだ、転移をしません、姉にオーレオールとのリンクをさせて転移先を追いかけます」

「うむ。転移先が判明したら座標を教えろ。私とアウラ、マーレとで現地向かう。なにしろ我が階層守護者に打ち勝つ存在だからな。ワールドアイテムの一つは持っているともて間違いない」

「アインズは脇に控えるアウラとマーレに目をやりました。」

「わかりました。念のためわたくしも直ぐにアインズ様の元に駆けつけられるように致します」

「うん？ まあ、アウラとマーレがいるから大丈夫だろう。まあ、それでも万が一にアルベドに備えてもらうのも良いな。さて……」

「……アインズ様。ありんすちゃんが転移しました。転移先は——スレイン法国です！」

「……予想通りだな。よし、では行こう。〈ゲート〉」

「アインズは〈ゲート〉を開くとアウラ、マーレと共に法国に向かうのでした。」

※ ※ ※

スレイン法国に着いたアインズ達の前に現れた光景は——

「ふんぞり返って得意そうなありんすちゃんと土下座をする法国の神官達——」

「どうか我々の降伏を認めて頂きたい」

「最高神官長が弱々しい声で言いました。」

「ダメでありんちゆ！ ありんちゆちはルビキユで勝ちゆますでありんちゆ！」

「ありんすちゃんはキヨロキヨロとあたりを見回しました。どうやら『漆黒聖典』を探しているみたいですね。」

「……『漆黒聖典』も『絶死絶命』も貴女様に殴られて絶対安静の状

態です。もう、法国には貴女様に齒向かう事は出来ません」

「!!」

ありんすちゃんは口をポカンと開けました。

「……じゅるいでありんちゅー！ 勝ち逃げしてるゆるちやないでありんちゅー！」

ありんすちゃんは腕をグルグル回しながら駆け出しました。

「——ウグエー！」「——フングツ！」

ありんすちゃんに殴り飛ばされた最高神官長達が空高く飛んでいきます。

「——そこ、まで、だ……この最強の“絶死絶命”が相手になるツ！」

……グハア……」

崩れかけの建物からヨロヨロと銀髪と黒髪のハーフエルフが姿をあらわしました。

「……勝負するでありんちゅー！」

ありんすちゃんのリベンジが始まりました。

※ ※ ※

「……アインズ様。どうします？」

ずっと様子を離れて見守っていたアウラが尋ねました。

「………帰るか……」

「はい。アインズ様」

「はい。……では、〈ゲート〉……」

※ ※ ※

「こりでありんちゅちやの勝ちでありんちゅー！」

ありんすちゃんは得意気にルビクキューを掲げました。ベタベタと塗りたくったニセモノのルビクキューです。

「——いや、それはニセモ——グハア！」

番外席次は思わず叫ぼうとした神官を殴り黙らせます。

「……………うわースゴイ。全部そろーてるー！　ワタシの負けダワー！」

何故か棒読みでありんすちゃん勝利を讃えると、ありんすちゃんはさらに胸を反らしてふんぞり返ります。

「……………また、あの幼女を泣かせてみる？　法国は跡形もなくなるぞ。いいか、絶対に泣かせてはならない」

番外席次は小声で皆に言い聞かせます。うーん。

かくしてありんすちゃんの大活躍でスレイン法国はアインズ・ウール・ゴウン魔導国の傘下に入る事になったのでした。

もちろんありんすちゃんにはスレイン法国が降参した本当の理由を知るよしもありませんでした。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ、5歳児位の女の子に過ぎないのでから。

145ありんすちやんとドラゴンのほ

ナザリック地下大墳墓 第六階層へログハウスへ——ここはアウラとマールレが住んでいる建物です。

「……うーん。うーん？」

分厚い本を前にしたマールレが何やら難しい顔をしています。

「マールレ？ トイレなら我慢しない方が良いでしょう？」

「……ち、違うよ。お姉ちゃん。ちよつとこの本の話に納得出来ないんだよ……」

「——ちよおつと待った！ あたしは無理！ そういうの無理だから。そうだ。デミウルゴスなら詳しいんじゃないかな？」

アウラは慌てて言いました。マールレはニツコリすると

「わかったよ。お姉ちゃん。デミウルゴスさんに聞いてくるね」

マールレはデミウルゴスのいる第七階層に向かいました。

※ ※ ※

「これはこれはようこそ。マールレに………ありんすちやん」

マールレが後ろを振り向くといつのまにかありんすちやんがついて来ていました。

「……えつと、あのですね……」

マールレはモジモジしながら尋ねました。

本に書かれていた話——ドラゴンの歯を地面にまくとやがてガイコツの剣士が生えてくる——を話すとマールレは……

「……あの、僕はおかしいと思うんです。なんでドラゴンの歯から、あの、ガイコツなのかな？ って」

マールレは目を輝かせながら言った。

「やっぱり、ドラゴンの歯を埋めたらドラゴンが生えてくるんじゃないかって、あの………思うんです」

「……ドラゴン埋めたらドラゴン、はえてくるますでありんちゆか

「……?……」

「ありんすちゃんの話についてゆけていないみたいですね。」

「デミウルゴスは楽しそうに笑いました。」

「うん。そうだね。マール。……その答えなら実際に試してみてもどうだろう? 幸いにもこの階層にドラゴンの死体が保管されているから、歯などを第六階層に埋めてみたら良い」

「マールは。パアツと顔を明るくします。」

「デミウルゴスさん、ありがとうございます。あの、早速試してみます!」

「マールは嬉しそうに駆けていきました。ありんすちゃんも後を追いかけていきます。」

「ドラゴン、ドラゴン、たくちゃん、はえる、ドラゴン、たくさん!」

※ ※ ※

第六階層に戻ってきたマールは一区画の畑を用意すると耕し、ドラゴンの歯を埋めました。

「……こりでドラゴンいばーい生えるでありんちゆね。ありんちゆちやもやりたいでありんちゆ」

「ありんすちゃんがスコップで山を作ります。」

「ありんすちゃん、そんなに山にしたら、あの、なかなか芽が出せないですよ」

「……こり位でありんちゆ」

二人は仲良くドラゴンの歯や目玉、ウロコ等を埋めていきます。

「……ちようだ。マール。いいもの持ってきてくりゆでありんちゆ!」

「ありんすちゃんはなにやら思いついたようで、泥だらけのまま駆け出してしまいました。」

※ ※ ※

「ふーん。で、第六階層にドラゴンの歯を埋めてみたんだ？」

アウラがマールに尋ねます。マールは『実験中』と書かれた札が立てられた区画にジヨウロで水を撒いています。

「……ドラゴンの歯以外にもいろいろ埋まっているみたいだけど？」

「え？ ……うん。ありんすちやんがね……」

実験中の畑には小さな立て札がいくつもあって、それぞれには『もんぶらんのけき』『いちごだいふく』『ちよこれと』等と書かれています。

「……ありんすちやんは埋めたらたくさん生えてくるって、あの……思ったみたいで……」

なるほど。ありんすちやんはモンブランケーキ等を増やそうと考えて畑に埋めたのですね。うーん……

「……で、あれなんだけどさあ？」

アウラがジト目をしながら畑の一ヶ所を指差しました。

「……あそこにありんすちやんが埋まっているんだけど？」

アウラが指差した場所には顔だけを地面から出したありんすちやんが鼻唄を歌っていました。

「ありんちゅちや、いぱーい、ありんちゅちや、たくしゃん、ありんちゅちや、ふえる♪」

仕方ありませんよね。だって、ありんすちやんはまだ5歳児位の女の子に過ぎないのですから。

146 ありんすちゃんとなぞのメモ

ナザリツク地下大墳墓第二階層〈屍蟻玄室〉——ありんすちゃんが机に向かって書きものをしています。珍しいですね。

ありんすちゃんはお風呂に入るか眠るかお菓子を食べているのかイメージがありませんが……ゲフンゲフン。

もしかしたらオーバーロード15巻がなかなか発売されないの自分で書き始めたのかもしれないね。一枚の紙に何やら書き連ねると満足そうに頷きました。

「むふー。けっちゃんが出来たでありんちゅ」

ありんすちゃんは机の引き出しを開けました。どうやら書きあがった傑作をしまうみたいですね。

おや？ 引き出しの中には何やら書きなぐったメモが入っていました。

「……こりはなんでありんちゅね？ ……えとえと……」

ありんすちゃんはメモを声を出して読み上げました。

「——もつちもち うれしよん たいへん あるだろ ドラゴン しようつく たおれる かわいい すべてしまつ かんしや どあーふ ほうもつこ——宝物庫！」

ありんすちゃんの顔に赤みがさしてきました。

「こりは宝もののありか、しめちた謎謎でありんちゅ！」

……いやいや、ありんすちゃん。たぶん忘れているみたいですがそのメモはドワーフ王国にアインズ様のお供をして行った時に一生懸命アインズ様の言葉を書き記したやつですよ？

「……お宝、ありんちゅちやがみちゅけるますでありんちゅ！」

※ ※ ※

ありんすちゃんがやってきたのはカルネ村でした。

「……え？ 儂にうれしよんしろ、じゃと？ ……いや、それは……」

いったいどういう意味なんじゃ?」

カルネ村の一面に工房を設けたドワーフ達の一人、ゴンドはいきなり詰め寄るありんすちゃんに困っていました。

「……お主の言うことが全くわからんのじゃが……儂がうれしよんすれば宝が見つかるとは一体どういう事なんじゃ? そもそもうれしよんとは……まさか嬉しさのあまり垂れ流すというやつではあるまいの?」

ありんすちゃんは胸を張り、フンスと鼻息を荒くします。

「チャツチャとうれしよんしるでありまちゆでありんちゆ。うれしよんしたらおちつこが宝ものありかみちゆけるんでありんちゆ」

ありんすちゃんはメモを両手で掲げ持ちました。すると――

「……フンフン。なんか面白そうな匂いがするつすね。なんすか? このしわくちやなメモは?」

突然姿を表したルプスレギナがありんすちゃんからメモをひったくり、広げました。

「……なんすかこれ? うれしよん……これって館ころもつちもち様がうれしよんされたつてことつすか? マジつすか!!……」

ありんすちゃんはルプスレギナを見ながら考えます。館ころもつちもち様のうれしよんつて何だか記憶にありました。確か老犬がうれしよんをして困るつて話だつたはずですが……

「……え? なんすか? イヤイヤイヤ、私はうれしよんなんてしないつすよ? そもそもうれしよんなんて犬のような事は私はしないつす」

ルプスレギナはふと何やら思いつき、ありんすちゃんに囁きました。

「……そんなにうれしよんにこだわるなら……館ころもつちもち様が作られたNPCにも犬がモチーフな人物がいるじゃないつすか」

※ ※ ※

「……ありんすちゃん様。館ころもつちもち様に対して不敬ですわ。

……わん。……それと私は犬では御座いません……わん。……そもそもこんなメモに宝物のありかが示されているなど到底思えません……わん」

納得いかないありんすちゃんが唇を尖らせますが、ペストレーニヤは上手でした。

「そんな事より……最近副料理長が新作のスイーツを作りまして、紫芋を使った紫色のモンブランケーキですよ……わん。栗と芋を合わせたクリームが絶妙でしたわん」

ペストレーニヤを急かして食堂に向かったありんすちゃんの頭から先程のメモの事はなくなってしまうました。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

147ありんすちやんのりようりたいけつ

「あたしの記憶が確かならばここ、ナザリック地下大墳墓の第六階層の円型闘技場コロッセウムではいくつもの名勝負が繰り広げられてきたッ！ 今宵はアインズ様をお招きしての天覧試合を行います！ アインズ様に盛大な拍手！」

アウラの挨拶を受けてアインズは立ちあがり観衆のシモベ達に手を振ります。

「さてさて、まずは挑戦者の登場だッ！ アインズ様の片腕を自任する守護者統括、アルベドの登場だッ！ ちなみにアインズ様の右腕はあたし、譲らないからね」

アルベドは一瞬だけ眉をひそめました、すぐに笑みを浮かべます。

「そして対戦相手は——蘇るがいい！ スーパーシェフ！」

アウラが呼びかけると煙りと共に可愛らしい料理人が現れました。

「ありんちゅちやは負けなめでありんちゅ！」

「そして今回の料理対決の食材はこれだッ！ 最高級エンシヤントドラゴンの霜降り肉だッ！」

舞台の中央にせりあがってくる肉の塊を眺めながらアインズは呟きました。

「……馬鹿な……料理対決……だと？ 二人とも料理のスキルは無いはずだが……」

ありんすちやんは鼻からフンスと熱い息を吐きました。

「それじゃあSat^料us coc^理tione^開！」

アウラが高々と宣言しました。

※ ※ ※

「ええっと、あの、挑戦者サイドです。アルベドさんが動き出しました。着ていたガウンを脱いで……あれ？ 裸………」

料理対決の様子をダークエルフの双子が実況中継するみたいです

ね。

「これは……アルベド様はどうやら本気の様子ですね。なんとガウンの下は裸エプロンです」

副料理長のピツキーが解説します。

「こちらは超人サイドです。大変な事がおきました！　ありんすちゃんが包丁を持ちましたがなんとボロボロになっちゃいました！　アシスタントのソリュシャンが体内から新しい包丁を取り出して渡しますが次々にボロボロになっちゃいますッ！」

「——そうか！　カーストスキルかッ！」

アウラの中継にアインズが呟きました。なんとという事でしょう！　ありんすちゃんはカーストスキルの影響で手に触れるものを破壊してしまうのでした。

今まで『ふしぎのくにのありんすちゃん』ではあまり触れてこなかったのを忘れていましたが……ありんすちゃん、早速ピンチです。「……えっと、アルベドさんです。大きな肉の塊を手に入れました。あれはブルーアイズホワイトドラゴンの肉です」

「……なんと！　ドラゴンの中でも最高難度のドラゴンですね。私も料理長もまだ調理した事がありません！　……しかし……用意された食材の中になかったはず……」

マールのレポートに副料理長が続けます。

「……このままではアルベドは失格か……」

アインズが小さく呟くとアルベドの動きが止まりました。

「アインズ様！　これはその……練習。そうです。練習です！　アインズ様にわたくしの最高の料理を召し上がって頂きたいのです！」

「……うん？　……ああ。」

（いやいやいや。俺、食事出来ないんだけど……それになんかこの流れ……もしかしたら俺が食べるの？）

アインズは複雑な思いで料理対決を見守るのでした。

「おおー。ありんすちゃんは包丁をあきらめたぞ？　どうするのかかな？　なんと！　爪ですッ！　爪で食材を切り分けているッ！　凄いいッ！」

ありんすちゃんの手際よく肉の塊を切り分けていきます。その肉をソリュシャンが鉄板に載せて焼いていきます。

「なるほど。素材の味わいを活かしたステーキにするんですね。上に乗せられたのは臭み消しの香草のようです」

ピッキーがすかさず解説します。

「……えっと、アルベドさんの方です。現在、鍋でスープを作っています。中身はお砂糖、スパイス、素敵なものいっぱい、だそうです」

マーレが挑戦者サイドの報告をします。

「……うーん。どうでしょう？　どんな味になるか想像が出来ません……」

「……これってまさかシュガー……」

ピッキーに続いて出たアインズの小さな呟きは誰にも聞こえない小さなものでした。

※ ※ ※

「いよいよ終盤です！　挑戦者サイドでは鍋をかき回すアシスタントのナーベラル、ドラゴン肉に焼き目をつけているアルベド。今、ナーベラルの鍋にドラゴンが入りました！」

「……鍋ラルか……ふっ」

「超人サイドです。ありんすちゃんが焼いているステーキにワインをかけました。凄い炎です。……おや？」

「……ありんすちゃん様、ワインを飲んだんですね……足もとがふらついています……」

料理終盤でありんすちゃんはワインで酔っぱらってしまっているようです。うーん。大丈夫でしょうか？

やがて終了時間となりました。はたしてこの料理対決の勝者は料理の超人ありんすちゃんか？　それとも挑戦者のアルベドでしょうか？

※ ※ ※

いよいよ実食です。アインズとピツキーの前に料理が運ばれてきました。まずは挑戦者アルベドの料理です。

「……うん？ ……ここ、これは！」

ピツキーが目を見開きます。

「……この香ばしさ、苦々しく荒っぽい濁流のように舌を焦がす独特な味わい……………墨です」

次は料理の超人ありんすちやんの料理の番です。

「……………ただの墨です」

仕方ありませんよね。だってありんすちやん達には料理スキルがないのですから。

148 ありんすちゃんのおししようがつ

明けましておめでとうございます。ナザリック地下大墳墓ではアインズからの通達でお正月気分を皆楽しんでいるようです。

ありんすちゃんは長い銀髪をお団子に結びあげて、可愛い着物を着て澄ましています。

こうしてじっとしているだけなら掛け値なし、文句なしに絶世の美少女なのですが——ゲフンゲフン。

ありんすちゃんは第二階層を出ると第六階層に向かいます。成程。なかよしのアウラ・マーレの双子の姉弟に会いに行くのですね。

※ ※ ※

「来たね〜！ あけおめ！」

「……あ、あけましておめでとうございます」

ありんすちゃんを第六階層でアウラとマーレが出迎えます。二人はそれぞれ羽織袴と振袖を着ています。ちなみに姉のアウラが羽織袴で弟のマーレが振袖です。

「あけまちておめとーでありんちゅー！」

ありんすちゃんも双子に戻します。

「それでどうする？ お正月の遊びは何をしようか？」

アウラが首を傾げます。ナザリック地下大墳墓でのアインズの新年の挨拶で『皆、正月を楽しむように』とあって、各自いろいろと試行錯誤しているのです。

「……あの……ボクはカルタがいいと——」

「羽根ちゆき、しるでありんちゅー！」

マーレの言葉をさえぎってありんすちゃんが宣言しました。見るとありんすちゃんは手際よく羽子板二枚と羽根を用意していました。三人は羽根つきをする事にしました。

カチーン……カチーン……

羽子板で羽根を打ち合う音が響きます。ありんすちゃんとアウラの対決はどうかやらアウラが優勢のようです。

「……………ありんちゅちゅの羽子板小さすぎるんでありんちゅ！」

ありんすちゃんは自分の羽子板をポイツと捨てるとグレーターテレポートで替わりのモノを取り寄せました。

「——わっ！ なんだ一体！ なんだなんだ？」

ありんすちゃんは羽子板替わりの女聖騎士を片手で振り回します。女聖騎士は白いサーコートをひるがえしながらアウラの打つ羽根を体で返します。

「あっ！ ズルい！ ならあたしも！」

アウラはシモベのドラゴンキンをつかんで羽子板がわりにします。そのうち羽根つきは互いの羽子板？ による叩きあいになってしまいました。

「……………飽きちゃったね、羽根つき」

「ちようでありんちゅな……………」

ありんすちゃんとアウラはそれぞれが羽子板替わりにしていた女聖騎士とシモベを捨てます。

「……………さて、と……………次はなににして遊ぼうか？」

アウラが意見を求めます。

「……………あの……………ボクはカル——」

「次は福笑いしるでありんちゅ！」

またしてもありんすちゃんの意見で次の遊びが福笑いになりました。

※ ※ ※

「では福笑いしるでありんちゅ」

ありんすちゃん達の前にはかつてナザリツクで捕らえられてバラバラにされた少女、アルシエが——

※大人の事情により福笑いの内容は全て削除されました。ご了承下さい。

※ ※ ※

「うーん。意外に難しかったね」

「……まさか他の人間のパーツが混ざっているなんて……あの……思わなかったです」

「ありはカルカ棒の欠片でありんちゆ。ちゆぎは初日の出見に行くますでありんちゆ！」

ありんすちゃんは二人と手を繋ぐとグレーターテレポーションで何処かに転移してしまいました。

※ ※ ※

バハルス帝国皇帝ジルクニフは寝室で鏡の前に立ちました。そして静かに頭に手をかけると……

なんとという事でしょう！ ジルクニフの髪はカツラでした。カツラの下にある本物の髪の毛はもはや残りわずかなものでした。

ジルクニフは慈しむように微かな自毛を撫で付けながらため息をつきました。

かの魔導王に対してのストレスの蓄積は彼から髪の毛を無情にも奪いさつていったのです。

と、突然空間が揺らぎ――

「――初日の出でありんちゆ！」

ギョツとして立ち竦むジルクニフの前に三人の子供が現れて――

ありんすちゃんはジルクニフの残りわずかな髪の毛をつかむとむしりとりました。

「こりで初日の出でありんちゆ」

ありんすちゃんは楽しそうに笑いました。仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子にすぎないのでから。

〈最終話〉アリンズ・ウール・ゴウンよえいえんに

——ナザリック地下大墳墓第十階層玉座の間——

ナザリック地下大墳墓の栄光が具現化したかのような広大な大広間には埋め尽くさんばかりに、主だったシモベ達が集められていました。彼らの静かな熱気は徐々に高まっていき、やがて現れたアインズとありんすちゃんを迎える際にはシモベ達のボルテージは頂点に達しようとしていました。

二つ並べられた玉座のそれぞれに荘厳な衣装を纏い、ギルドの象徴でもあるスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを手にしたアインズと、同じく荘厳な正装を身に纏ったありんすちゃんが座ります。アインズは軽く右手を振り合図をすると、途端にシモベ達が静まりかえりました。

静寂の中、静かにアインズが立ちあがりました。玉座の横に並んだ各階層守護者はみな、真剣な眼差しを向けながら、アインズの言葉を待ちます。

「お集まりの我が同胞諸君、ナザリック地下大墳墓を拠点とする我らアインズ・ウール・ゴウンの名声は今や全世界の知る所となった。これもひとえに諸君らの絶え間なき努力の賜物である。まずはアインズ・ウール・ゴウン魔導国の代表として礼を述べたい」

シモベ達の拍手が津波の様に大広間を揺るがします。アインズはゆっくりとシモベ達を見渡すと満足そうに頷き、静かに右手を挙げました。途端にシモベ達は静かになります。アインズはさらに言葉を続けました。

「さて、この輝かしい日に、私は一つの決断をした。私は後継者にこれからの魔導国を任せる事にした。ありんすちゃん、改め『アリンズ・ウール・ゴウン』、前に」

アインズの紹介を受けてありんすちゃんが立ちあがりました。そして、ドレスの裾をつまみ優雅に挨拶をしました。

「ここにいる者達は誰もが彼女を知っている事だろう。そして彼女がこの世界を我々の支配下にするにあたり、多大な貢献があつた事も皆

が知る所であろう。スレイン法国最高執行機関が無条件降伏を申し出てきたのはひとえに彼女の力によるものである。これ等の功績の大きさは、単に階層守護者に留まるべきでは無いであろう」

アインズはゆつくりとスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンをありんすちゃんに渡しました。

「これよりありんすちゃん改め『アリンズ・ウール・ゴウン』に魔導王を譲位し、私はかつての名前、モモンガに戻り、彼女の後見をするものとする」

大広間にシモベ達の熱狂的な歓声が響き渡りました。守護者統轄のアルベドが目を潤ませながらアインズ、いや、モモンガに抱きつきました。シモベ達の歓声はいつしか『アリンズー！ アーリンズー！』とありんすちゃんを讃えるものになります。ありんすちゃんは左手のスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを高く掲げました。

「——アリンチュ・ウール・ゴウンに栄光あれんちゅー！」

……ちよつとだけ噛んでしまいました。

各階層守護者達もありんすちゃんを祝福してくれます。

「……よく似合っているわ。モモンガ様の事は私に任せなさい。私もまた、いとおしい方をいとおしい名前で呼べて嬉しいわ」

「おめでとう。かつてのシャルティエ復活から今日に至るまでが、全てアインズ様の計画だったとはね……さすがは至高の方々のまとめ役、私など及ぶべくもありませんね。……さて、アリンズ、これからも共に協力していきたいものだね。よろしく頼む」

「……コノ小サナ体デ責任アル立場ニタツトハ凄イ事ダ……コノヨウナ日ニ立チ会エルトハ実ニ素晴シイ……」

「ありんすちゃん、おめでとう。あたしはそういうの、柄じゃないからねー。うん、うん。良かった、良かった。ペロロンチーノ様に見せてあげたかったね」

「あ、あの……おめでとうございます。ボ、僕もありんすちゃんが適任だと思えます」

シモベ達のアリンズコールはいつまでも続くのでした。

※ ※ ※

「それにしても……流石はアインズ様、いえ、モモンガ様。シャルティア復活の際に幼児化したのも全てこの時の為だったとは……このデミウルゴス、まさに脱帽という他ごさいません」

「確かに幼児の姿だからこそ、スレイン法国も竜王国も、更には評議国までが簡単に傘下に入ったと言えるわね。流石はモモンガ様」

ナザリック地下大墳墓を代表する智者、デミウルゴスとアルベドがモモンガの知謀を絶賛します。

「……しかし、ありんすちゃんのティアアラにはどうして『め』と書かれているのかしら？」

ありんすちゃん改めアリンズ・ウール・ゴウンの額を飾るプラチナのティアアラには確かに金の文字で『め』とありました。

「あれは、二次小説界最強のオリジナル主人公の証しなのさ。これもモモンガ様の深慮遠謀かと……」

アルベドは小さな声で呟いてみました。『め・ありんす』『めありんすー』『めありーすー』

「あつ！ メアリースー！」

そうです。かつてスタートレックの二次小説で登場した伝説のオリジナル主人公キャラクター……その為にはシャルティアが『ありんすちゃん』にならなくては到達出来なかつたのでした。

まだやむ気配の無い『アリンズー』コールはいつしか『メアリースー』コールに変わっていききました。ありんすちゃんは頬を上気させていつまでもいつまでも手を振って応えるのでした。

※ ※ ※

「——さま！　ありんすちちゃん様！」

ありんすちちゃんはヴァンパイア・プライドに揺さぶられて目が覚めました。あたりを見回すといつもの屍蟻玄室の自分のベッドです。

ありんすちちゃんは何だか凄く素敵な夢を見ていた様でしたが、目が覚めた途端に全て忘れてしまい、何も覚えていませんでした。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

A l i n c e / s t a y n i g h t

ナザリック地下大墳墓 第二階層〈死蝨玄室〉——珍しくマールレがキヨロキヨロしながら入って来ました。

「マールレ様。ありんすちゃん様は留守にされていらっしやいます」
シモベのヴァンパイア・ブライドが答えます。

「え？ そ、そうなの？ あの……ぼ、僕、ありんすちゃんに呼ばれたんだけど……」

うーん。たぶんありんすちゃん、忘れてますよね？

「……では、中でお待ちになりますか？」

ヴァンパイア・ブライドに招き入れられてマールレは室内で待つ事にしました。

「……おや？ 本……かな？ えつと……ファテ スタイ ニフト……？」

背表紙にはF a t e / s t a y n i g h tと書かれてありました。マールレはラテン語の読み方をしたみたいですね。

「魔法書、みたいだね。えつと……告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

突然、天井を壊して赤いフルアーマーを着たありんすちゃんが落ちて来ました。

「——えええええー！」

驚くマールレにありんすちゃんが訊ねました。

「ちよおう。マールレがありんちゅちやのマシユターでありんちゅか？」

マールレにはありんすちゃんが何を言っているかわかりませんでした。マールレがポカンとしてしているとありんすちゃんが怒り出しました。

「マールレはちゅかえないでありんちゅ。ダメダメでありんちゅ」

ありんすちゃんはスポイトランスをブンブン振りながら宣言しま

した。

「これからナザリックSEI S A I争奪戦の始まりでありんちゅ」

※ ※ ※

ナザリックSEI S A I争奪戦とは——ナザリックNPC全ての願望であるSEI S A I。それを叶えるという万能の器を巡り七体のサーヴァントが戦いを繰り広げるといふもの——

で、ありんすちやんはスポイトランスを持っているのでランサーのサーヴァントなんですって。今までありんすちやんは他のメンバーとクラスの割り振りをしていたそうです。

ちなみに他のサーヴァントはライダーにアウラ、セイバーにキュートス、キャスターにナーベラル、アサシンにソリュシャン、アーチャーにシズ、最後のバーサーカーにアルベドですって。

ありんすちやんの説明を聞いてマーレがモジモジしました。

「……あ、あの……ぼ、僕も参加したいな」

ありんすちやんはナーベラルの代わりにマーレをキャスターとして参加させる事にしました。

そしてありんすちやんはマーレと一緒にコキュートスを討つ事にしました。

※ ※ ※

ありんすちやんとマーレは第五階層にやって来ました。

「コキュトシユ！ 観念するでありんちゅ」

ありんすちやんがスポイトランスを構えて走り出します。と、途端に雪の中に作られた落とし穴に落ちて動けなくなります。

「フフフフ。アリンスチャンヨ。ソナ事デハ私ヲ倒ス事ハ出来ナイナ」

ありんすちやんをコキュートスが見下ろしました。
ありんすちやんは全く身動き出来ません。危うし！

「……こ、コキュートスさん、しよ、勝負です！」

マーレが杖を構えます。

「……フム。マーレカ。相手ニトツテ不足ハナイ。イクゾ！」

マーレがいきなり超位魔法を放ちます。コキュートスは四本の腕に得物を装備して迎え撃ちます。激しい戦いの末——マーレ、コキュートス、相討ちとなり脱落——残りは五名になりました。

※ ※ ※

ナザリック地下大墳墓 第六階層——

「卑怯だ。二対一では？」

「あたしはライダーだからねー。別にシモベに乗らなければならな
いって決まりはないよ？」

「そうっすよ。シズちゃんには悪いっすけど、勝たせてもらおうっす」

巨大な狼に騎乗したアウラがシズを追い詰めます。

「やーらーれーたー！」

シズが脱落して残りは四名になりました。

※ ※ ※

ナザリック地下大墳墓 第十階層——

優勝候補のアルベドは余裕綽々です。そこに先程シズを下したア
ウラが狼——ルプスレギナに跨がって襲いかかりました。

アルベドはすぐさま宝具——ギンヌンガガブを発動させ、アウラ達
の動きを止めます。さらに返す刀で忍び寄ってきていたソリュシヤ
ンも返り討ちにしました。

「SEISSAI——アインズ様の正妻の座はわたくしのもの——」
アウラとソリュシヤンが脱落して残りは二名になりました。

※ ※ ※

「ふふふふふ……このSEI SAI戦争は俺が勝たせて貰うぞ。悪いな、アルベド！」

突然現れた金色のアーチャーによってアルベドが倒されました。なんと前回のSEI SAI争奪戦に参加していたペロロンチーノでした。

ペロロンチーノは宝具——ゲート・オブ・エロゲーを展開します。これはあらゆるメーカー、ブランドのエロゲーが收藏されている恐るべき宝具です。

「さあ、もう準備が出来た。聖杯よ！ その姿を現せ！」

ペロロンチーノの呼び掛けに答えるように、ナザリック地下大墳墓第十階層の玉座の間に巨大な聖杯が出現しました。その聖杯の中には黒いドロドロしたものが溢れだそうとされていました。

※ ※ ※

ナザリック地下大墳墓 第五階層——

その頃、ようやくありんすちゃんは落とし穴からはい上がる事が出来ました。

「コキュトシユ、勝負でありんちゆ！ ……………コキュトシユ？」

なんと既にコキュトスとマーレは脱落した後でした。

そう、残っているサーヴァントはありんすちゃんとペロロンチーノの二人だけになっていたので。

ありんすちゃんは玉座の間でペロロンチーノに相対します。

「ペロロンチーノちゃま……」

「…………お、シャルティアか？ うーん…………俺、ロリコンだけど幼女趣味は無いんだわ。パス」

そんなペロロンチーノに天罰が下ります。

「くおら！ 弟！ エロゲーを積むほど買ってくるなって言ってる！」

ペロンチーノは突然現れたピンク色のなにかに拐われてしまいました。

「ありんちゅちやが正妻でありんちゅ！」

ありんすちゃんは聖杯に手を伸ばしました。すると聖杯がひっくり返り、中身の黒いものが溢れました。

「……あれ？ 寝てたのかな？ 仕事で疲れていたからかな」

黒いものは背伸びをしました。なんと聖杯の中身はへろへろでした。

「ありんちゅちやが優勝でありんちゅ」

ありんすちゃんは空っぽになった聖杯を持って嬉しそうです。うーん……たぶん優勝カップだと思っっていますよ？ きつと。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の子なので。子なので。

※ありんすちゃんの絵に文字を加えました

——巨乳はパッドで出来ている。

血潮は好物で、頭は空っぽ。

幾たびの任務を重ねて失敗。

ただの一度も成功はなく、

ただのシモベにも尊敬されない。

彼の者は目が据わり バーのカウンターで泪酒に酔う。

後に、しょうがなく椅子にされ。

その胸はパッド三枚で出来ていた。

A l i n c e / s t a y n i g h t

おまけ編 もしもありんすちやんが至高の四十二人目だつたら……

ナザリック地下大墳墓 第十階層玉座の間——玉座にはありんすちやんがちよこんと座っていました。

「モモンガしゃま、ペロンチーノしゃま、ぶくぶく茶釜しゃま、えつと……えつと……たっちゃんしゃま……しーとべるとしゃま、……えつと……ままいかしゃま、えつと……えつと……いっばい」

壁にかけられた四十一の旗を指差しながら一人一人の名前を上げていましたが、全員の名前は言えないようでした。

しかし、何故ありんすちやんが玉座に座っているのでしょうか？

ユグドラシル最終日、アインズ・ウール・ゴウンのギルドマスターのモモンガがさつきまでいたのですが、ちよつとの間ログアウトする事になり、代わりにありんすちやんが留守番をする事になったのでした。

ありんすちやんは玉座に座り、足をブラブラさせながらキョロキョロします。隣には守護者統括のNPC、アルベドが立っていました。

ありんすちやんは手を伸ばすとアルベドの角を触ってみました。

「……ちくちくしてありんちゅ」

次にアルベドの設定を開きました。文字が多すぎて目がチカチカしてきたのでありんすちやんは目をこすりました。

「——えくちゅー！」

大変です。ありんすちやんはくしゃみをした拍子についてうっかりアルベドの設定を全て消去してしまいました。

ありんすちやんはコンソールを叩いてみましたが何の反応もありません。次に鼻の穴を髪の毛の先でくすぐってまたもやくしゃみをしてみますが勿論元には戻りません。

ありんすちやんは仕方ないので新しくアルベドの設定を書き直す事にしました。

※ ※ ※

「お待たせしましたありんすちゃん。用件を済ませて戻りました。ん？ ……どうかしましたか？」

ありんすちゃんは慌てて玉座から飛び降りるとモモンガを迎えま
した。

「な、なんでもないでありんちゅ。アルベドが、しえっつい変わってな
いでありんちゅよ」

明らかに動揺した様子のありんすちゃんでしたが、いつもの事だっ
た為、モモンガは気にしませんでした。

ユグドラシル終了まであとわずか……モモンガは玉座に座り目を
閉じます。隣にはありんすちゃんが坐り込み、コックリコックリと居
眠りしていました。

……23：59：57、58、59……

やがてブラックアウトし――

……0：00：00……1、2、3

モモンガは目を開けました。

「……サーバーダウンが延期した？」

隣を見るとありんすちゃんが寝転がってスヤスヤ眠っています。

「……モモンガちゃま、どうちまちたでありんちゅ？」

モモンガが初めて聞く声に振り返ると、そこには幼女のような表情
をしたアルベドが見つめているのでした。

※ ※ ※

モモンガが戻る少し前――

「……えーと……好きなものは、モンブランっど……ちよれからお風呂大好き……お風呂はアワアワのやちゆでありんちゆ。……でありんちゆ、つと。やつと出来たでありんちゆ」

アルベドの設定を書き直す時にありんすちは自分自身の好物や好きな遊び等を書き込んだ為、アルベドがありんすちやん化してしまったという訳です。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちはまだ5歳児位の女の子なのですから。

おぼろど せいおこくのせいき した

やるだば がわつはつはははとわらいます。
れめでお が けんでたたきます。

あたしのこげき やつけてやる。

れでめおす こうげき やるだばにはききません。
めれでおす はひさつこうげき しまるす。

ねいあ さげびまくす。

れでめおす だんちよしんじやいました。

うわはは と やるだばとわらいました。

おねえちや しんじやた あの おもいます。

けらと なきまくす。

かるかさま あの にげてくたさい。

わかつたわ わたくしにげるわ。

あいんずさま

そこまでだ やるだば わたしがあいて。

やるだばと は かるかもてたたきます。

かすぼん せいおじよ たすける。

ねいや さげひまくす。

あいんずさま がんばれ。

やるだばと くらえ かるかぼ だ。

あいんずさま ぴんち。

かるかぼ が ぼちんぼちんあいんずさまたたきまくす。

あいんずさま のぴんちに あかいしやるてあ ぐれたてれば
してきました。

しやるてあ はばさりと かるかぼをきります。

きんきんきんきん

なかなかやりますね。

しやるてあ はあいんずさまをたすけます。

ばみりおのぼ でやるだばやつけます。

あいんずさま はしやるてあにだきつき おれいにきすします。

よくも やるだばと をたおしたな。わたしはおとどの やるば
でおと だ。わたしはおととよりつおいぞ。

きんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきん
きん。

しやるてあ は やるばでおと とはげしたたかいしるす。

きんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきん
きんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきん
きんきんきんきんきんきん。

はげしたたかい よるまでつづく。

きんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきん
きんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきん
きんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきん
きんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきん。

しやるてあ は やるばでおと をたおしました。

ねいや さけひまくす。たいへんです またきました。

わははははわ わたしは やるばでおと のぎりのおとどの や
ばるでおと だ。こんどはわたしがあいてだ。

きんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきん
きん。

しやるてあ は やるばでおと とはげしたたかいしまるす。

きんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきん
きんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきん
きんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきん
きんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきん

しよぶはなかなかつきません。

きんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきん
きんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきん

しやるてあ はあはあ。

きんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきん
きんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきん
きんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきん
きんきんきんきん。

やばるでおと はたおれました。

ねいや さけひまくす。なんかきました。

わたしは やるばでおと のとなりにすむ やでるば だ。わたしがあいてだ。

しやるてあ はたたかいます。

やでるば をたおした しやるてあ に あいんずさまが ちゆちゆしました。

あいんずさま いいました。けこんしてください。

しやるてあ は あいんずさまとけこんしました。

ねいや さけひまくす。おめでたございます。

かるか はくやしそうです。

れでめおす は あたしはおいわいするよ。

けらと は ぼくもおもいます。

しやるてあ はしあわせなりました。

めでたし めでたし。

※ ※ ※

お久しぶりです。

私は作者の善太夫です。

ずいぶん太ってしまいました。

私からはイミーナさんの白目を剥いている顔が間近に見えます。

今回はありんすちやんの文章に空白や句点、改行をしました。

とても大変でした。

え？ 『112ありんすちやんとおわらないふゆ』でありんすちや

ん曰く「……………きつとネイアはちんじやうでありんちゆ。ドツペル

はきつとお兄ちゃんでありんちゆ。アインジュちやまがピンチで

チャルチエがたしゆけるでありんちゆ。……そうでありんちゆ！」

だったじゃないか？ ですって？

うーん。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちやんはまだ5歳児位の女

の子なのですから。

では、皆さん生きていたらまたお会いしましょう。
作者の善太夫でした。

はたらかない細胞

私たち人間の身体の中ではたくさん細胞たちが毎日、二十四時間休まず働いています。

ところでアンデッドの身体の中ではどうでしょう？

人間と同じく赤血球がいました。うーん……なんだか様子が違うみたいですね。

「……あー働きたくね……つか、俺、必要ないんじゃないかね？」

赤血球たちは皆座り込んだり寝転んだりしてしまっています。

「だってよ、アンデッドってそもそも生きていないじゃん。生きていないのに酸素必要か？」

「確かにそうですね。すると先輩、私はどうしたら良いですか？」

赤血球の女の子は困った様子で尋ねました。どうやら彼女は新人みたいです。

「……ん？ いや、俺たちがいるのはアンデッドの身体の中なんだ。

新人、お前はアンデッドって知ってるか？」

「……アンデッドですか？」

「——ちがーう！ アンデッ ドだ!! あぶないあぶない……奴らに聞かれたりしたら面倒な事に……」

新人の赤血球は訳がわからないようです。

「……あの先輩。アンデッドとアンデットって何が違うんですか？」

先輩の赤血球は新人の口を慌ててふさぐとかがんで周囲をうかがいます。

「……どうやら奴らには聞かれていないみたいだ。正確には『読まれて』いかなかったようだ。いいか？ 絶対にアンデッドの『ド』に濁点をつけ忘れてはならない。それがこのルールだ」

「わかりました先輩。絶対にアンデットとは言いません——あ！」

赤血球の二人はしやがみこんで息を殺します。

「……大丈夫なようだな。そういえば今は平日の午前中か……5ちやんねるも人が少ないから助かったな」

「……そんなに恐ろしい場所なんですか？ その『ゴツチャンデス』というの？」

「ああ。恐ろしい。何でも我々の世界の多くがエターナルという魔法で消滅してきたらしい。ある日なんの前触れもなく、な……」

新人はブルリと身を震わせました。

「……そ、それにしても先輩はよくいろんな事をご存知ですね。ここではもう長いんですか？ 私は昨日ようやく一人前に——」

「いや、一週間だ。お前もすぐにわかるさ。何しろアンデッドは死体と同じなんだから。俺たち赤血球が酸素や二酸化炭素を運ぶ必要がない……と。……新人？」

先輩赤血球の話の最中に新人赤血球は好中球の姿を見かけて走っていつてしまいました。

「はっけつきゅーさーん！ 何しているんですか？」

白血球。好中球のひとつで体内に入ってきた細菌を撃退します。

「……赤血球か。今はする事がなくてな。コイツと酒を飲んでいるんだ」

白血球の隣には銀灰色の細菌がいました。

ケカビ——ムコール属の細菌でタンパク質を分解します。動物の死体に付く事も多くデンプン糖化力が強いものはアルコール製造に使われることもあります。

「……ケカビです。宜しくお願いします」

「あ、はい。私は赤血球です。宜しくお願いします」

ぎこちなく挨拶をかわす二人です。と、突然激しく地面が揺れました。

「……これは……ヤバイな。あいつらが来る……」

先輩赤血球が真っ青になります。とはいえ赤血球はヘモグロビンで赤いのですが。

「せ、先輩。まさか『ゴツチャンデス』が来るんですか？」

新人赤血球の声はたちまちかき消されてしまいました。

激しい物音と共に空から降ってきたのは大量の——大量の血液——赤血球たちでした。

「あわわわ……赤血球が一杯……くるし……」

吸血——アンデッドの中でも吸血鬼が行う外部からのエネルギー
摂取行為です。

たくさん赤血球たちは叫びました。

「……ここが我々の新天地か。さて、頑張つて働くぞ！」

大量に吸血された赤血球たちはどれも新鮮な酸素を持っていた。
た。

「先輩。彼らは酸素をどこに届けたら良いでしょうか？」

先輩赤血球はしばらく考え込んでから言いました。

「この身体の持主は少しばかり脳が栄養不足みたいだから酸素を届け
たら少しはまともになるかもしれない。……だが、あそこには……」

「ありがとうございます先輩。脳ですね。……では皆さん私が案内し
ますから酸素を運びましょう！ 脳へ！」

新人赤血球は大勢の赤血球と共に出かけていってしまいました。

「……あそこにはやつかいな存在がいるんだが……」

※ ※ ※

脳にやつて来た赤血球を待ち構えていたのは——

『ありんす菌』——特定のヴァンパイアにだけ存在する固有の細菌
でお風呂と昼寝とお菓子が大好きです。

数えきれない数のありんす菌が赤血球達を囲みます。

「ありんちゅちゅやくれんぼしるでありんちゅ」

「モンブラン食べたいでありんちゅね」

「ありんちゅちゅやくと鬼ゴッコしるでありんちゅ」

「お風呂入るでありんちゅ」

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女
の子なのですから。

特別編 亡国の吸血娘（五さい）【前編】

ありんすちゃんブレアデスが地上のログハウスにやって来ると、そこでは戦闘メイドのユリとシズが何やら悩んでいました。

「どうしたでありんちゅ？ わらわ——わたしが解決するでありんちゅよ。めいたんで、ありんちゅちやがまあるかいかいけちゅしるでありんちゅ」

ありんすちゃんは胸をはりました。

「ああ、ありんすちゃん様。実はナザリック宛にこんなものが……」

ユリはありんすちゃんに小さな小包を見せました。大きさは丁度A5サイズ位でドツシリした重さがあります。

「……爆発物ではない。なんらかの魔法の痕跡もない。だから大丈夫……たぶん」

ありんすちゃんは小包を振ってみましたが何の音もしませんでした。どうやらお菓子ではないみたいです。

ちなみにありんすちゃんの頭を振るとカラカラと音が……ゲフンゲフン。な、なんでもありません。

改めてありんすちゃんは宛名を調べてみました。すると表に『ナザリック地下大墳墓 鈴木悟 様』という宛名書きがありました。

「……えつと、えつと……」

そういえばありんすちゃんは漢字が読めないのでしたね。

「……鈴木悟、ですよ。そんな名前、ナザリックにはいないかと……」
「……肯定。ナザリックにスズキサトルというデータは無い。ちなみにスズキゴでもリンボクゴでも登録は無い」

「……ふ、ふーん」

ありんすちゃんはわかったようなふりで誤魔化します。しばらく考え込む様子を見せていたありんすちゃんはいきなり顔を上げました。

「……こりは『ありんちゅちや様』と書いてあるでありんちゅ。ありんちゅちやを漢字で書くところなるでありんちゅ」

ありんすちゃんは胸をそらせ、鼻からフンスと息をはくと小包を手

にログハウスを後にするのでした。

※ ※ ※

ありんすちゃんは屍蠟玄室に戻るとベッドに寝そべり早速小包を開けてみます。中からでてきたのは一冊の本——オーバーロード3の全巻購入特典『亡国の吸血姫』でした。

ありんすちゃんは本をひろげますが、漢字が多すぎて読めません。そこでシモベのヴァンパイア・プライドを呼んで本を読ませはじめました。

ナザリツクを出たモモンガは空高く飛び上がります。そして「いっげ！」というかけ声でたくさんの花火を点火するスイッチを入れます。ありんすちゃんは大喜びです。

つついありんすちゃんは花火代わりにへヴァーミリオンのヴァアを打とうとしてシモベ達に止められてしまうのでした。

やがていつの間にか廃虚の街にいたモモンガは一人のアンデッドの少女——キーノ・フアスリス・インベルンと出会います。キーノが自分の名前を名乗るシーン——感動的な場面に話があると何故かありんすちゃんは不機嫌になりました。

ありんすちゃんはヴァンパイア・プライドから本を奪うと「なまえはキーノ・フアスリス・インベルン」の一文の上にバツをつけ、『ありんすちゃん』と書き加えました。

これで主役はキーノからありんすちゃんに変更です。

すっかり満足したありんすちゃんは枕元に『亡国の吸血姫』を置いて幸せそうに眠りにつくのでした。

※ ※ ※

夜中にふと目が覚めたありんすちゃんは「クチュン！」とくしゃみをしました。するとヘグレーターテレポーションが発動してど

こが知らない世界に転移してしまうのでした。

ありんすちやんは立ち上がるとキョロキョロあたりを見回してみます。するとありんすちやんは誰かを踏みつけている事に気がつきました。

何やらボロ布をマントのように羽織っていてズボンのようにスカートを縫い合わせた服を着た、金髪の十歳位の少女です。どうやら気絶をしてしまったようです。

ありんすちやんは近くの扉の中に少女を押し込めるとなにごともなかったかのような顔をしました。

そこに一人の人物——自称スケルト族の男——がやって来ました。

「……こんばんは、星が綺麗な良い夜ですね。幾つか聞きたいのですが……」

ありんすちやんはコクリと頷きます。

「まずはそうですね。……私は……鈴木悟と言いますが、貴方のお名前をお聞きしてもよろしいですか？」

ありんすちやんはニツコリと笑いました。

「ありんちゅちはありんちゅちやでありんちゅ」

「……ん？　ありんちゅちやさん？　……それで早速なのですが、この都市で何があったのかを教えてくださいませんか？」

悟の問いかけに少女——ありんちゅちや五さい——はいろいろ話しはじめました。

「えっと……モンブランが好物でお風呂が大好き……ですか。うーん……その、ありんちゅちやさん、誰か大人の人はいないのでしょうか？　お父さんとかお母さんとか……この世界についていろいろ知りたいのですが」

ありんすちやんは口もとに指を当てて首をかしげます。

「……ありんちゅちやは5さいだからわかんないでありんちゅ」

「……」

「……」

このままでは話が終わってしまう、と思われたその時——

『……ありんすちやん様。聞こえますか？　ソリュシャンです』

ありんすちゃんに〈伝言〉^{メッセージ}が届きました。

「ありんちゅちやでありんちゅ。チヨリチャ、なんでありんちゅ？」

『……良いですか？　ありんすちゃん様。ありんすちゃん様は現在夢を見ていますがこれはアインズ様のヒロインの座を射止める好機です。おわかりですか？』

ありんすちゃんは首を傾げました。

「飛行機はありんちゅちや好きでありんちゅよ」

『……えっと好機です。……飛行機ではなくて、ですね……まあいいわ。ありんすちゃん様には私がセリフを伝えるのでその通りにアインズ様へ言つて下さい』

「……めんどくちや、でありんちゅね」

『……私の言う通りにしたら後でおやつを差し上げます』

「——モンブラン！　おつき栗のモンブランがいいでありんちゅ！」
『わかりました。それでは——』

※ ※ ※

「えちよ、こりがわたちの……ありんちゅちやの物語。……始まりありんちゅ」

ありんすちゃんはセリフをいい終えるとホツとため息をつきました。

「……成る程。そんな事が……ありんちゅちやさんはこの国——インベリアの王女で父のフアスリス王と母のアンネと幸せに暮らしていた。それがある日突然に自らはアンデッドの吸血姫に、父母やメイドを含めて国民がことごとくゾンビになってしまったと……それから長い期間、ありんちゅちやさんは皆を元にもどす研究をしていたんですね」

ありんすちゃんは悟の言葉に目をパチクリさせますが、あわてて頷きました。

「ちようでありんちゅ。……えっと……お城に行くでありんちゅ。怖い怖いをやっちゅけるでありんちゅ」

ありんすちやんと悟は手をつないで王城
に向かう事になりました。

※ ※ ※

「おんやー……そーちゃん、ここにいたっすか？ アルベド様がお呼
びっすよ」

「ルプス、わかったわ。しかし困ったわね」

「どうかしたっすか？ なんなら頼れるルプス姉さんにドーンと任せ
るっす」

ソリュシヤンは少しばかり躊躇しましたが結局ありんすちやんの
バックアップをルプスレギナに任せる事にしました。

『……っーわけでヨロシクっす。で、ありんすちやん達は王城っすか
？ えっと……んじやドグ・ゾンビを召喚して口にチェンジリング
ドールをくわえるっす』

ありんすちやんはゾンビになった犬を追いかけながら口にアイテ
ムをくわえました。

「……んーんーんー？」

『……あ、間違ったっす。さっきのはありんすちやんじやなくてアイ
ンズ様っす。ああ、アインズ様じやなくて悟様っすね。……ええっと
……ありんすちやんは……あー！ 大変っす！ ポテチをこぼし
ちやっただっすよー！』

ルプスレギナが大騒ぎしている間にありんすちやん達は王城を占
拠しているアンデッドの首魁——ナイトリツチと対面していました。

「ヴァーミリオン・ノヴァ
朱の新星」

出会い頭にありんすちやんが唱えた魔法で首魁は呆気なく消滅し
てしまいました。

『……やれやれ。ポテチが半分になったっす。えっと、次はアインズ
様からへメッセージくぐるんで「嘘だ！」って叫ぶっす。あ、アイ
ンズ様じやなくて悟様だったっすね」

ありんすちやんは隣の悟の顔をじっと見つめました。ですがいつ

こうに〈伝言〉^{メッセージ}を使う様子はありません。当然ですよ。

「あーあー。こちらはありんちゅちや。メッセージこないでありんちゅ」

『マジっすか？ えっと、本ではアインズ様がアンデッド倒した時にあまりに雑魚なんで待たせてたキーノを心配してアインズ様がメッセージ使うすっけど……』

「……アンデッドは雑魚でありんちだが……ありんちゅちやのバーミリオノバちゅおいでありんちゅ」

『……んんん？ ありんすちやん今何処っすか？ もしかしたらアインズ様と一緒にすかね？ あ、アインズ様じゃなくて悟様だったっす』

「ありんちゅちやはアインジュちやまとお手てちゅないでいますでありんちゅ」

『わかったっす。じゃ、適当に飛ばして次にいくっす』

『亡国の吸血姫』の内容とは少しずっ齟齬をきたしつつもありませんちやんと鈴木悟の冒険は続くのでした。

——後編へ続く

特別編 亡国の吸血娘（五さい）【後編】

※ ※ ※

ありんすちやんと悟は城内の探索を始めました。

「えと……埃いっばいでありんちゆ」

「まあ、何年間も使われていなかったわけですしね」

「……床にはちろい埃がちゆもって……なんでありんちゆ？ ルプー？」

『ありんすちやん、それはセリフじゃないつす。ト書きつすよ』

ありんすちやんにルプスレギナがあわてて伝えます。

「ありんちゆちやはちつているでありんちゆよ。トガキは渋い柿でありんちゆ。でも、フデガキは甘いんでありんちゆ」

ありんすちやんは得意気に胸を張ります。

『……いや、柿じゃ……まあいいつす。……ありんすちやんの次のセリフは『よろしければ掃除をさせてくださいますか？』つす』

ありんすちやんは悟に向き直りました。

「……えとえと……ありんちゆちやセリフ、よろしく掃除でありんちゆか？……出来たでありんちゆ！」

ありんすちやんはうれしそうに手を叩きました。

「うん？ よくわかりませんが……まあ良いですよ」

悟は巻物を取り出すと下級の風精霊と水精霊を召喚して部屋を綺麗にしました。

『……ありんすちやん、次のセリフつす。『それではどこから調べますか？』つすよ。あ、さつきみたいに『ありんちゆちやセリフ——』つて言つちやダメつすよ』

「……えとえと……ちらべますか？ つて言つちやダメつすよでありんちゆ」

悟は一瞬だけ怪訝な表情になりますが、すぐに気を取り直して言い直しました。

「まずはこの羊皮紙の束から調べてみましょう。あのアンデッドの正

体や目的がわかればゾンビになった人々を救う手段がわかるかもしれない

「ありません」
ありんすちやんは変な臭いのする羊皮紙の巻物に手を伸ばしました。すると悟は止めようとします。

「……アインジユちやま」

「……ええ？ 違うっす。そこは……マズイっす。ユリ姉、別にさぼってるんじゃないっすよ。これには理由があるっす……」

「ん？ いや、罘について調べましたか？ 魔法的な罘がある可能性が……」

悟が上目使いで見つめてくるありんすちやんに説明します。

「大丈夫でありんちゆ。へナパーム！……こりで罘無くなったでありんちゆ」

「……え？」

悟は啞然としてしまいました。

『……お待ちせつす。ユリ姉を誤魔化して戻ってきたっす。次のセリフは『申し訳ありません。悟さま。私にはこの文字を読むことができません……』っす』

「えとえと……ありんちゆちや読めないでありんちゆ」

「……うん。確かに燃えつきてしまいましたから誰にも読めませんよね」

悟は気を取り直して回収したアイテムを床に並べていきます。

「では、このアイテムを見てもらえますか？」

ありんすちやんはアイテムを手にとりました。

『……えつと、ガントレット・オラ・グリフォンロード「イルビア・ホルダンの仮面」、ロープ・オラ・ファーストインベルン「建国王の長外套」、虹よりこぼれし白「ホワイつすね。ありんすちやんは透明な短杖を拾い上げて『これです！ これがあれば

！』って叫ぶっす』

「わかったでありんちゆ」

ありんすちやんは床のアイテムを一つ拾い叫びました。

「こりで……ええと……こりでありんちゆ」

悟はありんすちやんが手にした皮袋を見ながら考え込みました。

（この中身はどうやら金貨みたいだが……この世界での蘇生魔法は金貨が必要という事だろうか？ それとも『地獄の沙汰も金次第』という事なのだろうか？）

悟が考え込んでいるとありんすちやんがヒョイと床から銀のネックレスを拾い上げ、自分の首にかけました。

「こりはありんちゅちやに似合うであります」

（ん？ ……なにかシンボルや文字らしきものが刻まれているが……魔法のアイテムではないしまあ良いだろう。しかしあのアンデッドは何故こんなものを身に付けていたのだろうか？）

※ ※ ※

ありんすちやんと悟は城下でゾンビを一体掴むと〈転移門〉を使い都市の外に移動しました。そこでゾンビを殺しました。

「それではそのアイテムを使ってくれますか？」

悟がありんすちやんに振り返りましたが、ありんすちやんはまごまごしています。

『ありんすちやん、さっきの透明のワンドを使うつすよ』

困っているありんすちやんにルプスレギナが〈メッセージ〉ですかさずサポートします。

「ありんちゅちや、持っていないであります」

『……え？ さっき透明なワンドを拾ったじゃないつすか？』

ルプスレギナは動揺しました。

「……えと、えと、さっきは金貨たくさん拾ったであります。ワンドは置いてきたであります」

ありんすちやんは胸を張って答えました。

『駄目つすよ！ それじゃ話が進まないつす。取りに戻るか〈グレーターテレポーターション〉で取り寄せるつす』

ありんすちやんは頷くと〈グレーターテレポーターション〉を唱えました。次の瞬間、ありんすちやんの右手には先程の透明なワンドがありました。

『準備が出来たらそのワンドを使うっす』

ありんすちゃんはコクリと頷き「えいつ」とワンドを使いました。
しかし何も起こりません。

「……あの……私にでなくこのゾンビの死体に使うんですよ」

ありんすちゃんが今度は死体にワンドを使うと死体はゆつくりと起き上がりよたよと歩きだしました。

『ありんすちゃん、次のセリフっす。』——悟さま。私が研究して努力すれば、みんなを、みんなを元に戻せると思いますか?』っす』

ありんすちゃんはじつと悟の目を見つめました。

「……えとえと……アインジュちゃん。研究したらみんな元気なりま
ちゅでありんちゅか?」

どことなく棒読みなありんすちゃんの言葉に悟が答えました。

「可能性が絶対にゼロとは言えない。俺には分からないが、この現象を説明できる人物がこの世界のどこにいるかもしれない。そうすればどうにかできる手段がわかるかもしれない。ただし……かなり困難だろうな」

『ありんすちゃん、ここで泣くっす』

「どうちて泣くでありんちゅか? ありんちゅちはおつきなつたから泣かないでありんちゅ」

『……あー……ここで涙頂戴してアインズ様がへ星に願いをぐで』この都市の住人たちが元に戻す方法を教えたまえ!』って願うっすけど……飛ばして次にいくっす。じゃ、『共に世界を見に行く、私がついて行っても本当によろしいのでしょうか』って言うてくださいつす。そんで手を見ながら『お邪魔に——』って言うっす』

ありんすちゃんは頷きました。

「えと……世界を見るいくありんちゅ」ありんすちゃんは手を見ながら続けました。「邪魔でありんちゅ」

「……乗りかかった船だ。もう少し協力するさ。アリンチュチャさん。共に、そう共に旅をしよう」

かくして原作『亡国の吸血姫』とは微妙に異なりながらもありんすちゃんは鈴木悟と一緒に旅をする事になりました。

旅の支度の為に馬車を調達しようとする際に悟が見せた『カボチャの馬車と写るドレス姿のぶくぶく茶釜』の写真を見たありんすちやんが『どうしてもカボチャの馬車に乗るでありんちゆ』と駄々をこねたりという事がありました。……仕方ありませんよね。だって、ありんすちやんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

尚、この後ありんすちやんは悟と一緒にインベリアを死の街に代えた元兇、元、■■■の竜王で現、朽棺の竜王キュアイーラム||ロスマルヴァーと闘う事になりますが……機会があればまたいつかの話という事にします。

「ご注文はうなぎですか？」

ナザリツク地下大墳墓第二階層にある屍蟻玄室を訪れたアインズは違和感を覚えました。

「……………うむ？ ……なんだこれは？」

屍蟻玄室の入り口には立看板が置かれていました。

「……………『らんぷりい はうす』 ……なんだ？」

アインズは考え込みました。どうやらありんすちゃんは何やらまた、始めたみたいですね。

「……………入るべきか……………うーむ……………」

アインズはこめかみを押さえて考え込んでいました。改めて看板をよく見ると『らんぷりい はうす』の文字の下にかすかに『ラビツトハウス』という文字の跡がありました。

「……………『ラビツトハウス』 ……だと？」

アインズは思い出しました。これは頭に丸いウサギを乗せた少女が喫茶店で働くストリーのアニメに出てくる店名です。たしか心がピヨンピヨンするやつです。

「……………戻るか」

アインズは扉に背を向けました。どうせ中ではありんすちゃんが頭に大きな毛玉でも乗せて待ちかまえているのでしよう。

※ ※ ※

執務室のある第九階層に戻ってきたアインズはまたしても変なものを見つけました。

『ラビツトハウスはこちら』

それは通路に置かれた立看板でした。立看板に書かれた矢印は副料理長のピツキーがバーテンをしているショットバーを示しています。

(……なんだなんだ？ 流行っているのかこれ……)

アインズが看板を前にして考え込んでいると――

『……これは至高の御方、アインズ様。もしかしてアインズ様もバーにいらっしやるので？』

アインズが声に振り返るとそこには部下に抱えられたエクレアがいました。

「実はピツキーが最近バーの模様替えをしたそうでした……なんでも守護者統括殿の指揮でずいぶん凝ったものにするのだとか……」

「……ほう。アルベドが……」

アインズは少し興味を持ちました。

「他にもプレアデスのナーベラル殿も手伝っているそうで。があるずバー、とかいうものだそうですよ」

「……ガールズバー……だど？」

アインズは嫌な予感がしてきました。

「衣装にも凝ったらしいです。ばにいがーるとかいうウサギをモチーフにしたものらしいとか。それではお先に失礼いたします」

恭しくお辞儀をするとエクレアは部下に抱えられたまま『ラビットハウス』に入っていきました。

「……うむ。仕事に戻るか……」

アインズはラビットハウスを後にすると執務室に戻っていきました。

※ ※ ※

『らんぷりい はうす』ではカウンターにありんすちゃんとアウラ、マーレの三人が暇そうにいました。三人とも可愛らしい色違いの制服を着ていてとても似合っています。

ありんすちゃんは髪をお団子にゆって、なぜか頭の上にスピアニードルの子供を乗せています。

「おかちいでありんちゅ。アインジユちやま、来ないでありんちゅ」

「……うーん。この時間には第二階層を通る筈だったんだけどね

……」

ありんすちやんの言葉にアウラも首をかしげました。

「ちえっかくアインジユちやまにおいちいコーヒーのましえるでありんちゆに……残念なんでありんちゆ」

ありんすちやんがため息をつきました。

「……あ、あの……いま気がついたんだけど……」

ふと、マールが口を開きました。

「……アインズ様は、あの、コーヒー……飲めないですよね？」

「——あ……」

仕方ありませんよね。だって、ありんすちやんはまだ5歳児位の女の子なので。から。

「……コホン。ところで……店の名前の『らんぷりい はうす』ってどういう意味なの？」

何事もなかったかのようにアウラが訊ねました。

「知らないでありんちゆ」

「——は？」

「ルプーが『ありんすちやんのお店ならこれっすよ』ってちゆけてくれたんでありんちゆ。きつと『かわいくてかちこいありんちゆ』という意味なんでありんちゆよ」

うーん。ありんすちやん、残念ですがランプリーって鰻という意味ですよ……

(祝) アニメ4期&劇場版聖王国編制作決定

ナザリック地下大墳墓 第二階層〈屍蠟玄室〉――

「ちやるちえあ・ぶらどほおるる、参りまちた!!」

扉を勢いよく開き、深紅のフルアーマーにスポイトランスを装備したありんすちゃんが入ってきます。

「……うーん……全然ダメっすね。いいですか？ シャルティアはアインズ様にあるまじき失点をしていたんすよ？ そんな時にアインズ様直々に命令を受けてはりきっているんす。もっと必死さが必要っす」

ルプスレギナの駄目出しにありんすちゃんは一瞬、ぐぬぬといった表情になりますが、すぐにやり直しをします。

「ちやるちえ、ぶらどほるる、まいりまちやた!!」

うーん……なかなかうまくいかないみたいですね。

「いいっすか？ アニメはあまくないんっす。私だつて3期の時に『失望した』つてアインズ様から言われるシーンで散々ネットで叩かれたっすからね。やれ、もつと絶望的になるはず、だの、自殺したくなる心情が出なくてはおかしい、だの……」

ルプスレギナの瞳から光が失われていきます。余程辛い事があったのでしょね。

「がんばりまんちゅー!」

ありんすちゃんはギュッとこぶしを握りしめると演技の稽古を再開するのでした。

※ ※ ※

ナザリック地下大墳墓

第九階層〈執務室〉ではアインズが階層守護者達と一緒にリモートビューイングを使ってありんすちゃんの様子を観察していました。

「……うん、あれは間違いなくアニメ4期に備えての練習……だよな？」

「はい。アニメ4期は帝国とドワーフ国が舞台になると聞いておりますので……」

アルベドの答えにアインズは頭を抱えました。

「……するとありんすちゃん知らないのだな？」

いならぶ守護者達は黙って頷きました。

「……困ったな。アニメ4期に登場するのはあくまでもシャルティアなんだがな……カド●ワはなんと言ってきたのだから？」

「——はっ。我々の予測通り『ありんすちゃんという幼女がシャルティアを演じる事は認められない』との事です」

即座にデミウルゴスが答えます。

「……あれだけ本人がやる気になっているのだがな……だが、仕方あるまい。ありんすちゃんを説得するほかなさそうだな」

アインズの発言に皆の視線がアウラに集まります。

「——え？ あたし？ あたしにありんすちゃんの説得？」

「……仕方がないわ。だって貴女はありんすちゃんと違ってアニメ4期で活躍するじゃない？ 下手したら恨まれるかもしれないわ」

そして結局、ありんすちゃんの説得はアウラがする事になりました。ありんすちゃんは泣き叫び、駄々をこね、地団駄を踏み、最後には監督を脅しに行くと言い張り大変だったそうです。

仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ、5歳児位の女の子なのですから。

※ ※ ※

「アウラよ。ご苦労だった。……ところでデミウルゴスの姿が見えないが……？」

アインズの問いかけに気まずそうな様子でアルベドが答えました。

「……それが……その……アインズ様。デミウルゴスは劇場版の稽古に張り切っていました……特に聖王国編の後半のアインズ様と戦うシーンをいたく楽しみにしていて今もプレイアデスを連れて……」

「……なん……だ……とっ？」

アインズは頭を抱えました。

「……あのシーンのヤルデバオトはデミウルゴスではないぞ？ ゴリラル——いや、憤怒の魔将だぞ？ ……それにプレイアデス……まさかオレオールもか？」

「……オレオールは初めてナザリツクの外に出れるとそれはもう、大変な喜びようだとか……」

「……馬鹿な……そのシーンのプレアデスはドツペルケンガーだぞ？ オレオールに至ってはパンドラズ・アクターなんだが……」

アインズにとって胃の痛くなりそうな問題がまだまだ続いたのでした。

かんぜんしんさくげきじょうばんありんすちゃん

ナザリック地下大墳墓 第二階層〈屍蟻玄室〉——入り口には『か
いきちうはいろな』と大きく書かれた貼紙がありました。どうやら中
で秘密会議が行われているようですね。

「あー、あー……」ホーン！」

ありんすちゃんはシモベのヴァンパイア・ブライドを集めて大きく
咳をしました。

「こりはありんちゅちやが手にいれちや、オバロドの映画の書かれ
ちやちゅでありんちゅ」

ありんすちゃんは原稿の束を取り出しました。あ、あれはたぶん現
在制作中の劇場版オーバードロード新作の聖王国編の原稿みたいで
すね。

「こりはポイしてありまちゅ。しよいでありんちゅちやが主役のオ
バロドの書いたの取り替えしまるすでありんちゅ」

どうやらありんすちゃんは本気のようにです。

「いっばいいいっばいいアイデア出すでありんちゅ。そいでありんちゅ
ちやのファンイッパイパーイしてでありんちゅ」

ありんすちゃんの視線にヴァンパイア・ブライドの一人がおずおず
と手を上げました。

「……あの……そうですね。アニメにするのでしたら人気作品に内容
を寄せるのはいかがでしょう?」

「そりは良いでありんちゅ。さつちよくしてでありんちゅ」

ありんすちゃんは大興奮です。

「えとえと……まじゅありんちゅちやには妹がいるてありんちゅ。
で、ありんちゅちやが町に出かけて帰ってくりゅと妹が鬼になつちえ
るんでありんちゅ。ありんちゅちやは修行ちて鬼退治の剣士なるま
すでありんちゅ。ちよちてありんちゅちやが汽車に乗って鬼をやつ
ちゅけますでありんちゅ!」

うーん……それって鬼●の刃ですよね?」

「ありんすちゃん様。その内容だとアニメ化は無理かと……」

ありんすちゃんは腕を組んで考え込みはじめました。

「……あの……ありんすちゃん様。今度のアニメ4期は帝国が舞台らしいですが……」

行き詰まったありんすちゃんにヴァンパイア・ブライドが助け船を出します。

「わかっちゃでありんちゅ。ありんちゅちは帝国に追われるですますでありんちゅ。ありんちゅちはフォーシユの力でちゅよくなりますでありんちゅ。ありんちゅちは最後のジエツタイの戦士なりますでありんちゅ！」

「……ありんすちゃん様。それも他の作品に似すぎているのでは……」

ありんすちゃんはぐぬぬといった表情で腕を組みます。

「あ、あの……スポーツもの、はいかがでしよう？」

ありんすちゃんの目が輝きだしました。

「えーと、ありんすちゃん様は女子サッカーのエースで試合で大活躍します」

「ありんちゅちや大活躍してでありんちゅ！」

「ですが激しい動きで胸のパットをなくしてしまいます。タイトルは『さよなら私のグラマー』……」

「——しよんなんダメでありんちゅ。こうなつちやら——」

ありんすちゃんは何やら思いついたみたいですが……

そしてその夜、オーバーロードの原作者である丸山く●ね氏が突如現れた謎の幼女に連れ去られたそうです。

うーん。仕方ありませんよね。だってありんすちゃんはまだ、5歳児位の女の子なのですから。

オーバーロード劇場版聖王国編公開記念　ありんす
ちやん再放送を見る

ありんすちやんはトコトコとナザリック地下大墳墓　第六階層に
やってきました。

円形闘技場——コロッセウムの中央で足を止めたありんすちやん
はキョロキョロと回りを見回しました。

「とあー！」

掛声と一緒にアウラが建物から飛び降りてありんすちやんの前に
立ちました。

突然だったのでありんすちやんは思わず尻もちをついてしまいま
した。

「ぶいー……………なんだありんすちやんか」

両手にピースを作ってみせたアウラは顔をくもらせる。

「……………ありんちゅちやは、おどろいちやちないでありんちゅ。ちよつ
とだけ、ビクツてなっただけでありんちゅ」

ありんすちやんは何もなかったかのように立ちあがりました。

「……………お姉ちゃん、待って……………」

息を切らせてマーレがやってくると、ありんすちやんはビシツと指
を突き詰めて言いました。

「マーレはおちよいんでありんちゅ。おかげでアウアウにビククリし
ちやでありんちゅ」

「……………えつと……………あの、ゴメンなさい？」

戸惑うマーレを制してアウラがありんすちやんを指差します。

「——で、ありんすちやんはなんの用なのかな？　単なる冷やかしな
ら帰ってもらうけど？」

ありんすちやんはニヤリとすると胸をはります。

「しゅごいでありんちゅ。オバロド映画、秋にやりますでありんちゅ
！　ありんちゅちやはヒロインになりますでありんちゅ！」

ありんすちやんは鼻からフンスと息をはきます。

興奮するありんすちゃんとは対象的にアウラはジト目で眩きます。

「……知ってる。それに今、M●TVでアニメ1期の再放送してるし……」

「……再放送……？」

ありんすちゃんは小首をかしげます。途端にアウラはニヤリとしながら言葉を続けました。

「……ふうん。なんだ、ありんすちゃんは知らないんだ？ 先週から水曜日の夜11時からオーバーロード1期の再放送しているんだよ？ さっきのあたしが飛び降りたシーンも出てきたんだから」

アウラは得意気にまたピースを作って見せました。

「……ありんちゅちゅもいぱーい写るんであるますでありんちゅ。かわいいかわいい、いぱーいでありんちゅ」

「うんうん。だと良いね……まあ、自分の目でみてみると良いんじゃないかな？」

ありんすちゃんは鼻息を荒くしながら第六階層を飛び出していきましました。

* * *

「……夜更かし、ですか？」

第二階層の屍蟻玄室に戻ってきたありんすちゃんの言葉にしもべたち——ヴァンパイア・ブライドたちは戸惑いの言葉を洩らししました。

「ちようでありんちゅ。オバロドの見る夜のじゅういち時まで、眠らないでありんちゅ」

「……えつと……で、ですが……」

ヴァンパイア・ブライドたちの脳裏には夜9時前にはベッドでスヤスヤ眠るありんすちゃんの姿が浮かびます。

——うん。ありんすちゃんは果たして夜11時まで起きていられるのでしょうか？

マールから差し入れてもらったブラックコーヒーを脇にオーバーロード再放送の視聴に望んだありんすちゃんでしたが……………

残念ながら睡魔に負けてしまいました。8時を回ったあたりからまぶたが重くなり、9時にはスヤスヤ眠ってしまったそうです。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の子なのですから。